仙台市文化財調査報告書第163集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

――富沢遺跡第70～75・77・79次，発掘調査報告書――

下ノ内遺跡

――第5次発掘調査報告書――

1992年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第163集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

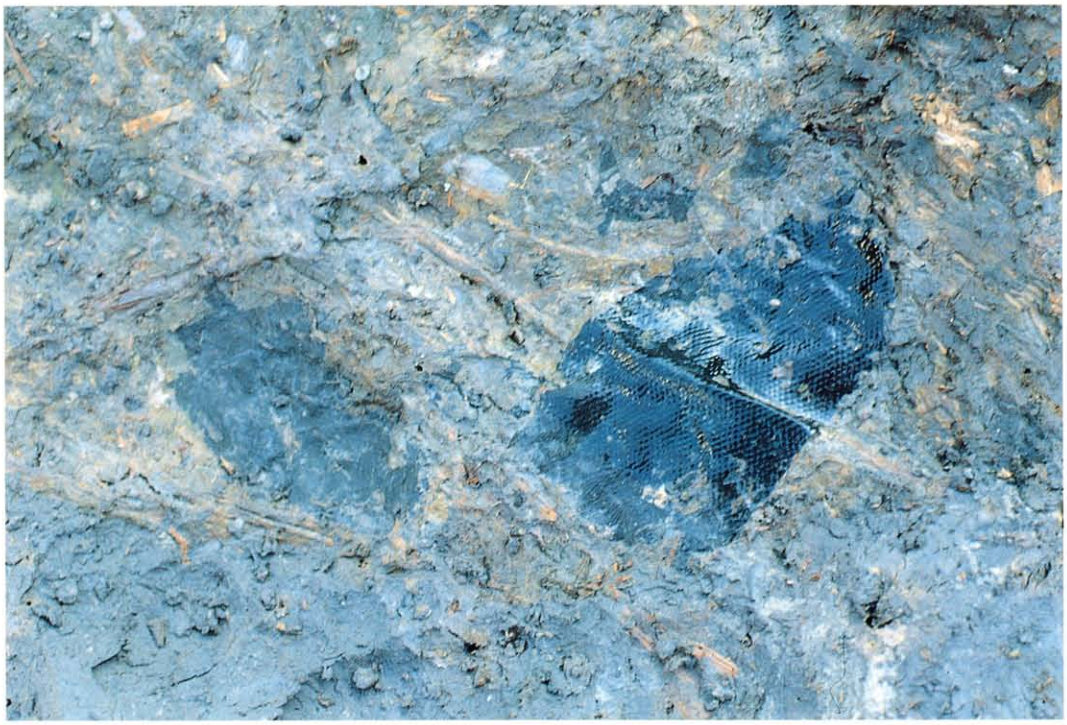
――富沢遺跡第70～75・77・79次，発掘調査報告書――

下ノ内遺跡

――第5次発掘調査報告書――

1992年3月

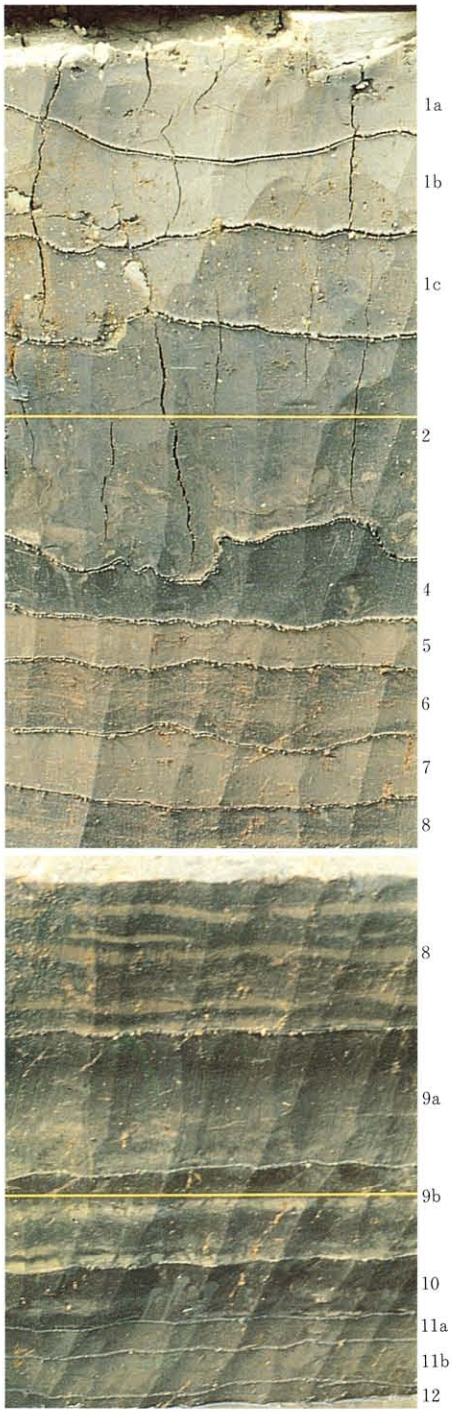
仙台市教育委員会



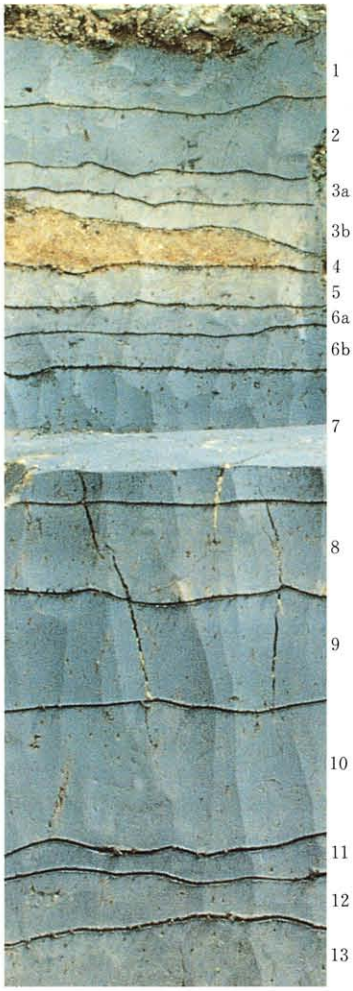
富沢遺跡第77次調査　漆製品出土状況

富沢遺跡第77次調査　木簡

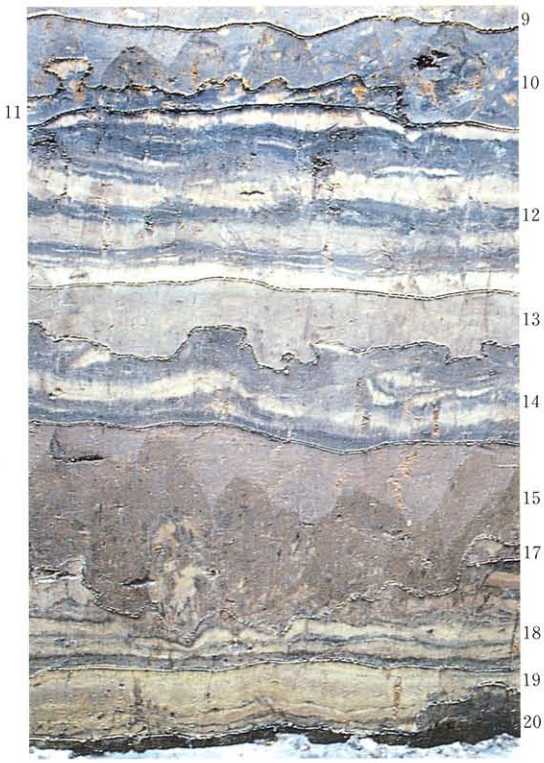
富沢遺跡第70次調査　基本層序



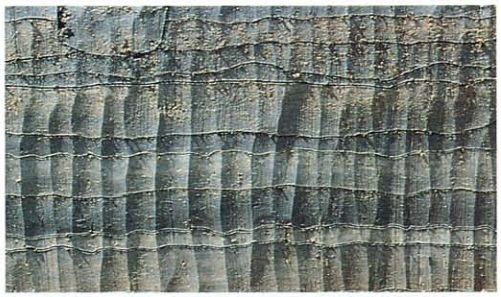
富沢遺跡第71次調査　基本層序



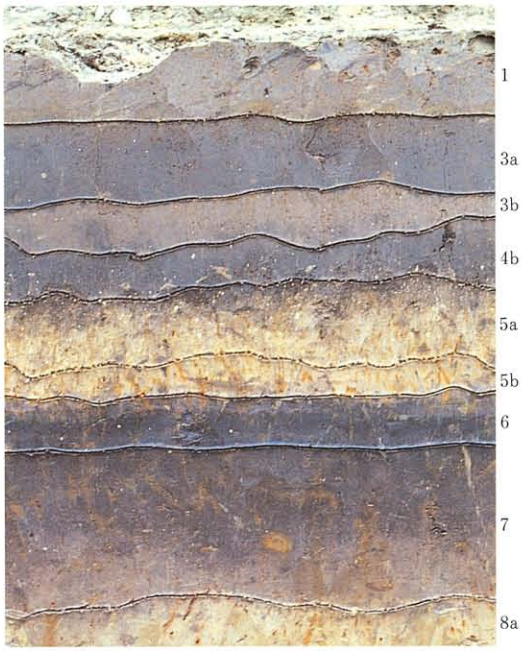
富沢遺跡第72次調査　基本層序



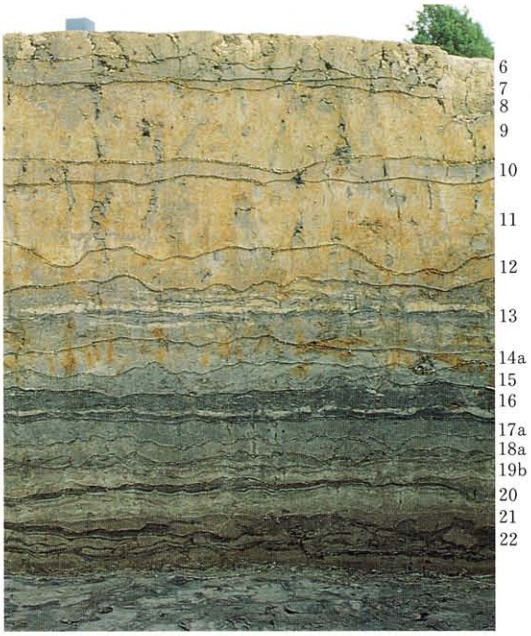
富沢遺跡第73次調査　基本層序



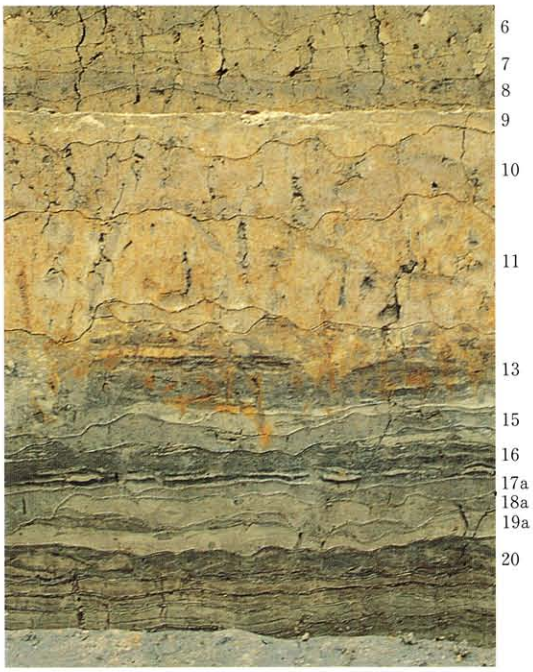
富沢遺跡第74次調査　基本層序



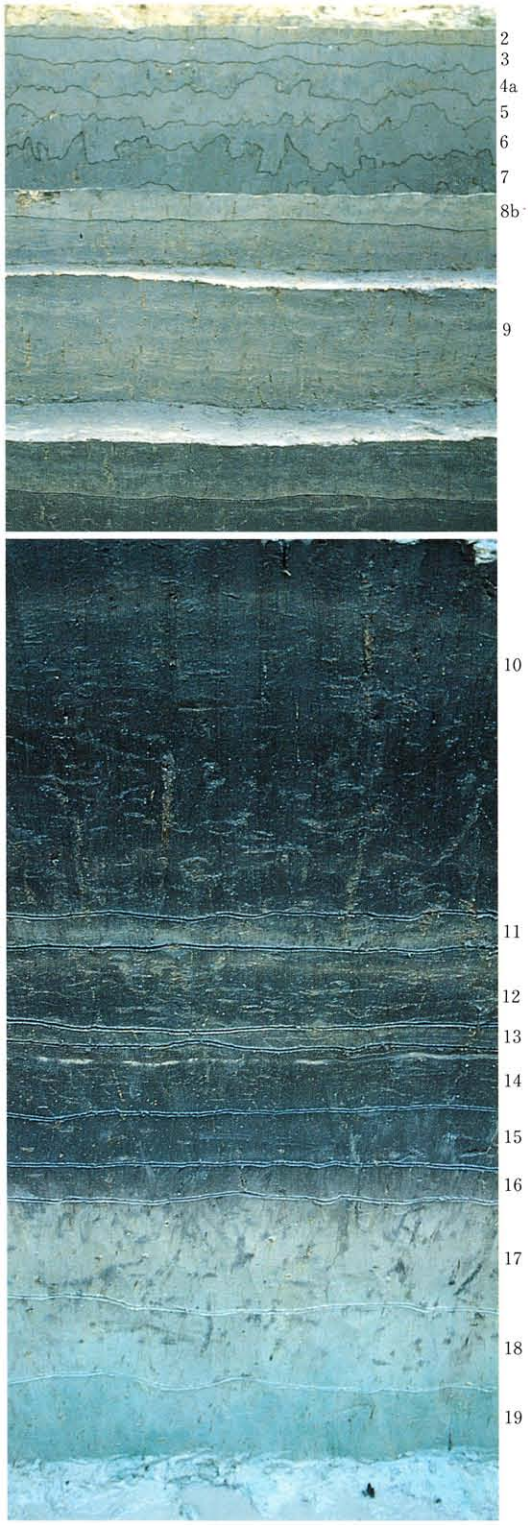
富沢遺跡第75次調査　基本層序



富沢遺跡第77次調査　基本層序(1)



富沢遺跡第77次調査　基本層序(2)



富沢遺跡第79次調査　基本層序

序　　文

昭和57年、仙台市は山口遺跡において初めて水田跡を検出し、同年より開始した富沢地区の高速鉄道の試掘調査により当地域に広大な水田跡の存在を確認することができました。昭和58年にこれらの調査結果に地形的条件を加え、新たに「富沢水田遺跡」を登録しました（昭和62年「富沢遺跡」に改称）。

富沢遺跡は仙台市南西部の富沢、泉崎、袋東、長町南等に広がる総面積90ヘクタールに及ぶ水田跡を中心とした遺跡で、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野に立地しています。当遺跡は昨年度まで69次に渡る調査が実施され、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されています。このうち、弥生時代の水田跡の検出は東北地方中部における稲作農耕の起源を解明する上での貴重な資料となっています。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺構や遺物が確認され、さらにその下層からは約20,000年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生々しい状態で発見されています。

しかし、この富沢地区は昭和50年代の区画整理事業を契機として年毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄開業により、一層都市化が進んでいるところです。このような中にあって、平成３年度は富沢地区に所在する富沢遺跡、下ノ内遺跡におきまして11件の発掘調査を実施致しました。本報告書はそのうち９件の調査成果をまとめたものであります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私たちに課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序と致します。

平成４年３月

仙台市教育委員会

教育長　東海林　恒　英

例　　言

1．本書は、平成３年度富沢地区受託事業に係わる富沢遺跡第70～75・77・79次発掘調査報告書と、下ノ内遺跡第５次発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2．報告書刊行のための遺物整理は、文化財課調査係　太田昭夫・工藤哲司・渡部弘美・斎野裕彦・平間亮輔・五十嵐康洋が担当し、陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。
3．本書の編集は斎野裕彦が行った。
4．関連科学については、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、プラント・オパール分析を古環境研究所、樹種同定を高橋利彦（木工舎ゆい）、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
5．本文の執筆分担は下記のとおりである。

「富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)」

守田益宗：第３章第１節
古環境研究所：第３章第３節
高橋利彦：第３章第２節１
パリノ・サーヴェイ株式会社：第３章第２節２
太田昭夫：第２章第８節
渡部弘美：第２章第２・３節・６節１・２・３－(1)・(3)・(4)
斎野裕彦：第２章第１節４、第６節３－(2)－①、第４章
平間亮輔：第１章、第２章第５節
五十嵐康洋：第２章第１節１～３・５、第４・７節

「下ノ内遺跡」

工藤哲司

6．石材の鑑定は、東北大学　蟹沢聰史氏にお願いした。
7．種子の同定は東北大学　星川清親氏、庄司駒男氏にお願いした。
8．発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々の適切な助言・指導をいただいた。

蟹沢聰史・山田しょう・永嶋正春・伊達泰宗・星川清親・庄司駒男・松本秀明（敬称略）

凡　　例

1．本報告書の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
2．本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
3．図中・本文中使用の方位の北（N）は、全て真北である。
4．遺構名の略語として、ＳＩ：竪穴住居跡・竪穴遺構　ＳＤ：溝跡　ＳＫ：土坑　ＳＲ：河川跡　ＳＸ：性格不明遺構を使用した。
5．土器で中心線が１点鎖線のものは、図上復元実測図である。
6．本文中での「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。
7．本文中での「擬似畦畔Ｂ」とは、水田畦畔の直下層（自然堆積層）上面に認められる畦畔状の高まりを指す（斎野：1987）。

目　　次

序　　文
例　　言

富沢・下ノ内浦・山口遺跡(4)

第１章　富沢遺跡のあらまし……1
　１．遺跡の概要……1
　２．泉崎浦遺跡について……1
　３．水田跡の認定基準……1
第２章　調査結果……7
　第１節　富沢遺跡第70次調査……7
　　１．調査方法……7
　　２．基本層序……7
　　３．検出遺構と出土遺物……8
　　４．石器の使用痕分析……13
　　５．遺構の所属年代のまとめ……17
　第２節　富沢遺跡第71次調査……18
　　１．調査方法……18
　　２．基本層序……18
　　３．検出遺構と出土遺物……18
　　４．まとめ……19
　第３節　富沢遺跡第72次調査……20
　　１．調査方法……20
　　２．基本層序……20
　　３．検出遺構と出土遺物……23
　　４．まとめ……24
　第４節　富沢遺跡第73次調査……25
　　１．調査方法……25
　　２．基本層序……25
　　３．検出遺構と出土遺物……26
　　４．遺構の所属年代とまとめ……29
　第５節　富沢遺跡第74次調査……31
　　１．調査方法……31
　　２．基本層序……32

3．検出遺構と出土遺物……34
4．遺構の所属年代とまとめ……45
第6節　富沢遺跡第75次調査……46
1．調査方法……46
2．基本層序……46
3．検出遺構と出土遺物……47
4．遺構の所属年代とまとめ……57
第7節　富沢遺跡第77次調査……58
1．調査方法……58
2．基本層序……60
3．検出遺構と出土遺物……62
4．分析・同定……91
5．遺構の所属年代とまとめ……94
第8節　富沢遺跡第79次調査……97
1．調査方法……97
2．基本層序……97
3．検出遺構と出土遺物……98
4．遺構の所属年代とまとめ……105
第3章　分析・同定……106
第1節　花粉分析……106
富沢遺跡（第74次調査）の花粉分析……106
第2節　樹種同定……110
1．富沢遺跡第70次・72次・73次・77次調査出土材の樹種……110
2．富沢遺跡79次調査で出土した材の樹種……111
第3節　プラント・オパール分析……112
仙台市富沢遺跡（第70，71，73，74，75，77，79次調査）
におけるプラント・オパール分析……112
第4章　まとめ……118
下ノ内遺跡
1．調査要項……155
2．調査方法……155
3．基本層序……157
4．検出遺構と出土遺物……158
5．遺構の所属年代とまとめ……158

挿表目次

富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

第１表　遺跡地名表……２
第２表　平成３年度　富沢遺跡調査要項……４
第３表　４層水田跡畦畔計測表……34
第４表　５層水田跡畦畔計測表……36
第５表　７層出土石器の類別と石材の関係……50
第６表　８層出土石器の類別と石材の関係……50
第７表　７層８層出土石器観察表……55
第８表　昆虫遺体……93

挿図目次

富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

第１図　周辺の遺跡……３
第２図　富沢遺跡全体図……５・６
第３図　調査区位置図・設定図……７
第４図　基本層序……８
第５図　出土遺物……９
第６図　ＳＤ２・３・ＳＸ４平面図
　　ＳＤ２・３断面図……９
第７図　ＳＤ１・３出土遺物……９
第８図　９層水田跡平面・断面図
　　石器・石庖丁出土状況……10
第９図　６層上面で確認された９層水田跡
　　擬似畦畔Ａ平面図……11
第10図　出土遺物……11
第11図　10層平面図……12
第12図　15層平面図……13
第13図　９層出土石器実測図・光沢分布図(1)……14
第14図　９層出土石器実測図・光沢分布図(2)……15
第15図　調査区位置図・設定図……18
第16図　基本層序……19
第17図　調査区位置図・設定図……20
第18図　壁断面及び遺構平面図……21・22
第19図　基本層序概略……23
第20図　出土遺物……24
第21図　調査区位置図・設定図……25
第22図　基本層序……26
第23図　７層水田跡平面・断面図……27
第24図　16ａ層平面図……28
第25図　出土遺物……28
第26図　その他の出土遺物……29
第27図　調査区位置図・設定図……31
第28図　基本層序……32
第29図　４層水田跡平面・断面図……35
第30図　５層水田跡平面図……36
第31図　ＳＫ１平面・断面図……37
第32図　10層上面平面・断面図……39・40
第33図　10層上面標高……41
第34図　12層水田跡平面・断面図……42
第35図　出土遺物……44
第36図　調査区位置図・設定図……46
第37図　基本層序……47
第38図　３ａ層水田跡……48
第39図　３ａ・３ｂ層水田跡出土遺物……49
第40図　７層・８層出土石器実測図(1)……51
第41図　７層・８層出土石器実測図(2)……52
第42図　７層・８層出土石器実測図(3)……53
第43図　類別の最大長、重さ、
　　石材との関係（７層）……54
第44図　類別の最大長、重さ、
　　石材との関係（８層）……55
第45図　調査区位置図・設定図……58
第46図　グリット配置図……59
第47図　基本層序……60
第48図　３ｂ層・４ｂ層水田跡平面図……62

第49図　柱状図……63・64
第50図　5層上面平面図……65
第51図　6層上面平面図……67・68
第52図　ＳＩ１平面図・断面図……70
第53図　ＳＩ１・２平面図・断面図……71・72
第54図　ＳＩ１出土遺物……74
第55図　ＳＩ３平面図・断面図……75
第56図　ＳＩ１・３出土遺物……76
第57図　ＳＩ３出土遺物……77・78
第58図　ＳＤ１・２・４・５断面図……79
第59図　ＳＤ１・４出土遺物……80
第60図　ＳＫ１・２平面・断面図……81
第61図　ＳＫ３・４平面・断面図……82
第62図　ＳＫ５平面・断面図……82
第63図　出土遺物(1)……83
第64図　10層水田跡平面・断面図……85
第65図　10層水田跡平面図……86
第66図　17ａ層水田跡平面図……87
第67図　18ａ層水田跡平面図……88
第68図　19ａ層水田跡平面図……89
第69図　17層18層19層断面図……90
第70図　出土遺物(2)……91
第71図　出土遺物(3)……92
第72図　調査区位置図……97
第73図　調査区設定図……97
第74図　基本層序……98
第75図　5層水田跡平面図……99
第76図　6層水田跡平面図……100
第77図　6層水田跡木材群……100
第78図　6層水田跡断面図……100
第79図　杭セクション図……100
第80図　8ａ層水田跡平面図……101
第81図　6層水田跡出土遺物(1)……102
第82図　6層水田跡出土遺物(2)……103
第83図　6層水田跡出土遺物(3)……104
第84図　6層水田跡出土遺物(4)……105

下ノ内遺跡

第１図　調査区位置図・設定図……155
第２図　調査区平・断面図……156
第３図　下ノ内遺跡の基本層位……157

写真図版目次

富沢遺跡第70次調査

写真１　9層水田跡大畦断面……127
写真２　9層水田跡検出状況……127
写真３　15層溝状遺検出状況……127
写真４　石庖丁出土状況……128

富沢遺跡第71次調査

写真５　基本層序……128

富沢遺跡第72次調査

写真６　1号河川跡（足跡）検出状況……128
写真７　10号河川跡　樹木検出状況……129
写真８　調査区東壁断面……129
写真９　調査全景……129

富沢遺跡第73次調査

写真10　土層断面……130
写真11　7層水田跡検出状況……130
写真12　杭断面……130
写真13　木製農具出土状況……131

富沢遺跡第74次調査

写真14　基本層序（南壁東端部）……131
写真15　4層水田跡検出状況
（西部、畦畔№２・３、南より）……131

写真16　5層水田跡確認状況
（東部、畦畔№3・4、南より）……132
写真17　10層水田跡確認状況
（南東部、南西より）……132
写真18　10層水田跡検出状況（南より）……132
写真19　12層水田跡確認状況
（南から、奥は4層水田跡手前は
5層水田跡検出状況）……133

富沢遺跡第75次調査

写真20　基本層序……133
写真21　3b層　擬似畦畔検出状況……133
写真22　調査区全景……134

富沢遺跡第77次調査

写真23　SK2断面（西より）……134
写真24　SK2完掘全景……134
写真25　SD4完掘全景（東より）……135
写真26　SD2完掘全景（東より）……135
写真27　SD4遺物出土状況……136
写真28　南区SI1・SI2確認状況……136
写真29　SI1完掘全景（西より）……136
写真30　SI2完掘全景（東より）……137
写真31　SI1遺物出土状況……137
写真32　SI1木簡出土状況……137
写真33　SI3断面（北より）……138
写真34　SI3遺物出土状況（北より）……138
写真35　SK5確認状況（南より）……138
写真36　西区10層水田跡（西より）……139
写真37　東区10層水田跡（西より）……139
写真38　東区17a層水田跡（東より）……139
写真39　東区18a層畦畔・
17a層擬似畦畔B（西より）……140
写真40　東区19a層水田跡（西より）……140

富沢遺跡第79次調査

写真41　調査風景（西より）……140
写真42　5層水田跡（北より）……141
写真43　6層水田跡（北より）……141
写真44　6層水田跡木材群（東より）……141
写真45　8a層水田跡確認状況（北東より）……142
写真46　8a層水田跡東半部（南西より）……142
写真47　材の顕微鏡写真(1)
パリノサヴェイ株式会社……143
写真48　材の顕微鏡写真(2)
高橋利彦……143
写真49　プラント・オパール顕微鏡写真……144
写真50　石器表面及び光沢面の顕微鏡写真……145
写真51　第70次調査出土遺物……146
写真52　第72次・第73次調査出土遺物……147
写真53　第74次調査出土遺物……148
写真54　第75次調査出土遺物(1)……149
写真55　第75次調査出土遺物(2)
第77次調査出土遺物(1)……150
写真56　第77次調査出土遺物(2)……151
写真57　第77次調査出土遺物(3)……152
写真58　第77次調査出土遺物(4)……153
写真59　第79次調査出土遺物……154

下ノ内遺跡

写真1　Ⅲ－4層出土縄文土器……159
写真2　攪乱部完掘状況……160
写真3　基盤礫層検出状況……160
写真4　下ノ内遺跡第5次調査区土層断面……160

富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

―― 富沢遺跡第70～75・77・79次，発掘調査報告書 ――

第１章　富沢遺跡のあらまし

１．遺跡の概要

富沢及びその周辺の遺跡の歴史的環境及び地形・地質に関しては山口遺跡第２次調査報告書（田中他：1984）、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野他：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田他：1991）に詳しいので、ここでは概要を述べるに留めることとし、その他「泉崎浦遺跡」に関わる変更事項についてのみ触れることとしたい。

富沢遺跡は仙台市南部の太白区鹿野、長町、長町南、泉崎、富沢に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）西部に位置し、北西部を丘陵、他を自然堤防で囲まれた後背湿地を中心に広がっている。現在は土地区画整理事業による盛土のため旧地形を見ることはできないが、盛土以前の標高は９～16m、総面積は約90haである。

昭和51年、本遺跡南側の六反田遺跡で「アゼ状遺構」が検出され、その後昭和57年には隣接する山口遺跡において仙台市では初めて水田跡が検出された。また同時に富沢地区においても高速鉄道に係わる試掘調査及び本調査の結果から水田跡の存在が確認された。このため調査成果と共に地形的特徴を考慮して、昭和58年新たに「富沢水田遺跡」として登録された。その後居住域等の検出によって昭和62年には「富沢遺跡」と改称され、平成２年には遺跡範囲の北東部が拡大されている。調査は昨年度まで69次の調査が実施され、今年度は第70～79次調査が行われたが、この他に宮城県教育委員会、民間の調査団による調査も行われている。

２．泉崎浦遺跡について

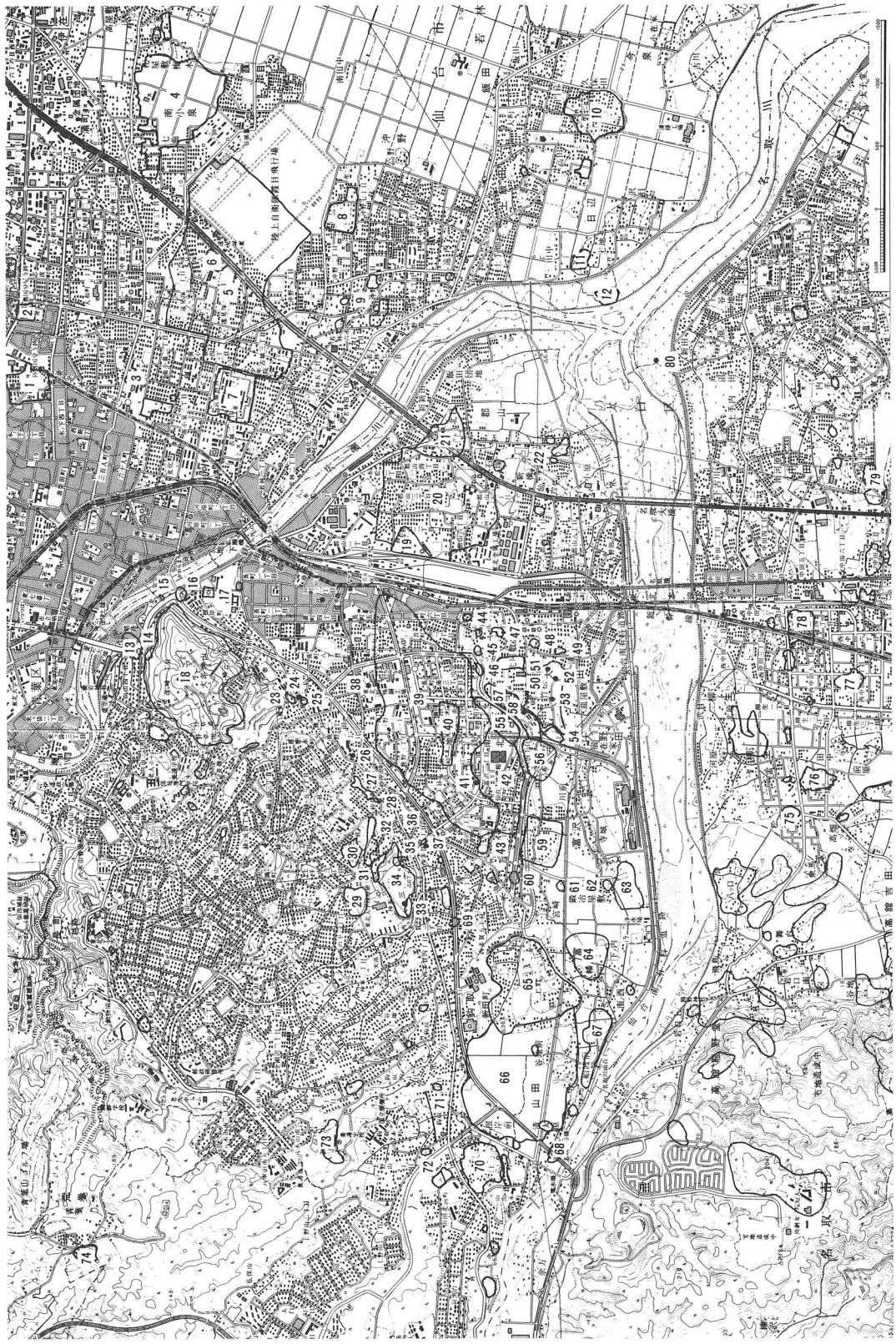
遺跡中央部の微高地部分を中心とする約５haの地域は従来「泉崎浦遺跡」として登録され、これまで４次にわたる調査が実施されてきた。当初、「泉崎浦遺跡」は低湿地に立地する「富沢水田遺跡」に対して居住域等の存在を想定した位置付けがなされていたが、その後に泉崎浦遺跡でも水田跡が検出されたこと、また「富沢水田遺跡」が居住域などの検出によって「富沢遺跡」と改称されたことなどによって両者間において遺跡構造の類似性が認められるようになった。このため、今年度からは「泉崎浦遺跡」を「富沢遺跡」に包括して調査・報告を行うこととし、調査次数も富沢遺跡として与えている。今回は富沢遺跡第70次調査がこれに相当する。なお「泉崎浦遺跡」としての登録は従来通りとする。

３．水田跡の認定基準

現在、富沢遺跡における水田跡の認定基準に関しては「水田跡の基本的理解－仙台市における水田跡の検出と認定」（仙台農耕文化勉強会：1990）を基準としており、概要については前年度の富沢地区の報告書でも抜粋している。詳細についてはこれらを参照されたい。

第１表　遺跡地名表

No.	遺跡名	立地	年代	No.	遺跡名	立地	年代
1	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良・平安・近世	41	教塚古墳	後背湿地	古墳（後）
2	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良・平安・中世	42	山口遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世
3	法領塚古墳	自然堤防	古墳（後）	43	富沢清水遺跡	自然堤防	奈良・平安
4	仙台東郊条里跡	沖積平野	奈良・平安	44	長町六丁目遺跡	自然堤防	奈良・平安
5	南小泉遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世	45	元袋Ⅲ遺跡	自然堤防	奈良・平安
6	遠見塚古墳	自然堤防	古墳（前）	46	袋東遺跡	自然堤防	古墳・平安
7	若林城跡	自然堤防	古墳・中世・江戸	47	新田遺跡	自然堤防	奈良・平安
8	沖野城跡	自然堤防	中世	48	北屋敷遺跡	自然堤防	奈良・平安
9	神柵遺跡	自然堤防	縄文～平安	49	長町清水遺跡	自然堤防	奈良・平安
10	今泉遺跡	自然堤防	縄文（後）～近世	50	大野田古墳群	自然堤防	古墳（中・後）
11	日辺館跡	自然堤防	室町	51	王の壇古墳	自然堤防	古墳
12	日辺遺跡	河川敷	古墳（中）	52	鳥居塚古墳	自然堤防	古墳（後）
13	愛宕山横穴群	丘陵	古墳（末）・奈良	53	春日社古墳	自然堤防	古墳（後）
14	大年寺山横穴群	丘陵	古墳（末）	54	伊古田遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
15	宗禅寺横穴群	河岸段丘	古墳（末）	55	下ノ内浦遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
16	根岸遺跡	河岸段丘	縄文	56	下ノ内遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
17	兜塚古墳	自然堤防	古墳（中）	57	六反田遺跡	自然堤防	縄文～江戸
18	茂ケ崎城跡	丘陵	南北朝～室町	58	五反田古墳	自然堤防	古墳
19	西台畑遺跡	自然堤防	縄文・弥生（中）・古墳	59	富沢館跡	自然堤防	戦国
20	郡山遺跡	自然堤防	古墳（末）・奈良・中世	60	堀ノ内遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
21	北目城跡	自然堤防	室町・江戸	61	鍛冶屋敷Ａ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
22	欠ノ上Ⅰ遺跡	自然堤防・後背湿地	古墳・奈良・平安	62	鍛冶屋敷Ｂ遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・奈良・平安
23	鹿野屋敷遺跡	丘陵	古墳・奈良・平安	63	六本松遺跡	自然堤防・後背湿地	奈良・平安
24	一塚古墳	後背湿地	古墳（後）	64	南ノ東遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・奈良・平安
25	鹿野一丁目遺跡	河岸段丘	縄文・弥生・奈良・平安	65	上野遺跡	河岸段丘	縄文（中）・奈良・平安
26	二塚古墳	後背湿地	古墳	66	山田条里遺構	河岸段丘	縄文・奈良・平安・江戸
27	砂押屋敷遺跡	河岸段丘	奈良・平安	67	船渡前遺跡	河岸段丘	縄文・弥生・奈良・平安
28	砂押古墳	河岸段丘	古墳	68	清太原西遺跡	河岸段丘	縄文・平安
29	芦ノ口遺跡	丘陵	縄文（早・前）・弥生・平安	69	西台窯跡	丘陵	古墳・奈良・平安
30	土手内遺跡	丘陵	縄文～平安	70	山田上ノ台遺跡	河岸段丘	旧石器・縄文(早・前・中・後)・平安・江戸
31	土手内横穴群	丘陵	古墳・奈良	71	杉土手	丘陵	江戸
32	土手内窯跡	丘陵	古墳・奈良	72	北前遺跡	河岸段丘	旧石器・縄文（早・前・中）・平安・江戸
33	富沢窯跡	丘陵	古墳・奈良・平安	73	御堂平遺跡	丘陵	縄文・平安・中世
34	三神峯遺跡	丘陵	縄文（前・中）・平安	74	青葉山遺跡	丘陵	旧石器
35	金山窯跡	丘陵	古墳（中）	75	松木遺跡	自然堤防	平安・中世・近世
36	金洗沢古墳	河岸段丘	古墳	76	関場遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安
37	裏町古墳	河岸段丘	古墳（中）	77	栗遺跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安
38	金岡八幡古墳	後背湿地	古墳（後）	78	安久東遺跡	自然堤防	弥生～近世
39	富沢遺跡	後背湿地	旧石器～近世	79	後河原遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・奈良・平安・中世
40	泉崎浦遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・古墳・平安・近世	80	大塚山古墳	河川敷	古墳

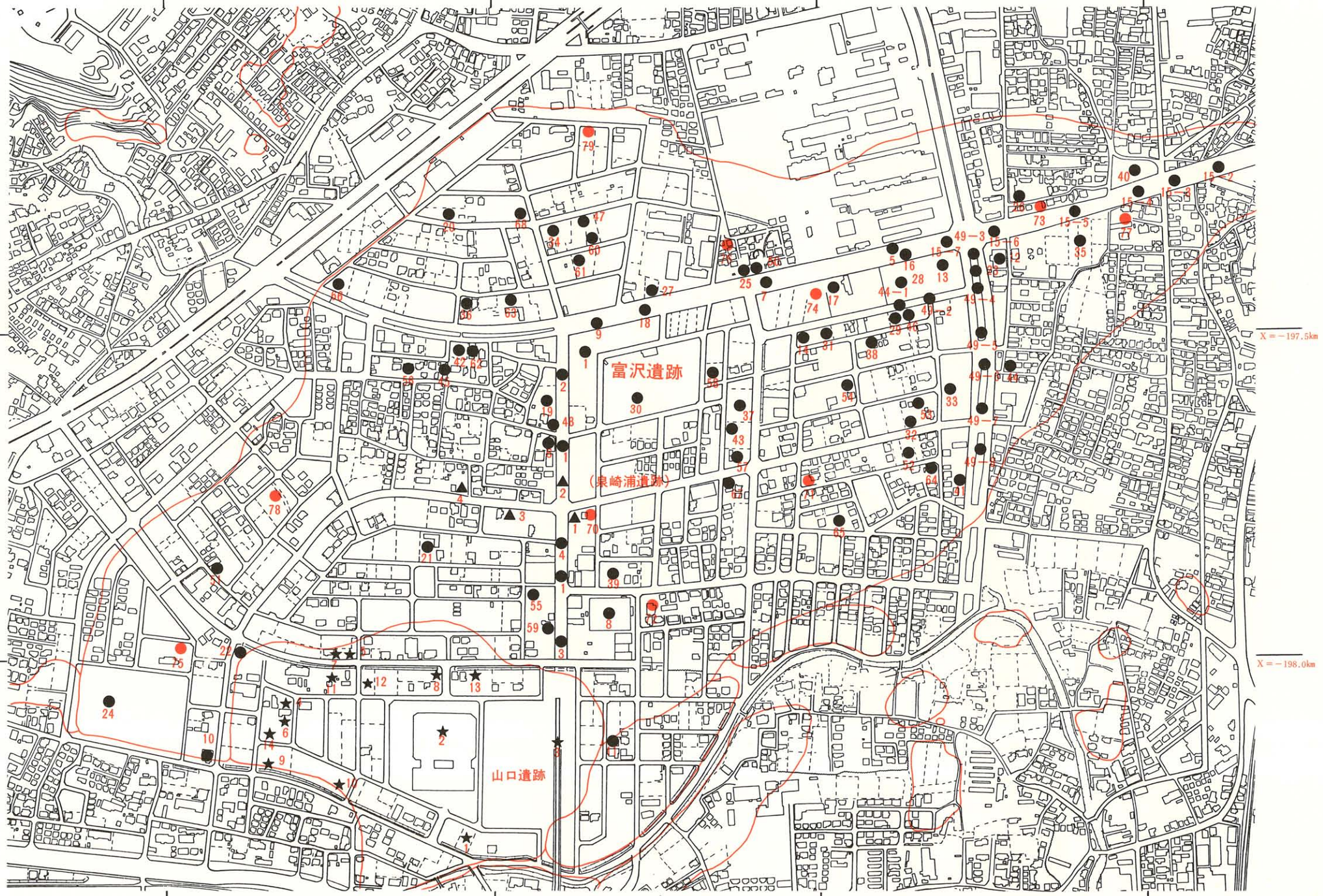


第１図　周辺の遺跡

第２表　平成３年度　富沢遺跡調査要項

調査次数	所在地	調査期間	調査面積	立地	位置	杭A座標	現況	現標高	旧標高	協力者	担当職員
富沢第70次	長町南四丁目12	平成３年４月15日～５月28日	約 70㎡	微高地縁辺	微高地部	X＝－ 197.78019km Y＝＋ 3.63562km	宅地	11.58m	10.78m	㈱日栄産業	五十嵐康洋
富沢第71次	長町南三丁目14	平成３年４月15日～４月24日	約 15㎡	後背湿地	北部	X＝－ 197.73183km Y＝＋ 3.98027km	宅地	10.65m	8.75m	㈱東北積和不動産	渡部弘美
富沢第72次	長町南四丁目21	平成３年５月８日～６月19日	約100㎡	後背湿地	南部	X＝－ 197.91651km Y＝＋ 3.76707km	宅地	10.75m	9.65m	㈱仙台土地開発	渡部弘美
富沢第73次	長町七丁目11	平成３年６月10日～６月27日	約 33㎡	後背湿地	北部	X＝－ 197.30419km Y＝＋ 4.33711km	宅地	11.00m	9.89m	佐藤良和	五十嵐康洋
富沢第74次	長町南三丁目１	平成３年７月４日～９月12日	約284㎡	後背湿地	北部	X＝－ 197.43864km Y＝＋ 3.95957km	水田	9.9m	9.9m	㈱宮城野土地	平間亮輔 川名秀一
富沢第75次	富沢二丁目５	平成３年７月１日～８月22日	約115㎡	後背湿地	西部	X＝－ 197.97546km Y＝＋ 3.76706km	宅地	14.7m	13.1m	社会福祉法人 仙台市社会事業協会	渡部弘美
富沢第77次	長町南一丁目４	平成３年８月22日～平成４年１月７日	約310㎡	微高地	北部	X＝－ 197.32665km Y＝＋ 4.45454km	宅地	10.80m	9.84m	㈱仙台土地開発	五十嵐康洋
富沢第79次	鹿野三丁目209	平成３年11月11日～12月５日	約 50㎡	後背湿地	北部	X＝－ 197.19311km Y＝＋ 3.65460km	宅地	12.50m	11.48m	㈱東急不動産	太田昭夫

＊　富沢第76次調査＝「仙台平野の遺跡群 XI」に報文所収
富沢第78次調査＝平成４年度継続調査予定



1/7,000

第２図　富沢遺跡全体図

第２章　調査結果

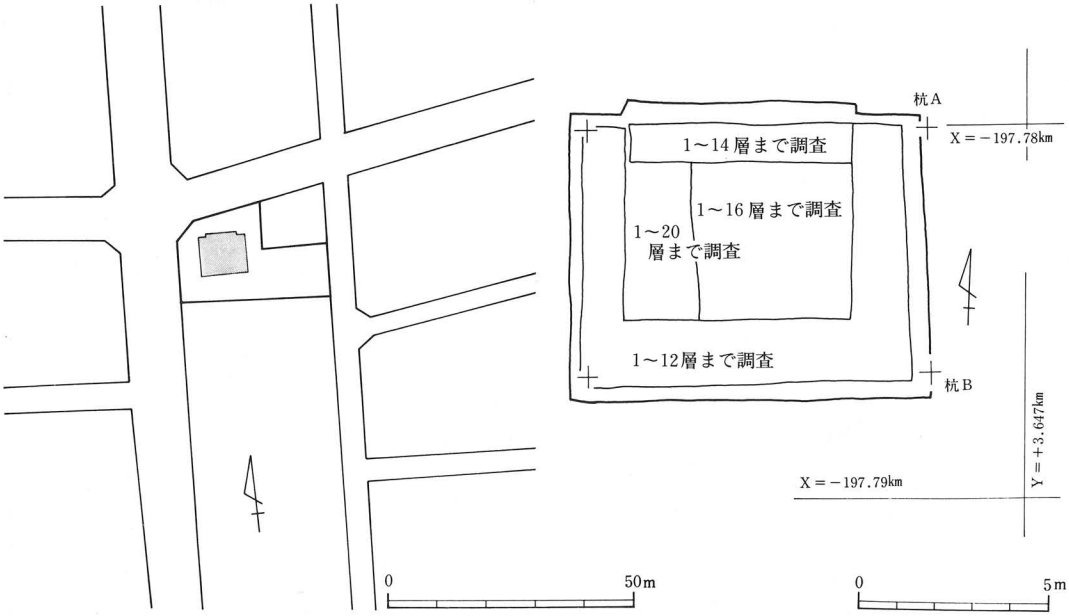
第１節　富沢遺跡第70次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は、約８×９ｍ（72㎡）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）上面までを重機で排除し、以下は人力により行なった。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。12層上面までは、調査区全面の精査を実施し、12層以下は、約５×６ｍの試掘区を設けて掘り下げた（16層以下は約２×４ｍ）。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準にして実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している。（杭Ａ：Ｘ＝－197.78019km　Ｙ＝＋3.63576km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.78664km　Ｙ＝＋3.63562km）。

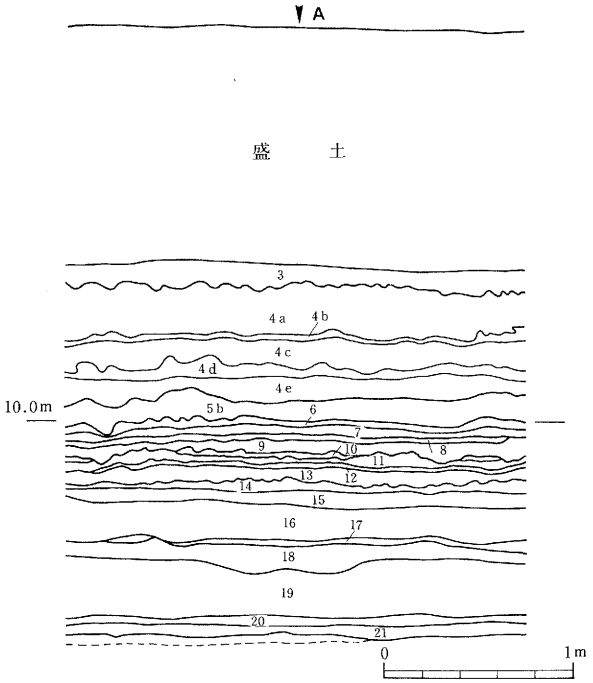
２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別20層、細別25層が確認された。各層の土質は、１～４ｄ層が砂または砂質シルトで、５ａ、５ｂ層は粘土である。６層～16層までは泥炭質粘土であるが、13層～16層は泥炭化が進んでる。17層～19層は砂質粘土から細砂で、20層はシルト質粘土になっ



第３図　調査区位置図・設定図

ている。グライ化は17層以下から漸次進んでいる。現代のものをのぞく水田土壌は、９層である。また、水田土壌の可能性のあるのは、３層・５ａ層・13層・14層・16層である。遺物出土層は、溝の埋土内からと９層からである。全体的な層の傾きは、北側にわずかに下がる。



第４図　基本層序

３．検出遺構と出土遺物

(1)　２層上面

ＳＤ２・ＳＤ３・杭列１・ＳＸ４

２層上面において平行する溝跡２条（ＳＤ２・ＳＤ３）を検出し、ＳＤ３に伴う杭列を検出した。ＳＸ４を調査区の南西部で検出した。ＳＤ２・ＳＤ３の方向は共にＮ－50°－Ｗである。

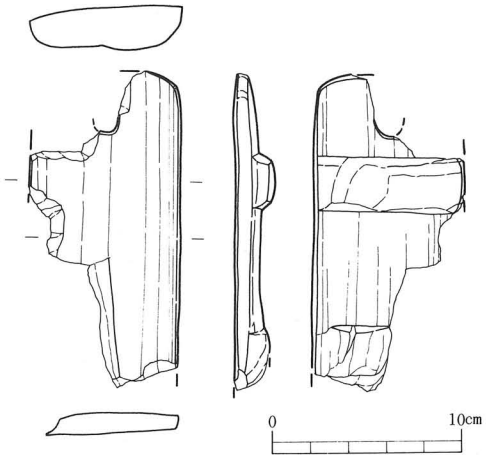
ＳＤ２は上端幅50～60cm、下端幅約25cmである。深さは24cmで、ほぼ垂直に掘り込まれ底面は平坦で、埋土は２層である。出土遺物はない。

ＳＤ３は、上端幅100～130cm、下端幅20～70cmである。深さは約30cmである。

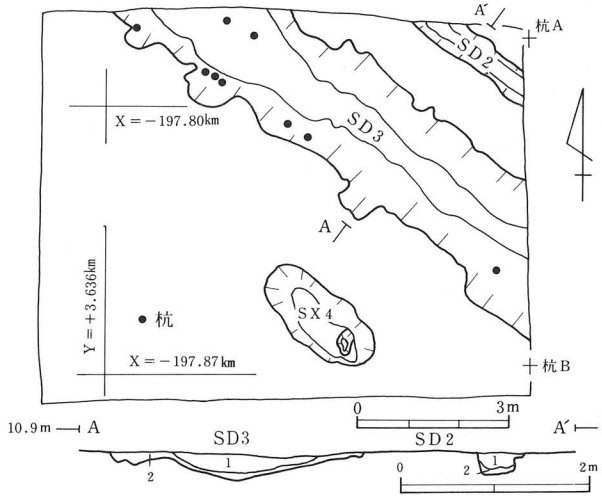
層序	色調	性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1	オリーブ黒色 5Y3/1	砂質シルト	2cm～32cm	――	２層ブロック（下部）	現代の水田土壌
2	灰色 7.5Y4/1	細砂	3cm～22cm	――	φ径１～４cm礫・白色粒（全体）	――
3	オリーブ黒色 5Y3/1	砂質シルト	2cm～６cm	あり	――	10YR1.7/1黒斑状（水田土壌？）
4a	褐色 10YR4/4	砂	4cm～34cm	――	マンガン粒・φ５mm～２cm礫（ブロック）	――
4b	黒褐色 10YR3/2	粘土質シルト	2cm～６cm	――	――	――
4c	褐色 10YR4/4	砂	6cm～14cm	――	マンガン粒（全体）	――
4d	黒褐色 2.5Y3/2	砂質シルト	2cm～10cm	――	――	――
4e	褐色 10YR4/4	砂	2cm～12cm	あり（層下部）	――	――
5a	オリーブ黒色 5Y4/1	泥炭質粘土	10cm～12cm	――	――	下部に下位の層ブロック・水田土壌？
5b	オリーブ黒色 5Y3/1 灰色 5Y5/1	泥炭質粘土	8cm～14cm	――	――	――
6	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	2cm～６cm	――	――	――
7	オリーブ黒色 7.5Y3/1	泥炭質粘土	2cm～６cm	――	――	――
8	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	1cm～２cm	――	――	――
9	黒色 2.5GY2/1	泥炭質粘土	3cm～14cm	――	炭化物・マンガン集積（層中項）白色粒	水田土壌
10	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	2cm～６cm	――	――	部分的分布
11	オリーブ黒色 7.5Y3/2	泥炭質粘土	1cm～８cm	――	炭化物・マンガン集積（層下部）	――
12	オリーブ黒色 5Y3/2	泥炭質粘土	1cm～４cm	――	炭化物	炭化物全体（5.6cm～１cm）
13	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	4cm～12cm	――	帯状にマンガン集積	（水田土壌？）
14	黒色 7.5Y2/1	泥炭質粘土	2cm～10cm	――	――	（水田土壌？）
15	オリーブ黒色 5Y3/2	泥炭質粘土	2cm～10cm	――	マンガン（層上部）	――
16	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	15cm～24cm	――	――	（水田土壌？）
17	黒色 2.5Y2/1	砂質粘土	2cm～８cm	――	――	層下部砂質分多い
18	黒褐色 2.5Y3/1	砂質シルト	8cm～15cm	――	――	層下部砂質分多い（２～３mm）
19	暗オリーブ灰色 2.5GY4/1	細砂	22cm～38cm	――	砂（層中項）径大きい	層全体5Y2/1黒斑状・グライ化
20	暗オリーブ灰色 5GY4/1	シルト質粘土	3cm～６cm	――	マンガン（帯状）	――

埋土は２層で、堆積土中から下駄１点（第５図）と陶器片10点を出土している。下駄は約１／３を欠損し、鼻緒穴と考えられる穴が１つある。歯は２枚あり、著しくすり減っている。また、歯をついだ跡は認められないので連歯であると考えられる。陶器片のうち図化できたのは１点だけで（第７図１）、相馬灰釉碗であると考えられる。

杭列１はＳＤ３の南辺で検出している。これらの杭列の中には上部に焦痕を持つものもある。また、溝の中央部で杭を２本検出しているがこの杭列に伴うものかどうかはわからない。ＳＤ

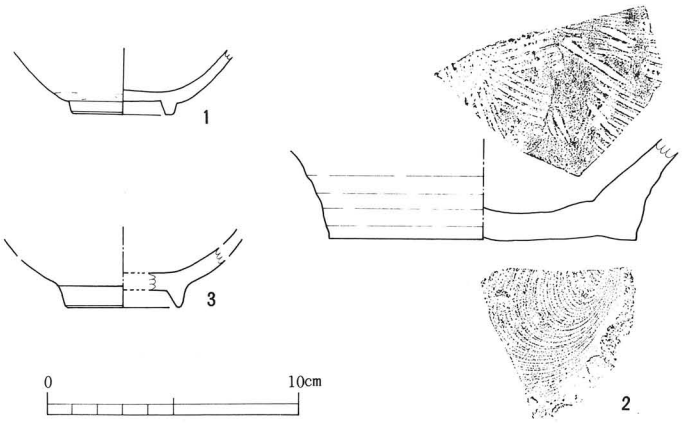


第５図　出土遺物



第６図　ＳＤ２・３・ＳＸ４平面図・ＳＤ２・３断面図

挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種別	樹種	長さ	幅	高さ	台厚さ	鼻緒穴径	木取り	備考
第５図	51－6	ＳＤ３	下駄	ヤナギ属	16.8cm	7.9cm	2.1cm	1.3cm	1.3cm	柾目	子供用？



No.	写真図版	遺構・層位	種別	器種	遺存度	底径	色調 外面	色調 内面	特徴
1	51－7	ＳＤ１	陶器	碗	下半 1/3	4cm	浅黄色	浅黄色	削り出し高台、内・外面灰釉、相馬、18c？
2	51－8	ＳＤ１	陶器	擂鉢	下半 1/5	(12cm)	灰色	暗赤褐色	底部回転糸切無調整、内・外面鉄釉、古瀬戸、中世
3	51－5	ＳＤ３	陶器	碗	下半 1/4	(4.6cm)	緑灰色	緑灰色	削り出し高台、内・外面灰釉、相馬、18～19c

第７図　ＳＤ１・３出土遺物

３の上部に区画整理前の溝を検出し、陶磁器片を出土している（第７図２・３）。

ＳＸ４は、上端長軸250㎝、短軸125㎝の楕円形の落ち込みで埋土は１層である。出土遺物はない。

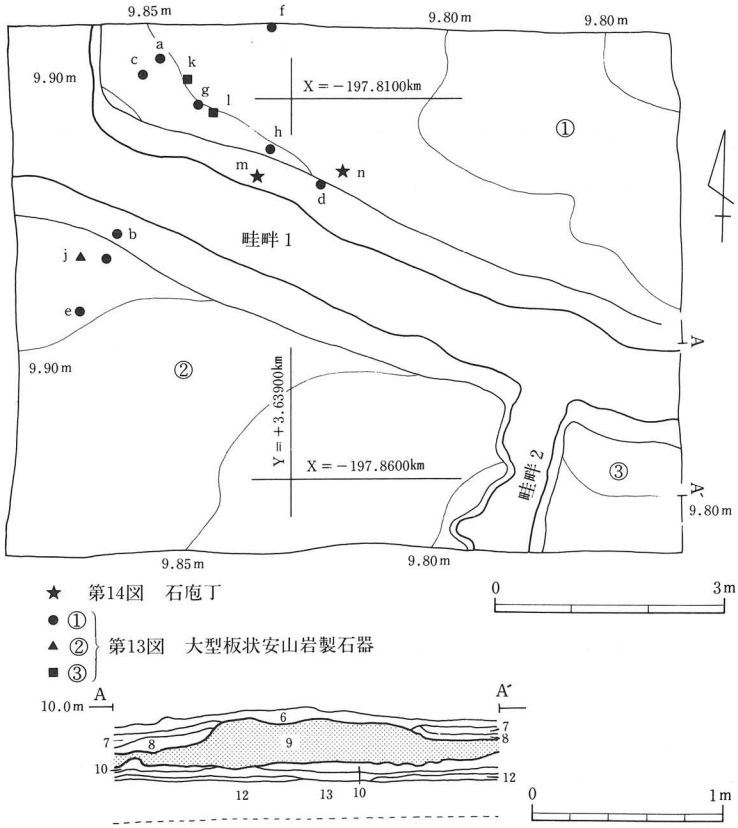
⑵　９層上面

９層水田跡（第８図）

畦畔（畦畔１・２）２条を検出し、これによって区画される水田区画を３区画検出した。水田面の標高は9.76～10.05ｍで北東方向に下がっている。

水田跡は直線的に延びる畦畔１、これにＴ字状に交わる畦畔２から構成されている。しかし、畦畔１は北東部で広がりが認められ、別の畦畔が取りついていた可能性もあるが調査区外に延びるため断定はできない。畦畔は耕作土と同じ９層を盛り上げて作られている。畦畔１は検出長9.5ｍ、方向Ｅ－25°－Ｓ、下端幅1.8～2.0ｍで耕作土上面からの高さは７～10㎝の間である。畦畔１は、擬似畦畔Ａを伴っている。規模、構造からみて畦畔１は大畦と考えられる。畦畔２は畦畔１にＴ字状に交わり検出長2.2ｍ、方向Ｓ－16°－Ｗ、下端幅0.8～1.2ｍで耕作土上面からの高さは４～６㎝である。規模、構造からみて畦畔２は小畦と考えられる。

畦畔１・２によって区画される水田区画は３区画である。いずれも部分的な検出で全体の規



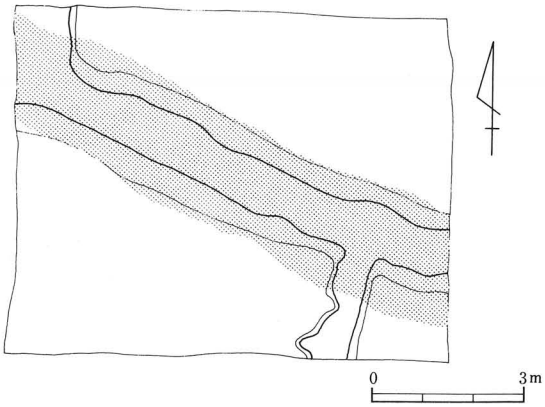
第８図　９層水田跡平面・断面図　石器・石庖丁出土状況

模、形状は不明であるが、残存形から方形を呈するものと思われる。同一区画内での比高差は、区画①８cm以内、区画②17cm以内、区画③10cm以内である。区画②から区画①において10cm程の下がりが認められ、北東方向への傾斜が観察でき、全体的な傾斜と同様である。耕作土の９層は直下の10～12層を攪拌することによって形成されている。層中には10～12層をブロック状に含み、中位にマンガンの帯状の集積が認められ層の下面には著しい凹凸が見られる。層厚は８～30cmである。尚、水口は検出されなかった。

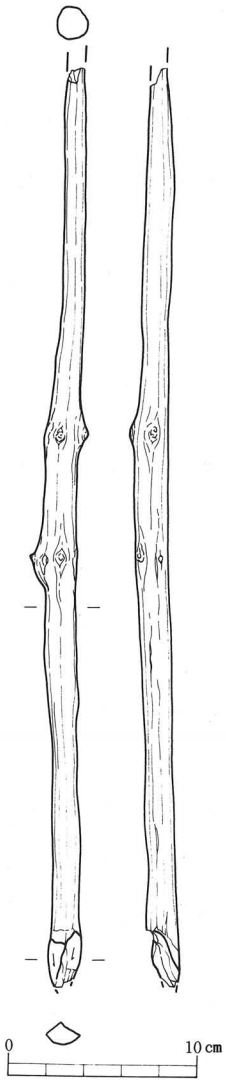
遺物は耕作土中から石器20点、先端加工のある材１点が出土している。20点の石器のうち石材から２つに分けられる。

第13図：畦畔１の周囲から、板状節理を有する安山岩を石材とする18点の石片が出土している。このうち14点に接合関係が認められ、出土状況は第８図に示してある。接合により復元された石器３点を第13図①・②・③として図示してある。他の４点には接合関係は認められない。

①の平面形は不整四辺形を呈している。ａ面において下側縁は直線的で縁辺角は小さく（15°～17°）、折れ面状の微細剥離痕が認められ、ａ・ｂ両面の一部に肉眼で光沢面が認められる。他の側縁はすべて折れ面である。断面形はくさび形を呈している。このため、石器の種類としては、ａ面下側縁（ｂ面では上側縁）を刃部とする微細剥離痕のある石片と理解される。最大長15.9cm、最大幅7.7cm、厚さ10mm、重さ97.0ｇを測る。刃部長、刃部に直交する最大器幅はそれぞれ最大長、最大幅と同じである。これらの点から、この石器は石質及び大きさや、形態的特徴から大型板状安山岩製石器（斎野他：1987）と考えることができる。し



第９図　６層上面で確認された９層水田跡擬似畦畔Ａ平面図
（スクリーントーン部分）



第10図　出土遺物

挿図番号	図版番号	出土層位	種　別	樹　種	表材形状	長　さ	直　径	先端加工	表面加工	備　　考
第10図		９層中	杭	イヌガヤ	丸太材	48.3cm	1.6cm	２方向	――	焦痕

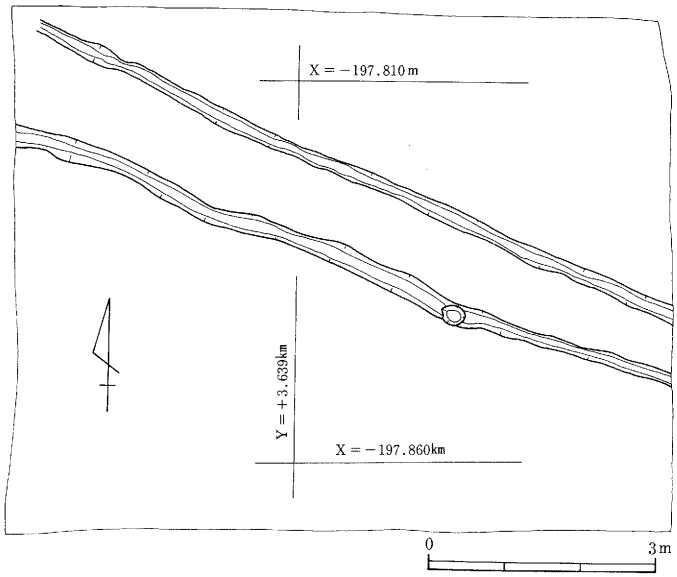
かし、折れ面と刃部の微細剥離痕の新旧関係については不明であり、この形態で石器として使われていたか否かは明確でない。

②の平面形は、不整五角形を呈する。ａ面において下側縁は短いが二次加工が認められる。縁辺角は小さく約17°を測る。他の側縁はすべて折れ面である。最大長5.3cm、最大幅2.5cm、厚さ10.7mm、重さ12.4ｇを測る。

③の平面形は不整四辺形を呈する。ａ面において下側縁は縁辺角17°を測る。他の側縁はすべて折れ面である。最大長9.3cm、最大幅2.8cm、厚さ8.3mm、重さ21.6ｇを測る。
他の４点については不整四辺形を呈し側縁のほとんどが折れ面である。

これらの①～③と他の４点の関係については、石質や厚さなどに類似性が認められること、比較的まとまった範囲（４×４ｍ）から出土していること、後述されているように金属顕微鏡の観察による光沢面の分布状況からは、ａ面の左側縁から上側縁にかけての折れ面は下側縁より新しいことが推定されることから、本来①よりも大きなひとつの石器であった可能性が考えられる。また、①～③はいずれもいくつかの石片が接合しており、さらに接合しなかった他の４点を含めても石器個々の大きさは最大長５cmを越えるものはなく、通常の折損（事故など）の結果を示しているとは考えにくい面もあり、意図的な破砕が行われた可能性が考えられる。この石材の産地としては、富沢遺跡南西方向約４kmの高舘丘陵北部と推定されている。（斎野他：1987）。

第14図：粘板岩製の磨製石庖丁である。第８図に★で示すように大畦の東側から出土した２点が接合している。２点間の距離は約1.1ｍである。形態的には外弯刃の半月形石庖丁と考えられるが、約１／２が折損している。背部は直線的である。刃部は両刃であるが、断面形は非対称で、片面は浅く、もう片面は深く研がれている。両面共に研磨が行われており、ａ面はほぼ平坦であるが、ｂ面には素材面が残っている部分も認められ、やや凹凸が見られる。紐穴は２孔認められ、紐穴の芯々間隔は36mmである。ａ面側の右の紐穴は約２／３が欠損している。ａ面側の右の紐穴は回転穿孔痕の



第11図　10層平面図

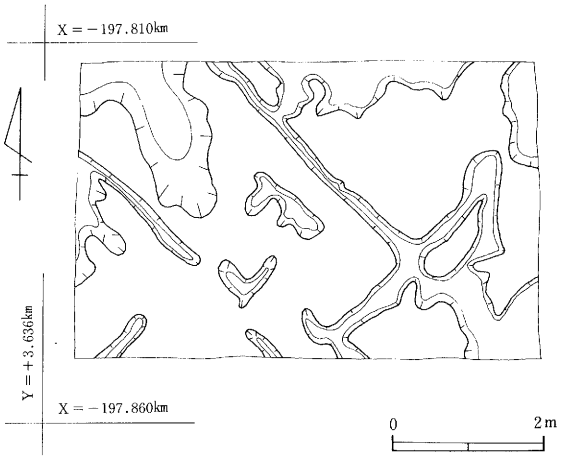
み認められるが、他は敲打の後回転穿孔によってあけられている。ａ面側の左の紐穴の径は７㎜である。残存長10.0㎝、最大幅7.1㎝、厚さ６㎜、重さ53.0ｇである。金属顕微鏡の観察によりｂ面に部分的に光沢が認められ、この石庖丁が製品として機能したあとに何らかの原因で折損したと考えることができる。この石材の産地については阿武隈山系に求められる可能性がある。

(3)　10層上面

10層上面において溝状の落込みを２本確認した。２本はそれぞれ平行して直線的に延びている。２本間の間隔は、40～70㎝である。埋土はそれぞれ１層で、基本層９層の土が入り込んでいる。方向は北西から南東に下がっている。出土遺物はない。

(4)　15層上面

15層上面において溝状の落込みを調査区全面で確認した。幅８㎝～40㎝、深さ12㎝ほどである。この溝状の落ち込みには何らかの区画を示すように直交するものや、幅の広がるものなどがあり性格は不明である。埋土は１層で基本層の14層である。出土遺物はない。



第12図　15層平面図

４．石器の使用痕分析

９層水田跡（弥生時代桝形囲式期あるいはそれ以前）に伴って出土した石器の使用痕分析を行った。

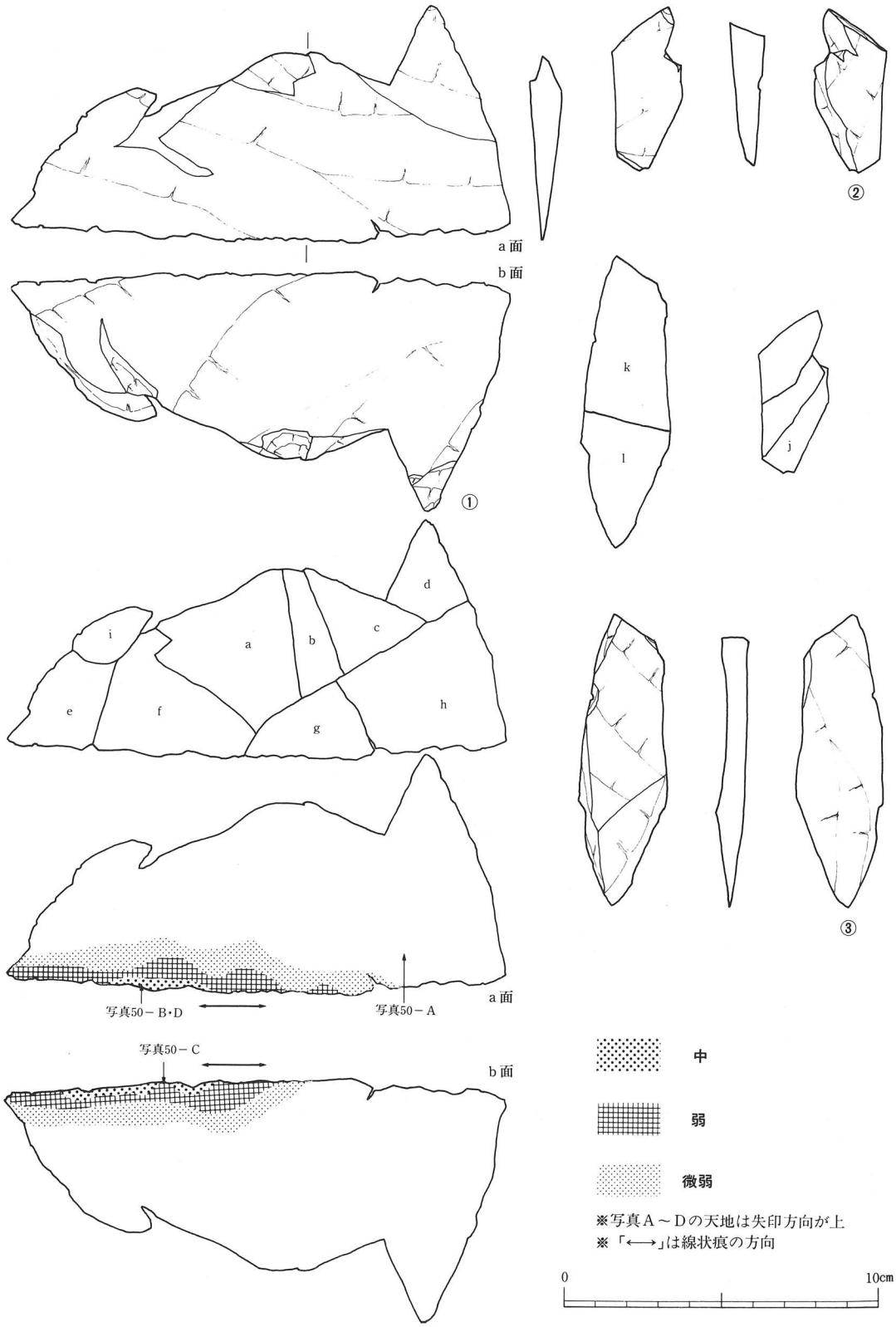
(1)　分析方法

Ｌ．Ｈ．キーリーによって確立された高倍率法による分析である（Keely：1980）。金属顕微鏡の100倍と200倍で観察を行った。光沢面のタイプについては梶原・阿子島（1981）、芹沢他（1981）、山田（1986）にもとづいた。また、実体顕微鏡（10～63倍）による石器表面の観察も行った。

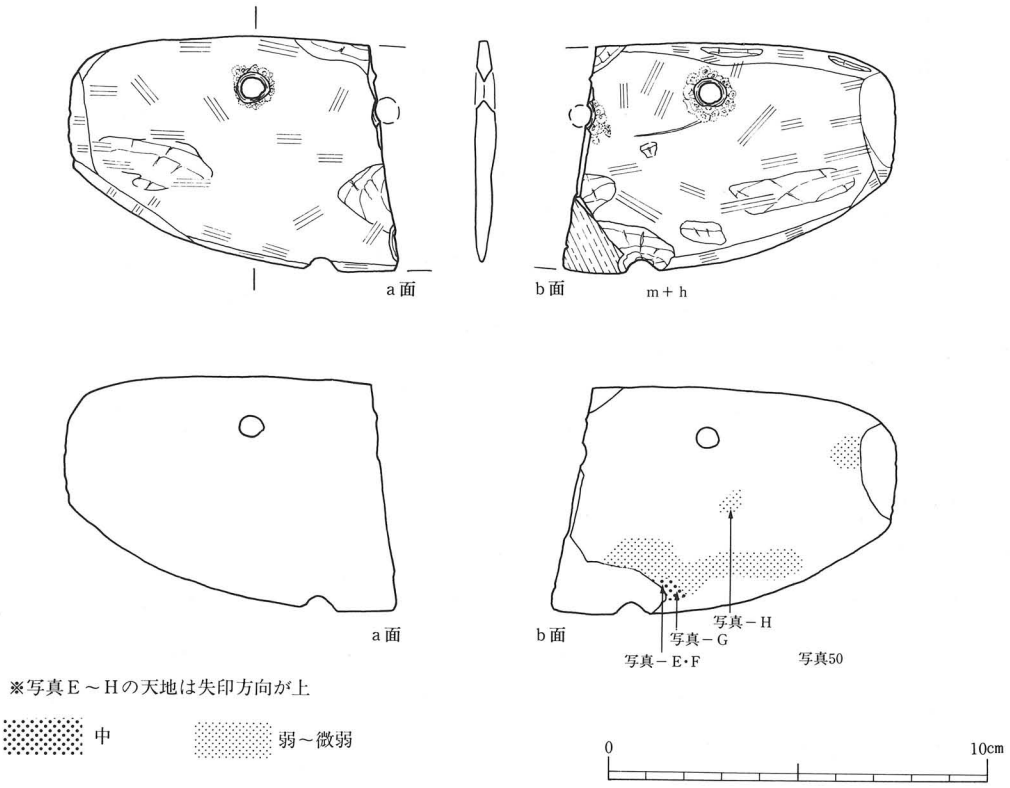
石器は水田土壌中より出土していることもあり、資料表面の汚染は少ないので、アルコールによる手の油脂の拭き取り以外の洗浄は行わなかった。

(2)　観察結果

第13図①～③：石材は板状節理を有する安山岩である。出土した18点の石片のうち14点に三つの接合関係が認められる（①～③）。①は微細剥離痕のある石片（大型板状安山岩製石器）で



第13図　９層出土石器実測図・光沢分布図(1)



第14図　９層出土石器実測図・光沢分布図(2)

ある。

①にはａ面における下側縁、ｂ面では上側縁の一部にそれぞれ肉眼で光沢面が観察される。金属顕微鏡による観察では、①にはａ・ｂ両面に使用痕光沢面が認められたが、②、③には認められなかった。以下は①の使用痕分析結果である。

確認された光沢面は、タイプＡとタイプＢ、及びその中間の形状を示すものである。タイプＢと識別された光沢面の表面は丸味を帯びており、明るくなめらかである。頁岩などにみられる水滴のような形状を呈するものは少なく、線形を呈するものが多い。実体顕微鏡と金属顕微鏡との併用により、この線形のタイプＢは、剥離面表面の細長い凸部（写真50－Ａ）に、その形状にそって形成された光沢面であることが知られる。大きさには違いもみられ、発達の程度を示すものと考えられる。接眼ミクロメータで計測をしたところ、大きなものは長さ100～150ミクロン、幅15～20ミクロンで、小さなものは長さ20ミクロン以下である。

線形のタイプＢの発達したものは他と連接している状況が認められ（写真50－Ｃ）、その間の凹部や周囲にも光沢面が形成され、タイプＡとなっている部分もある（写真50－Ｄ）。実体顕微鏡による観察では、タイプＡの分布するところはやや起伏のある平坦な面に見える（写真

50－Ｂ）。

これらのことから、この石器における光沢面の発達過程は、主に線形のタイプＢの形成、その連接、タイプＡの形成という順序が考えられ、それぞれ「微弱」、「弱」、「中」として光沢分布図を作成した。しかし、タイプＡは部分的に認められるだけであり、顕微鏡の視野（径約２ミリ：×100倍）全面に広がるほどではないため、「強」はもうけなかった。

光沢分布図では、「中」の範囲がａ面下側縁左側（ｂ面でも対応するほぼ同じ位置）にみられ、そこから上方、左右に光沢は徐々に弱くなりながらも広がっている。ａ面に比べ、ｂ面上側縁の右方への広がりはやや弱い。

線状痕の方向は、ａ面における下側縁（ｂ面では上側縁）に斜行するものもあるが、平行するものが支配的である。

第14図：磨製石庖丁。石材は粘板岩である。肉眼ではａ・ｂ両面に光沢面は観察されない。金属顕微鏡による観察では、ｂ面に使用痕光沢面が認められた。

ｂ面で確認された光沢面は、須藤・阿子島（1984年）により「コーングロスパッチ」ともいわれ、その大きさや分布の密度から、「強」～「無」の５段階の基準が設けられている。400倍での観察は行わなかったが、この基準をもとにして光沢分布図を作成した。また、背部の観察も行ったが、光沢面は認められなかった。

光沢分布図では、「中」の範囲がｂ面下部左側に認められ（写真50－Ｅ・Ｆ・Ｇ）、そこから上方、右方に「弱～微弱」の範囲が広がっている。「弱～微弱」の範囲は上部右側にも部分的にみられる（写真50－Ｈ）。刃部端に光沢面は認められない。

線状痕の方向は、光沢面の発達が弱く、把握することはできなかった。

(3) 考　　察

第13図①：ａ面下側縁（ｂ面上側縁）にみられるタイプＡの光沢面は、シリカ含有量の高いイネ科植物などの作業であらわれる使用痕である。また、タイプＢの光沢面はタイプＡの発達の初期、あるいは木に対する作業であらわれる使用痕であり、この場合は前者であると判断される。線状痕の方向がａ面下側縁に平行であるものが支配的であることから、この石器はａ面下側縁（ｂ面上側縁）を刃部とし、シリカ含有量の高いイネ科植物などの切断に機能したことが考えられる。また、ａ面左側縁は折れ面となっており、光沢面との直接的な新旧関係はわからなかったが、光沢面の分布状況からは折れ面のほうが新しいと推定される。なお、線形を呈するタイプＢの光沢面については、今後使用痕実験などにより石材の影響を明らかにしていく必要があろう。

第14図：ｂ面にみられる「コーングロスパッチ」は、シリカ含有量の高いイネ科植物などに機能した場合にあらわれる使用痕である。発達の程度は弱く、線状痕の方向はわからないが、須

藤・阿子島（1985）などからイネの穂摘具として使用されていたことが考えられる。また、a面に光沢面は認められない。これは、磨製石庖丁の光沢面分布が両面の向かって左側が強くなるという一般的な特徴（須藤・阿子島：1985）とは異なっており、研ぎ直しが行われた結果か、あるいは使用の初期の段階で折損した可能性が考えられる。

5．遺構の所属年代とまとめ

遺構を検出したのは、2層・9層・10層・15層である。各遺構の所属年代は層位の対応の可能な隣接する仙台市高速鉄道関係遺跡の調査（泉崎2区）（吉岡、篠原：1989）、泉崎浦遺跡第3次調査（主浜：1988）の結果などから考えると確実に対応できたのは9層だけである。

70次調査	高速鉄道	泉崎浦3次	所属年代
9層	8層	Ⅷb層	弥生時代中期（桝形囲式期かそれ以前）

1．2層上面で検出したのは溝跡2条（ＳＤ２・３）とＳＤ３に伴う杭列1列、性格不明遺構1基である。所属年代は近世以降であると考えられる。

2．9層で検出した水田跡は大畦畔とそれに交わる畦畔からなっている。大畦畔は擬似畦畔Aを伴っており、これは6層上面でも確認されている。水田区画はいずれも部分的な検出であり一区画の大きさは明確ではないが、検出された区画内での比高差が大きいのでさらに畦畔によって区画されていた可能性もある。

9層で出土した大型板状安山岩製石器は、畦の両側での接合関係がみられる。18点の石器個々の大きさが最大長5㎝を越えないこと、側縁が折れ面であるものが多いことなどから通常の折損とは考えにくい面があり、意図的な破砕が行われた可能性も考えられる。しかし、調査区の範囲が狭いこと、出土地点が調査区の北西部分であることなどから、分布範囲はさらに広がる可能性も考えられるので今後の資料の増加を待って検討して行きたい。また、石庖丁もこの範囲内から折損した状態で出土しており大型板状安山岩製石器の出土状況との関連性についても今後の課題としたい。

3．10層上面で検出された溝条の落ち込みは9層水田跡で検出された畦畔の方向とほぼ同一であるので、9層での水田耕作に関係する可能性もある。

4．15層上面で検出された落ち込みは、方形状にみられるところもあることや、14層が水田土壌である可能性もあることから水田耕作に関するものである可能性がある。しかし、隣接する他の調査で対応する層がみられないこと、出土遺物がないことから時期や性格の判断はできない。

第２節　富沢遺跡第71次調査

１．調査方法

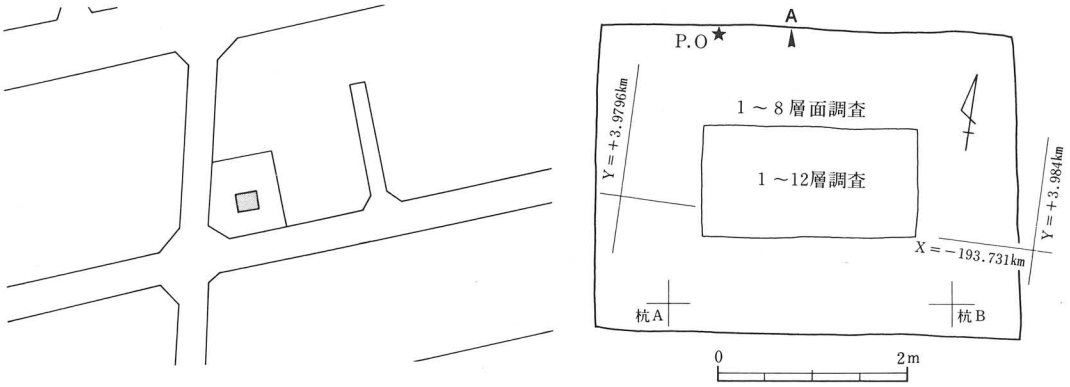
調査区の設定面積は約15㎡（4.5×3.3m）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。８層上面までは調査区全面の精査を実施したが、８層以下は安全確保のため調査面積を縮小している。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。測量は杭Ａ・Ｂを基準に行った。杭の座標値は、平面直角座標第Ｘ系で、杭Ａ：Ｘ＝－197.73183km、Ｙ＝＋3.98027km・杭Ｂ：Ｘ＝－197.73151km、Ｙ＝＋3.98315kmである。

２．基本層序

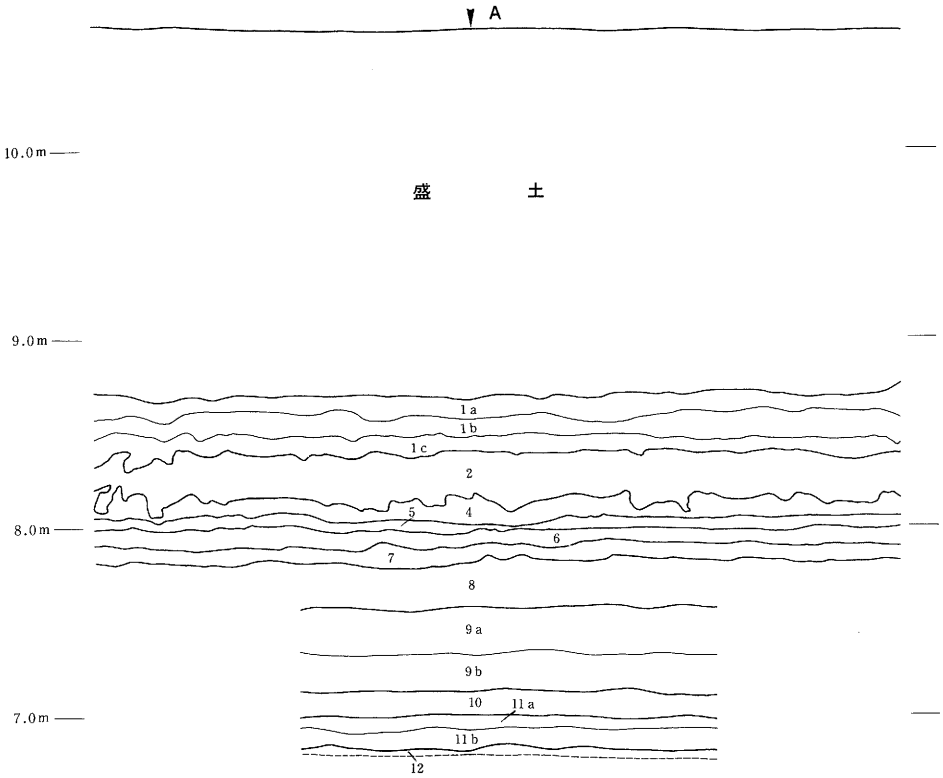
当調査区では盛土下に大別で12層、細別で16層の層序を確認した。各層の性質は１・２層が粘土で、３～12層までが泥炭質粘土である。尚、９層以下は分解の度合いからか粘性が強い。２層は下層を撹拌しており下面の凹凸がいちじるしい。層下部で灰白色火山灰が検出されている。３層は２層撹拌時に巻き上げられ、東壁に部分的に存在するのみであった。各層ともほぼ水平な堆積状況を示している。尚、当調査区では２層から８層までの計６地点でのプラント・オパール分析を実施（第３章第３節参照）したが、２層のみからイネのプラント・オパールが検出されている。

３．検出遺構と出土遺物

遺構は何ら確認されなかった。遺物は１層中で陶器、土師質土器・須恵器片が計５点出土したのみである。



第15図　調査区位置図・設定図



第16図　基本層序

層序	色調	性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1a	オリーブ黒色　7.5Y3/1	シルト質粘土	5～22cm	――	――	現代の水田土壌
1b	灰色　7.5Y4/1	シルト質粘土	5～15cm	斑文有	細砂	――
1c	灰色　7.5Y4/1	砂質粘土	2～20cm	斑文有	粗砂	――
2	黒色　5Y2/1	粘土	12～34cm	――	層下面に火山灰ブロック	水田土壌・下面著しく起伏3層巻き上げ
3	灰黄褐色　10YR5/2 黒褐色　10YR3/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	――	――	――	互層・部分的に分布
4	黒色　10YR1.7/1	泥炭質粘土	2～18cm	――	――	――
5	灰黄褐色　10YR4/2	泥炭質粘土	2～8cm	――	――	――
6	黒褐色　10YR2/3 黒褐色　10YR3/4	泥炭質粘土 泥炭質粘土	5～12cm	――	――	――
7	黒褐色　10YR3/2	泥炭質粘土	3～13cm	――	――	――
8	黒色　10YR2/1 灰黄褐色　10YR4/2	泥炭質粘土 泥炭質粘土	21～32cm	――	――	互層
9a	黒色　10YR1.7/1 黒色　10YR2/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	22～24cm	――	――	互層
9b	黒色　10YR1.7/1 灰色　7.5Y5/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	17～23cm	――	――	互層
10	黒色　10YR1.7/1 灰色　7.5Y5/1	粘土 粘土	10～16cm	――	――	互層
11a	黒色　10YR2/1	粘土	4～8cm	――	――	――
11b	黒褐色　10YR3/1	粘土	4～12cm	――	――	――
12	黒色　10YR2/1	粘土	10cm以上	――	――	――

4．まとめ

遺構は検出されず、水田耕作土の可能性のある層（2層）の確認のみにとどまっている。2層の時期は灰白色火山灰等から、平安時代以降と考えられる。

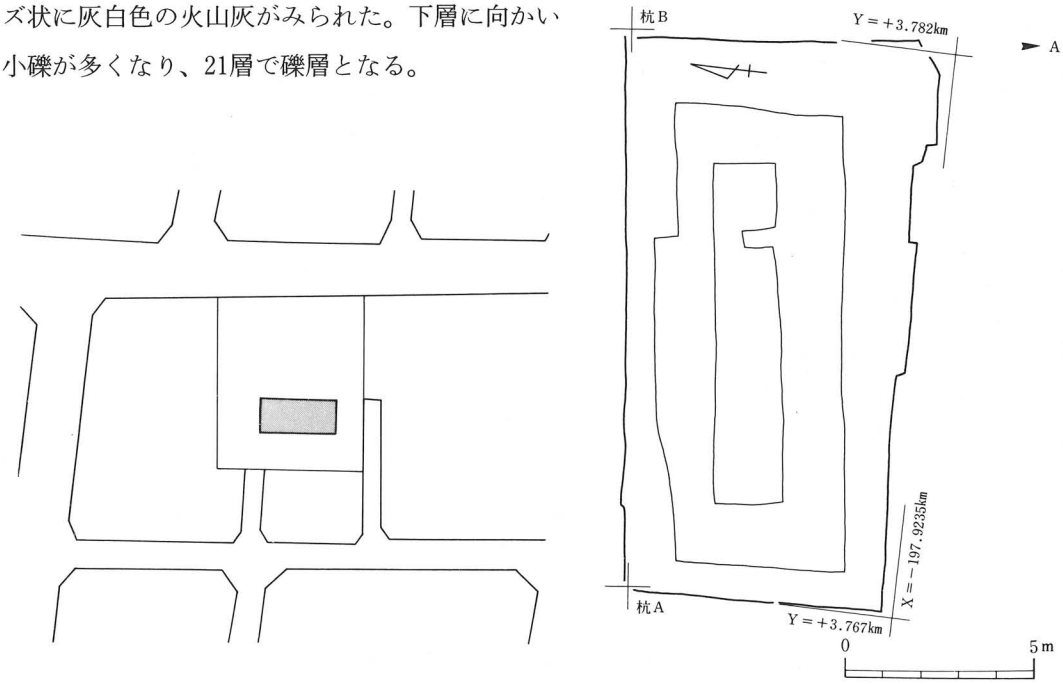
第３節　富沢遺跡第72次調査

１．調査方法

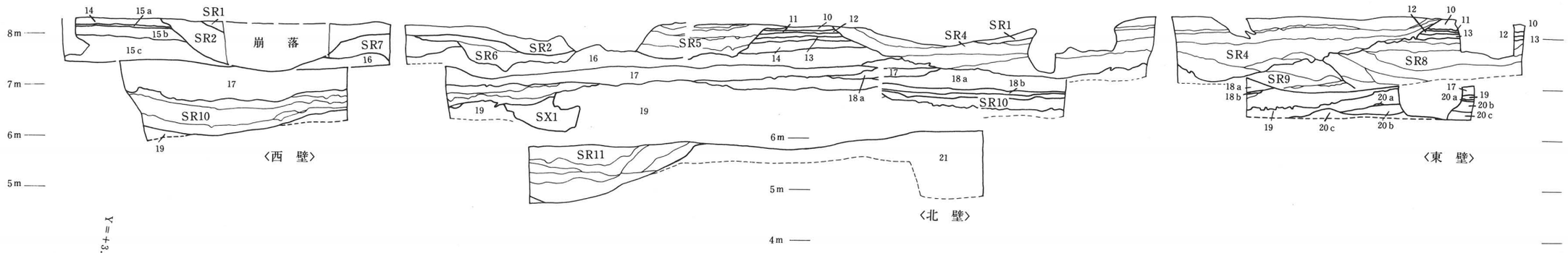
調査区の設定面積は約100㎡（14.5×７ｍ）である。調査は、現地表下３～４ｍにも及ぶ撹乱部を重機で排除し、以下は人力により行った。当調査区は第８次調査地点（工藤哲司他：1984）の東側に位置するが、前述の撹乱により水田遺構等の精査は不能となっている。21層上面までは調査区全面の精査を実施したが、21層面では12×4.5m、25層面では９×２ｍと安全確保のため調査区を縮小し段掘を行っている。調査区内には土層観察・排水用の側溝を設けた。測量は杭Ａ・Ｂを基準に行った。杭の座標値は、平面直角座標第Ｘ系で、杭Ａ：Ｘ＝－197.91651km、Ｙ＝＋3.76707km・杭Ｂ：Ｘ＝－197.91491km、Ｙ＝＋3.78155kmである。

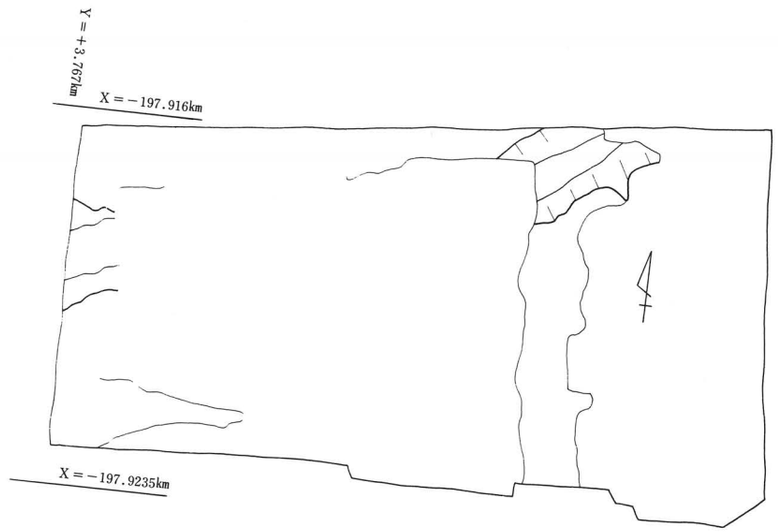
２．基本層序

１で上述した様に大規模な撹乱が調査区全域に及んでおり、連続した基本層位は把握し得なかったが、盛土下で大別で21層、細別で28層の層序を確認した。各層の性質は１～３層が粘土質シルト、４層が砂で５層が砂質シルトである。６～14層までが泥炭質粘土である。15層以下ではグライ化がみられ、砂を主体とした砂質シルト・泥炭質粘土の層となる。17層中にはレンズ状に灰白色の火山灰がみられた。下層に向かい小礫が多くなり、21層で礫層となる。

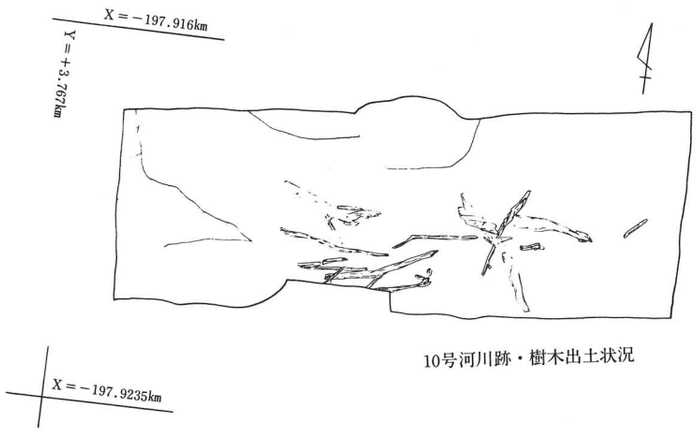


第17図　調査区位置図・設定図





1号河川跡平面図



10号河川跡・樹木出土状況

層序	色調	性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1	灰色 10Y4/1	粘土質シルト	14～18cm	下面に結核	――	現代の水田土壌
2	黒褐色 2.5Y3/1	粘土質シルト	14～20cm	――	上面に砂	――
3 a	灰色 5Y4/1	粘土質シルト	6～11cm	――	黒色土少量	――
3 b	灰色 5Y5/1	粘土質シルト	4～12cm	斑文有	――	――
4	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂	7～18cm	――	――	――
5	灰色 10Y5/1	砂質シルト	10cm前後	――	――	――
6 a	黒褐色 10YR3/1	泥炭質粘土	5～10cm	――	――	――
6 b	黒褐色 10YR3/1	泥炭質粘土	8～12cm	――	――	――
7	黒色 10YR2/1	泥炭質粘土	15cm前後	――	――	――
8	黒褐色 2.5Y3/1	泥炭質粘土	13cm前後	――	――	――
9	黒色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	19cm前後	――	――	――
10	黒褐色 10YR2/2	泥炭質粘土	21～25cm	――	――	――
11	黒色 10YR2/1	泥炭質粘土	5cm前後	――	――	――
12	褐灰色 10YR4/1	泥炭質粘土	5～10cm	――	――	――
13	褐灰色 10YR6/1	泥炭質粘土	15cm前後	――	黒色土少量	――
14	黒色 10YR2/1	泥炭質粘土	20cm以上	――	――	――
15 a	褐灰色 10YR5/1	砂質シルト	5cm前後	――	――	グライ化
15 b	緑灰色 7.5GY6/1	砂質シルト	16～23cm	――	――	グライ化・縄文土器片
15 c	緑灰色 7.5GY5/1	砂質シルト	35～55cm	――	――	グライ化
16	灰色 10Y5/1	砂	19～33cm	――	――	グライ化・泥炭質粘土含む
17	にぶい黄橙色 10YR6/4	砂	16～70cm	――	層中に火山灰のブロック	部分的にグライ化・樹木・種子　泥炭質粘土含む
18 a	緑灰色 10GY6/1	砂	25～35cm	――	――	グライ化
18 b	灰色 10Y6/1	砂質シルト	20cm前後	――	――	グライ化
19	緑灰色 10GY6/1	砂	9～108cm	――	――	グライ化・縄文土器片
20 a	灰色 2.5Y7/1	シルト	3cm前後	――	――	グライ化・（火山灰？）
20 b	緑灰色 10GY6/1	砂質シルト	21cm前後	――	――	グライ化
20 c	緑灰色 10GY5/1	砂	18cm前後	――	小礫	グライ化
21	暗緑灰色 10GY4/1	礫	130cm以上	――	粘土質の砂	拳大の礫

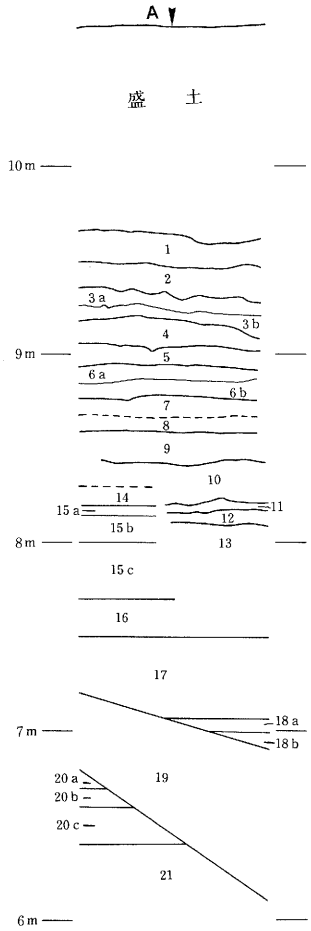
第18図　壁断面及び遺構平面図

３．検出遺構と出土遺物

検出した遺構は河川跡11条（ＳＲ１～11）と性格不明遺構（ＳＸ１）１基である。遺物は基本層、河川跡、盛土・撹乱内からで少量の出土である。尚、ＳＲ１・ＳＲ10から出土した樹木種は樹種及び種子同定を実施（第３章参照）した。

(1) 河　川　跡

撹乱のため層上部が消失し遺構の確認面が不定となっているものもあるが、層の特徴等から判断してＳＲ１～５は基本層６～10層内と考えられる。ＳＲ６～９はＳＲ３・４と重複関係にあり下層のものである。ＳＲ10は19層上面、ＳＲ11は21層上面（礫層）での確認である。堆積土はＳＲ１～７で泥炭質粘土が主体となり、ＳＲ８～11は砂質シルト・砂となりグライ化がみられる。



第19図　基本層序概略

１号河川跡－ＳＲ１－

調査区北東側から西側へほぼ直線的に延びている。現存幅は約1.6～２ｍで、深さは30cm程である。底面高は両端部ともほぼ同じである。堆積土は２層確認した。泥炭質粘土を多く含む粘土質シルトで、下部には砂がみられる。河川跡確認面で多数の足跡が検出されている。方向はほぼ直線的である。長さ20cm前後を計り、形状から人間の足跡と考えられる。埋土は砂である。遺物として樹木塊・トチの実がある。樹木は鑑定の結果、カエデ属の一種と同定された。

10号河川跡－ＳＲ10－

19層上面での確認である。調査区中央部を東西に延びるもので、幅は５ｍ以上、深さは80cm程を計る。堆積土は細別で５層確認した。褐色及び灰色を呈する砂質シルトである。１・２層には樹木片・種子が多量に含まれ、下部の３層ではグライ化がみられる。河川中央部の２層中で樹木群及び種子（クルミ等）が多数検出されている。樹木の内３点の樹種同定を実施したがエノキ属の一種、カエデ属の一種、ヤマグワと同定された。樹木群と伴に縄文土器を利用した径３cm程の円盤状の土製品が１点出土している。胎土に繊維が含まれる。所謂、繊維土器である。尚、河川跡底面でＳＸ１が検出されているが平面形は歪んだ円形を呈し、底面には凹凸がみられる。埋土は灰色の砂質シルトである。状況から倒木痕跡と考えられる。

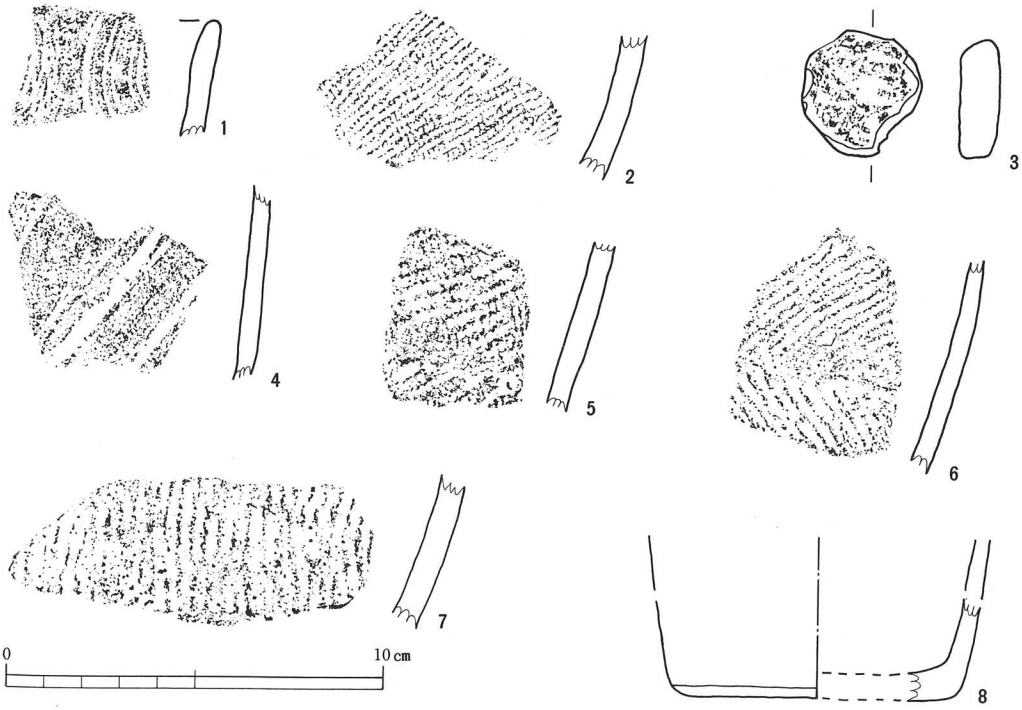
(2)　その他の出土遺物

15ｂ層・19層・ＳＲ４・ＳＲ10・撹乱土から縄文土器が計14点出土している。体部破片資料で地文のみのものが大半を占めるが、15ｂ層では縦位の沈線文をもつ口縁部資料が１点ある。

４．ま　と　め

大規模な撹乱（破壊）を受け、１層から９層までの調査が不能となり、隣接地点で検出されている水田遺構等の確認は出来なかった。

検出遺構はすべて河川跡に関わるもので断面確認も含めて計10条確認した。隣接調査区との層位の対応も難しく、また出土遺物も少なく明確な時期は不明で、おおきく縄文時代早期から後期頃と言わざるをえない。尚、当地点は状況から判断して河川の影響下におかれており、安定をみるのは10層以上の時期と推察される。



No.	写真図版	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	底　径	色調 外面	色調 内面	特　徴
1	52－1	15ｂ層	縄文土器	鉢	口縁部小片	?	にぶい褐色	にぶい褐色	内面ミガキ、外面ミガキ→沈線文
2	52－2	ＳＲ４	縄文土器		体部小片	?	黒　色	黒　色	内面ミガキ、外部単節ＬＲ縄文、スス？付着
3	52－3	ＳＲ10	土製品	土製円盤	一部欠損	－	暗褐色		
4	52－4	撹乱	縄文土器	深鉢	体部小片	?	浅黄橙色	灰黄褐色	内面ミガキ、外面沈線文
5	52－5	撹乱	縄文土器		体部小片	?	黒褐色	黒　色	内面ミガキ、外面単節ＬＲ縄文
6	52－6	撹乱	縄文土器		底部小片	(7.6cm)	褐　色	にぶい赤褐色	内面ミガキ、外面磨滅の為不明
7	52－7	撹乱	縄文土器		体部小片	?	褐灰色	灰白色	内面ミガキ、外面磨滅の為不明
8		撹乱	縄文土器		体部小片	?	黒　色	黒　色	内面ミガキ、外面羽状縄文

第20図　出土遺物

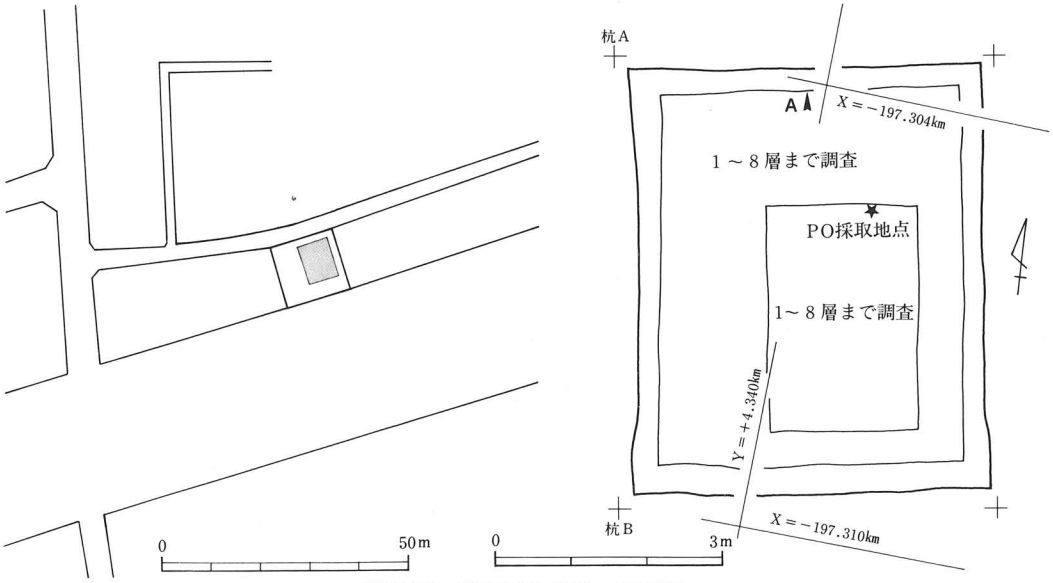
第４節　富沢遺跡第73次調査

１．調査方法

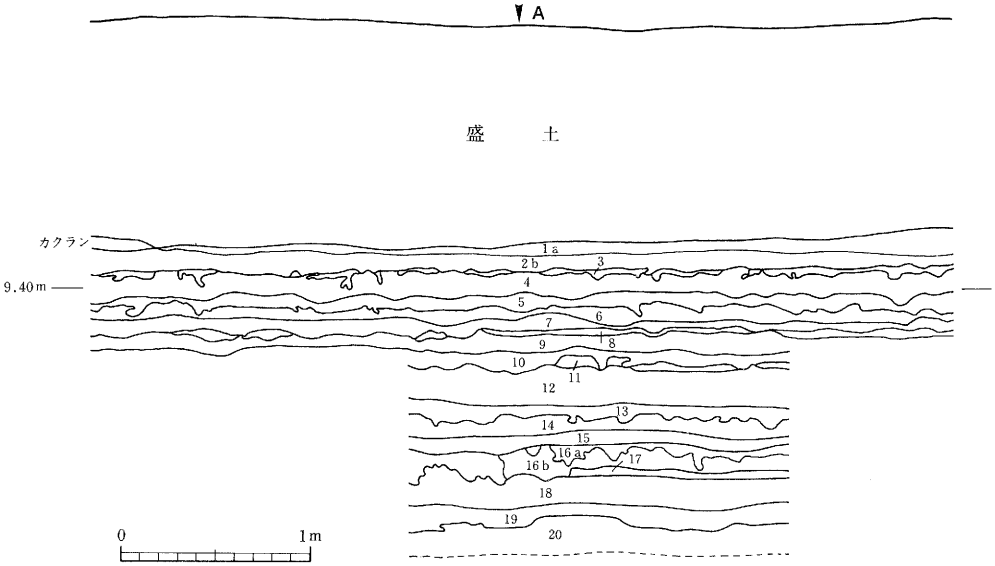
調査区の設定面積は約5.5×4.5m（24.75㎡）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で排除し、以下は人力により行なった。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。８層までは調査区全面の精査を実施し、９層以下は、約３×２ｍの試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準にして実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。（杭Ａ：Ｘ＝－197.30420㎞　Ｙ＝＋4.33711㎞　杭Ｂ：Ｘ＝－197.31007㎞　Ｙ＝＋4.33838㎞）。

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別20層、細別23層が確認された。各層の土質は基本的には粘土が主体であるが、６層は砂質シルトである。11層以下20層までは、泥炭質粘土となっている。今回の調査で確認した水田遺構は、現代のものをのぞくと７層である。また、２ａ層・５層・10層・13層・16ａ層は、土層観察の結果と隣接する調査区の層位の対応関係から水田土壌の可能性がある。５層中からは灰白色火山灰が検出されている。遺物出土層は、１・２ａ・４・５・６・７層・16ａ層である。全体的な層の傾きは、１～12層まではほぼ水平であるが、13層以下は南側に下がっている。尚、当調査区は第15次調査（斎野他：1987）Ｖ区に隣接しているが、各層の対応関係については遺構の対応関係と共に後述する。



第21図　調査区位置図・設定図



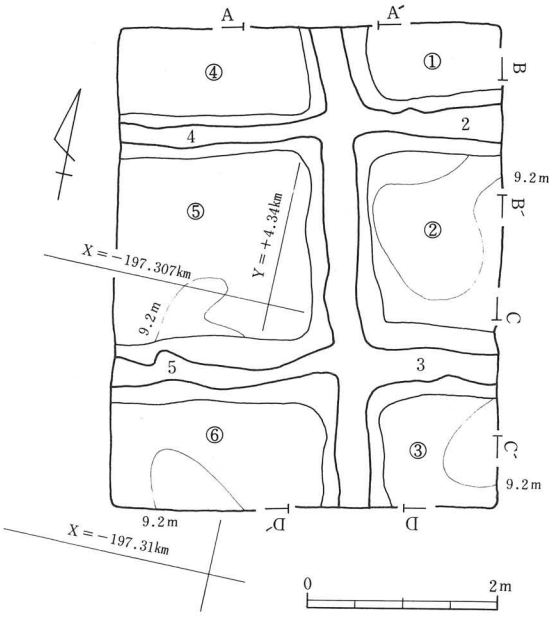
第22図　基本層序

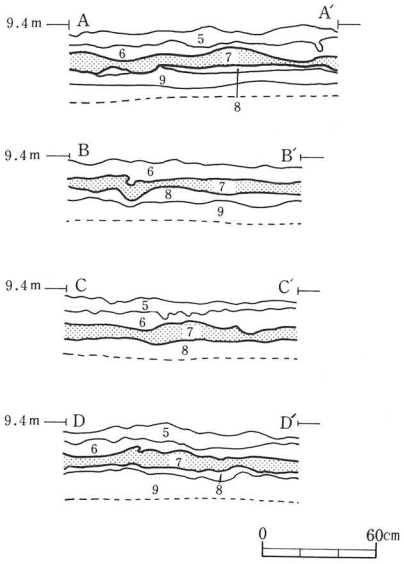
層序	色調	性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1a	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	2cm～14cm	あり	マンガン粒	現代の水田土壌
1b	黒色　5Y2/1	粘土	4cm～6cm	あり	マンガン粒	部分的分布
2a	オリーブ黒色　7.5Y3/1	粘土	2cm～10cm	あり（帯状）	炭化物・白色粒・小礫	3.4層ブロック
2b	黒色　7.5Y2/1	粘土	4cm～12cm	――	マンガン粒	部分的分布・水田土壌？
3	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	1cm～8cm	――	――	部分的分布・4層ブロック
4	灰色　10Y4/1	粘土	4cm～14cm	あり	マンガン粒	――
5	オリーブ黒色　10Y3/1	粘土	3cm～12cm	――	灰白色火山灰（層中）	6層ブロック・下部マンガン集中
6	暗オリーブ色　5Y4/4	砂質シルト	2cm～12cm	あり	――	――
7	オリーブ黒色　7.5Y3/1	粘土	2cm～12cm	あり（多量）	マンガン粒	足跡多数・水田土壌
8	灰色　5Y4/1	粘土	1cm～12cm	あり（上面）	マンガン沈着	――
9	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	4cm～12cm	斑紋	マンガン粒	――
10	黒色　5Y2/1	粘土	2cm～10cm	あり	――	下面起伏・水田土壌？
11	黄灰色　2.5Y4/1 黄灰色　2.5Y5/1 黒色　10YR1.7/1	泥炭質粘土	2cm～6cm	斑紋	――	部分的分布
12	黒褐色　10YR2/2 暗灰黄色　2.5Y4/2	泥炭質粘土	18cm～20cm	――	――	――
13	灰色　5Y4/1	泥炭質粘土	3cm～12cm	――	――	下面著しく起伏・水田土壌？
14	灰色　5Y6/1 灰色　5Y5/1 黒色　10YR1.7/1	泥炭質粘土	4cm～16cm	管・量管状紋	――	――
15	黒褐色　10YR5/2	泥炭質粘土	2cm～14cm	――	炭化物	――
16a	黒褐色　10YR2/2	泥炭質粘土	4cm～16cm	――	――	下面起伏・16b17層小ブロック・水田土壌
16b	灰色　5Y4/1	泥炭質粘土	2cm～10cm	――	――	――
17	オリーブ黒色　5Y5/2	泥炭質粘土	2cm～6cm	――	――	――
18	灰色　5Y5/1 灰色　5Y4/1 黒褐色　2.5Y3/2	泥炭質粘土	3cm～20cm	量管状紋	――	――
19	灰色　7.5Y4/1	粘土質シルト	6cm～12cm	――	――	――
20	オリーブ黒色　5Y2/2	泥炭質粘土	20cm以上	――	――	――

3．検出遺構と出土遺物

(1)　4層上面

4層上面でピット状の落ち込みを一基検出した。堆積土は一層で、遺物は出土しなかった。





第23図　７層水田跡平面・断面図

(2)　７層上面

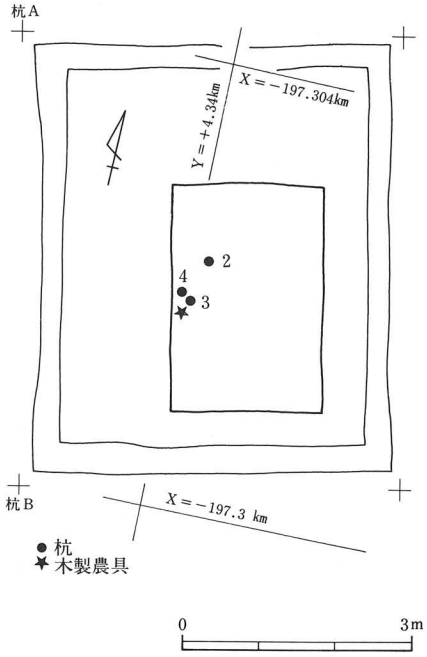
７層水田跡（第23図）

ほぼ直行する５条の畦畔によって区画される水田区画を６区画検出した。検出された区画の総面積は12.89㎡以上である。水田面の標高は9.18～9.26mで、南東方向への下り傾斜が推定できる。

水田跡は、直交する直線的な５条の畦畔より構成されている。畦畔は耕作土と同じ７層を盛り上げて作られている。畦畔１は、調査区の中央に直線的に延びており検出長は５ｍである。方向はＮ－15°－Ｗで、下端幅は0.6～0.7m、耕作土上面からの高さは２～５㎝である。畦畔２～５は畦畔１に直交する畦畔で、畦畔５はやや湾曲しているものの、他は直線的に延びている。検出長は1.2～2.4mである。方向はＮ－76°～80°－Ｅの間で、下端幅は0.5～0.8m、耕作土上面からの高さは１～３㎝の間に納まっている。

畦畔１～５によって区画される水田区画は６区画であるが、いずれも部分的な検出で全体の規模、形状は知り得ない。しかし、３辺を検出している区画⑤から推定すると、区画は長方形を基調とし、面積は3.8㎡以上である。同一区画内の耕作土上面の比高差は殆どは３㎝以内にあり、ほぼ平坦で地形と同様の傾きを示している。

耕作土の７層は、主に直下の８層・９層を攪拌することによって形成された可能性が考えられるが、７層とこれらの層には色調等に大きな相違が認められ、７層と８層



第24図　16ａ層平面図

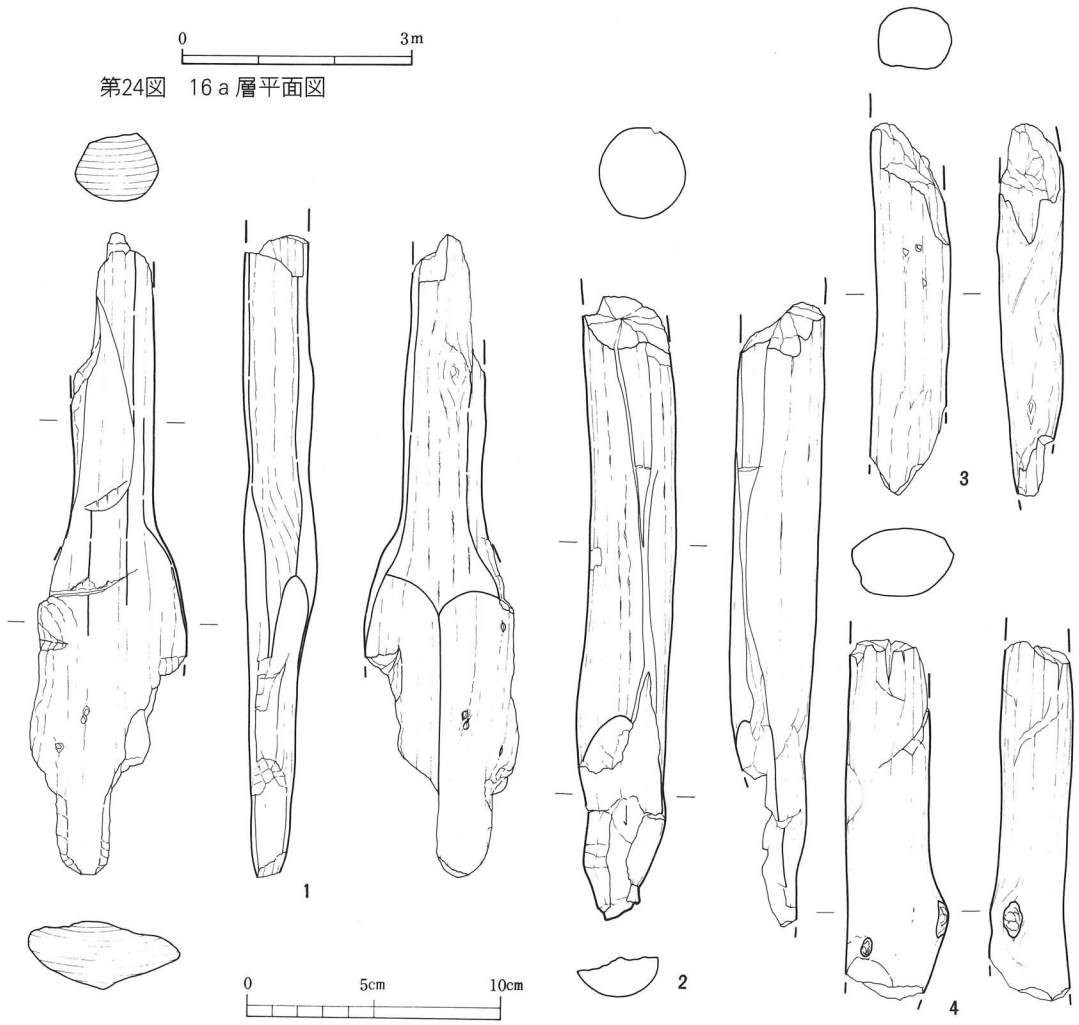
の間に別の層が存在していた可能性もある。層厚は、１～12cmと一定ではなく、下面には凹凸がみられる。また、層中に少量のマンガン粒、酸化鉄斑が見られる。

尚、畦畔上面、耕作土上面において足跡と推測される凹凸を多数検出したが、人か動物の特定は困難で、また、規則的な方向性も認められなかった。

遺物は出土しなかった。

(3)　16ａ層上面

杭列２列を検出した。畦畔などは検出できなかったが、第15次調査区の水田跡と同一の層であると思われるので、この層は水田土壌である可能性が高い。16ａ層は、主に泥炭質粘土層の16ｂ・17層を攪拌し形成さ



第25図　出土遺物

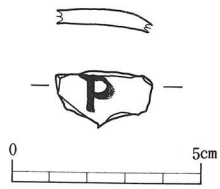
杭No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	樹　種	素材形状	長　さ	直　径	先端加工	表面加工	備　考
1	第25図2	52−10	16a層	杭	キハダ	丸太材	24.8cm	3.5cm	1方向	――	
2	第25図4	52−9	16a層	杭	――	丸太材	14.3cm	3.2cm	――	枝払い	
3	第25図3	52−11	16a層	杭	――	丸太材	14.9cm	2.8cm	――	――	
4	――	――	16a層	杭　?	――	樹木片	2.8cm	3.0cm	――	――	
5	――	――	16a層	杭　?	――	樹木片	4.8cm	3.1cm	――	――	

No.	挿図番号	図版番号	出土遺構・層位	種　別	材　質	素材形状	長　さ	身部長	身部幅	厚　さ	柄部長	柄部径	備　考
1	第25図1	52−12	16a層	鋤	クヌギ	半割材・板目	25.5cm	14.0cm	6cm	2.6cm	11.5cm	3.3cm	

れたと推測されるが、一部18層にまで達するところがある。層の下面は凹凸が著しい。層厚は、2～20cmで平均は10cm位である。16a層上面の標高は8.48～8.58mで、南西に下がっている。

杭列は2列で方向はN−25°−Eと、これに直交するE−25°−Sである。杭はいずれも丸太材を使用しており杭1に先端加工が認められるが、他に先端加工は認められない。これらの杭はすべて打ち込み杭であるが、この層に伴うかどうかは、杭の打ち込みが浅いこと（杭1で20cm）、上部を欠損していることなどから断定はできない。

遺物として、木製品（第25図1）を1点と木片2点を出土した。この木製品は、上下を欠いているが、木製農具の一部と思われる。



第26図
その他の出土遺物

(4)　その他の出土遺物

1・2a・4・5・6層から陶器片、磁器片、土師器片などが出土した。陶器片（第26図）は2a層中より出土しており、底面に墨書が見られるが判読はできなかった。器種は徳利か土瓶で産地は相馬と考えられ、時期は江戸時代以降と思われる。土師器片は4・5・6層から出土しているが細片がほとんどであり、器形等の復元はできなかった。その内5層から出土した土師器はロクロ使用の坏で、内面ヘラミガキの後黒色処理が施されている。他、7層から自然礫が1点出土している。

No.	写真図版	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	色調 外面	色調 内面	特　徴
1	52−8	2a層	陶　器	徳利か土瓶	底部小片	灰白色	浅黄橙色	底部外面墨書、相馬？　江戸時代

4．遺構の所属年代とまとめ

今回、遺構が検出されたのは7層、16a層である。その他、2a・5・10・13・16a層も水田跡である可能性がある。これらの層の所属年代は、隣接する第15次調査V区の調査結果と合わせて考えると次のようになり、その他の層については対応関係が明らかにできなかった。

2a層	近世以降	15次調査1～2層
4層	平安時代（灰白色火山灰降下以降）	4b層
5層	平安時代（灰白色火山灰降下前後）	5a層

６層	平安時代（灰白色火山灰降下以前）	６層
７層	古墳時代	７ａ層
10層		８層
13層	弥生時代（十三塚式期）	９ａ層
14層	弥生時代（桝形囲式期以降十三塚式期以前）	10ａ層
16ａ層	弥生時代（桝形囲式期）	11ａ層

１．７層水田跡で検出された水田区画は、第15次調査Ｖ区７ａ層で検出された水田区画の延長上であり水田が北方へ延びることが確認された。また、今回検出された調査地点から南に70ｍ離れた第35次調査においても同時期の水田跡が検出されており、富沢遺跡北東部で古墳時代の水田がより広範囲で耕作されていたことが窺える。

２．16ａ層で検出された杭列は、第15次調査Ｖ区11ａ層において検出されている杭列との関連性が考えられ、畦畔に伴うものである可能性がある。

３．16ａ層から出土した木製品は、上下を欠いているが仙台市内で以前に出土している木製農具に形状が近似している。［富沢遺跡第７次調査（註１）・同８次調査（註２）・中在家南遺跡（註３）］これら３遺跡の木製農具の性格として、鋤の可能性が考えられており（註４）、今回の木製品も同様の性格であると考えられる。鋤であるとした場合、身と柄の部分を分けずに作り出す所謂「一木鋤」であり、上記３遺跡で出土しているものと作り方においても差異は認められない。弥生時代中期中葉ごろの仙台平野においてこの形状の鋤が一般的であったのか、あるいは他の形状のものも使用されていたかについては、今後の資料の増加に期待する。

註１：篠原・吉岡『－富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ｉ』
　　仙台市文化財報告書第126集　　1989

註２：工藤哲司他『富沢水田遺跡Ｉ』　仙台市文化財調査報告書第67集　1984

註３：工藤・荒井『仙台市中在家南遺跡出土の木製品』考古学ジャーナル第323号　1990

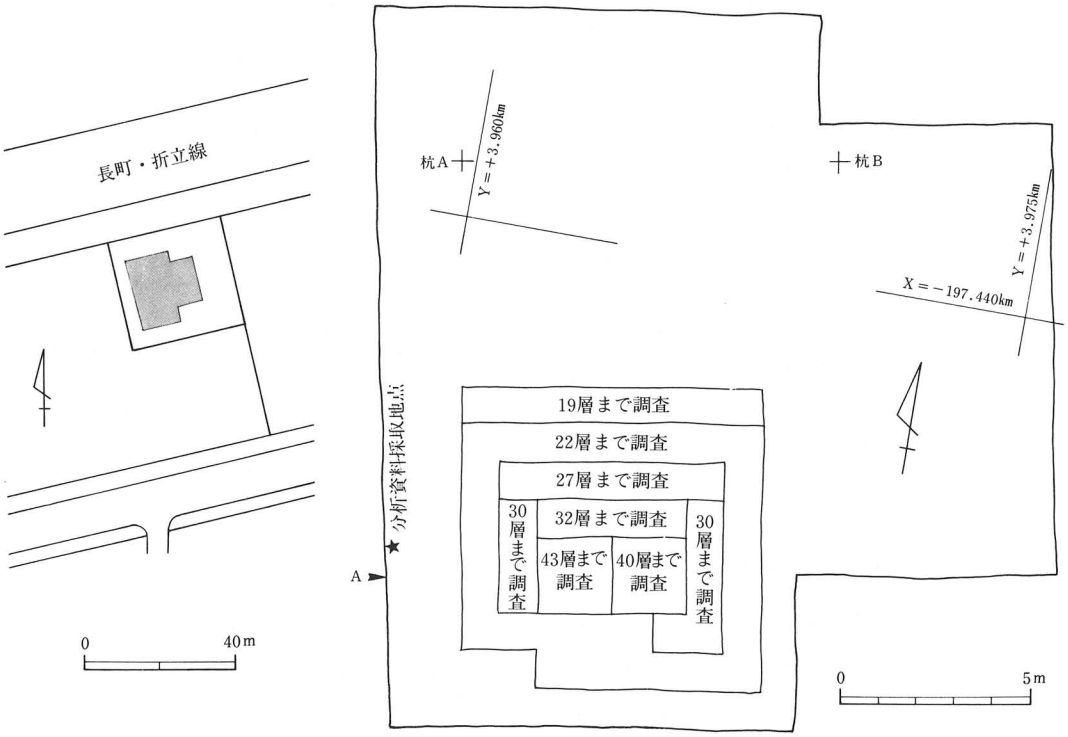
註４：須藤　隆『東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開』
　　宮城の研究－考古学篇－　1984

第５節　富沢遺跡第74次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は約289㎡である。調査区は盛土が成されていないため調査は１層から人力で行い、調査区内に土層観察及び排水用の側溝を設けながら掘り下げた。なお、調査途中で建物の設計変更が行われたため、それに伴って調査区を南北両側に拡張したが、その影響で側溝の一部が調査区を横断する形となっている。13層上面までは調査区全面の精査を実施し、それ以下は試掘区を設けて掘り下げた。試掘区は13層以下が約８×８ｍ、19層以下は約８×７ｍ、22層以下は約６×４ｍ、27層以下は約６×３ｍ、30層以下は約４×３ｍ、32層以下は約４×２ｍ、40層以下は約２×２ｍである。

遺構の測量は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.43864km　Ｙ＝＋3.95956km、杭Ｂ：Ｘ＝－197.43687km　Ｙ＝＋3.96940km）。

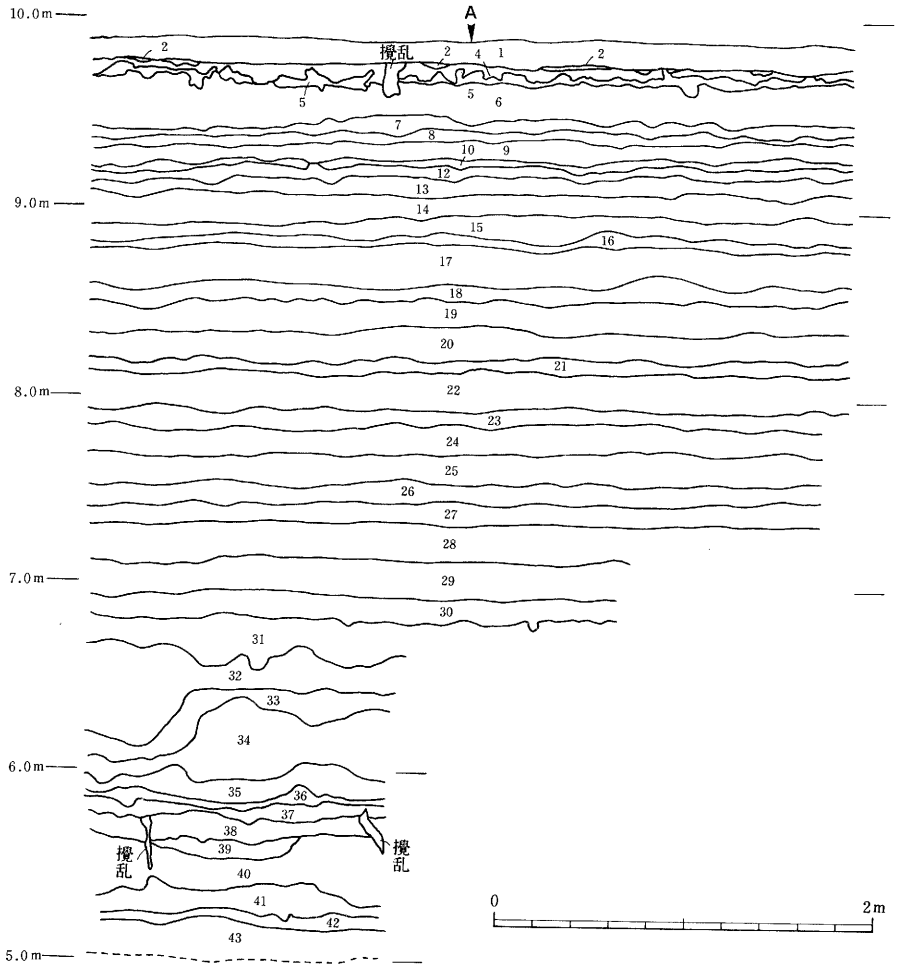


第27図　調査区位置図・設定図

２．基本層序

今回の調査では１～43層まで確認された。各層の土質を大別すると１から５層が粘土、６～18層が泥炭質粘土、19～26層が粘土と泥炭質粘土、27～38層までが粘土、39～43層がシルト質粘土である。グライ化は17層から漸次進み、30層以下では顕著である。各層の傾きは１～５層までは一様に東側へ向かって緩やかに下っているが、６～13層までは北から南西方向へ向かって緩やかに傾斜している。14層以下は部分的な調査のため詳細は不明であるが、ごく緩やかに東側へ下っていると考えられる。

現代のものを除く水田土壌は４・５・７・12層であるが、その他２・３・10層も水田土壌の



第28図　基本層序

層序	色調	性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1	暗灰黄色 2.5YR4/2	粘土	6～29cm	斑文	砂粒をわずかに含む	現代水田耕作土
2	にぶい黄褐色 10YR4/3	シルト質粘土	1～20cm	上面に斑文	マンガン粒微量、砂粒少量	水田耕作土？　不連続な分布、下面若干起伏
3	黒褐色 10YR2/2	粘土	1～13cm	少量	マンガン粒微量、部分的に灰白色火山灰ブロック少量	水田耕作土？　下面若干起伏　調査区東端部に部分的に分布
4	黒褐色 10YR3/2	粘土	1～14cm	少量	マンガン粒微量、灰白色火山灰ブロック少量	水田耕作土、下面著しく起伏、不連続な分布
5	黒褐色 10YR2/2	粘土	1～15cm	微量	マンガン粒微量、10YR4/6 褐色粘土ブロック少量	水田耕作土？　下面若干起伏
6	黒色 10YR2/1 黒褐色 10YR3/1 にぶい黄褐色 10YR5/3 褐色 10YR4/6	泥炭質粘土 粘土 粘土 粘土	4～32cm	――		互層
7	灰黄褐色 10YR4/2	泥炭質粘土	2～10cm	微量		水田耕作土　下面若干起伏
8	褐色 10YR4/4 黒褐色 10YR3/1	泥炭質粘土 泥炭質粘土	1～8cm	――		互層
9	黒色 7.5YR1.7/1	泥炭質粘土	4～15cm	――		下面若干起伏
10	黄灰色 2.5Y4/1	泥炭質粘土	1～9cm	――		水田耕作土、下面若干起伏
11	暗灰黄色 2.5Y4/2	泥炭質粘土	2～5cm	――		10層大畦畔下に部分的に遺存
12	黒褐色 10YR2/2	泥炭質粘土	2～20cm	――		水田耕作土　下面若干起伏
13	黒色 2.5Y2/1	泥炭質粘土	2～13cm	――		植物遺体多量
14	黒褐色 2.5Y3/2	泥炭質粘土	18cm前後	――		植物遺体多量
15	黒褐色 2.5Y3/1	泥炭質粘土	10cm前後	――		植物遺体多量
16	黒褐色 2.5Y3/1	泥炭質粘土	5cm前後	――		
17	オリーブ黒色 5Y3/1	泥炭質粘土	20cm前後	――		上部は植物遺体多量
18	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	10cm前後	――	粘土分多量	
19	オリーブ黒色 5Y3/2 オリーブ黒色 5Y2/2	粘土 粘土	5cm前後	――		互層　植物遺体多量
20	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	15cm前後	――		上部は植物遺体多量
21	オリーブ黒色 5Y3/1 黒色 5Y2/1	粘土 粘土	6cm前後	――		互層　植物遺体多量
22	オリーブ黒色 5Y3/1 黒色 5Y2/1 黒褐色 10YR2/3	粘土 粘土 泥炭質粘土	20cm前後	――		互層　植物遺体少量
23	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	11cm前後	――		
24	黒色 2.5Y2/1	粘土	15cm前後	――		植物遺体少量
25	黄褐色 2.5Y5/3 黒色 5Y2/1 オリーブ黒色 5Y2/2 暗灰黄色 2.5Y4/2	粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土	16cm前後	――	粘土分多量 粘土分多量	互層
26	黒色 5Y2/1	泥炭質粘土	11cm前後	――	粘土分多量	
27	オリーブ褐色 2.5Y4/3 黒褐色 2.5Y3/1	粘土 粘土	10cm前後	――		互層、植物遺体少量
28	黄灰色 2.5Y4/1 黒褐色 2.5Y3/1	粘土 粘土	20cm前後	――		互層　植物遺体少量
29	黒褐色 2.5Y4/1	粘土	20cm前後	――		植物遺体少量
30	黄灰色 2.5Y4/1	粘土	14cm前後	――	φ1mm以下の砂粒微量	植物遺体少量
31	灰白色 7.5Y7/1	粘土	11～28cm	――	φ1mm以下の砂粒微量、7.5Y5/1　灰色粘土ブロック少量	
32	緑灰色 5G6/1	粘土	10～52cm	――	φ1mm以下の砂粒少量（部分的にブロック状）	著しく起伏、植物遺体少量
33	緑灰色 5G6/1	粘土	4～25cm	――		著しく起伏、植物遺体微量
34	暗緑灰色 5G4/1	シルト質粘土	6～44cm	――	φ1mm程度の粗砂多量（ブロック状）	著しく起伏、植物遺体微量
35	緑灰色 5G6/1	粘土	4～17cm	――		著しく起伏、植物遺体微量
36	灰色 5Y4/1	粘土	1～10cm	――		著しく起伏、腐植質粘土層、植物遺体微量
37	灰色 5Y6/1	粘土	1～10cm	――		やや起伏、植物遺体微量
38	黒褐色 10YR3/2 灰黄褐色 10YR4/2	粘土 粘土	8～16cm	――		やや起伏、互層、腐植質粘土層、植物遺体微量
39	オリーブ灰色 2.5GY6/1	シルト質粘土	4～11cm	――		やや起伏、斑状の腐食質粘土層、部分的分布
40	明緑灰色 5G7/1	シルト質粘土	13～37cm	――		著しく起伏
41	緑灰色 5G6/1	細砂	5～19cm	――	5G6/1　粘土質シルトブロック少量	やや起伏
42	明緑灰色 5G7/1	シルト質粘土	3～10cm	――		やや起伏
43	緑灰色 5G6/1	シルト質粘土	24cm以上	――	φ1mm前後の細砂少量	

可能性がある。なお３・４層中には灰白色火山灰の粒子・ブロックが少量含まれているが、これらは下層から巻き上げられた可能性がある。なお、遺物は１・２・４層中と30層上面から出土した。

３．検出遺構と出土遺物

(1)　４層上面

４層水田跡（第29図）

〈遺構状況〉　東西・南北方向の小畦畔と斜行する段差によって構成されている。これらは２層を削り込む過程で確認したが（３層は調査区東部にのみ部分的に遺存するため）、畦畔や耕作土上面は２・３層の耕作土によって攪乱されており、遺存状況はあまり良くない。

耕作土：耕作土は基本層４層で、黒褐色の粘土である。厚さは１～14cmで一定せず、下面は起伏が激しい。下層への食い込みの大部分は直下の５層中で止まっているが、５層を完全に攪拌して６層中にまで達する場合がある。なお層中には灰白色火山灰の粒子・ブロックが少量含まれているが、前述したようにこれらは下層から巻き上げられたと考えられる。

畦畔：小畦畔２条（№１・２）と段差を一箇所（№３）検出した。小畦畔は耕作土を盛り上げて作られている。方向は南北畦畔が真北から11～12°東に振れており、東西畦畔はこれにほぼ直交している。規模は表３の通りで２条共にほぼ同じである。調査区南西部で検出した段差は直下の５層水田跡の大畦畔の東側のラインに一致することと高さが小畦畔に比べてやや高いことから大畦畔の片側を検出した可能性もある。

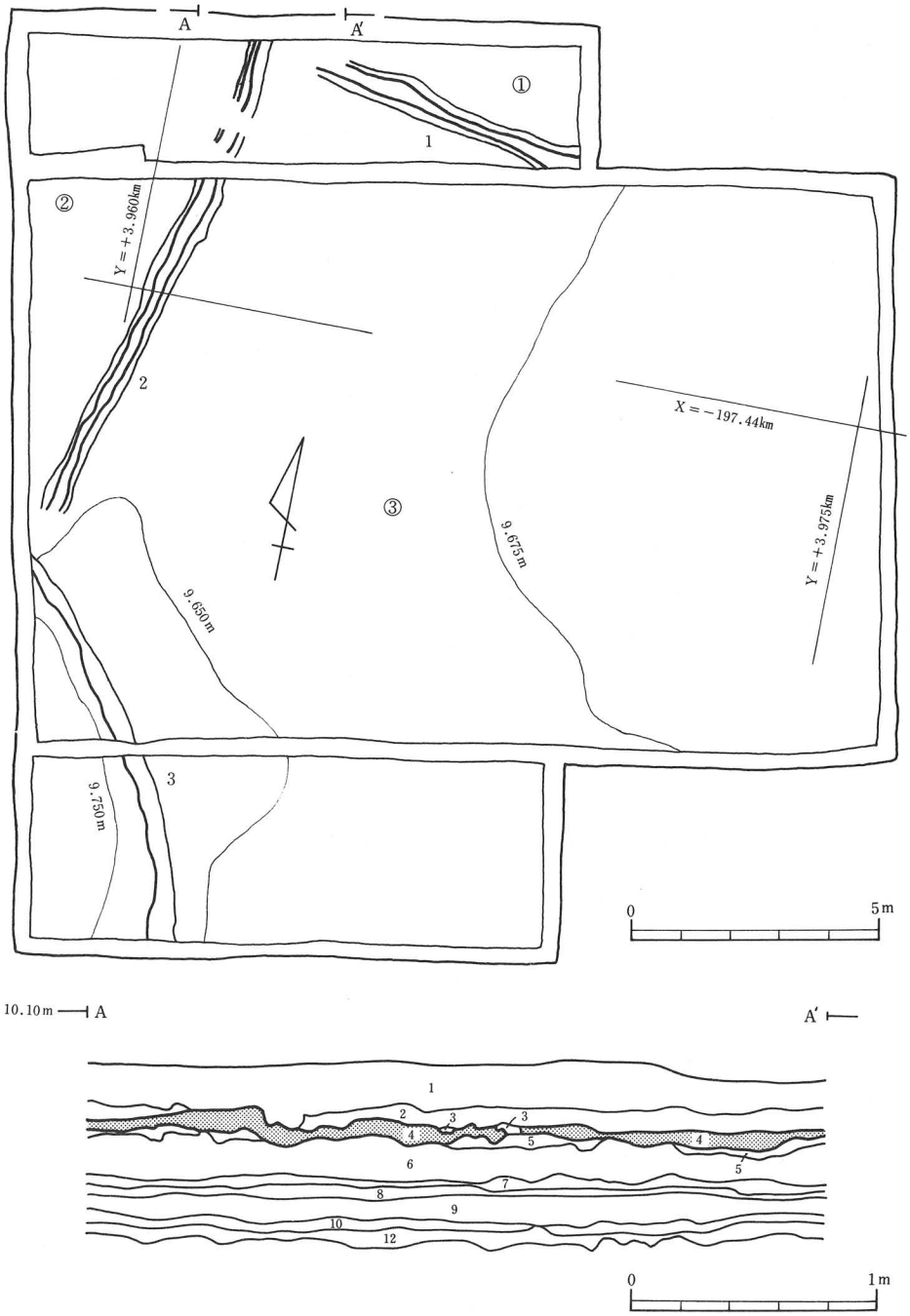
水田区画：①～③まで認められたが全体を検出できた区画はなく、区画の平面形や規模は不明である。なお、段差の西側部分は畦畔部分と水田区画部分の区別が付かないため区画№は付けていない。

水田面の傾斜：全体の地形は西から東に下っているが、区画③は地形面の傾きとは逆に西半部が低い（調査区内における比高差は約５cm）。全体を検出できた区画がないため区画内及び区画間の比高差は不明である。

〈出土遺物〉　ロクロ土師器片、陶器片などが数点出土したが図化出来るものはなく、遺構との関係も不明である。

№	方　向	長　さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高　さ(cm)	備　考
1	N－79°－W	5.2以上	16～46（平均28）	38～76（平均55）	1～3	
2	N－12°－E	11.4	13～32（平均23）	38～72（平均52）	1～9	５層水田跡№１と同位置？
3	N－40°－W	9.0以上			3～12	段差、５層水田跡№２と同位置

第３表　４層水田跡畦畔計測表

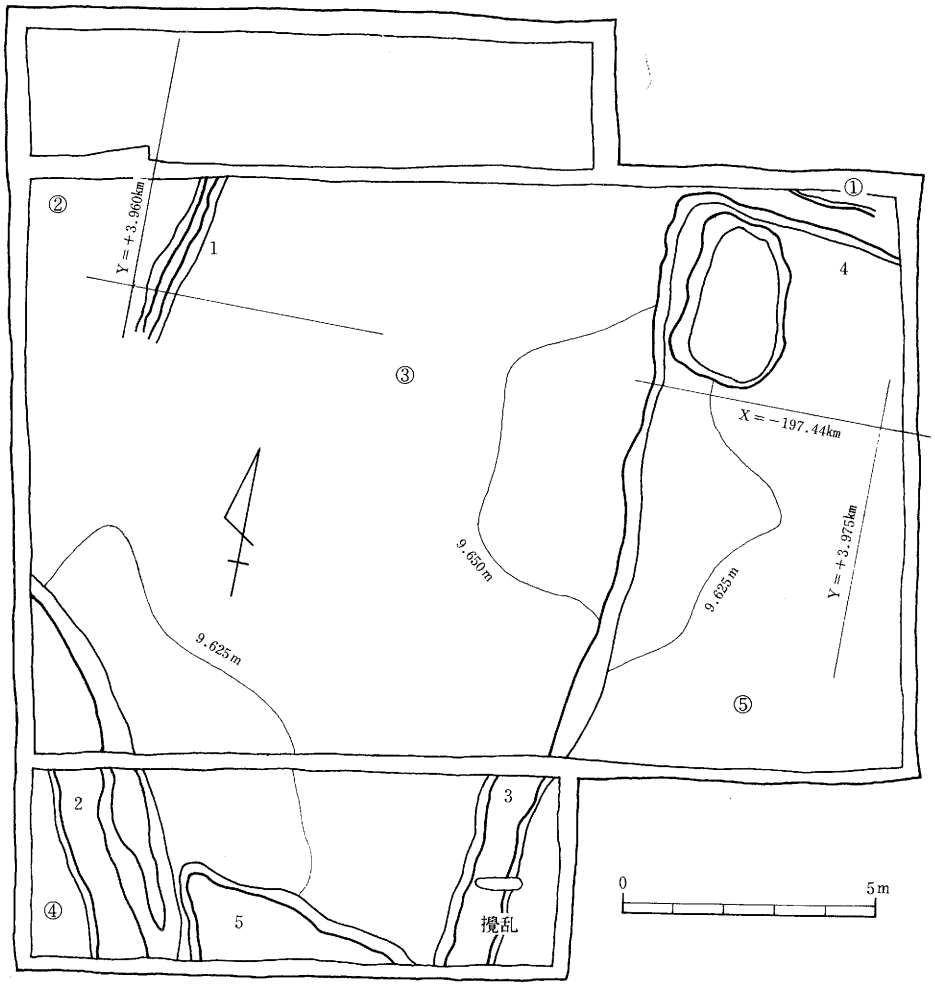


第29図　４層水田跡平面・断面図

(2)　５層上面

５層水田跡（第30図）

〈遺構状況〉　東西・南北方向の小畦畔と段差及び斜行する大畦畔、土坑によって構成されている。畦畔や段差は４層を削り込む過程で確認し、土坑は５層上面で確認している。これらは４層水田跡の耕作土によって攪乱されており、遺存状況は良くない。



第30図　５層水田跡平面図

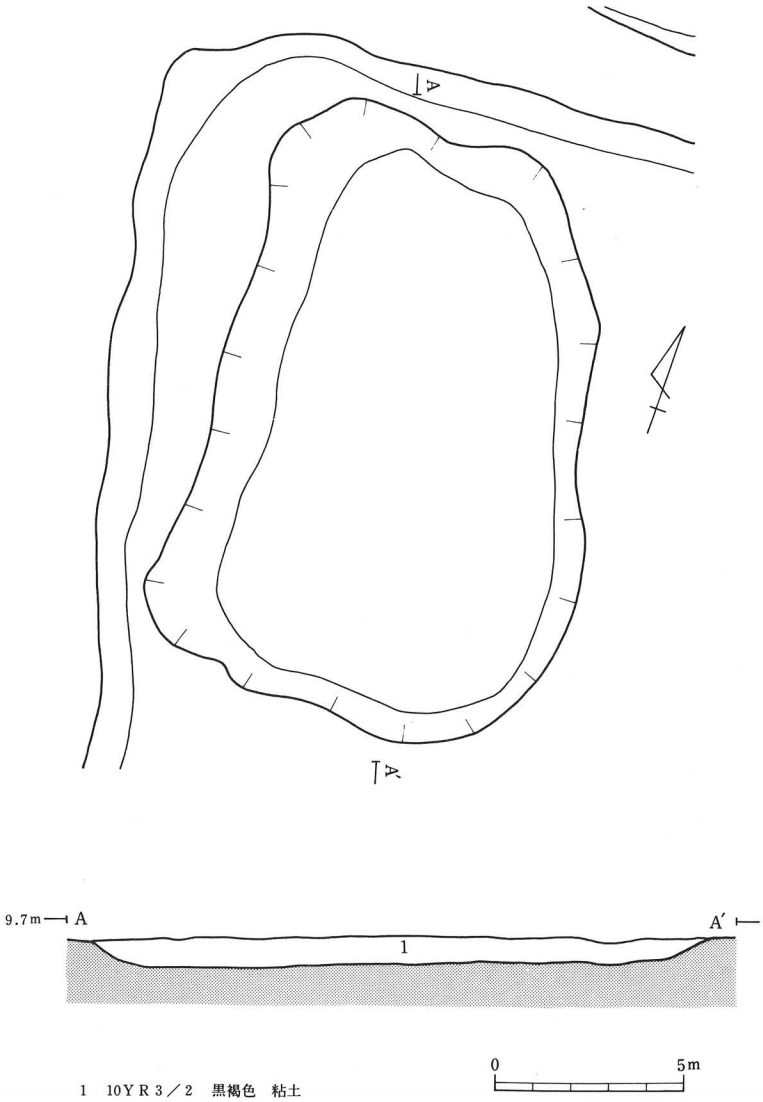
No.	方　向	長　さ(m)	上端幅(cm)	下端幅(cm)	高　さ(cm)	備　考
1	N－12°－E	3.4以上	10～25（平均20）	46～ 64（平均 54）	1～9	４層水田跡No.２と同位置
2	N－35°－W	7.4以上	67～98（平均79）	168～203（平均185）	1～12	大畦畔
3	N－４°－E	推定16.3	67～98（平均78）	98～117（平均109）	1～4	大部分が段差として検出
4	N－82°－W	3.0以上	42～52（平均48）	72～ 83（平均 77）	1～5	
5	N－80°－W	5.1以上			1～3	段差

第４表　５層水田跡畦畔計測表

耕作土：耕作土は基本層５層で、黒褐色の粘土である。厚さは１～15cmで一定せず、下面は起伏があるがそれほど激しくはない。下層への食い込みは直下の６層中で止まっている。層中には直下の６層のブロックが少量含まれている。

畦畔：大畦畔を１条（№２）、小畦畔３条（№１・３・４、このうち１条は途中が段差のみの検出となっている）、段差を一箇所（№５）検出した。畦畔は耕作土を盛り上げて作られている。方向は南北方向の小畦畔が真北から４～12°東に振れ、東西方向の小畦畔と段差はこれらにほぼ直交する位置関係にあるが、大畦畔の方向はこれらとは異なっている。規模は表４の通りで、ややばらつきがあるが、大畦畔の下端幅は小畦畔の２～３倍前後ある。段差は調査区南部で検出したが、大畦畔の片側を検出したのか、あるいは小畦畔に伴うものであるのかは不明である。

水田区画：①～⑤まで認められたが全体を検出できた区画はない。区画の平面形は方形を基調としていると考えられるが、大畦畔№２が他の畦畔に対して斜行しているため区画③は歪んでいる。規模は



第31図　ＳＫ１平面・断面図

区画③の東西長が約９ｍと推定できるのみで、他は不明である。なお、段差の南側部分は畦畔部分と水田区画部分の区別が付かないため区画№は付けていない。

水田面の傾斜：全体の地形は西から東に下っているが、区画③のみは地形面の傾きと異なって東端部が高く、南西部の水口付近がわずかに低くなっている。また、全体を検出できた区画がないため区画内及び区画間の比高差は不明である。なお、遺物は出土しなかった。

水口：大畦畔№２の東側に段差№５が取り付くが、この間の溝状に途切れた部分が水口と推定される。区画③の水田面がこの部分に向って低くなることから③から南方に配水する機能を有すると考えられる。

土坑－ＳＫ１（第31図）　５層水田跡の区画⑤北西コーナーに位置する。平面形は不正な方形を呈し、長軸方向はほぼ畦畔№３の段差部分の方向と一致している。大きさは約3.0×2.0ｍで、深さは約14㎝である。底面は平坦で、壁はごく緩やかに立ちあがる。

堆積土は基本層４・５層に類似し、６層ブロックを含んでいる。出土遺物はない。

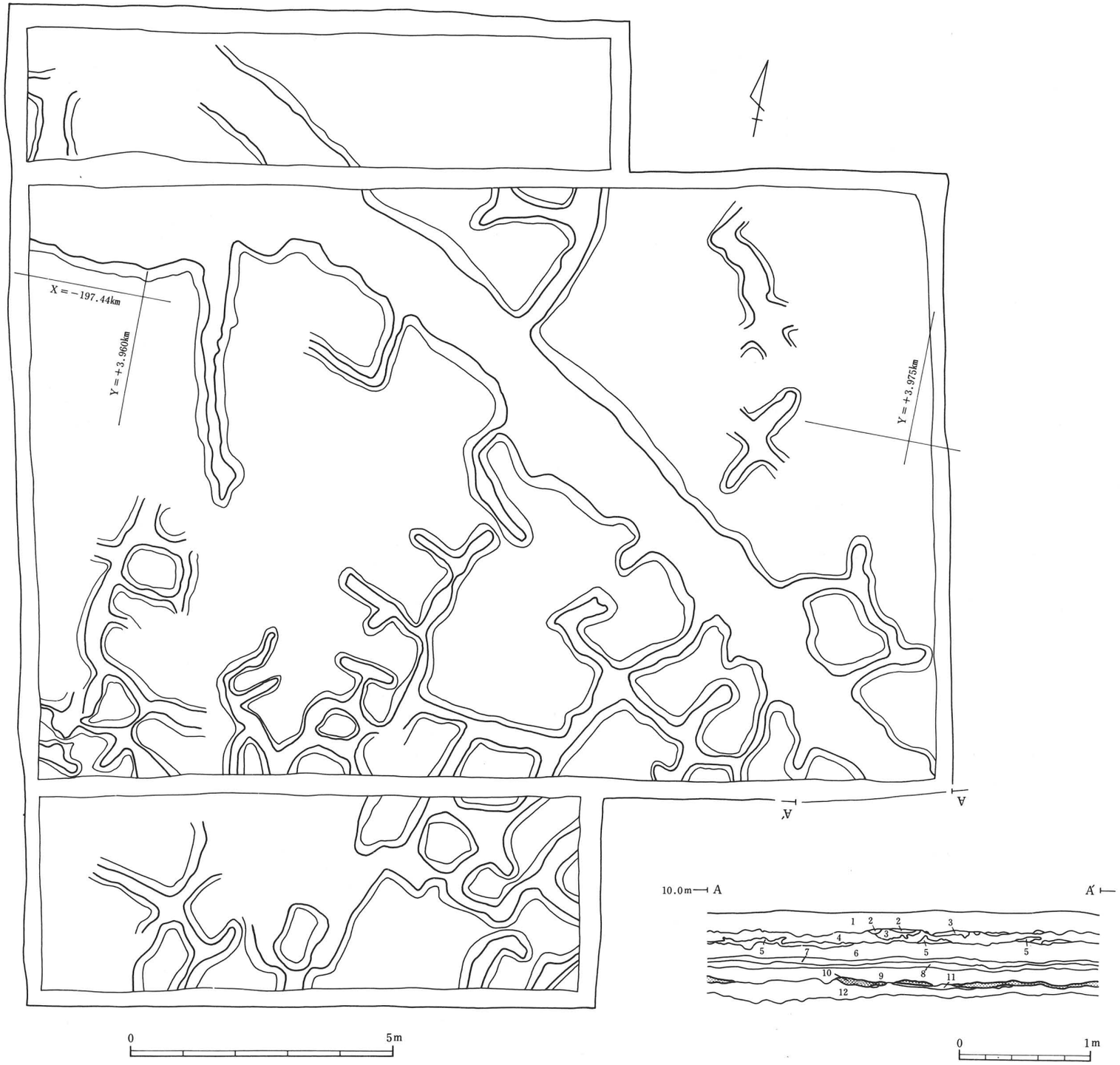
確認状況や堆積土からは４層水田跡・５層水田跡のどちらに伴うものか断定はできない。なお、性格は限定できないが、堆積土の状況からすると掘り込まれた後比較的短期間で人為的に埋め戻されたと考えられる。

(3)　10層上面

10層上面では畦畔状の高まりを多数検出した。これらは畦畔である可能性はあるが、10層自体が安定した状況を示さず分布の途切れる箇所があること、また畦畔状の高まりは不明瞭なものが多いことから水田跡とは断定できなかった。

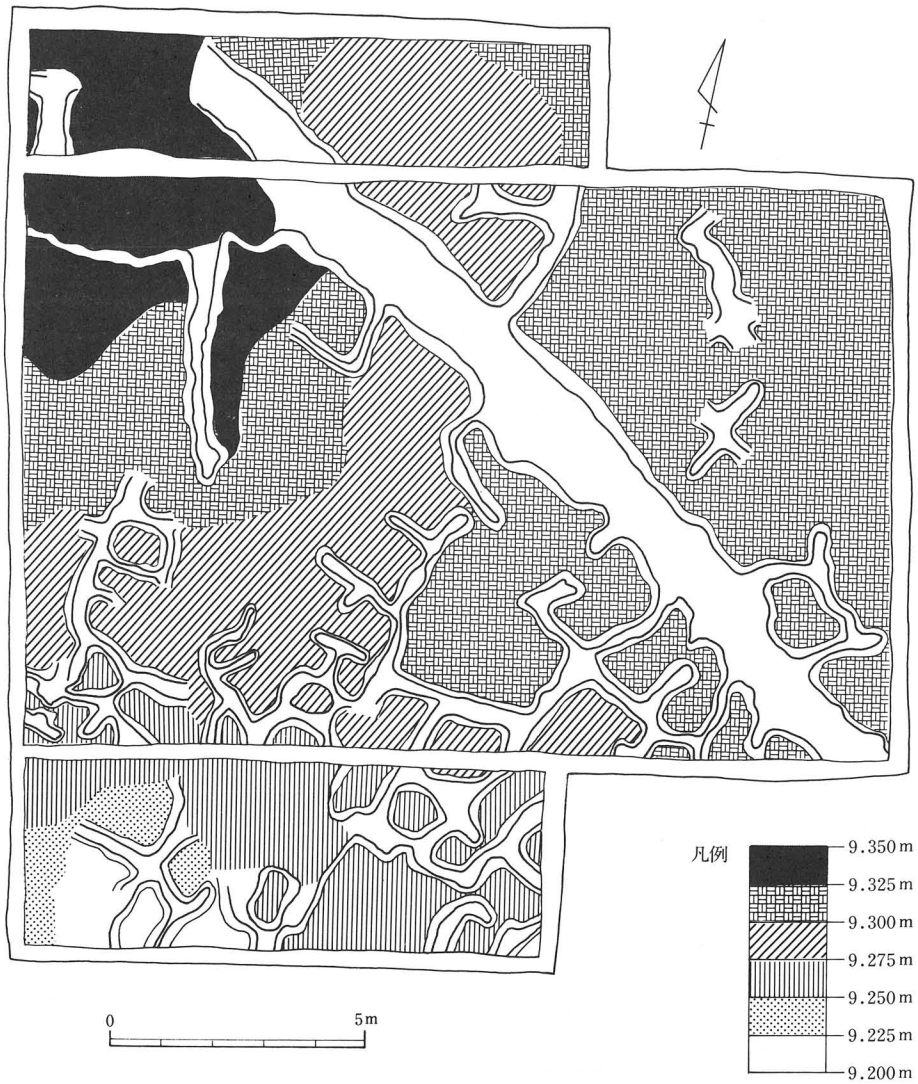
畦畔状の高まりは調査区の北西から南東に延びる幅の広いものが１条と、それに取り付く幅の狭いものが多数認められた。幅の広いものは下層の12層水田跡の大畦畔と同位置にあり、上端幅88～192㎝（平均124㎝）、下端幅112～236㎝（平均161㎝）、高さ１～７㎝である。10層が耕作土とすれば12層水田跡の大畦畔を踏襲して造られた大畦畔で、10層が耕作土でないとすれば12層水田跡の大畦畔に伴う擬似畦畔Ａに相当する。一方幅の狭いものは調査区南東部では比較的直線的に延び、方向も大畦畔状の高まりに平行あるいは直交するものが多いが、西半部では方向性に企画性は認められない。規模は上端幅25㎝前後、下端幅50㎝前後、高さ１～５㎝である。これらは小畦畔である可能性と、層上面の微細な高まりである可能性とが考えられるが、どちらとも断定はできない。

なお、10層上面の標高は9.22～9.34ｍである。勾配は約６㎝／10ｍで、南西方向に緩やかに下っているが、調査区東部は比較的平坦である。10層が水田跡と仮定した場合、区画が不明確なため区画内及び区画間の比高差は明らかではないが、調査区南東部では２～３区画が比高差2.5㎝の間に収まる（第32図）。



第32図　10層上面平面・断面図

なお、遺物は出土しなかった。

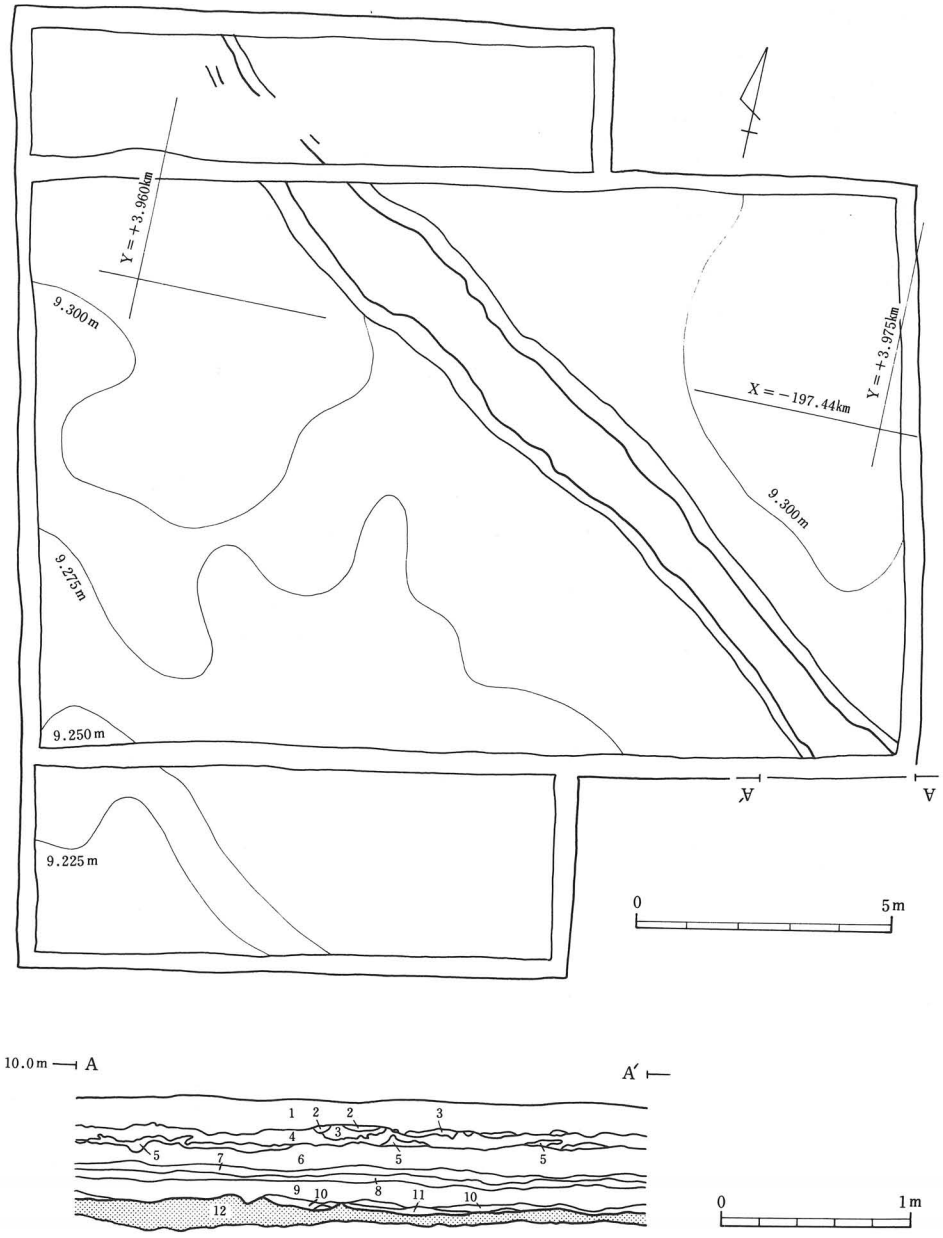


第33図　10層上面標高

(4)　12 層 上 面

12層水田跡（第34図）

〈遺構状況〉　大畦畔を１条検出した。11層は部分的に遺存するのみであるので、畦畔は10層を削り込む過程で確認した。



第34図　12層水田跡平面・断面図

耕作土：耕作土は基本層12層で、黒褐色の泥炭質粘土である。厚さは２～20cmで一定せず、下面はやや起伏がある。

畦畔：検出した畦畔は大畦畔１条のみで耕作土を盛り上げて作られている。方向はN－55°－Wでほぼ直線的に延びる。規模は上端幅43～166cm（平均104cm）、下端幅80～224cm（平均165cm）、高さ２～７cmである。

水田区画：大畦畔によって造られた大区画が認められたのみで、区画の規模などの詳細は不明である。

水田面の傾斜：水田面は全体の地形と同様に南に下がっており、調査区内における水田面の標高は9.20～9.32mである。調査区南西部がやや傾斜があるが、勾配は約７cm／10mである。区画が不明なため区画内及び区画間の比高差は明らかではない。

なお、遺物は出土しなかった。

(5)　その他の出土遺物（第35図）

１・２層中から土師器、赤焼土器、須恵器、かわらけ、陶器、磁器、瓦、石器（剥片）、石製品、金属製品、土師質土器、瓦質土器、鉄滓等、30層上面から石器１点が出土した。１・２層中の遺物はほとんどが細片で図化できたものは少ない。

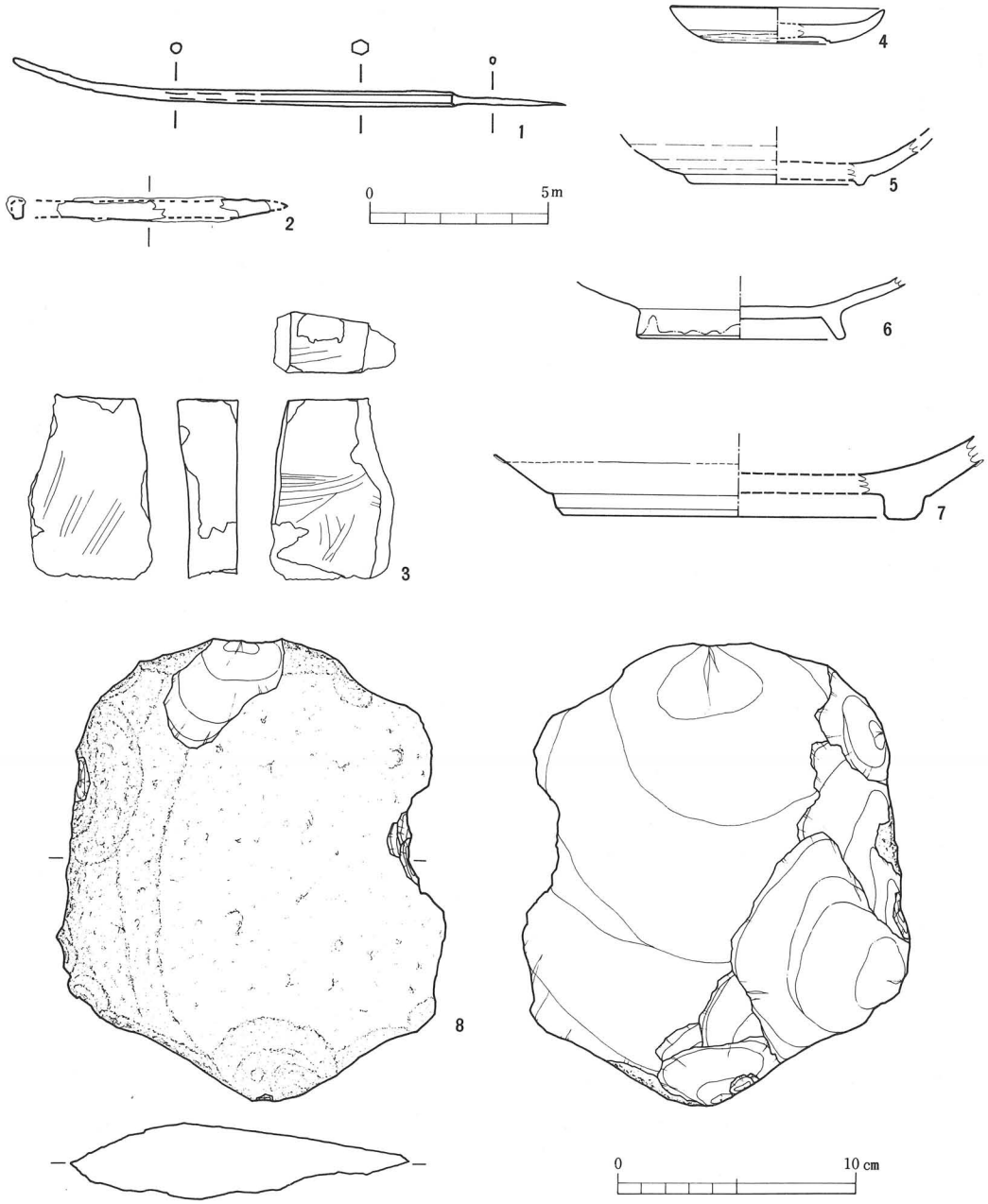
陶器のうち産地・年代を確定できるものは少ないが、２層中からは瀬戸・美濃産の皿(4)、志野産の丸皿(5)が出土しており、これらが２層の年代の上限を示す可能性はある。

(6)　下層の調査

13層以下は約８×８mの試掘区を設けて掘り下げた。調査区南西200～300mに位置する第30次・58次調査区では後期旧石器時代に属する生活跡・樹木群等が検出されているため当調査区におけるそれらの有無を確認するのが主目的である。

13層以下は泥炭質粘土層から粘土層へ移行し、27層以下が粘土層のみになる。グライ化が顕著になる30層上面で礫石器１点（第35図８）が出土したが、遺構は検出できなかった。この30層以下は粘土に砂粒が混入するようになるが、これらのグライ化した粘土層（30～35層、厚さ約１m）の直下標高約5.9mで色調の薄い腐植質粘土層[註1]（36層）を検出した。この腐植質粘土層が第30次・58次調査区等で検出されたものと類似することから、これ以下の層の精査を実施した。

精査の結果36層以下にも２枚（38・39層）の腐植質粘土層が検出された。38層は上面の標高が約5.75mで色調の濃い腐植質粘土層と色調の薄い腐植質粘土層の互層、39層は上面の標高が約5.6mで、部分的な分布を示し、粘土層中に色調の薄い腐植質粘土層が斑状に含まれるものである。各層上面はかなり起伏があるが、上層の32層以下40層上面まではかなり起伏があるので、層の起伏は腐植質粘土層に限ったものではない。



No.	写真図版	遺構・層位	種別	器種	遺存度	口径	底径	器高	色調 外面	色調 内面	特徴
1	53－1	2層	銅製品		完形	全長 15.5cm			――		断面六角形・用途不明
2	53－2	1・2層	鉄製品・角釘		両端欠損	遺存長 6.0cm			――		錆化が激しい
3	53－3	2層	石製品・砥石		破片	――			――		
4	53－4	2層	陶器	皿	1/6	(9cm)	(4.4cm)	(1.5cm)	浅黄色釉(地肌－灰白)	浅黄色釉	碁荀底、内・外面灰釉、瀬戸美濃、16c末？
5	53－5	2層	陶器	丸皿	底部小片	?	(7.2cm)	?	灰黄色	灰黄色	削り出し高台、内・外面釉、志野、17c前半
6	53－6	1層	陶器	皿	下部1/4	?	(8.8cm)	?	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	削り出し高台、内・外面釉、瀬戸、江戸？
7	53－7	2層	陶器	鉢	底部小片	?	(15.4cm)	?	オリーブ黒色(地肌－にぶい赤褐色)	オリーブ黒	削り出し高台、内・外面海鼠釉、堤、19c？
8	53－8	30層上面	二次加工のある剥片・最大長19.5cm・最大幅16.1cm・厚さ3.4cm・重さ1.28kg安山岩								

第35図　その他の出土遺物

なお、間の37層を含めて、各層上面や層中からは遺構・遺物は検出されず、樹木や毬果等の自然遺物も全く認められなかった。土壌水洗の結果も同様である。(註２)

また、最後に43層を標高５ｍまで掘り下げたが他に腐植質粘土層は確認できなかったため、調査を終了した。

４．遺構の所属年代とまとめ

１．検出遺構は４・５・７・12層水田跡とＳＫ１である。このうち７層水田跡は耕作土のみの検出であるが、東方約150ｍ離れた第28次調査区（佐藤：1988）および49次調査との層位の対応関係から水田跡と認定した。またこの他２・３・10層も水田土壌の可能性がある。

２．各水田跡のうち遺物が出土したのは４層水田跡のみで、その他は遺物が皆無であった。また４層水田跡の場合も遺構に伴う遺物を限定することはできなかった。このため各層の年代を限定するのは困難であるが28次・49次調査区との層位の対応関係から以下のように推定される。

〔第74次調査〕	〔第28次調査〕	〔第49次調査〕	
４層水田跡	４　層	４ａ層	灰白色火山灰降下時以降
５層水田跡	５　層	５ａ層	灰白色火山灰降下時以前
７層水田跡	９ａ層	９ａ層	弥生時代（十三塚式期）
12層水田跡	11ａ層	11　層	弥生時代（桝形囲式期）

３．36～39層については花粉分析結果から30次・58次調査等で検出された旧石器時代の層に対応する可能性はあるが、遺構・遺物等が検出されなかったため確定できない。現段階ではその可能性を指摘するに留めておきたい。

（註１）腐植質粘土層については富沢遺跡第57次調査（佐藤他：1991）を参照。

（註２）35～40層についてサンプル土を採取し、各層２kgずつを無作為に抽出して土壌水洗を行った。

第６節　富沢遺跡第75次調査

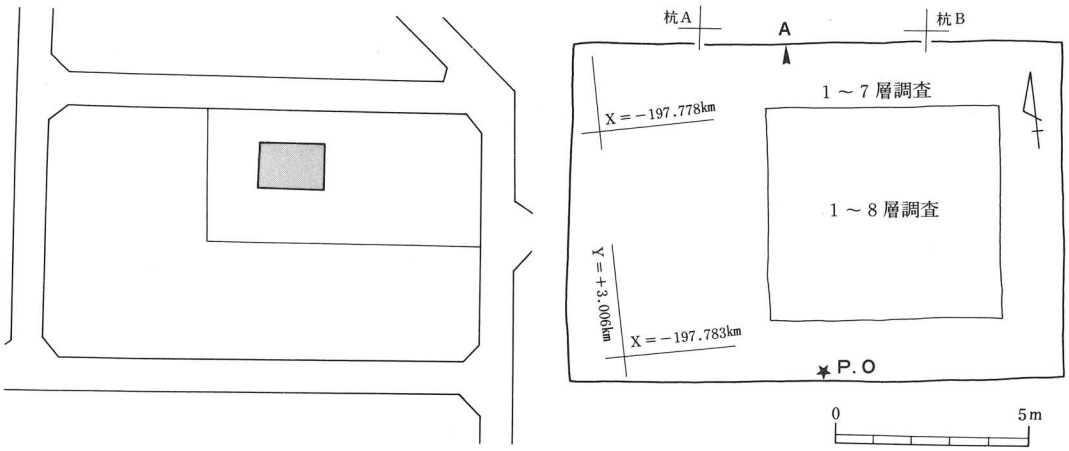
１．調査方法

調査区の設定面積は約115㎡（12.8×９ｍ）である。調査は、盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）までを重機で排除し、以下は人力により行った。８層上面までは調査区全面の精査を行ったが、８層以下は安全確保のため６×5.5ｍの調査区とし段掘を行っている。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。測量は杭Ａ・Ｂを基準としている。杭の座標値は平面直角座標第Ｘ系で、杭Ａ：Ｘ＝－197.97546㎞、Ｙ＝＋3.76706㎞・杭Ｂ：Ｘ＝－197.97618㎞、Ｙ＝＋3.01468㎞である。

２．基本層序

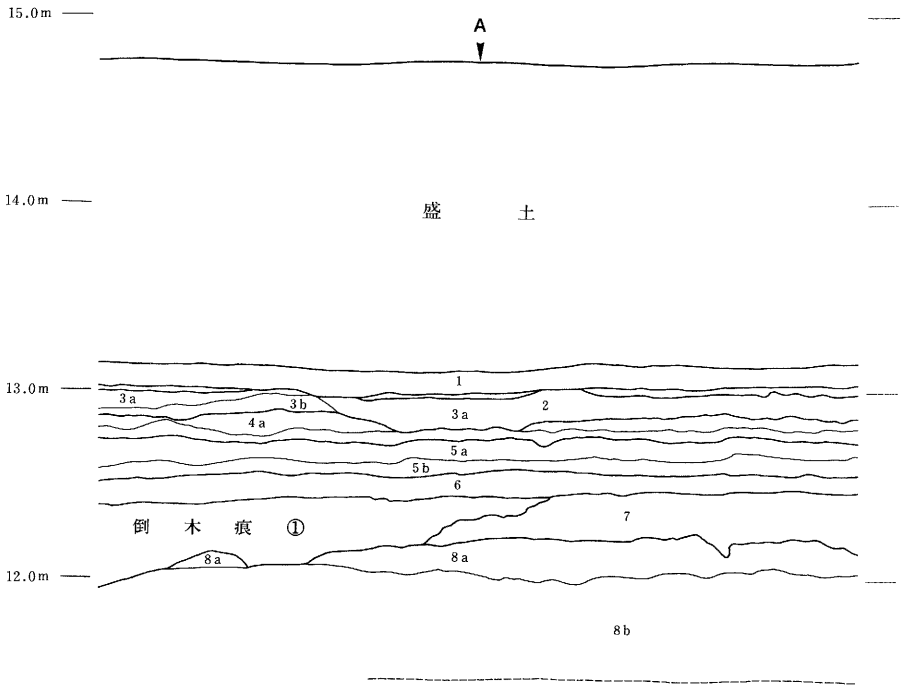
調査区内において盛土下に大別で８層、細別で12層の層序を確認した。各層の性質は１～４層がやや砂質の粘土質シルトで、３ａ・３ｂ層では灰白色火山灰が検出されている。５ａ層は砂で、５ｂ層にも粗砂が含まれるが、５ｂ～８層までは粘土である。７層下部からグライ化がみられ８層では顕著になる。各層ともほぼ水平な堆積状況を示すが、若干東南方向へ緩やかな傾斜がみられる。遺物出土層は１・２・３ａ・３ｂ・７・８ａ層である。

当調査区では２層から６層までの計８地点のプラント・オパール分析を実施（第３章参照）した。結果として、２・３ａ・３ｂ・４ａ・４ｂ層からイネのプラント・オパールが検出され、特に３ｂ層では高い値となっている。



第36図　調査区位置図・設定図

当調査区南側に第24次調査区が位置している。調査結果としてⅠ～Ⅻ層の基本層が確認され、遺構として近世～弥生時代の水田跡・縄文時代の包含層等が確認されている（工藤他：1988)。詳細な層対比には難があるが当調査区３層はⅤ層に、５ａ層はⅦ層に、８層はⅫ層にほぼ対比可能かと判断される。



第37図　基本層序

層序	色調		性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	8～16cm	下面に結核	――	現代の水田土壌
2	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	5cm前後	斑文有	――	――
3a	黒褐色	10YR2/2	粘土質シルト	5～18cm	斑文有	層中に火山灰のブロック	水田土壌・土師器・須恵器片
3b	暗褐色	10YR3/3	粘土質シルト	5～10cm	――	層中に火山灰のブロック	水田土壌・土師器片
4a	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	9～14cm	――	――	――
4b	黒色	10YR2/1	粘土質シルト	8cm前後	――	――	――
5a	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂	6～34cm	――	――	――
5b	褐色	10YR4/4	粘土	4～12cm	――	粗砂	――
6	黒色 暗褐色	10YR1.7/1 10YR3/3	粘土 粘土	6～16cm	――	――	互層
7	黒褐色 黒褐色	10YR2/2 10YR3/2	粘土 粘土	15～22cm	――	――	石器・縄文土器片
8a	オリーブ灰色	10Y5/2	粘土	26～36cm	――	――	グライ化
8b	オリーブ灰色	10Y5/2	粘土	85cm以上	――	――	グライ化・８ａに較べ暗い
①	黒色	10YR1.7/1	粘土	――	――	――	倒木痕跡

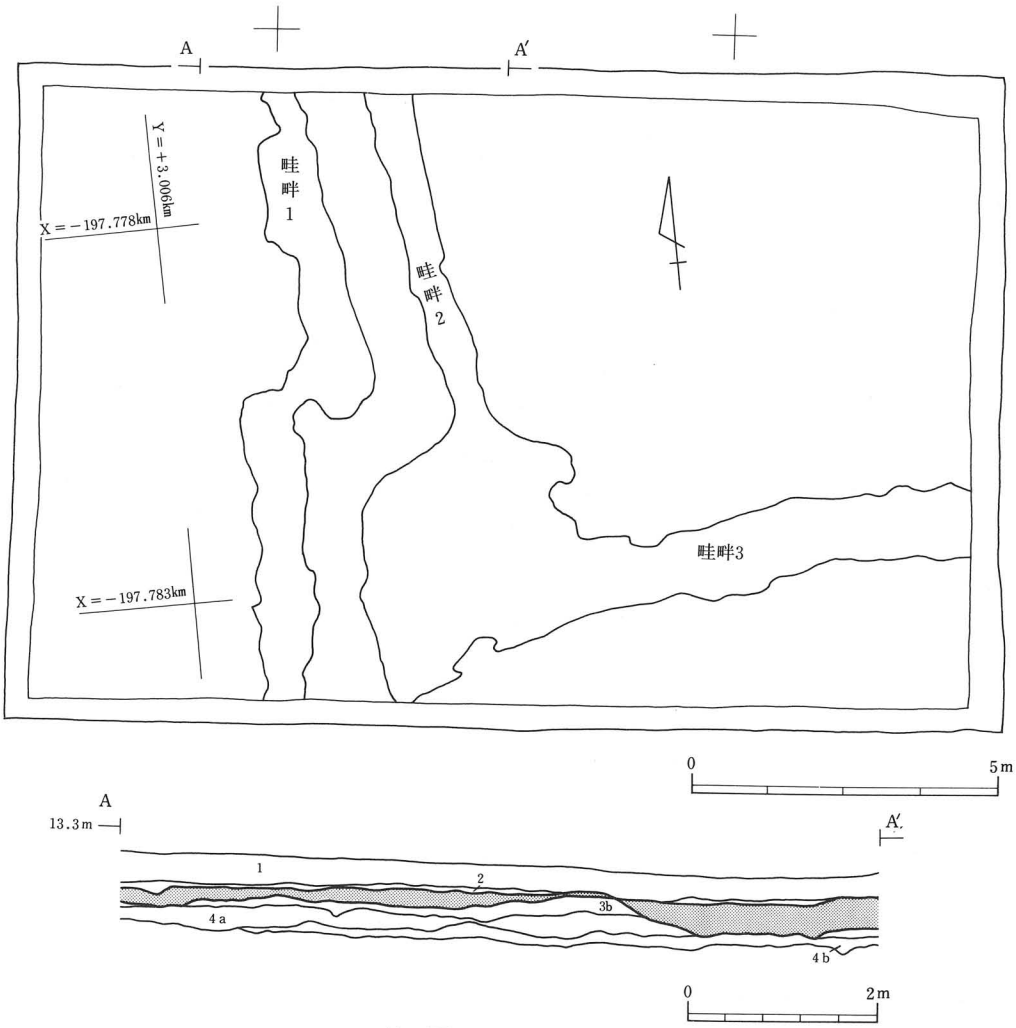
３．検出遺構と出土遺物

(1)　３ａ層水田跡（第38図）

〈遺構の検出〉　３ｂ層上面で東西及び南北に延びる幅50～100cm程の畦畔状の高まりを３条

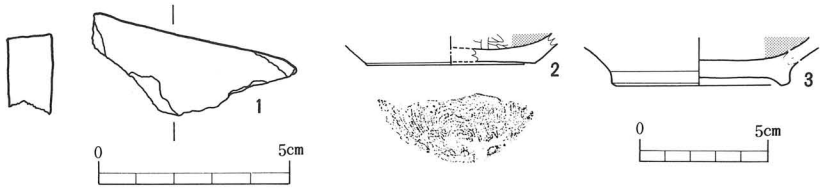
確認した。土層の特徴及び断面状況から擬似畦畔Ｂ（斎野他：1987）と考えられ、擬似畦畔が検出された直上の３ａ層上面に畦畔が存在していたものと判断された。擬似畦畔（以後、畦畔）１と畦畔２は80cm程の間隔をおき南北に延びるもので状況から間に水路が存在していたものかと考えられた。畦畔の方向はＮ－９°－Ｗである。畦畔３は畦畔２にほぼ直交する形でとりつき、接地部分は幅が広くなっている。畦畔２の方向はＥ－３°－Ｎである。区画は３区画検出した。規模・形状は知り得ないが状況から方形を基調とするものと考えられる。耕作土は５～18cm程残存しており、下面には浅い凹凸がみられる。東側部では撹拌のため３ｂ層が点的にしか遺存しない所がみられ、層中には３ｂ層及び灰白色火山灰が小ブロックで混じっている。

〈出土遺物〉　耕作土中より破片資料ではあるが土師器・須恵器が若干量出土している。掲載遺物は土師器坏と須恵器甕？の２点である。土師器坏はロクロ使用の底部破片資料である。内



第38図　３ａ層水田跡

面にはヘラミガキ・黒色処理が施され、外面はロクロ調整のみである。切り離しは回転糸切りで無調整である。須恵器は小破片で器種が断定できない。断面の一面（12×56㎜）が擦られており砥石として再使用されたものと考えられる。



No.	写真図版	層　位	種　別	器　種	遺存度	底　径	色　調		特徴
							外面	内面	
1		３ａ層	須　恵　器	甕？	体部小片	――	灰　色	灰　色	砥石に転用（断面を使用）
2		３ａ層	土　師　器	坏	底部１／３	(6.6cm)	にぶい黄橙色	黒　色	底部回転糸切無調整、外面ロクロ→一部ナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理
3		３ｂ層	土　師　器	高台付坏	底　　部	7cm	灰白色	黒　色	付け高台、底部回転糸切、外面ロクロ、内面ヘラミガキ・黒色処理

第39図　３ａ・３ｂ層水田跡出土遺物

(2)　７・８層出土遺物

各遺物にまとまりはなく、調査区内で散在した状況で縄文土器・石器・礫が出土している。７層では縄文土器37点・石器142点、８層では縄文土器２点・石器42点・礫２点が出土した。縄文土器はすべて小破片で地文がかすかに確認されるのみで、器形等は不明である。胎土に繊維が含まれるものもある。尚、７層上面で倒木痕跡を１基確認している。

①　７・８層出土石器

基本層７層から142点、基本層８層から42点、計184点の石器が出土している。これらはすべて打製石器である。以下のようにⅠ～Ⅻ類に分類され、Ⅴ・Ⅵ・Ⅻ類を除き、細分を行なった。またⅣ～Ⅵ類、Ⅷ類の類別基準は芹沢編（1979）『聖山』にもとづいており、Ⅳ～Ⅵ類は「不定形石器」として分類されたものに含まれている。

ｉ）　分類

Ⅰ類：石鏃。13点出土している。基部の形態によりａ種：平基式（第40図１）、ｂ種：凹基式（第40図２）に分けられる。この他ｃ種として、未製品・基部の形態の不明な折損品を分けた。

Ⅱ類：尖頭器。４点出土している。ａ種：凹基式石鏃と同様の形態で大型のもの（第40図３）と、ｂ種：両側縁が平行し、細長いもの（第40図４）に分けられる。

Ⅲ類：石錐。２点出土している。ａ種：錐部が太く、短いもの（第40図５）と、ｂ種：錐部が棒状で細身のものがある。

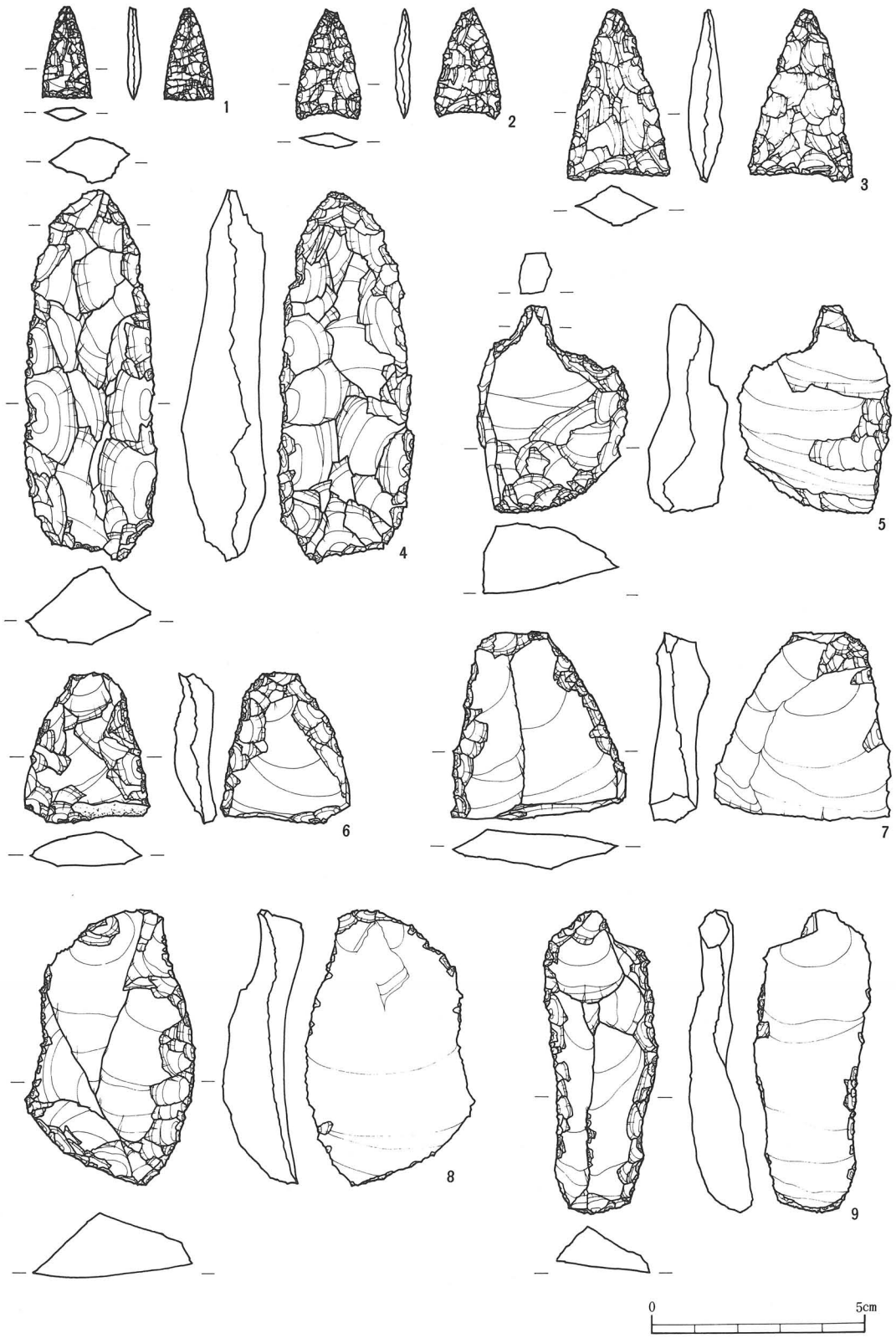
Ⅳ類：「平坦な二次加工が連続して施された刃部を有するもの。所謂「スクレイパー。」10点出土している。ａ種：二側縁を刃部とするもの４点と、ｂ種：末端と側縁を刃部とするもの３点に分けられる。ａ種には錯交剥離が施されているもの（第41図１・２）と背面加工のもの（第

第５表　７層出土石器の類別と石材の関係

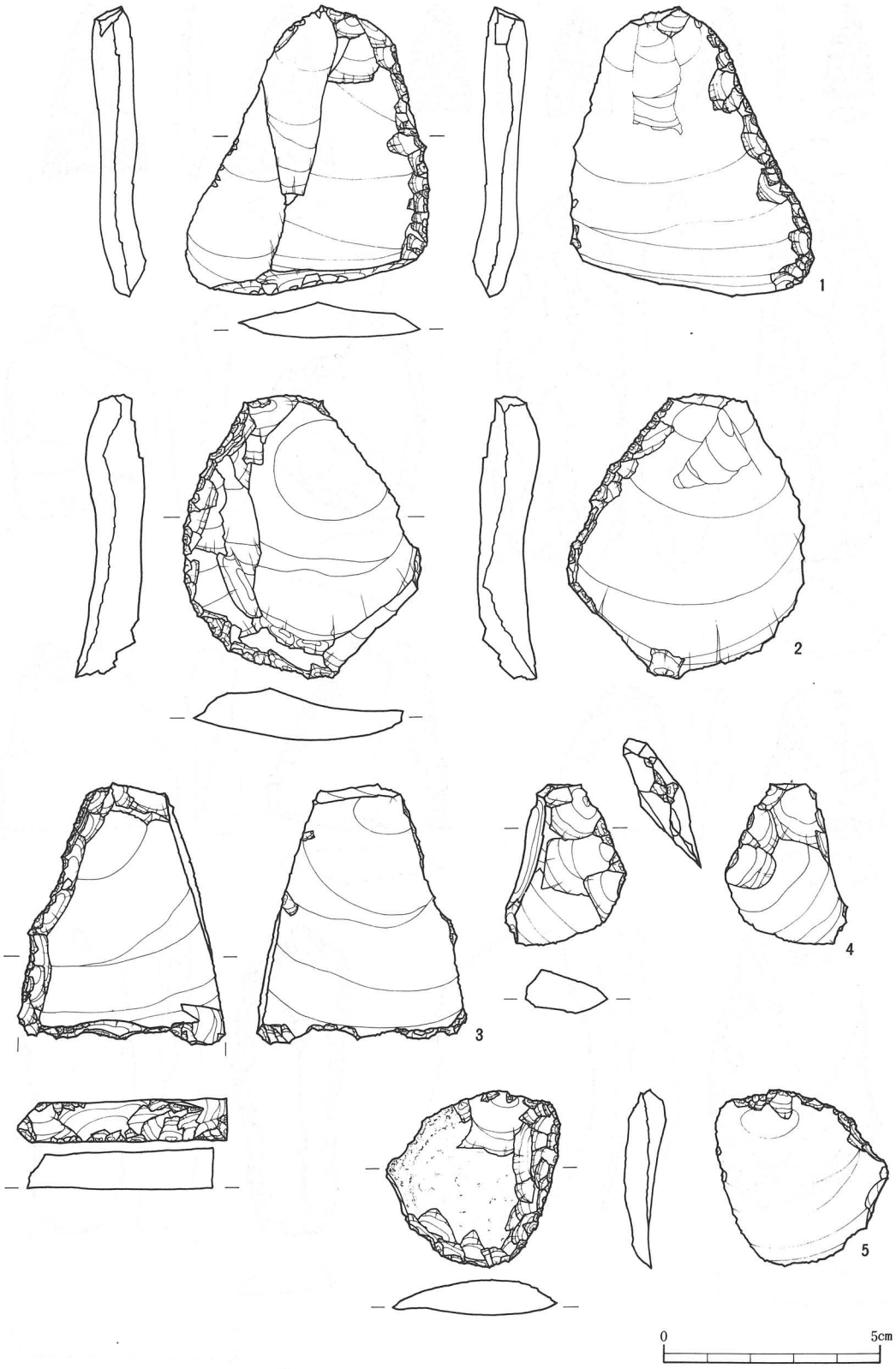
	Ⅰ			Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ			Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ			Ⅷ		Ⅸ			Ⅹ		Ⅺ			計
	7			2		0		8			1	1	19			5		15			9		64			131
	a	b	c	a	b			a	b	c			a	b	c	a	b	a	b	c	a	b	a	b	c	
	1	4	2	1	1			4	2	2			4	3	12	1	4	7	6	2	4	5	32	5	27	
珪質頁岩	1	2	1		1			4	2	2	1			2	3			4	5	2			9	3	8	50
細粒珪質凝灰岩													2		1	1			1			1	6		6	18
石英安山岩質凝灰岩			1	1								1		1	4		1	1			1		3	2	9	25
石英安山岩													1		2						2	3	2		2	12
黒曜石													1		2		3	1			1	1	10		2	21
玉髄		1																1								2
碧玉		1																					2			3

第６表　８層出土石器の類別と石材の関係

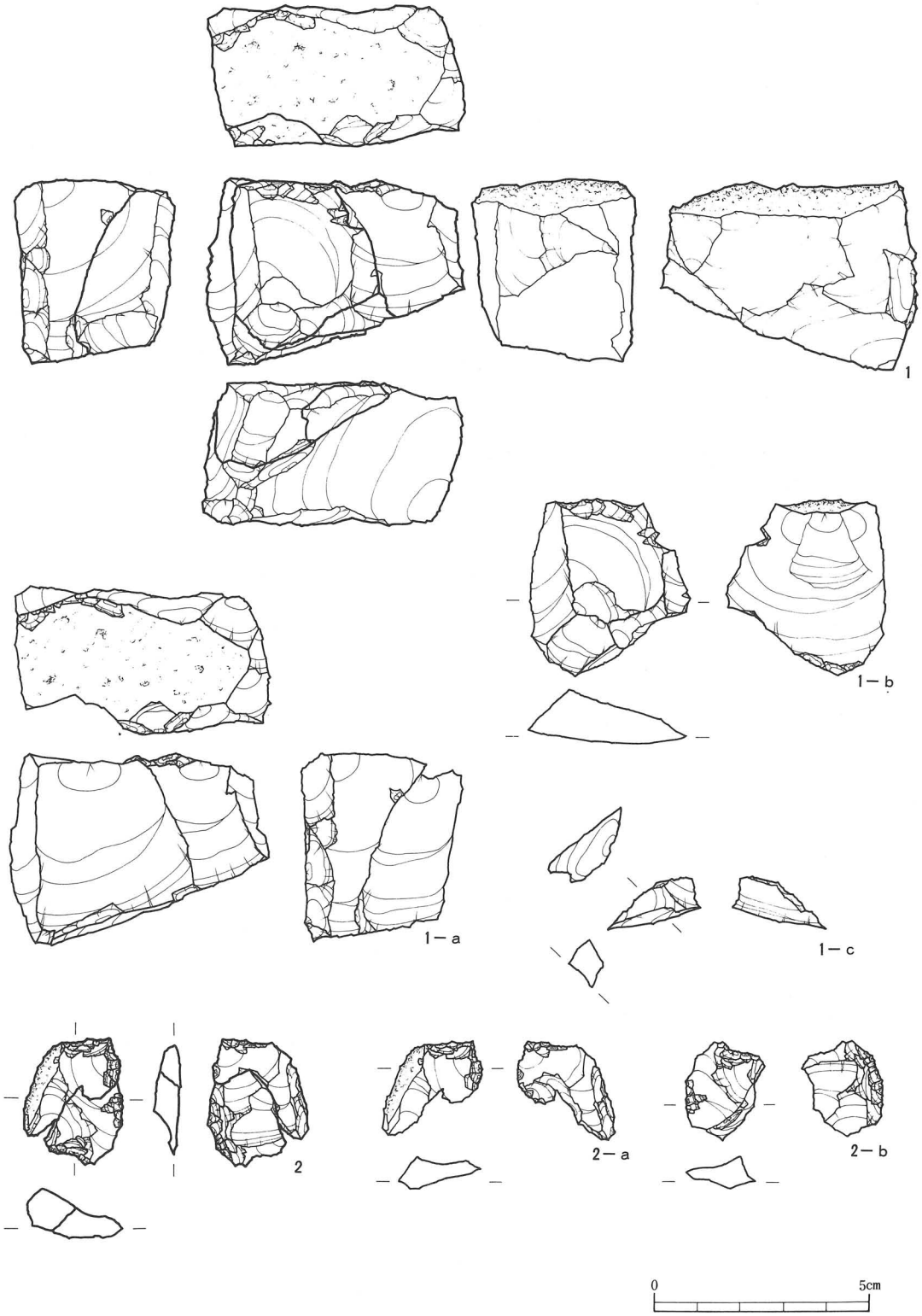
	Ⅰ			Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ			Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ			Ⅷ		Ⅸ			Ⅹ		Ⅺ			計
	1			1		1		2			1	2	4			4		4			0		20			40
	a	b	c	a	b	a	b	a	b	c			a	b	c	a	b	a	b	c			a	b	c	
		1		1		1			1	1			1	1	2	3	1	3		1			7	2	11	
珪質頁岩						1			1	1	1				2			2					2	1	3	14
細粒珪質凝灰岩													1			1							1			3
石英安山岩質凝灰岩		1		1								2		1			1	1		1			1	1	6	16
石英安山岩																										0
黒曜石																2							3		2	7
玉髄																										0
碧玉																										0



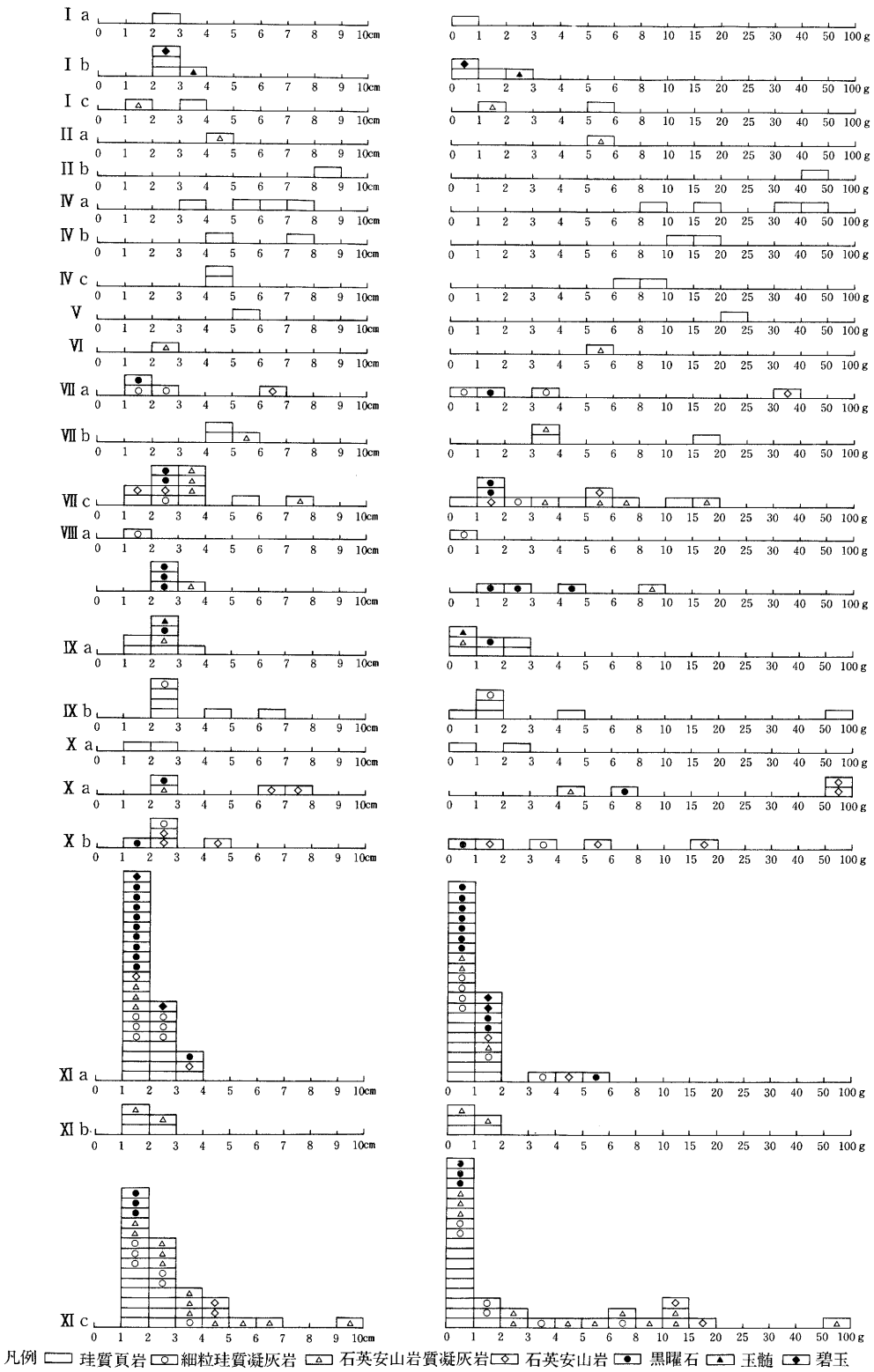
第40図　７層・８層出土石器実測図(1)



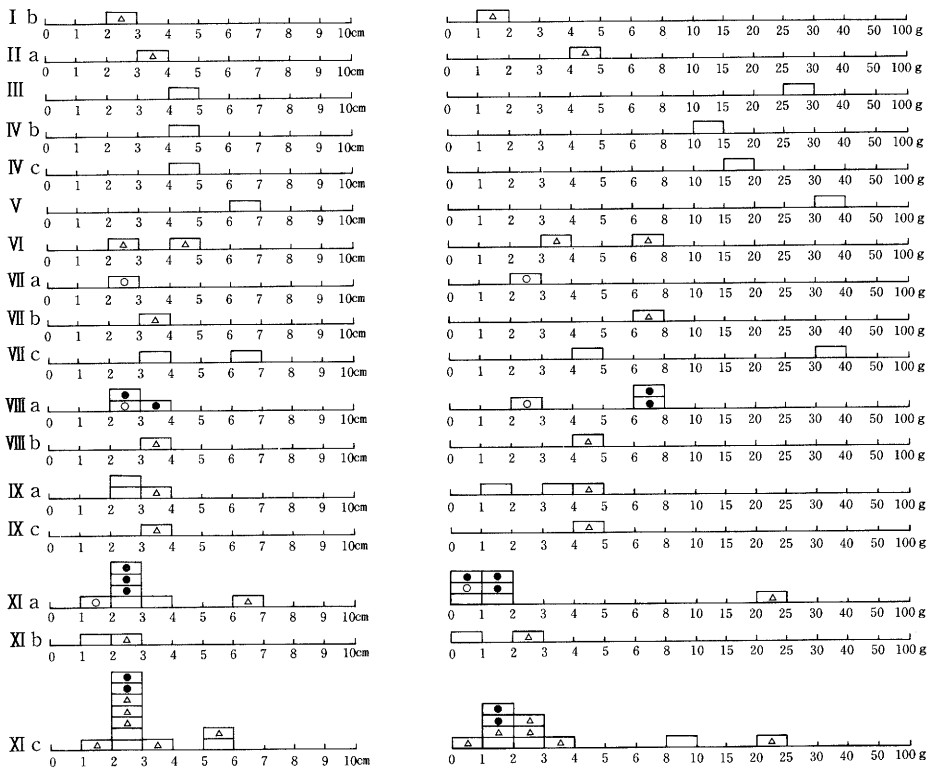
第41図　７層・８層出土石器実測図(2)



第42図　７層・８層出土石器実測図(3)



第43図　類別の最大長，重さ，石材との関係（７層）



第44図　類別の最大長，重さ，石材との関係（８層）

第７表　７層・８層出土石器観察表

挿図番号	写真番号	出土層位	名称	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	類別	備考
第40図　1	54－1	7　層	石鏃	2.16	1.11	0.28	0.7	珪質頁岩	Ⅰa	
第40図　2	54－2	7　層	石鏃	2.61	1.48	0.37	1.0	珪質頁岩	Ⅰb	
第40図　3	54－3	7　層	尖頭器	4.03	2.35	0.84	5.1	石英安山岩質凝灰岩	Ⅱa	
第40図　4	54－4	7　層	尖頭器	8.8	3.13	1.77	46.0	珪質頁岩	Ⅱb	
第40図　5	54－5	8　層	石錐	4.93	3.65	1.65	27.0	珪質頁岩	Ⅲ	
第40図　6	54－6	7　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	3.70	3.15	0.84	8.5	珪質頁岩	Ⅳa	
第40図　7	54－7	7　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	5.1	4.41	1.2	19.0	珪質頁岩	Ⅳa	折れ面有り
第40図　8	54－8	7　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	6.54	4.21	1.73	34.5	珪質頁岩	Ⅳb	
第40図　9	54－9	7　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	7.2	2.59	1.26	18.0	珪質頁岩	Ⅳb	
第41図　1	54－10	7　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	7.2	5.03	0.88	33.0	珪質頁岩	Ⅳa	折れ面有り
第41図　2	54－11	7　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	6.64	5.36	1.37	42.0	珪質頁岩	Ⅳa	
第41図　3	54－13	8　層	不定形石器Ⅲ類	6.48	4.85	0.89	36.0	珪質頁岩	Ⅴ	
第41図　4		8　層	不定形石器Ⅳ類	4.03	2.65	0.96	7.5	石英安山岩質凝灰岩	Ⅵ	
第41図　5	54－12	8　層	スクレイパー(不定形石器　Ⅰ類)	4.3	3.68	0.8	13.0	珪質頁岩	Ⅳb	折れ面あり
第42図　1		7　層	――	――	――	――	――	石英安山岩		第42図１a・b・cが接合
第42図１－a		7　層	石核	6.15	4.72	3.14	91.0	石英安山岩	Ⅹa	
第42図１－b		7　層	剥片	4.27	4.03	1.14	18.5	石英安山岩	Ⅹb	
第42図１－c		7　層	剥片	2.14	0.86	0.78	1.5	石英安山岩	Ⅹc	
第42図　2	54－14	7　層	ピエス・エスキーユ	2.9	2.6	0.92	4.0	黒曜石	―	第42図２a・bが接合
第42図２－a	54－14a	7　層	ピエス・エスキーユ・砕片	2.9	1.71	0.92	2.5	黒曜石	Ⅷb	
第42図２－b	54－14b	7　層	ピエス・エスキーユ・砕片	2.29	2.06	0.74	1.5	黒曜石	Ⅷb	

40図７）両面加工のもの（第40図６）がある。第40図６はヘラ状石器として理解することもできる。この他ａ種とｂ種の判別ができないもの３点をｃ種として分けた。

Ⅴ類：「片面加工による、急角度でかつやや大きな凹凸のある刃部を有するもの。」２点出土している。第41－３図は末端と一側縁に腹面からの連続した二次加工が施されている。

Ⅵ類：「側面観がジグザグな刃部を有するもの。」３点出土している。すべて二次加工は背腹両面から交互に行なわれている。第41－４図。

Ⅶ類：二次加工のある剥片。部分的あるいは連続的な二次加工が施されているもの。23点出土している。ａ種：折れ面のないもの、ｂ種：折れ面はあるが、打面を残しているもの、ｃ種：折れ面があり、打面を残していないものに細分した。

Ⅷ類：ピエス・エスキーユとその砕片。ａ種：ピエス・エスキーユは「両極剥離痕」と２ケ１対の鋭い刃部を有し、小形で、「四辺形の石器」であり、ｂ種：その砕片は「２ケ１対の刃部を有さないもの」である。ａ種４点、ｂ種５点が出土している。第42－２図はピエス・エスキーユの砕片２点が接合したものである。

Ⅸ類：微細剥離痕のある剥片。15点出土している。石材の種類による石質の違いはあるが、ここでは森嶋・岡村（1984）にもとづき、便宜的に剥片の側縁に長さ２㎜未満の剥離面が連続的に認められるものとした。剥離面の長さは、１㎜未満のものが多い。Ⅶ類と同様、ａ～ｃ種に分けた。

Ⅹ類：石核。９点出土している。ａ種：分割礫を素材とし、90度・180度の打面転移を行なうもの（第42図１－ａ）とｂ種：剥片を素材とし、腹面を作業面としているものに分けられる。第42図１はａ種と剥片の接合資料である。ａ種の接合資料は２例、ｂ種は１例認められる。

Ⅺ類：剥片。90点出土している。Ⅶ類と同様、ａ～ｃ類に分けた。

Ⅻ類：チップ。最大長10㎜未満の剥片、砕片。部分的に採取された土壌サンプルの水洗選別により、38点が検出されている。

ⅱ）　石材

蟹沢聡史氏の鑑定により、石材は７種類に識別された。総数184点のうち、最も多いのは珪質頁岩の71点である。次いで石英安山岩質凝灰岩の46点、黒曜石の29点、細粒珪質凝灰岩の21点と続く、珪質頁岩と石英安山岩質凝灰岩が多数を占める傾向は、７層、８層ともに認められる。この両者には最大長４㎝を越えるものも多い。黒曜石、細粒珪質凝灰岩の出度数量は比較的多いが、大きさは４㎝未満で、同一母岩の可能性を示すものもある。黒曜石の石質については、７層から出土した１点だけが流紋岩質の透明感があるもので、他はすべて流理構造の認められる石英安山岩質の透明感のないものである。なお、８層には、石英安山岩、玉髄・碧玉は認められない。

これらの石材の産地は、黒曜石を除き、奥羽山系に求められるが、なかでも石英安山岩質凝灰岩、珪質細粒凝灰岩、石英安山岩は、富沢遺跡周辺での採取が容易なものである。黒曜石の産地については不明である。

iii）　石材と類別された石器との関係（第43・44図）

・７層：最も多く出土している珪質頁岩はⅧ類・Ⅹ類を除く各類に認められるが、Ⅰ～Ⅲ類の定形化した剥片石器及びⅣ類・Ⅴ類との関連性の強いことが知られる。なかでもⅡ類ｂ種～Ⅴ類はすべて珪質頁岩製である。他の石材では、石英安山岩質凝灰岩、玉髄、碧玉はⅠ類、Ⅱ類ａ種の石材としても用いられているが、主にⅥ～Ⅺ類に認められる。また、各種石材が認められるⅦ・Ⅸ・Ⅺ類については、ａ～ｃ種に分けたことによる石材及び大きさの違いはあまりないが、Ⅺ類での最大長２cm未満、重さ１ｇ未満の比率が他に比べ高く、その中に含まれる黒曜石の点数も比較的多い。

・８層：７層とほぼ同様の傾向にあるが、Ⅰ類、Ⅱ類に石英安山岩質凝灰岩が用いられている点でやや異なる。

(3)　その他の出土遺物

基本層１層から陶器片・石器が各１点出土し、２層では陶器・磁器・土師器片が計12点出土している。２層中の遺物は陶器・磁器が主体を占め、近世～近代頃の年代が想定される。

４．遺構の所属年代とまとめ

検出した遺構は、３ｂ層上面検出の３ａ層水田跡と７層面での倒木痕跡１基である。水田跡に関しては検出状況・分析結果から２層・３ｂ層も水田跡と判断される。

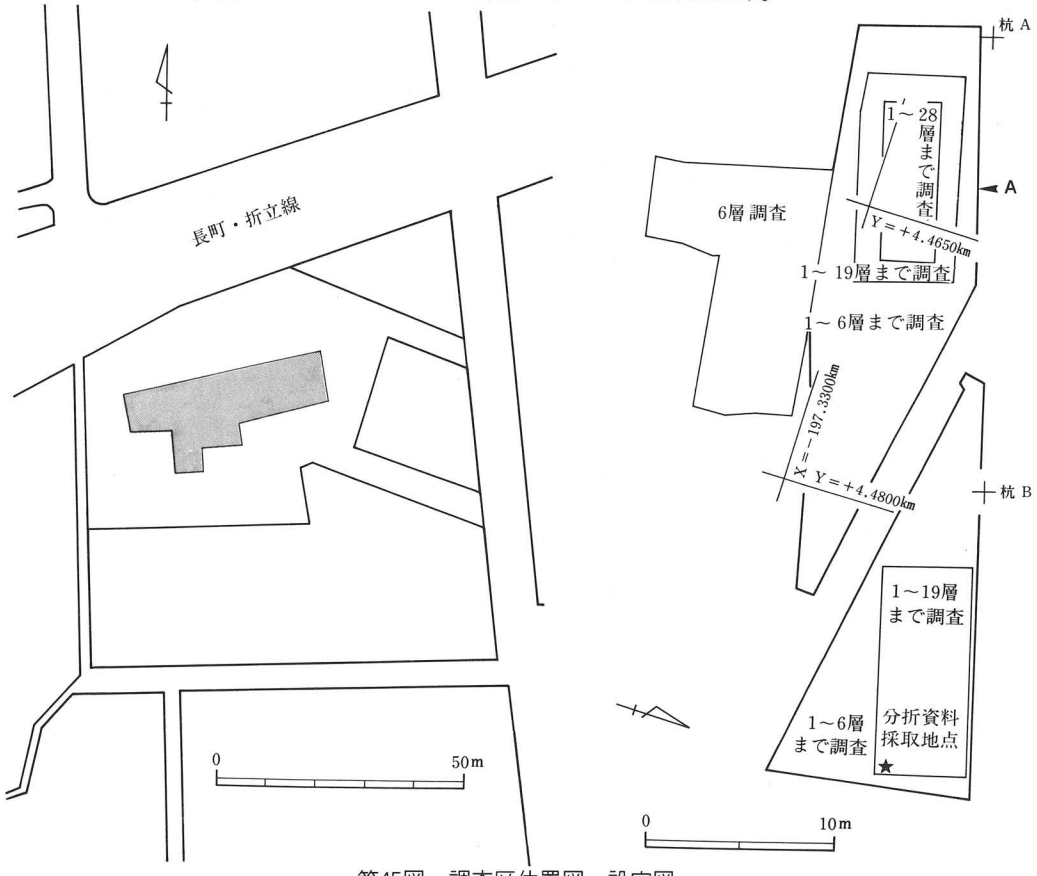
３ａ層水田跡は区画等詳細は明らかに出来なかったが、出土遺物・灰白色火山灰の存在から平安時代（10世紀前半以降）頃の年代が考えられる。畦畔は部分的な検出ではあるがほぼ真北方向を示しており、条里型土地割を考える（平間：1988）上での好資料となりうる。尚、３ｂ層水田跡は断面観察等の状況から３ａ層水田跡と同様な規模・区画をもっていたものと判断され、時期も平安時代頃と考えられる。

７層及び８層で縄文土器・石器を検出したが、遺構としては７層面での倒木痕跡のみとなっており、遺物包含層としてとらえ得るものである。出土遺物に所謂繊維土器が含まれているが他の土器の存在も考え併せて、時期は縄文時代早期末・前期初頭以降としておく。

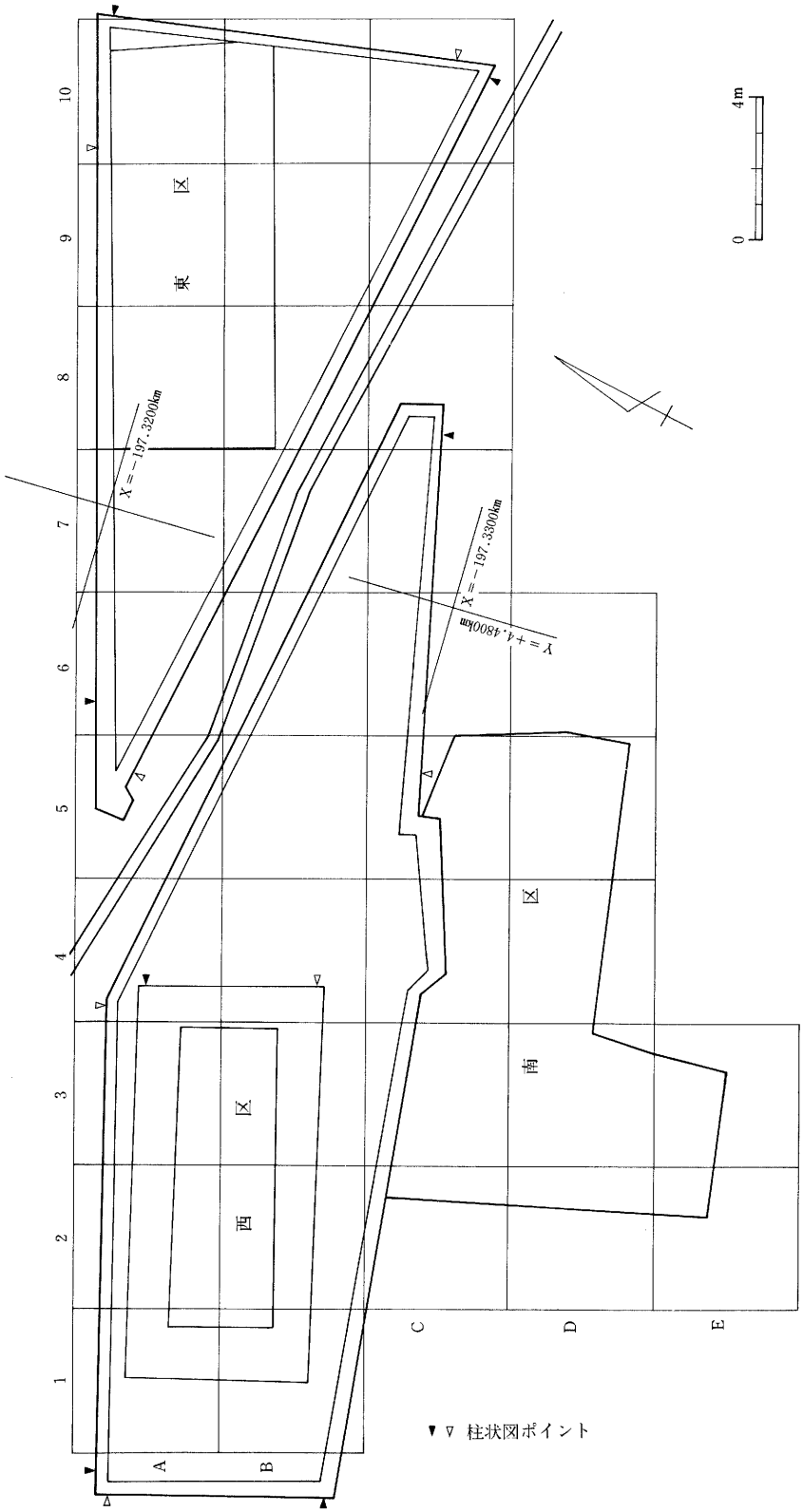
第７節　富沢遺跡第77次調査

１．調査方法

調査区の設定面積は、約470㎡である。調査は盛土及び直下の１層（旧水田耕作土）上面までは重機で排除し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は東区、西区、南区の３箇所に分けて実施し、東区、西区は６層まで全面の精査を実施し、６層以下はそれぞれ１箇所ずつ試掘区を設けて掘り下げた（東区試掘区では20層上面まで約4.5×11mで調査を行った。西区試掘区では20層上面まで約５×11m、20層以下は約４×8.5mで調査を行った。）。南区では攪乱が深く重機により４層下面まで排除し、５・６層の調査を実施した。遺構の測量は、任意に設定した４×４mのグリット（南北軸A～E、東西軸１～10）を基準として実施した。なお、グリット基準杭（杭A・B）の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している（杭A：X＝－197.326651km　Y＝＋4.454542km、杭B：X＝－197.319755km　Y＝＋4.477515km）。

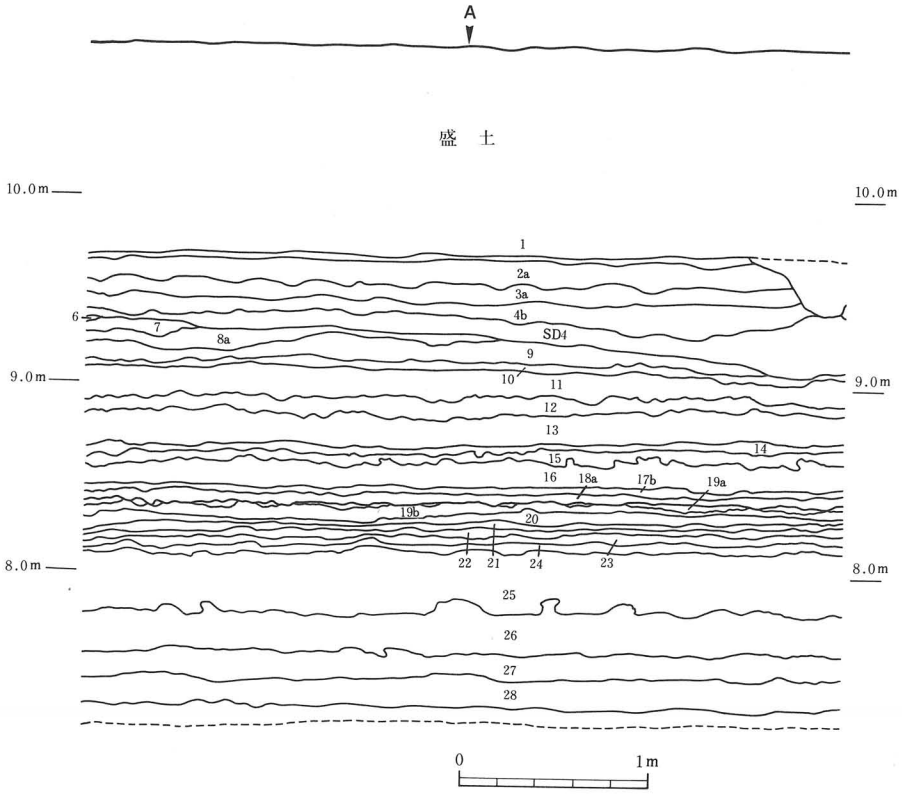


第45図　調査区位置図・設定図


東区
西区
南区
X＝−197.3200km
X＝−197.3300km
Y＝+4.4800km
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
A
B
C
D
E
0
4m
▼▽ 柱状図ポイント

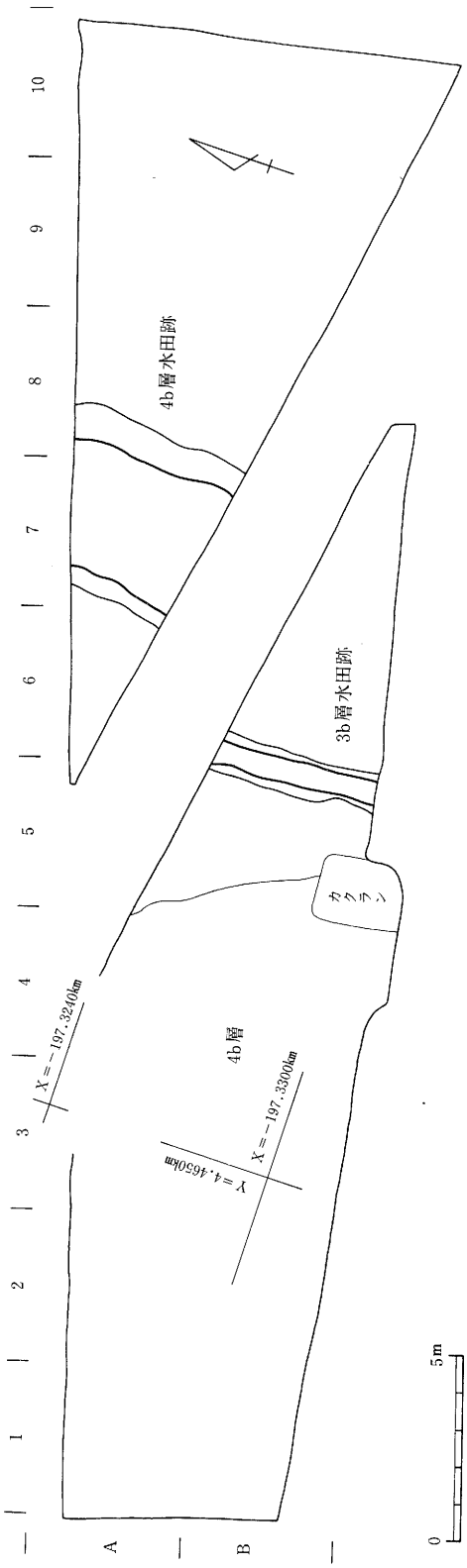
２．基本層序

今回の調査では盛土下に大別28層、細別37層が確認されているが、攪乱によって一部壁面観察が実施できない箇所があった。各層の土質は、１層から４層は粘土質シルトで、５層から28層までは粘土、特に16層以下では泥炭質の粘土である。５層の下部には他よりも色調の暗い部分が認められたが、部分的なもので分層はできなかった。現代のものをのぞく水田土壌は、３ｂ層・４ｂ層・10層・17ａ層・18ａ層・19ａ層である。水田土壌の可能性のある層は７層・14ａ層・15層である。全体的な層の傾きは、ほぼ平行であるが、南西方向への若干の下り傾斜が見られる。なお、当調査区は第15次調査（斎野他：1987）Ⅳ区、第35次調査（平間：1992）、第40次調査（平間：1989）に隣接しており、基本層に対応が一部認められる。各層の対応関係については遺構の対応関係と共に後述する。



第47図　基本層序

層序	色調	性質	層厚(cm)	酸化鉄	混入物	備考
1	オリーブ黒色　5Y3/2	シルト質粘土	1～36	あり		旧水田耕作土
2a	黄褐色　10YR5/8	シルト質粘土	1～15	あり（帯状）		
2b	褐色　10YR4/6	シルト質粘土	1～8			部分的分布、水田土壌？
3a	暗オリーブ褐色　2.5Y3/3	粘土	2～12		マンガン粒（上部）	水田土壌？
3b	褐色　10YR4/4	シルト質粘土	1～38	あり（帯状）	マンガン粒（上部）・炭化物	水田土壌・部分的分布
4a	オリーブ黒色　5Y3/2	シルト質土	1～18		マンガン粒（全体）	水田土壌？、部分的分布
4b	黒褐色　10YR2/2	シルト	1～29	あり（帯状）	マンガン粒（全体）	水田土壌、部分的分布
5	黒褐色　10YR2/2	粘土	1～30		10YR4/6（所々）	
6	にぶい黄褐色　10YR5/4	粘土	1～16	あり	マンガン粒	
7	暗オリーブ褐色　2.5Y3/3	粘土	1～9			水田土壌？
8a	黒褐色　2.5Y3/1	粘土	1～13	あり	マンガンブロック	部分的分布
8b	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	1～12			部分的分布
9	黄褐色　10YR5/8	シルト質粘土	1～19			
10	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	1～18		マンガン粒（全体）	水田土壌
11	黄褐色　10YR5/8	粘土	1～28		10YR5/3をブロック状、10YR7/3を帯状（層下部）	
12	灰黄褐色　10YR4/2	粘土	1～14		10YR6/4をブロック状。	
13	にぶい黄色　2.5Y6/3 黒褐色　2.5Y3/2 黒色　10YR1.7/1	粘土 粘土 泥炭質粘土	10～33			
14a	暗灰黄色　2.5Y5/2	粘土	1～11		2.5Y5/1をブロック状。	水田土壌？
14b	黄灰色　2.5Y5/1 黒色　10YR1.7/1	粘土 泥炭質粘土	1～5			部分的分布
15	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	1～11			
16	灰オリーブ色　5Y5/2 黒色　10YR1.7/1 灰色　5Y4/1	泥炭質粘土	3～20		5Y5/1を帯状（層中）	
17a	灰色　5Y4/1	粘土	2～11			水田土壌、下面非常に凹凸
17b	灰オリーブ色　5Y4/2 黒色　10YR1.7/1	泥炭質粘土	1～7			
18a	灰オリーブ色　5Y4/2	泥炭質粘土	1～10		下層土ブロック	水田土壌、下面非常に凹凸
18b	オリーブ黒色　5Y3/2	粘土	1～2			部分的分布
19a	オリーブ黒色　5Y3/1	粘土	1～10			水田土壌、部分的分布
19b	灰オリーブ色　5Y4/2 灰色　5Y4/1 黒色　10YR1.7/1 オリーブ黒色　5Y3/2	粘土 泥炭質粘土 粘土	1～20			
20	灰色　5Y4/1 黒色　5Y2/1 暗オリーブ色　5Y4/3	粘土 泥炭質粘土 粘土	2～24			
21	オリーブ黒色　5Y3/2	泥炭質粘土	2～4		細砂ブロック	
22	灰オリーブ色　5Y4/2	泥炭質粘土	2～7			
23	灰オリーブ色　7.5Y4/2 灰オリーブ色　5Y2/1	泥炭質粘土	2～7	あり（量管状）		
24	オリーブ黒色　5Y3/2 黒色　5Y2/1	粘土 泥炭質粘土	2～7			
25	灰色　7.5Y4/1 オリーブ褐色　2.5Y4/3 オリーブ灰色　5GY5/1 オリーブ黒色　5Y3/2 暗オリーブ灰色　5GY4/1 オリーブ黒色　7.5Y3/2	シルト質粘土 泥炭質粘土 シルト質粘土 泥炭質粘土 シルト質粘土 シルト質粘土	24～37	あり（量管状）		
26	黒色　5Y2/1 灰オリーブ色　7.5Y4/2 黒色　10YR1.7/1	泥炭質粘土 粘土 泥炭質粘土	16～30			
27	オリーブ黒色　5Y3/2 黒色　5Y2/1	粘土 泥炭質粘土	9～18			
28	オリーブ黒色　5Y3/1 黒色　5Y2/1 オリーブ黒色　5Y3/2	粘土 泥炭質粘土 粘土	10～17			



第48図　３ｂ層・４ｂ層水田跡平面図

３．検出遺構と出土遺物

(1)　３ｂ層上面

３ｂ層水田跡（第48図）

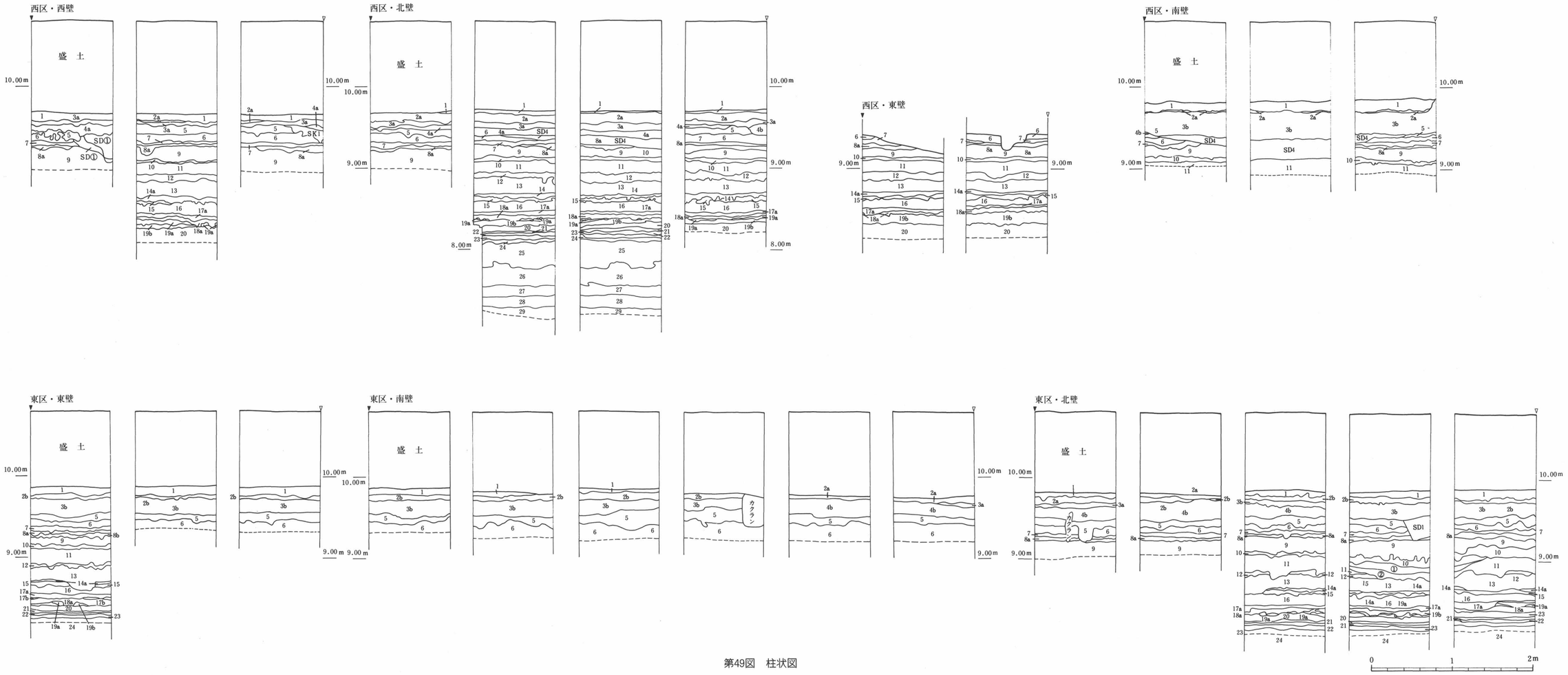
〈遺構状況〉西区３ｂ層上面で畦畔を１条検出した。東区では耕作土の連続は確認されたものの、上層の水田耕作の影響で畦畔等の遺構は検出されなかった。また、西区西半分にこの層が存在しない部分がある。

検出された畦畔は耕作土と同じ３ｂ層を盛り上げて作られており、直線的でほぼ真北を向き下端幅は0.8～1.4m、検出長は4.4mである。耕作土上面からの比高差は10～17cmである。

水田区画は２区画確認できるが、前述のように上層の影響や分布が一様でないことから本来的な区画の形状は不明である。

耕作土３ｂ層は褐色のシルト質粘土層で、分解はあまり進まず色調に変化が認められる。層厚は１～38cmである。層上部にマンガンを帯状に含んでいる。層下面の起伏はあまり顕著ではない。

〈出土遺物〉（第71図）土師器片（２点）、陶磁器片（12点）、古銭（１点）が出土している。２は新寛永銭である。６は鉄釉の施された擂鉢の体部破片であるが、産地は不明である。11は鉢底部破片である。表面に指頭痕が残っている。この鉢は在地産のもので、胎土中に白針状物質を多くふくんでいることや、器厚が厚く焼成が甘いなどの特徴を持っている。このような特徴を示す陶器はこれまで、今泉遺跡などで確認されている（佐藤：1983）。白石窯の製品（甕・鉢）などと共伴する事例が多いことから、13世紀から14世紀頃の所産と考えられている。


西区・西壁
西区・北壁
西区・東壁
西区・南壁
東区・東壁
東区・南壁
東区・北壁
盛　土
SD①
SK1
SD4
SD1
カクラン
10.00m
9.00m
8.00m
0
1
2m

第49図　柱状図

(2)　4ｂ層上面

4ｂ層水田跡（第48図）

〈遺構状況〉東区4ｂ層上面で1条の畦畔を検出している。西区では一部に耕作土の連続が認められたが、ほとんど存在していない。

検出された畦畔は耕作土と同じ4ｂ層を盛り上げて作られており、直線的で方向はN－4°－E、下端幅は4.38～4.46m、検出長は3.8mである。耕作土上面からの比高差は10cmである。

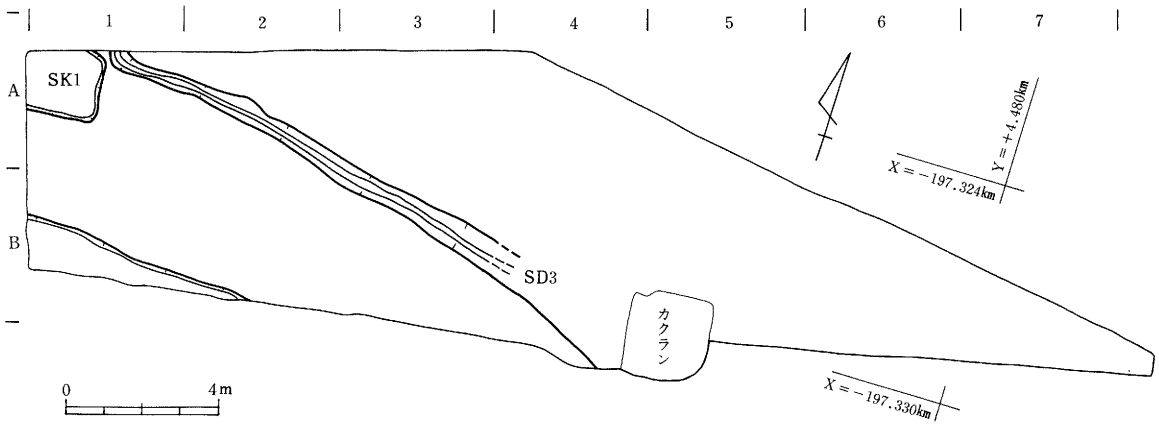
検出された畦畔によって確認される水田区画は2区画であるが、部分的な検出であり全容は明らかではない。

耕作土4ｂ層は黒褐色のシルト層であり、分解度に違いの認められる箇所がある。層厚は1～29cmで、層全体にマンガン粒を含んでいる。層下面の起伏はあまり顕著ではない。

〈出土遺物〉（第71図）土師器片（8点）、須恵器片（4点）、陶磁器片（8点）、銅製品（1点）が出土している。1は煙管の吸い口である。内部に〝ラウ〟が遺存している。8は渥美産の壺体部破片である。時期は12～13世紀頃のものである。10は砥石に転用した須恵器体部破片である。

(3)　5層

5層上面で検出できた遺構以外は全て6層上面まで下げたところで確認している。しかし、前述したように5層下部には色調に違いの見られるところがあったが、現場での明確な層の分離ができなかった。その後の整理作業において、遺構の検出状況、遺物の出土状況や隣接する調査区（第15次調査・第35次調査・第40次調査）での遺構等の状況などから検討を加えた結果、6層上面で検出した遺構群は、5層上面あるいは5層中から掘り込まれたものが混在していた可能性が強い。そこで、ここでは5層上面、6層上面として検出した遺構・遺物の事実関係だけの記述にとどめ、詳細は5．遺構の所属年代とまとめの項で記述することとする（なお、植物種子、昆虫遺体については4．分析・同定の項にまとめてある。）。



第50図　5層上面平面図

５層上面（第50図）

畦畔状遺構

西区Ａ－１、２、Ｂ－１～４グリットに位置している。直線的に延びており、方向はＮ－78°－Ｗ、検出長は約10ｍである。幅は4.0～4.4ｍで、上面は平坦である。周囲との比高差は約10㎝あり畦畔、あるいは道路として機能していた可能性も考えられるが、部分的な検出であり断定は差し控えたい。

３号溝跡－ＳＤ３－

西区Ａ－１、２、Ｂ－３、４グリットに位置している。ほぼ直線的に延びており、畦畔状遺構に平行している。検出長は約15ｍ、幅は0.36～1.4ｍである。東に行くほど底面が高くなり不明瞭になる。堆積土は１層である。遺物の出土はみられなかった。

１号土坑－ＳＫ１－（第60図）

西区Ａ－１グリットに位置している。全体的な平面形は調査区外へ延びているために明らかではない。東辺長は約200㎝である。堆積土は１層で人為的な堆積状況を呈し、深さは10～20㎝で底面に著しい凸凹が見られる。ＳＫ１は畦畔状遺構を切っている。遺物の出土はみられなかった。

６層上面

１号建物跡－ＳＢ１－（第51図）

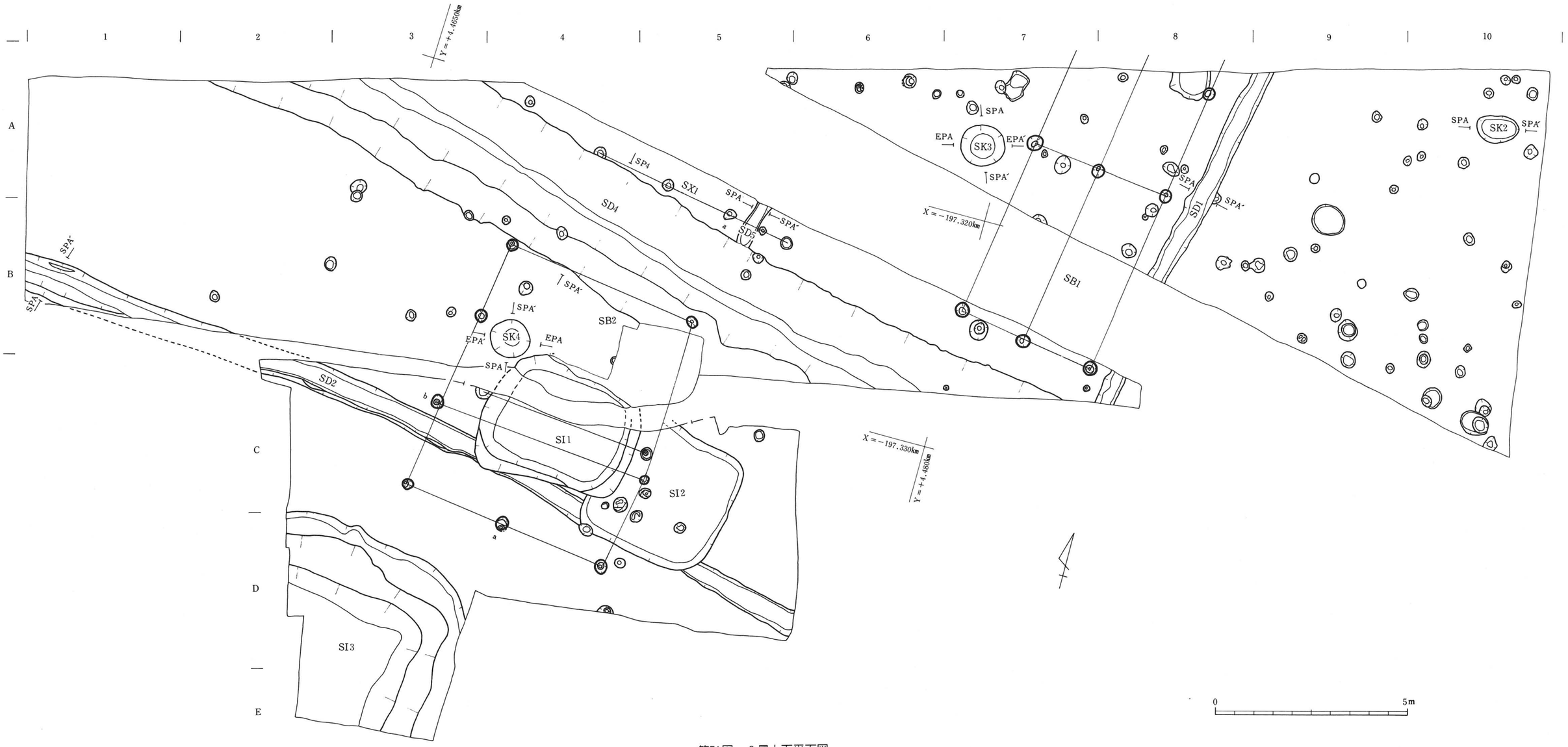
東区Ａ－７・８、Ｂ－７・８、西区Ｂ－７、Ｃ－７グリットに位置している。桁行３間以上（柱間寸法240㎝～280㎝）総長7.7ｍ以上、梁行２間（柱間寸法180㎝～190㎝）総長3.7ｍの南北棟で、北側は調査区外に延び全体規模は不明である。建物内部にも床束ないしは間仕切柱がある。桁柱列方向はＮ－７°－Ｅである。柱穴はほぼ円形で直径30～40㎝、深さ20～40㎝である。南１東２柱穴で直径15㎝ほどの柱根が遺存するが、他の柱穴では柱痕跡が明らかではない。柱穴埋土は黒褐色粘土で、炭化物を含むものがある。遺物の出土はみられなかった。

２号建物跡－ＳＢ２－（第51図）

西区Ｂ－３～５、南区Ｃ－３～５、Ｄ－４グリットに位置している。桁行３間（柱間寸法210㎝～260㎝）総長7.0ｍ、梁行２間（柱間寸法260㎝～280㎝）総長5.4ｍの南北棟建物である。桁柱列方向はＮ－７°－Ｅである。柱穴はほぼ円形で直径24～38㎝、深さは20～40㎝である。南１東２、西１南２柱穴で直径18㎝ほどの柱根が遺存するが、他の柱穴では柱痕跡が明らかではない。柱穴埋土は黒褐色粘土で、炭化物を多く含んでいる。ＳＢ２はＳＩ１と重複しているが、新旧関係は不明である。遺物の出土はみられなかった。

ＳＸ１性格不明遺構（第51図）

西区Ａ－４・５グリットに位置している。直線状に並ぶピット列で、方向はＮ－80°－Ｗで



第51図　６層上面平面図

ある。これらのピットの直径は30～35cmで、深さは15～42cmである。掘り方埋土は黒褐色の粘土で、炭化物を含んでいる。柱痕跡は確認できなかったが、ａ以外で底面に根石を確認している。ピット中央部を中心として計測すると間隔は西から２ｍ、1.8ｍ、1.8ｍである。ＳＸ１はＳＤ４・５と重複関係にあり、ＳＤ４に切られているが、ＳＤ５との新旧関係は不明である。これらピット列の性格として、塀あるいは掘立柱建物の一部と考えることができるが詳細は不明である。

１号竪穴遺構－ＳＩ１－（第52図）

〈遺構状況〉南区Ｃ－３グリットに位置している。ＳＩ１はＳＩ２とＳＤ２と重複関係にあり、これらすべてを切っている。上端平面形は隅丸長方形を呈し、長軸370cm、短軸270cmである。検出面からの深さは87cmである。本来の掘り込み面は５層上面か、５層中であると考えられるが、攪乱が深く及んでいるために確定はできない。底面は平坦で、ピット等の施設は検出されなかった。壁はほぼ急角度に立ち上がる。堆積土は大別２層で、12層に細分される。４層までは地山土がブロック状に入り込んでおり人為的な堆積と考えられる。５層以下は自然堆積状況を示し、８層以下からは植物遺体を多く含んでいる。（特に８層は、ワラ状の植物遺体層である。）周囲にはピットがいくつか確認されている。そのうち長軸線上に位置しているａ・ｂは柱痕跡の確認はできなかったが規模、形状から柱穴であったと思われ、ＳＩ１に伴う可能性が考えられる。方向はＮ－85°－Ｗである。

〈出土遺物〉遺物は、土師器、陶器、木製品、石製品、漆製品、植物遺体、昆虫遺体等が出土している。

石製品

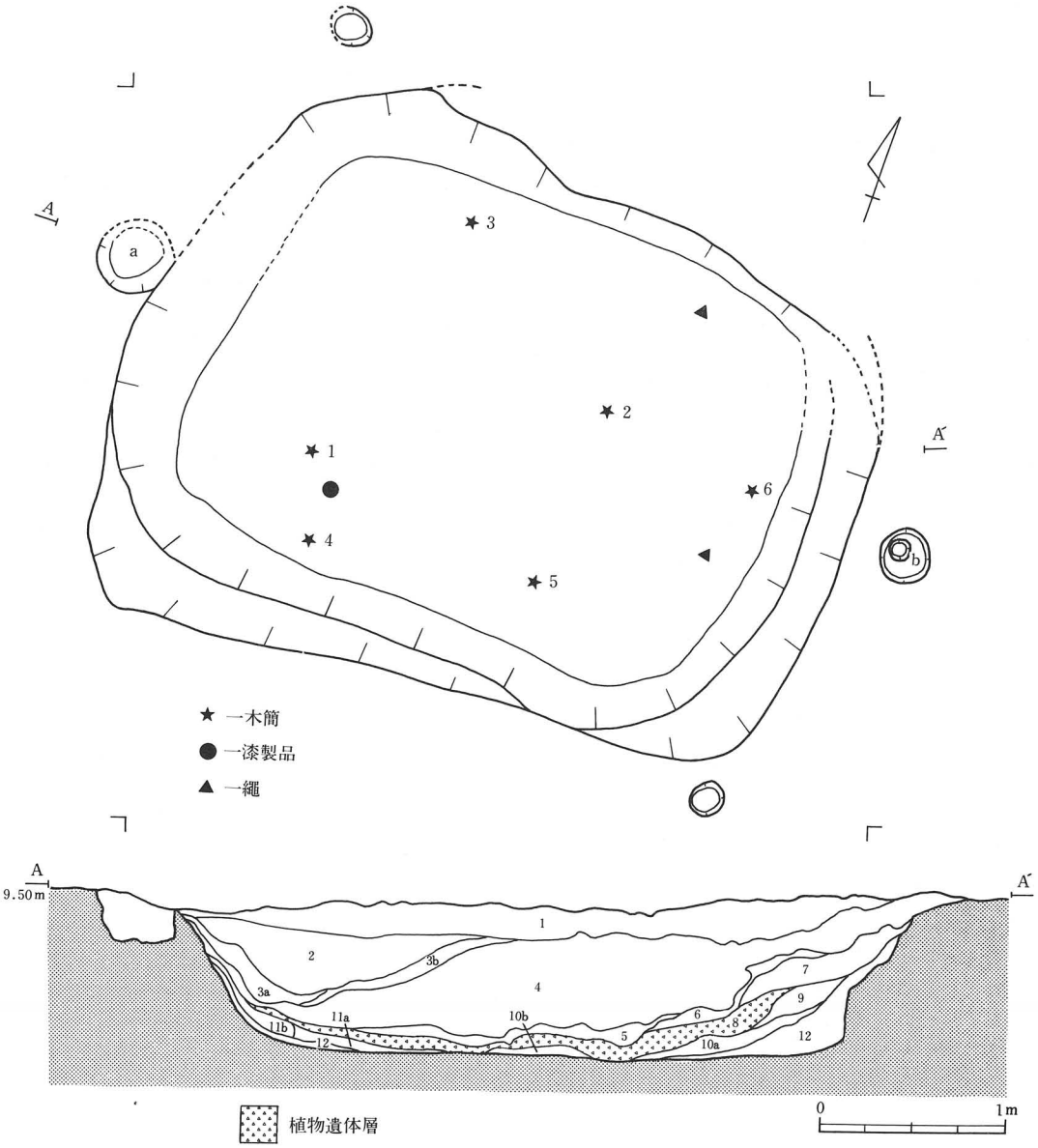
（第56図１）堆積土中から出土している。硯の一部と思われる。幅0.6mmの沈線文が施してある。

陶器

（第56図２）堆積土中から出土している。甕の体部破片である。外面に自然釉が見られる。常滑産のものであると考えられる。所属する年代等は不明である。

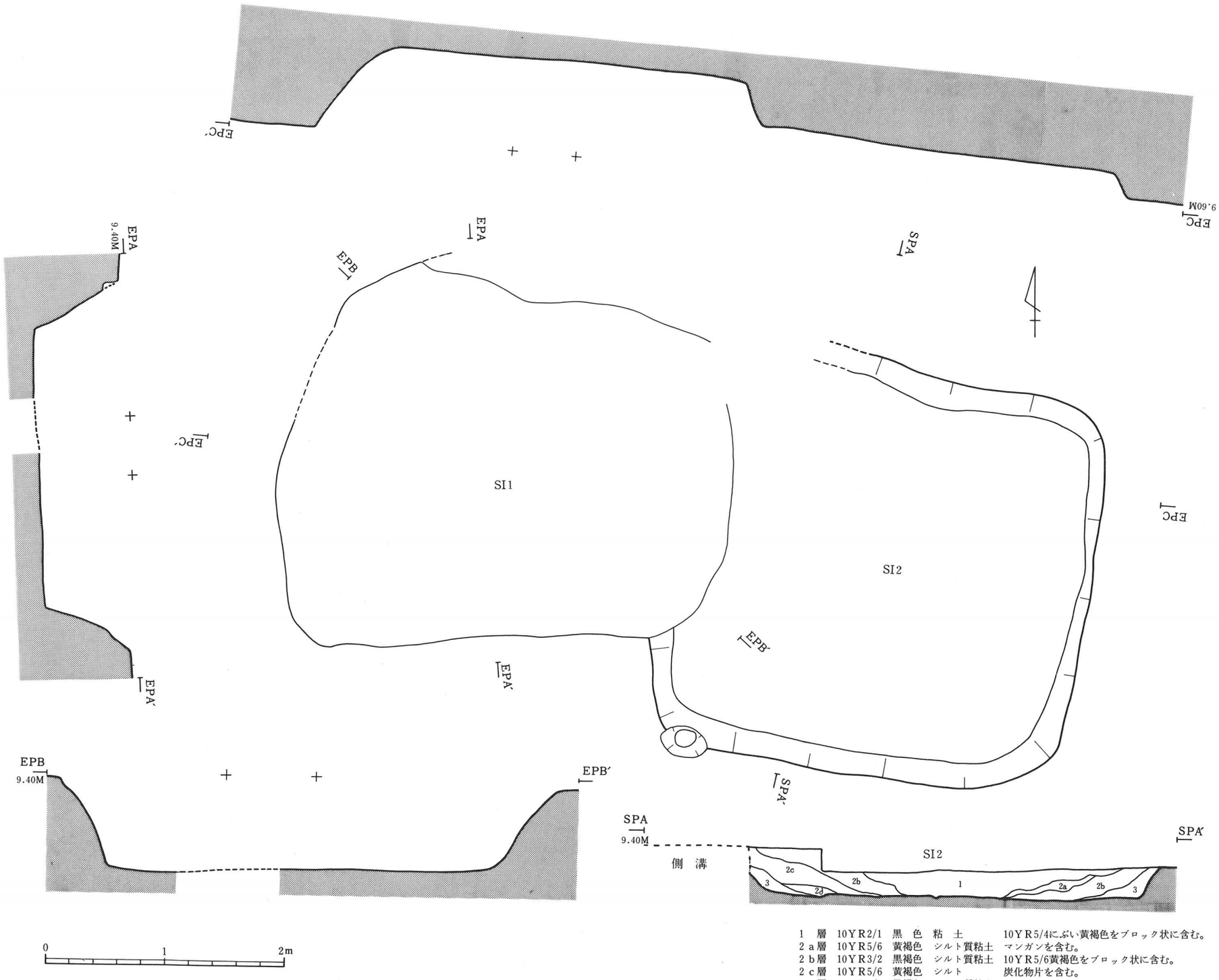
木製品

（第54図１～７）これらは全て底面から出土している。１～３・５は木簡である。１は上部と側面を欠損している。残存する長さは9.5cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmである。表裏ともに墨痕が認められるが、にじんだような状態で判読はできなかった。樹種はスギである。この木簡は形状等から付け札と考えられる。２は完形品である。下端を尖らせ、上端を平らに削っている。長さは14.6cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。表裏ともに墨痕が認められ、特に表面は「三斗三升」と肉眼でもはっきりと判読できる状態である。裏面は、書体がかなり書き崩してあり、また削り痕もあり判読はできなかった。樹種はヒノキ科ネズコである。この材は軽軟で加工が容易であり、保存性が高いことから木簡に適する材の選択であると指摘されている。[註1] この木



層位	色調	性質	備考
1層	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	粘土	全体にマンガン粒，炭化物片を若干含む。
2層	2.5Y3/2　暗褐色	シルト質粘土	10YR5/8黄褐色をブロック状に含む。
3a層	2.5Y4/4　オリーブ褐色	粘土	基本層をブロック状に含む。
3b層	2.5Y3/2　暗褐色	粘土	
4層	2.5Y3/1　黒褐色	シルト質粘土	下部に酸化鉄が帯状に見られる。基本層をブロック状に大量に含む。
5層	2.5Y4/1　黄灰色	粘土	2.5GY4/1暗オリーブ灰色をブロック状に含む。
6層	2.5Y2/1　黒色	粘土	炭化物が非常に多く含む。
7層	10YR2/2　黒褐色	粘土	炭化物片，マンガン粒を含む。
8層	2.5Y3/1　黒褐色	粘土	植物遺体を層状に含む。昆虫遺体を含む。
9層	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色	粘土	2.5Y4/6オリーブ褐色をブロック状に含む。
10a層	5GY4/1　暗オリーブ灰色	粘土	炭化物片を若干含む。植物遺体を含む。
10b層	2.5GY4/1　暗オリーブ灰色	粘土	下部に5Y3/1オリーブ黒を層状に含む。
11a層	2.5Y2/1　黒色	粘土	植物遺体を若干含む。
11b層	2.5Y3/2　黒褐色	粘土	
12層	5GY4/1　暗オリーブ灰色	粘土	植物遺体を大量に含む。昆虫遺体を含む。

第52図　ＳＩ１平面図・断面図



1　層	10ＹＲ2/1	黒　色	粘　土	10ＹＲ5/4にぶい黄褐色をブロック状に含む。
2ａ層	10ＹＲ5/6	黄褐色	シルト質粘土	マンガンを含む。
2ｂ層	10ＹＲ3/2	黒褐色	シルト質粘土	10ＹＲ5/6黄褐色をブロック状に含む。
2ｃ層	10ＹＲ5/6	黄褐色	シルト	炭化物片を含む。
2ｄ層	10ＹＲ3/2	黒褐色	シルト質粘土	
3　層	10ＹＲ2/3	黒褐色	シルト質粘土	炭化物片を多く含む。

第53図　ＳＩ１・２平面図・断面図

簡は形状等から付け札であると考えられる。３は完形品と思われ、上下端ともに斜めに裁断されている。表裏ともに墨痕が認められるが、にじんだような状態で判読はできなかった。長さは14.6cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmである。機能については不明である。樹種はスギである。５は欠損が著しいが表裏ともに墨痕が認められる。墨痕はにじんだ状態で判読はできなかった。残存する長さは6.9cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmである。樹種はアスナロである。６は上下端ともに欠損している。表裏に掛引線が認められ、間隔は0.8～1.0cmである。樹種はスギであり、加工の形態や樹種からみて曲げ物の一部であろう。４は欠損が著しく、その機能等は不明である。７は箸の一部であると考えられる。

漆製品

埋土８層下部で出土している。遺存状況が悪く図示はできなかった。周囲に植物製品（竹製の籠か？）のようなものがありその中に納められていたようである。註2黒漆を重ね塗りしており、遺存している部位の形状からみて烏帽子である可能性が強い。取り上げる際に下から別個体が出土しているので、枚数は少なくとも２枚はあったものと思われる。

２号竪穴遺構－ＳＩ２－（第53図）

南区Ｃ－４・５、Ｄ－４・５グリットに位置している。ＳＩ２はＳＩ１とＳＤ２と重複関係にあり、ＳＩ１に切られ、ＳＤ２を切っている。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。幅は約340cm、検出面からの深さは20cmでほぼ一定であり、底面は平坦である。堆積土は３層に分層され、地山土がブロック上に入り込み人為的な堆積状況を呈している。遺物の出土はみられなかった。

３号竪穴遺構－ＳＩ３－（第55図）

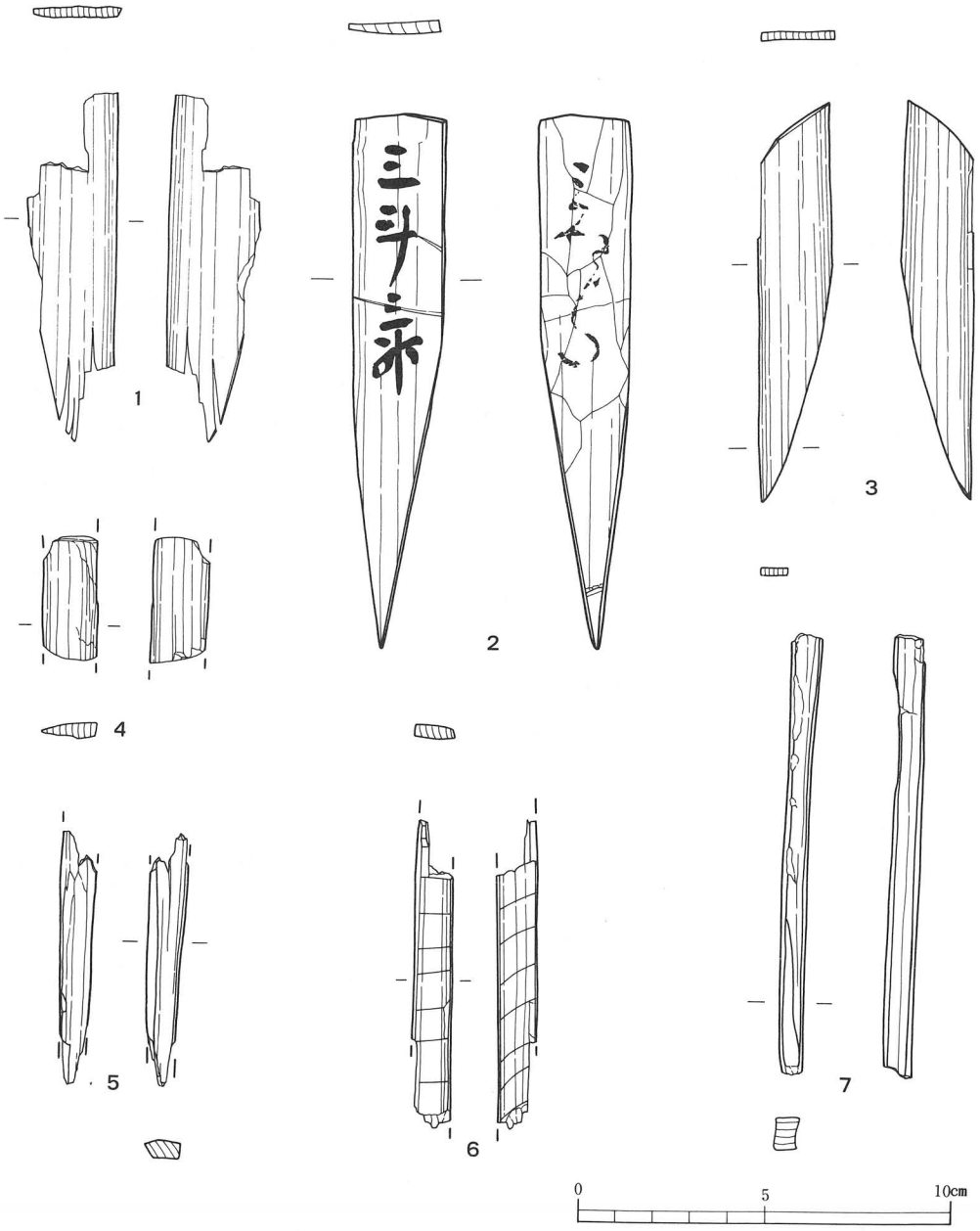
〈遺構状況〉南区Ｅ－２・３、Ｆ－２・３グリットに位置している。遺構が調査区外へ延びているが、底面の形状から隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは105cmであるが、攪乱が深く及んでいるので掘り込み面の確定は困難である。底面は平坦であり、ピット等の施設は確認されなかった。壁は急角度に立ち上がり、上半部は外へ開いている。堆積土は12層に分層され、自然堆積状況を示している。

〈出土遺物〉遺物は層中及び底面から加工痕のある木材、土師器、須恵器、陶器、種子、昆虫遺体等を出土している。

陶器

（第56図３・８・９）堆積土中から出土している。在地産の鉢である。３ｂ層水田跡のものと同様に胎土中に長さ１㎜ほどの白針状物質を含んでいる。時期は13世紀から14世紀頃のものであろう。

（第56図５・７）堆積土中から出土している。常滑産の甕体部破片である。外面に押印が認



番号	写真図版	区別	遺構	層位	種別	樹種	素材形状	長さ(cm)	幅・直径(cm)	厚さ(cm)	備考
1	58－3	南区	ＳＩ１	８層下部	木簡	スギ	柾目材	9.5	2.4	0.3	墨痕
2	58－1	南区	ＳＩ１	——	木簡	ネズコ	柾目材	14.6	2.5	0.3	墨痕「三斗三升」
3	58－2	南区	ＳＩ１	11ａ層下部	木簡	スギ	柾目材	10.9	2.0	0.2	墨痕
4		南区	ＳＩ１	８層下部	木簡？	カヤ	柾目材	3.4	1.5	0.4	
5	58－10	南区	ＳＩ１	11ａ層下部	木簡？	アスナロ	柾目材	6.9	0.9	0.5	墨痕
6	58－6	南区	ＳＩ１	11ａ層下部	曲げ物	スギ	柾目材	8.4	1.0	0.4	
7		南区	ＳＩ１	８層下部	箸？	———	柾目材	12.1	0.8	0.9	

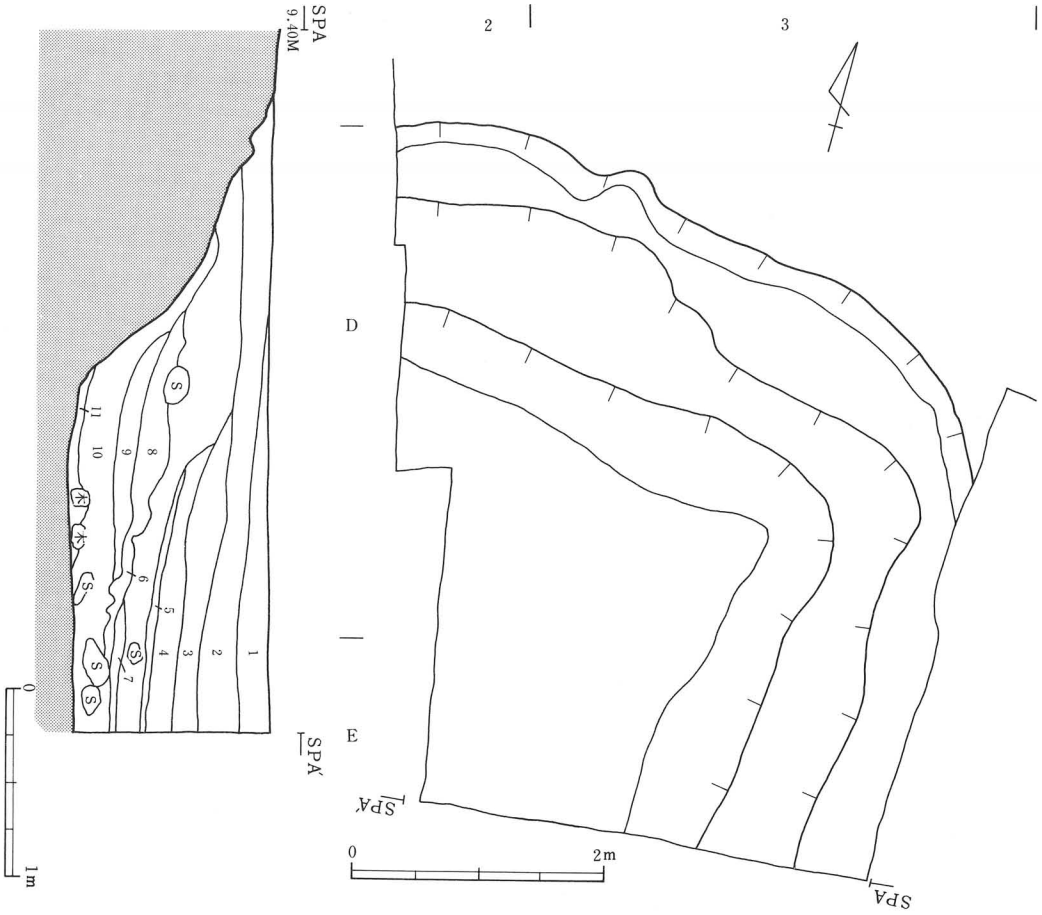
第54図　ＳＩ１出土遺物

められる。時期は上記の在地産のものとほぼ同じ頃のものであろう。

（第56図６）堆積土中から出土している。渥美産の甕体部破片である。時期は12～13世紀の間に位置するものと思われる。

土師器

（第56図４）堆積土中から出土している。坏底部から体部にかけての破片である。外面の底部から体部の境に段を有している。内面に段は認められない。調整技法は底部は手持ちヘラケズリ、体部はヨコナデであると思われるが摩滅が著しい。内面はヘラミガキ・黒色処理である。



層位	色調	土性	備考
1層	7.5GY3/1　暗緑灰色	粘土	酸化鉄、マンガンの沈着。
2層	7.5Y4/1　灰色	粘土	酸化鉄がブロック状に集積。
3層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	炭化物をブロック状に含む。
4層	5Y3.5/1　オリーブ黒色	粘土	３層よりは若干明るい。
5層	5Y3/2　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を大量に含む。
6層	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。
7層	2.5Y3/2　黒褐色	粘土	植物遺体を大量に含む。
8層	5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。
9層	2.5GY3/1　暗オリーブ灰色	粘土	植物遺体を含む。
10層	7.5Y3/1　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。
11層	7.5Y2/2　オリーブ黒色	粘土	植物遺体を含む。

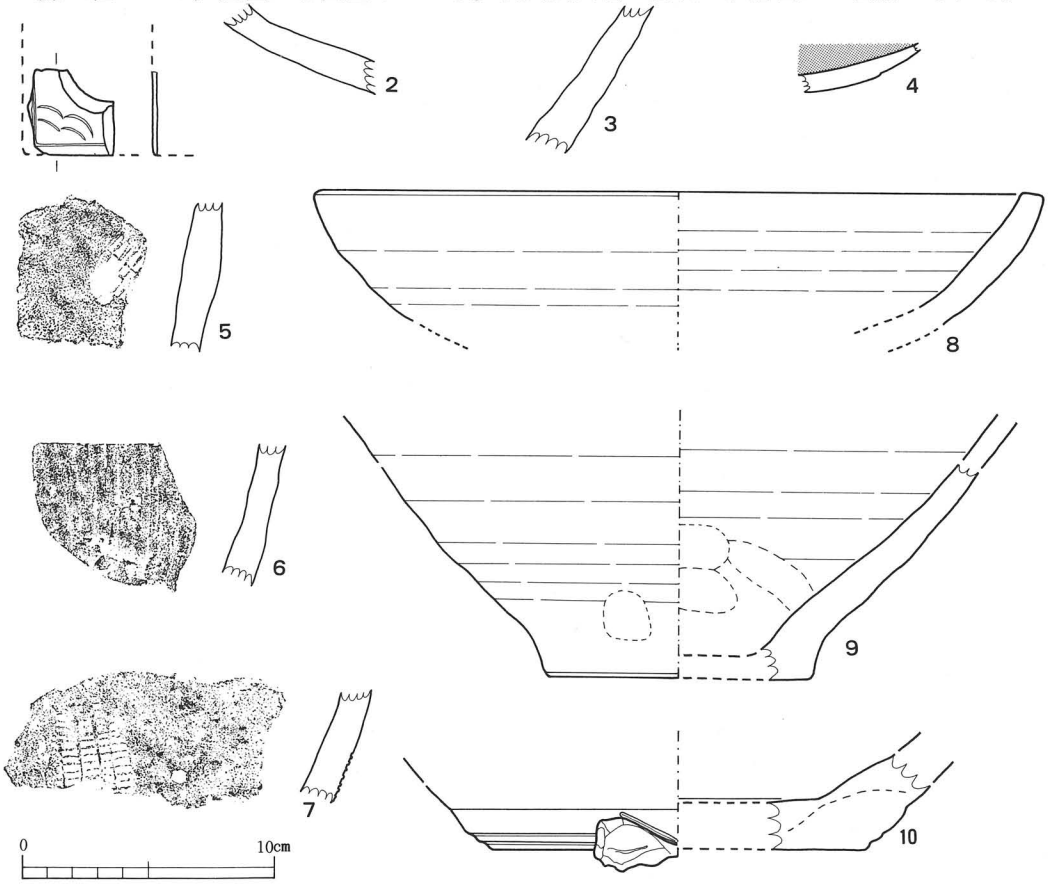
第55図　ＳＩ３平面図・断面図

木製品

（第57図１～11）これらは全て底面から出土している。建築材と考えられる。いずれも先端部を斜めに裁断している。３には「抉り」と思われる加工が施してある。４は方形に成形してあったと考えられるが、一面は焼けており詳細は不明である。６は方形に成形してあるが、両端部分は一段細く削られている。他は加工痕は認められるものの、欠損部分が多く詳細は不明である。

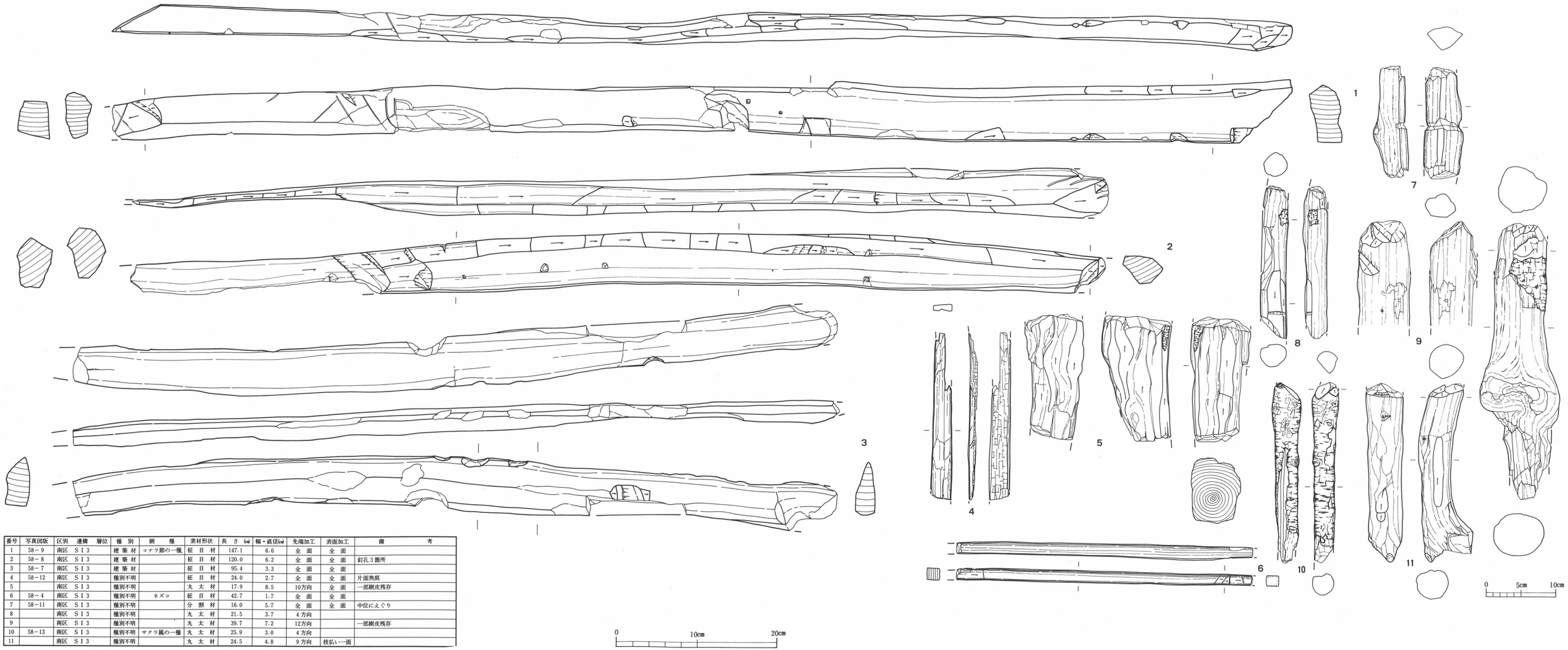
石製品

（第63図１・３）底面から出土している。石英安山岩の磨石で、磨面は３面認められる。



番号	写真図版	区別	遺構	層位	種別	器種	遺存度	口径(cm)	底部(cm)	器高(cm)	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	備考
1	57－15	南区	ＳＩ１		石製品	硯	表面小片						0.6㎜の沈線文
2	56－５	南区	ＳＩ１		陶器	甕	体部上小片					暗褐色	外面自然釉・常滑・中世
3	55－５	南区	ＳＩ３		陶器	鉢	体部小片				黒褐色	灰色	存地・13～14ｃ・白鉢を含む
4	57－６	南区	ＳＩ３		土師器	坏	底部～体部小片				非ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	
5	56－４	南区	ＳＩ３		陶器	甕	体部小片				にぶい赤褐色	にぶい褐色	常滑・中世・押印
6	56－９	南区	ＳＩ３		陶器	壷	体部小片				灰色	暗灰色	渥美・12～13ｃ
7	56－６	南区	ＳＩ３		陶器	甕	体部小片				褐灰色	赤褐色	常滑・中世・押印・内面に押圧痕
8	55－７	南区	ＳＩ３		陶器	鉢	口縁1/9	(29)			赤褐色	にぶい赤褐色	無釉・在地・13～14ｃ・白鉢を含む
9	55－３	南区	ＳＩ３		陶器	鉢	下半1/6		(10.4)		赤褐色	赤褐色	無釉・在地・13～14ｃ・白鉢を含む
10	57－８	南区	ＳＩ３		陶器	甕	下半1/5		(14.8)		灰色	灰白色	内面自然釉・外面粘土塊付着・産地不明・中世

第56図　ＳＩ１・３出土遺物



番号	写真図版	区別　遺構　層位	種　別	樹　種	素材形状	長　さ (cm)	幅・直径(cm)	先端加工	表面加工	備　　考
1	58－9	南区　ＳＩ３	建　築　材	コナラ節の一種	柾　目　材	147.1	6.6	全　面	全　面	
2	58－8	南区　ＳＩ３	建　築　材		柾　目　材	120.0	6.2	全　面	全　面	釘孔３箇所
3	58－7	南区　ＳＩ３	建　築　材		柾　目　材	95.4	3.3	全　面	全　面	
4	58－12	南区　ＳＩ３	種別不明		柾　目　材	24.0	2.7	全　面	全　面	片面焦痕
5		南区　ＳＩ３	種別不明		丸　太　材	17.9	8.5	10方向	全　面	一部樹皮残存
6	58－4	南区　ＳＩ３	種別不明	ネズコ	柾　目　材	42.7	1.7	全　面	全　面	
7	58－11	南区　ＳＩ３	種別不明		分　割　材	16.0	5.7	全　面	全　面	中位にえぐり
8		南区　ＳＩ３	種別不明		丸　太　材	21.5	3.7	4方向		
9		南区　ＳＩ３	種別不明		丸　太　材	39.7	7.2	12方向		一部樹皮残存
10	58－13	南区　ＳＩ３	種別不明	サクラ属の一種	丸　太　材	25.9	3.0	4方向		
11		南区　ＳＩ３	種別不明		丸　太　材	24.5	4.8	9方向	枝払い一面	

第57図　ＳＩ３出土遺物

１号溝－ＳＤ１－（第51・58図）

〈遺構状況〉西区Ａ－８・９、Ｂ－８、東区Ｃ－８グリットに位置している。検出長は9.7mで、直線的な溝である。方向はＮ－10°－Ｅである。深さは18㎝、堆積土は１層で、人為的な堆積状況を呈し、断面形は逆台形である。底面は平坦である。ＳＤ１はＳＤ４と重複関係にあると思われるが、調査区外であるため詳細は不明である。

〈出土遺物〉（第59図１）堆積土中から土師器坏底部破片が１点出土している。調整技法はロクロ調整と思われるが、摩滅が著しく断定はできない。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

２号溝－ＳＤ２－（第51・58図）

西区Ｂ－１、南区Ｃ－２～４、Ｄ－４・５グリットに位置している。ＳＤ２はＳＩ１、ＳＩ２と重複関係にあり、すべてに切られている。検出長は22m、直線的な溝である。方向はＮ－78°－Ｗである。深さは18～22㎝で、堆積土は２層で自然堆積状況を呈し、断面形は皿状である。底面はほぼ平坦で東から西方向への下り傾斜が認められる（平均勾配１㎝／10m）。遺物は土師器片が２点出土しているがいずれも細片で摩滅しており図示は困難できなかった。

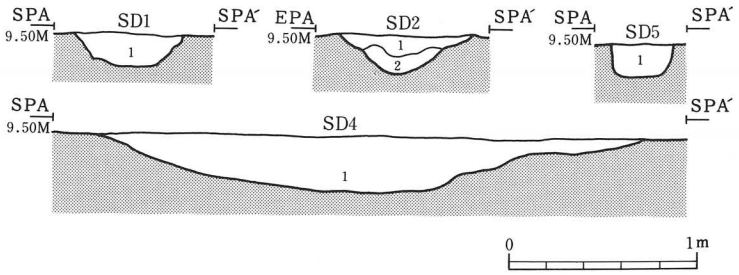
４号溝－ＳＤ４－（第51・58図）

〈遺構状況〉西区Ａ－２～５、Ｂ－３～６、Ｃ－５～７グリットに位置している。直線的な溝で方向はＮ－75°－Ｗ、検出長は15.5mである。深さは28～32㎝、堆積土は１層であるが、グライ化が進んでいる。断面形は南側で平場を有するがほぼ皿状を呈している。底面はほぼ平坦で、西から東方向への下り傾斜が認められる（平均勾配７㎝／10m）。ＳＤ４はＳＤ５と重複しているが切り合い関係は不明であるが同時期の可能性も考えられる。

〈出土遺物〉遺物は土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦、石製品等が出土しているが、細片が多く図示できたものは以下のものである。５以外は堆積土中からの出土である。

土師器

（第59図２）土師器坏である。調整技法はロクロ調整で、内面はヘラミガキ・黒色処理である。



遺構名	層位	色	調	土	性	備	考
ＳＤ－１	１層	10ＹＲ3/3	暗 褐 色	シルト質粘土		10ＹＲ5/6黄褐色をブロック状に含む	
ＳＤ－２	１層	2.5Y3/2	黒 褐 色	粘 土		酸化鉄斑を含む	
	２層	2.5Y4/1	黄 灰 色	粘 土		マンガン粒をブロック状に含む	
ＳＤ－４	１層	10ＹＲ4/1	褐 灰 色	粘 土		マンガン粒・炭化物片を含む	
ＳＤ－５	１層	2.5Y3/2	黒 褐 色	粘 土		2.5Y5/6黄褐色をブロック状に含む	

第58図　ＳＤ１・２・４・５断面図

磁器

（第59図３）青磁碗口縁部破片である。文様はみられないが、中国龍泉窯系のものであると考えられ、時期は13～14世紀頃のものであろう。

陶器

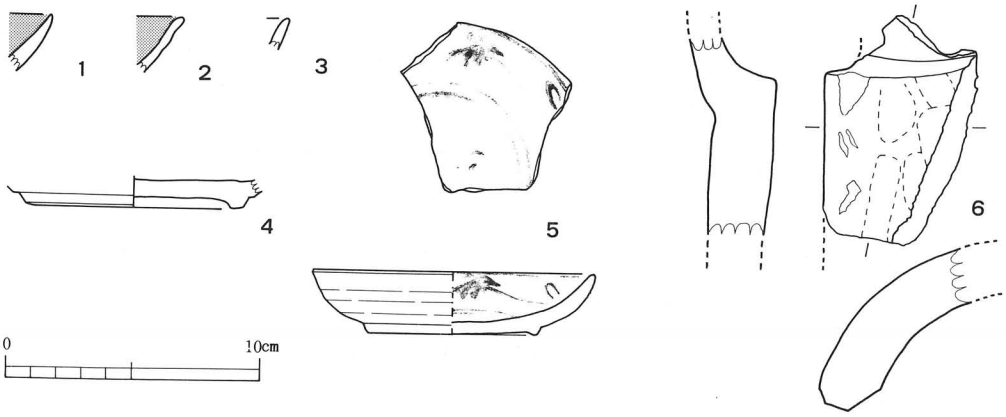
（第59図４）削り出し高台を持つ志野皿の底部破片である。時期は17世紀前半頃と考えられる。

（第59図５）削り出し高台を持つ志野織部小皿である。内面に水鳥文と唐草文（鉄絵）を施しており、時期は17世紀前半頃と思われる。底面より出土している。

（第59図６）燻瓦の一部である。内面に炭化物が付着している。時期は江戸時代前半頃であろう。

５号溝－ＳＤ５－（第51・58図）

西区Ｂ－５グリットに位置している。直線的な溝で方向はＮ－10°－Ｅ、検出長は55cmである。深さは16～20cmで、堆積土は１層で、人為的な堆積状況を呈し、断面形はＵ字形である。底面は平坦であり、北から南方向への下り傾斜が認められる。ＳＤ５はＳＤ４と重複しているが、切り合い関係は不明である。ＳＤ４に流れ込む溝である可能性も考えられる。遺物の出土はみられなかった。



番号	写真図版	区別　遺構　層位	種別	器種	遺存度	口径(cm)	底部(cm)	器高(cm)	器面調整　色調 外面	器面調整　色調 内面	備考
1	57－14	東区　ＳＤ１	土師器	坏	口縁部小片				ロクロ？	ヘラミガキ・黒色処理	
2	57－3	西区　ＳＤ４	土師器	坏	口縁部小片				ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	
3	57－4	西区　ＳＤ４	青磁	碗	口縁部小片				明緑灰	明緑灰	中国龍泉窯系・13～14ｃ
4	57－16	西区　ＳＤ４	陶器	皿	底部1/5		(8.4)				削り出し高台・志野・17ｃ前半
5	55－6	西区　ＳＤ４	陶器	丸皿	1/5	(11.2)	(6.6)	2.5			削り出し高台・鉄絵・志野織部・17ｃ前半　写真57－５は側面
6	56－2	西区　ＳＤ４	瓦	丸瓦	小片				ヘラケズリ→ナデ		内面にスス付着

第59図　ＳＤ１・４出土遺物

２号土坑－ＳＫ２－（第60図）

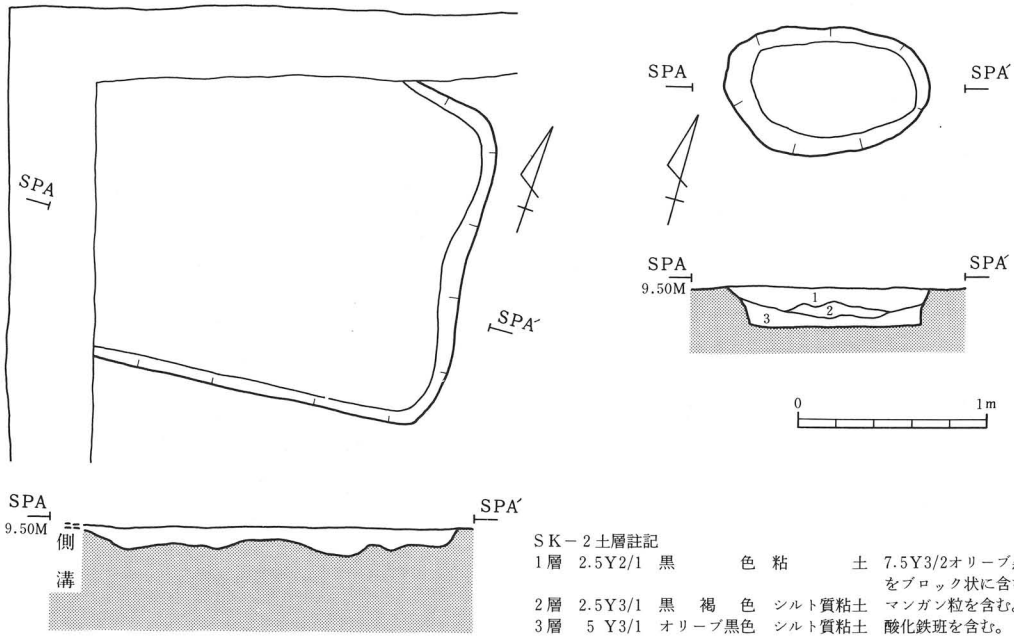
東区Ａ－10グリットに位置している。上端平面形は楕円形を呈し、長軸109㎝、短軸67㎝、深さは20㎝である。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。堆積土は３層に分層されるが、人為的な堆積状況を呈している。遺物の出土はみられなかった。

３号土坑－ＳＫ３－（第61図）

東区Ａ－７グリットに位置している。上端平面形は楕円形を呈し、長軸115㎝、短軸100㎝、深さは100㎝である。断面形は開口部付近で広がるがほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。堆積土は６層に分層され、自然堆積状況を呈している。遺物として、堆積土中より焼きぶくれをおこしたオオムギの種子が多数出土している。ＳＫ３は、断面形状や深さなどから、井戸として機能していた可能性が考えられる。

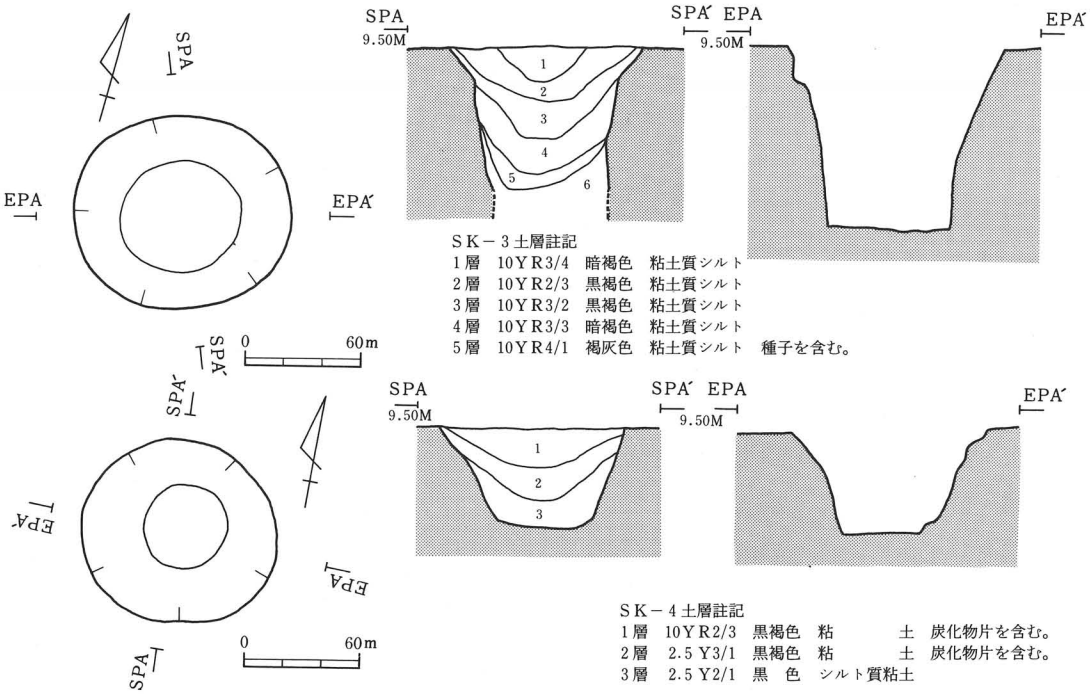
４号土坑－ＳＫ４－（第61図）

西区Ｂ－４グリットに位置している。上端平面形はほぼ円形を呈し、径は120㎝で、深さは55㎝である。断面形はすり鉢状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分層されるが、人為的な堆積状態を示している。遺物は石英安山質細粒凝灰岩の磨石（第63図２）を１点出土し、磨面は３面認められる。



ＳＫ－１土層註記
１層　10ＹＲ2/3　黒褐色　シルト質粘土　10ＹＲ4/6褐色をブロック状に含む。

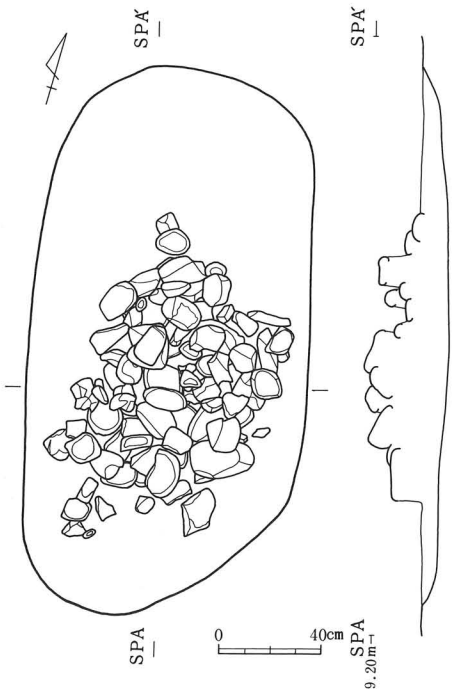
第60図　ＳＫ１・２平面・断面図



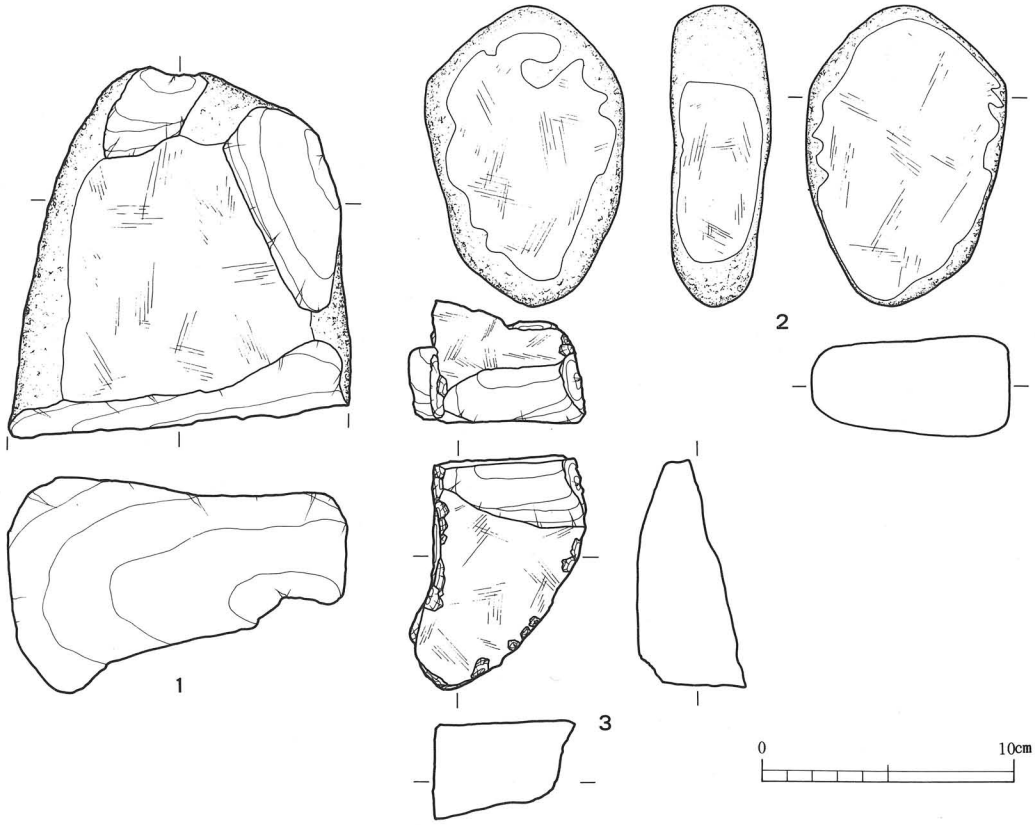
第61図　ＳＫ３・４平面・断面図

５号土坑－ＳＫ５－（第62図）

南区Ｄ－３、Ｅ－３グリットに位置している。上端平面形は楕円形を呈し、長軸218cm、短軸110cm、深さは10cmである。断面形はすり鉢状を呈し、底面は平坦である。堆積土は１層であるがグライ化が進んでいる。また、この土坑の上部には、1.2×0.8mの範囲の中に約180点の礫を約20cmの高さに積み上げている。これらの礫の中には意図的に割られて隙間に積めたと考えられるものもある。さらにこの周囲には多くの礫がありこの石積みから崩れたものであるかについては不明である。この遺構の性格として墓坑も考えられるが断定は差し控えたい。遺物の出土はみられなかった。



第62図　ＳＫ５平面・断面図



番号	写真図版	区別　遺構　層位	種　別	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚　さ(cm)	重　量(g)	石　　材	備　　考
1	57－1	南区・ＳＩ－３	磨　石	14.7	13.6	6.3	2000	石英安山岩	
2	57－9	西区　ＳＫ４	磨　石	12.0	7.9	4.0	530	石英安山岩質細粒凝灰岩	
3	57－10	南区　ＳＩ－３	磨　石	7.1	9.1	3.8	290	石英安山岩	

第63図　出土遺物(1)

(4)　10層上面

10層水田跡（第64図）

〈遺構状況〉東西両調査区で９条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出した。畦畔は直上９層下面で検出し、遺存状況は良好であった。

検出された１～９の畦畔は、ほぼ等高線に沿って延びる３条の大畦畔とそれに接続する５条の小畦畔から成っている。畦畔は耕作土と同じ10層を盛り上げて作られている。

これらの畦畔によって区画される水田区画は12区画である。大畦畔と小畦畔の接続部には接続しない部分があり、水口と考えられる。

耕作土10層は灰黄褐色の粘土層で、層厚は１～18cmほどで分解が進んでいる。主に直下の11層を攪拌することで形成されたと考えられるが、11層と10層とでは色調に差異が認められるので、間に別の層が存在していた可能性も推定できる。層全体にマンガン粒を含んでいるが、下

面に酸化鉄の沈着は認められなかった。層下面の起伏はあまり顕著ではない。

遺物の出土はみられなかった。

－西区－（第65図）

西区では５条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出している。１は水田の大区画を形成する大畦畔、２～５はこの中をさらに細かく区画する小畦畔と理解しておきたい。１は、途中で弯曲しているが他はほぼ直線的に延びている。畦畔の接続は「Ｔ」・「＋」字状の両者が認められる。１は方向Ｎ－58°－Ｗ前後で、検出長は5.4ｍである。下端部は0.9～1.4ｍで、耕作土上面との比高差は１～３㎝である。２は方向Ｎ－42°－Ｗで、検出長は6.6ｍである。下端幅は0.38～0.42ｍで、耕作土上面との比高差は１～３㎝である。３は方向Ｎ－45°－Ｗで、検出長は5.5ｍである。下端幅は0.34～0.62ｍで、耕作土上面との比高差は１～３㎝である。４は方向Ｎ－50°－Ｗで、検出長は3.3ｍである。下端幅は0.36～0.42ｍで、耕作土上面との比高差は１～２㎝である。５は方向Ｎ－48°－Ｗで、検出長は0.5ｍである。下端幅は0.30～0.40ｍで、耕作土上面との比高差は約１㎝である。

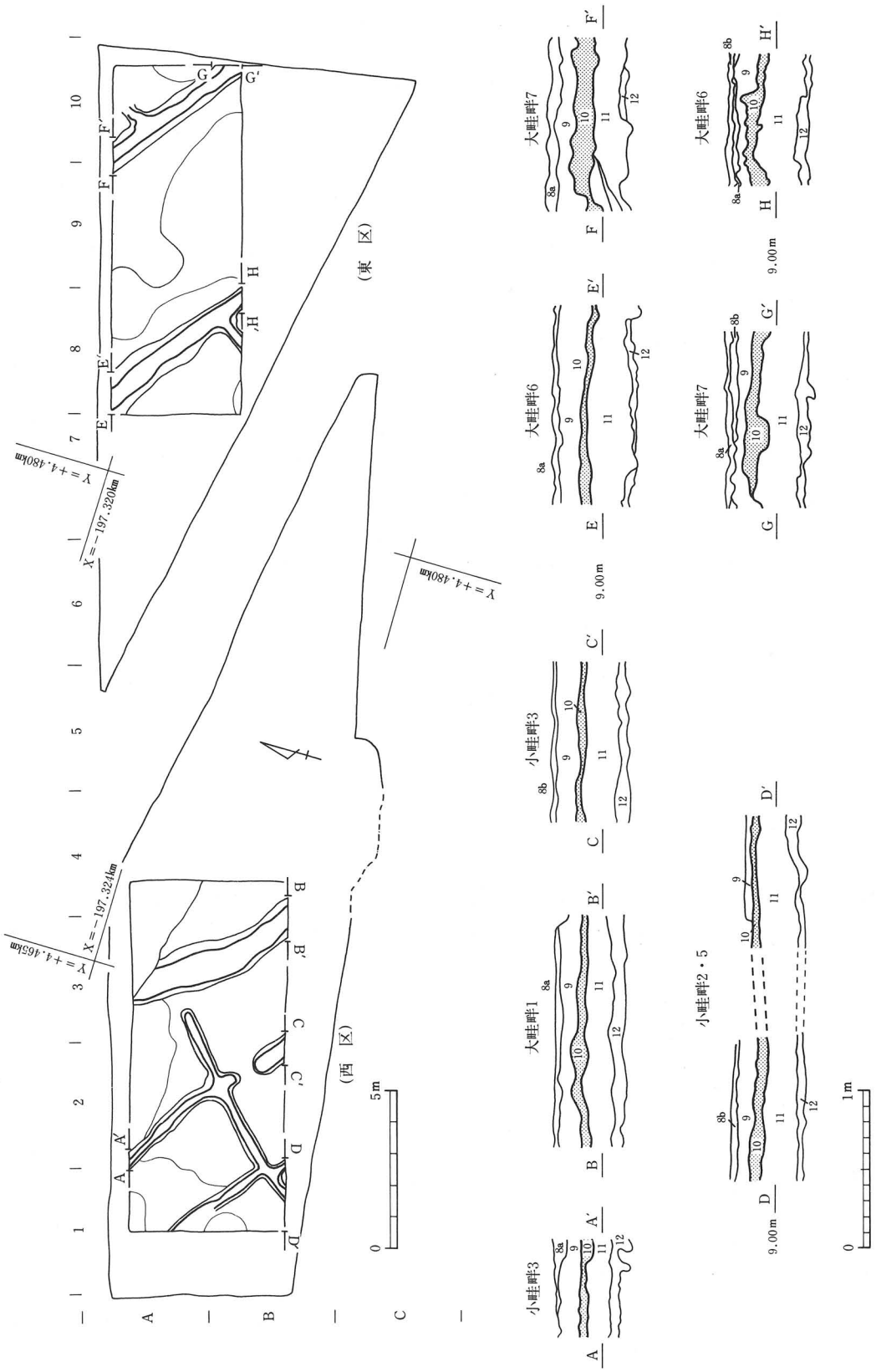
検出された畦畔によって確認できる水田区画は①～⑦の７区画であるが、いずれも部分的なものであり完結したものではない。水田面上面の標高は9.10～9.20ｍである。調査区内の平均勾配は10㎝／12ｍで、南東から北西へ緩やかに下がっている。区画の形状は畦畔のあり方から短冊形を基調とするものと推察され、地形の傾斜を考慮した水田区画のあった可能性も考えられる。

畦畔の連続しない部分が２箇所認められ、水口と考えられる。ここを水口とした場合、底面のレベルは耕作土上面より若干下がる程度である。水の流れは区画③→⑤、③→②の流れが考えられる。

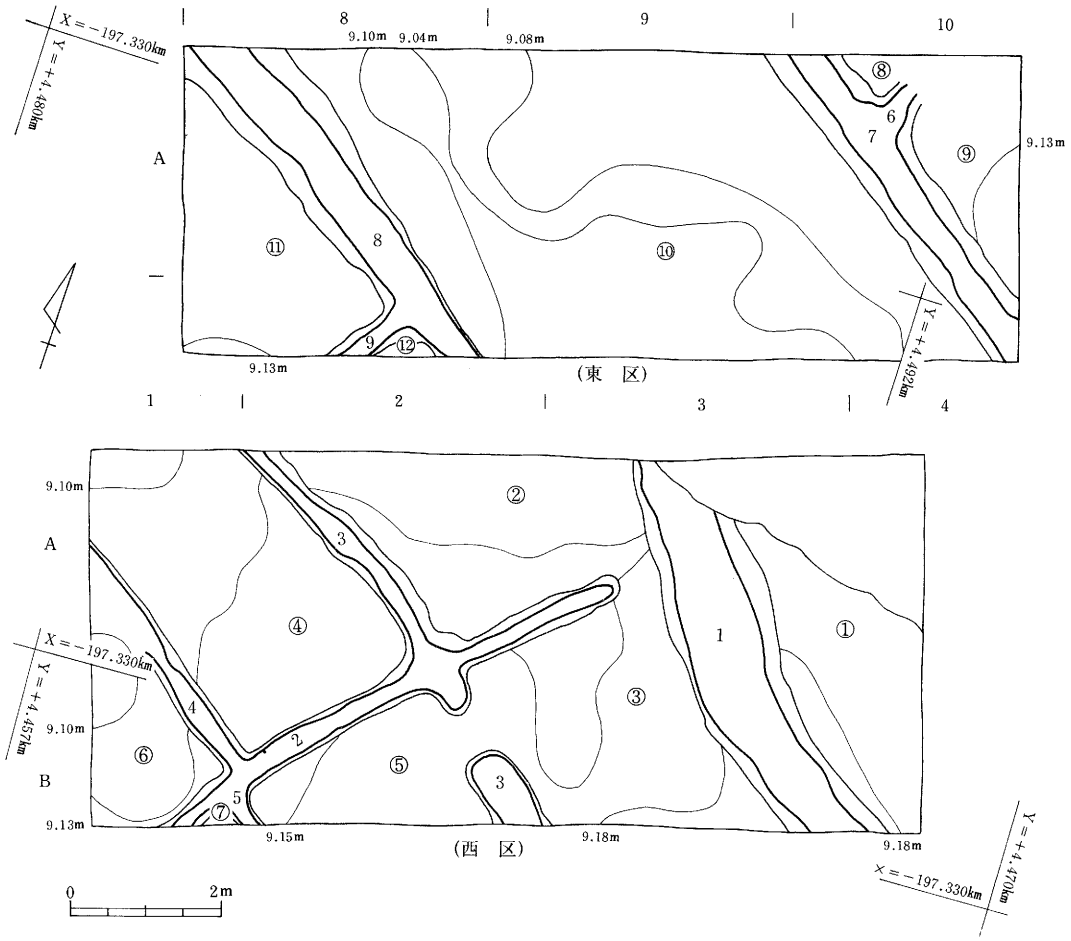
－東区－（第65図）

東区では遺存状況はあまり良好ではないが４条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出している。７、８は大区画を形成する大畦畔、６、９はこのなかをさらに細かく区画する小畦畔として理解しておきたい。畦畔はいずれも直線的に延びており「Ｔ」字状に接続する。６は方向Ｎ－30°－Ｅで、検出長は約0.6ｍである。下端幅は0.46～0.50ｍで、耕作土上面との比高差は１～２㎝である。７、８は方向がほぼ同じでＮ－53°－Ｗであり、規模は以下のとおりである。７は検出長4.8ｍ、下端幅0.78～0.90ｍで、耕作土上面との比高差は２～６㎝である。８は検出長5.2ｍ、下端幅は0.55～1.2ｍで、耕作土上面との比高差は１～４㎝である。９は方向Ｎ－36°－Ｅで、検出長は約１ｍである。下端幅は0.44～0.62ｍで、耕作土上面との比高差は１～２㎝である。

検出された畦畔によって確認される水田区画は⑧～⑫の５区画であるが、いずれも部分的な



第64図　10層水田跡平面・断面図



第65図　10層水田跡平面図

検出であり完結されたものではない。耕作土上面の標高は9.04～9.13mである。畦畔のあり方から短冊形を基調とする水田区画の存在が推察されるが、区画⑩では同一区画内の比高差が10cm以上あり、また、東区はあまり遺存状況が良好でないことからさらに畦畔で細かく区画されていた可能性は充分に考えられる。なお、畦畔６は途切れる形で検出しており、この部分に水口が存在していた可能性が考えられるが断定は差し控えたい。

(5)　17ａ層上面

17ａ層水田跡（第66図）

〈遺構状況〉東区17ａ層上面で３条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出した。西区では耕作土の連続は確認されたものの、畦畔等の遺構は検出されなかった。畦畔の検出は直上16層の下面である。遺存状況は不良で、本来はこれら以外に畦畔が存在した可能性が考えられる。

検出された１～３の畦畔はいずれも直線的で比較的整った状態を示している。１はほぼ等高線に沿って延びており、２、３はこれに直交し「Ｔ」字状に接続する。なお、最も規模の大きな畦畔である１の直下でのみ、17ｂ層上面で擬似畦畔Ｂが確認された。このため１を水田の大区画を形成する大畦畔、２、３はこの中をさらに細かく区画する小畦畔であると理解しておきたい。

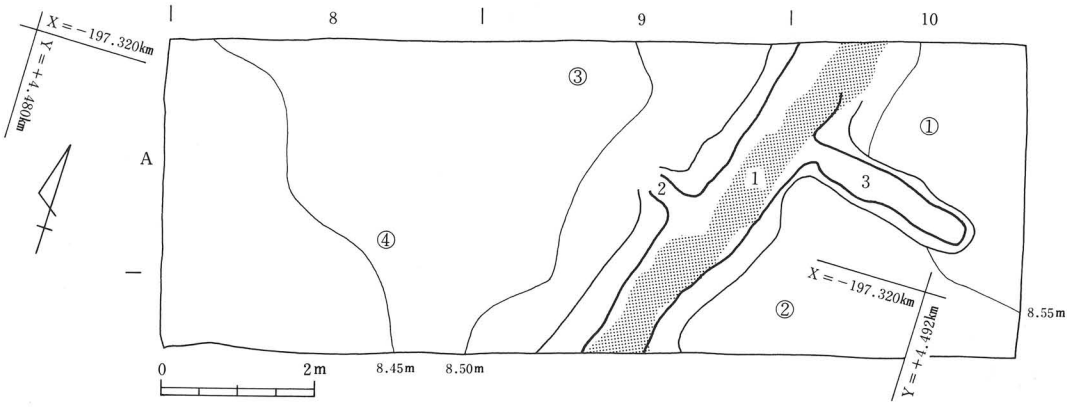
いずれの畦畔も耕作土と同じ17ａ層を盛り上げて作られており方向、規模は以下のとおりである。１は方向がＮ－20°－Ｅ、検出長5.2ｍ、下端幅は1.2～1.5ｍで、耕作土上面との比高差は１～４㎝である。２は方向がＮ－67°－Ｗ、検出長0.7ｍ、下端幅は0.5～0.8ｍで、耕作土上面との比高差は１～２㎝である。３は方向がＥ－12°－Ｓ、検出長2.0ｍ、下端幅は0.5～0.7ｍで、耕作土上面との比高差は１～２㎝である。

畦畔の遺存状況が悪く本来的にはこの他にも畦畔が存在していた可能性もあり、本来の水田区画の全容を明らかにすることはできなかった。今回検出された畦畔によって確認できる水田区画は①～④の４区画であるが、いずれも部分的なもので完結したものはみられない。

水田面上面の標高は8.43～8.57ｍである。調査区内の平均勾配は1.2㎝／ｍで、北東から南西へ緩やかに下がっている。区画の形状は畦畔のあり方から、方形を基調とするものと推察される。また、水田区画はほぼ等高線に平行する大畦畔とこれに直交する小畦畔で形成されており、微地形を意識した水田区画である可能性が考えられる。なお、畦畔３は途切れる状態で検出され、この部分に水口が存在していた可能性も想定できるが、断定は差し控えたい。

耕作土17ａ層は灰色の粘土層で、層厚は４～８㎝程度であり、比較的分解が進んでいる。主に直下の自然堆積層17ｂ層を攪拌することによって形成されたものと考えられ、17ｂ層は主に大畦畔下に認められる。攪拌は一部20層まで及んでいる。層下面の起伏は顕著である。

遺物の出土はみられなかった。



第66図　17ａ層水田跡平面図（スクリーントンは擬似畦畔Ｂ）

(6)　18ａ層上面

18ａ層水田跡（第67図）

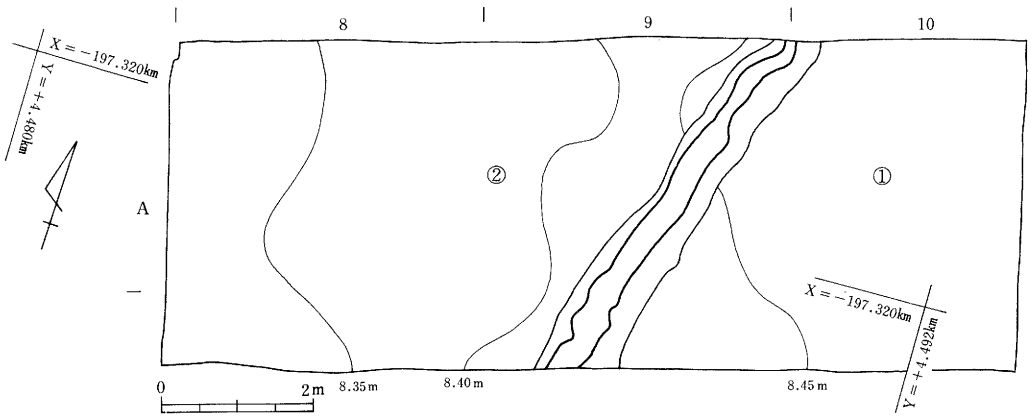
東区18ａ層上面で１条の畦畔と、これによって区画される水田区画を２区画検出した。西区では耕作土の連続は確認されたものの、畦畔等の遺構は検出されなかった。畦畔の検出は17ａ層水田跡大畦畔の直下であり検出状況は比較的良好であった。しかし、他の部分は17ａ層水田の耕作により遺存状況は良好なものとはいえない。

検出された畦畔は直線的で、ほぼ等高線に沿って延びており、耕作土と同じ18ａ層を盛り上げて作られている。畦畔の方向、規模はＮ－18°－Ｅ、検出長5.3ｍ、下端幅0.68～0.95ｍ、耕作土上面との比高差は１～７㎝である。

検出された畦畔によって確認される水田区画は２区画であるが、上層の水田耕作により、この畦畔以外の部分の遺存状況は良好とはいえず、さらに畦畔で細かく区画されていた可能性が考えられる。全体的な水田面上面の標高は8.29～8.50ｍである。平均勾配は２㎝／ｍで、北東から南西への下り傾斜が認められる。

耕作土18ａ層は灰オリーブ色の泥炭質粘土層で、層厚は３～９㎝である。主に直下の自然堆積層18ｂ層を攪拌することによって形成されたものと考えられるが、18ｂ層は畦畔下でわずかに認められる程度である。攪拌は一部20層まで達するところがあり、下層土を層中にブロック状に含んでいる。下面の起伏は顕著である。しかし、18ａ層と19ａ層とは色調、土質が似ており両層が重なるところでは分離しにくい箇所もあった。

遺物の出土はみられなかった。



第67図　18ａ層水田跡平面図

(7)　19ａ層上面

19ａ層水田跡（第68図）

〈遺構状況〉東区で擬似畦畔Ｂによる水田区画と、溝状の落ち込みが１条検出された。しかし、

19ａ層上面は上層の水田耕作によって攪乱を受けており、このため畦畔は上面では検出されず、層下面で擬似畦畔Ｂとして直下層の高まりを検出した。また、掘り過ぎのために一部下層の自然堆積層である19ｂ層を露出させてしまった箇所がある。西区でも層の連続は確認できたが部分的なものであった。

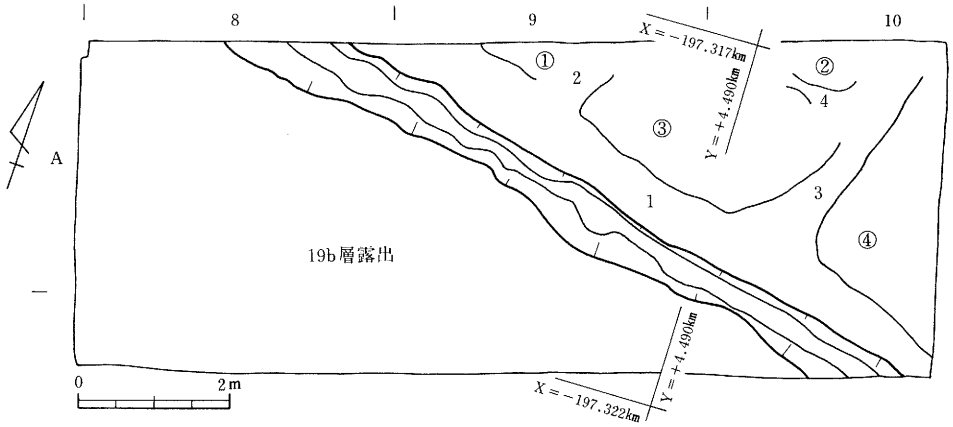
検出された１～４の畦畔はいずれも直線的に延びている。２、３は１に直交し「Ｔ］字状に接続している。４は断片的ではあるが３に直交する畦畔で「Ｔ］字状に接続するものと考えられる。１の方向はＮ－75°－Ｗ、幅は50～80㎝、検出長8.2ｍである。２、３は平行しており方向はほぼＮ－23°－Ｅである。幅は約40～60㎝、検出長はそれぞれ0.7～2.3ｍである。４の方向はＮ－75°－Ｗ、幅は20～30㎝、検出長は0.8ｍである。

水田区画は①～④の４区画確認できるが、遺存状況が悪く部分的なものであり完結したものではない。区画の形状はほぼ３辺を検出している区画③から方形を基調とする小区画水田であると推察される。面積は５㎡前後になるものと思われる。水田面上面の標高は計測できなかったが、調査区内の標高は8.38～8.45ｍで北東から南西への緩やかな下り傾斜が認められ平均勾配は約１㎝／ｍである。

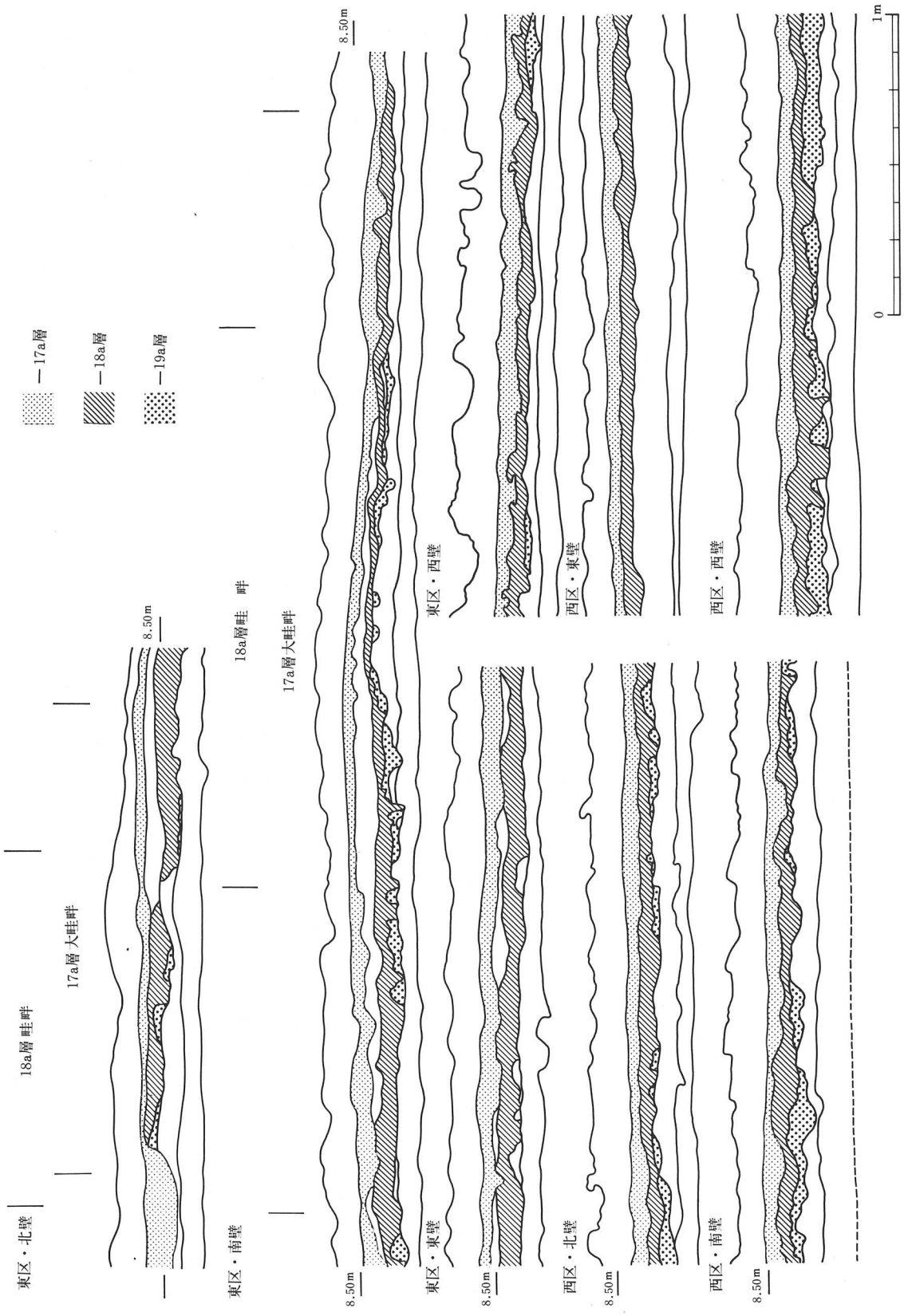
耕作土はオリーブ黒色の粘土層で、主に自然堆積層である直下の19ｂ、20層を攪拌することによって形成されたと考えられる。

遺物は西区で杭を１本出土している。（第70図１）先端加工は２方向から数回の打撃が認められるが焦痕があり詳細は不明である。樹種はカヤと固定されている。

畦畔に平行する溝状の落ち込みを検出している。しかし、これより南側は下層が露出してしまった部分であり水田に伴う水路である可能性も考えられるが、断定は差し控えたい。



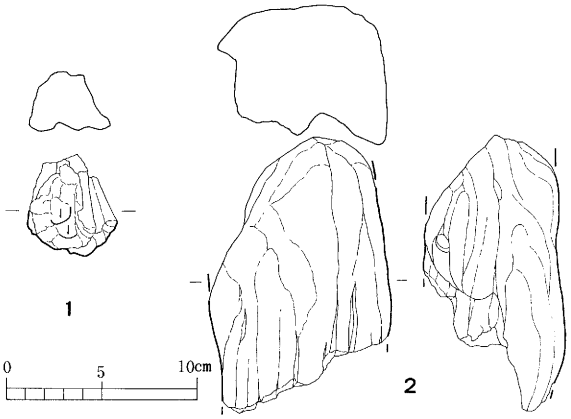
第68図　19ａ層水田跡平面図



第69図　17層・18層・19層断面図

(8)　その他の出土遺物（第71図）

基本層１層からは土師器片（１点）、陶磁器片（８点）が出土している。いずれも細片であり図示はできなかった。基本層２層からは陶磁器片（53点）が出土し、５は常滑産の甕体部破片で外面に押印がみられる。時期は中世であろう。他には須恵器片等が出土しているが、図示はできなかった。基本層５層からは土師器片（16点）、須恵器片（１点）、陶器片（１点）が出土している。４は土師器底部である。調整技法はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理で、底部の切り放し調整は回転糸切り無調整である。基本層６層以下では、６・７・９・10層より土師器片、須恵器片等が出土しているが図示できたのは３・９の須恵器片だけである。また、第70図２は６層上面で確認された柱穴に遺存していた柱根である。樹種はクリである。



番号	写真図版	区別　遺構　層位	種　別	樹　種	素材形状	長　さ(cm)	直　径(cm)	先端加工	表面加工	備　考
1		西区　19層下部	杭	カ　ヤ	丸 太 材	5.4	4.3	２方向		先端焦痕
2		東区　P76	柱　材	ク　リ	分 割 材	11.5	11.8			

第70図　出土遺物(2)

４．分析・同定

仙台市富沢遺跡産昆虫化石（昆虫遺体）のリスト

愛知県埋蔵文化財センター　森　勇一

試 料 1　ヒメコガネ　*Amomala rufocuprea* Motschulsky 前胸背板

（ＳＩ１）　アオオムサシ　*Carabus insulicola* Chaudoir 右鞘翅

スジアオゴミムシ　*Haplochaenius Costiger* (Chaudoir) 左鞘翅

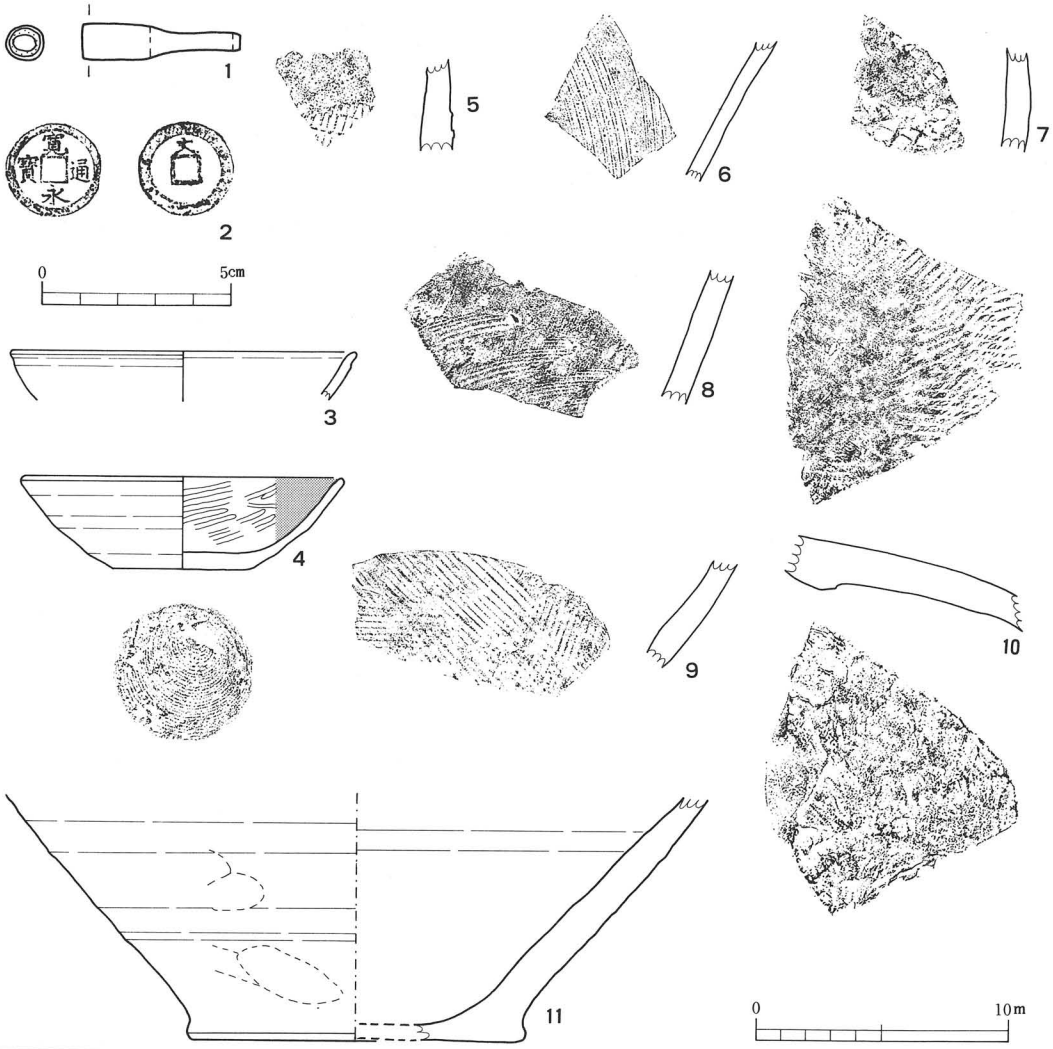
試 料 2　ヒメコガネ　*Amomala rufocuprea* Motschulsky 前胸背板

（ＳＩ３）　ヒメコガネ　*Amomala rufocuprea* Motschulsky 右鞘翅

ヒメコガネ　*Amomala rufocuprea* Motschulsky 中胸腹板

ヒメコガネ　*Amomala rufocuprea* Motschulsky 腿節

ドウガネブイブイ　*Anomala cuprea* Hope 左鞘翅片



番号	写真図版	区別	遺構	層位	種別	吸い口 長さ×幅(cm)	吸い口 材質	備考
1	57－11	西区		4層	煙管	4.2 × 0.9	銅	吸口・内部にラウの一部が遺存

番号	写真図版	区別	遺構	層位	種別	法量(cm) 直径	法量(cm) 中央穴の辺	法量(cm) 縁幅	裏面	備考
2	57－12	西区		3層	銅銭	2.5	0.6	0.2	文	新寛永・正字入文

番号	写真図版	区別	遺構	層位	種別	器種	遺存度	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	備考
3	57－2	西区		6層	須恵器	坏	口縁1/8	(13.8)					
4	55－4	東区		5層	土師器	坏	1/4	(12.8)	5.5	3.7	ロクロ	ヘラミガキ・黒色処理	底部回転糸切無調整
5	56－10	東区		2層	陶器	甕？	体部小片				タタキ		常滑・中世
6	56－7	西区		3層	陶器	擂鉢	体部小片						鉄釉・産地不明・17ｃ？
7	56－11	東区	P52		陶器	壺	体部小片				格子目タタキ	ヘラナデ	瀝美・12～13ｃ
8	56－3	東区		4層	陶器	壺	体部小片				ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	瀝美・12～13ｃ
9	56－8	東区		9層	須恵器	甕？	体部小片				平行タタキ	ナデ	
10	57－7	東区		4層	須恵器	甕	体部小片				平行タタキ	ナデ→ヘラナデ	砥石転用
11	56－1	東区		3層	陶器	鉢	下半1/3		(13.6)		ロクロ→ナデ		在地・13～14ｃ

第71図　出土遺物(3)

試料 3　サクラコガネ　*Anomala daimiana* harold 左鞘翅片

（ＳＩ３）　エンマコガネ属　*Onthophagus* sp　中後胸腹板

カドマルエンマコガネ　*Onthophagus lenzii* Harold 中後胸腹板

サクラコガネ属　*Anomala* sp 脛節

〈昆虫化石の生態等〉

（試料１）　二次林や草地などに生息し、人間が植栽したブドウ・クリ・マメ科植物などの果樹や、各種広葉樹、及びクズ・農作物等の葉を広く食害する食葉性のヒメコガネ（*Amomala rufocuprea*）のほかに、食肉性のアオオムサシ（*Carabus insulicola*）・スジアオゴミムシ（*Haplochaenius Costiger*）が出現している。アオオサムシ・スジアオゴミムシはともに夜行性で、日中は落葉の下や土中にひそみ、夜になると地上にでてミミズや他の虫・小動物の屍体（ネズミ・モグラなど）などをあさる。

（試料２）　ヒメコガネ４点・ドウガネブイブイ１点（*Anomala cuprea*）が発見された。両者とも各種広葉樹の葉や、人間によって植栽された果樹等の葉を食べる。

（試料３）　食葉性のサクラコガネ（*Anomala daimiana*）及びサクラコガネ属（*Anomala* sp）に同定される昆虫片を産した。

他に食糞性昆虫として知られるカドマルエンマコガネ（*Onthophagus lenzii*）と、それよりやや小型のエンマコガネ属（*Outhophagus* sp）の、それぞれ中後胸腹板が発見された。小型のエンマコガネ属は分類を進めれば、コブマルエンマコガネかマルエンマコガネ等に同定される可能性が高いものであると考える。これらは獣とくに牛馬糞を好み、鹿や犬の糞・人糞にも集まる。このことからＳＩ３の付近に、人糞を含む獣糞が存在したことは確実であろう。

No.	次数	層・遺構	時期	種	類	備考
1	77次	ＳＩ－１	中世	ヒメコガネ アオオサムシ スジアオゴミムシ	前胸背板 右鞘翅 左鞘翅	土倉の性格が考えられる。
2	77次	ＳＩ－３	中世	ヒメコガネムシ ドウガネブイブイ	右鞘翅・前胸背板・中胸腹板・腿節・他 左鞘翅片	土倉の性格が考えられる
3	77次	ＳＩ－３	中世	サクラコガネ エンマコガネ属 カドマルエンマコガネ サクラコガネ属	左鞘翅片 中後胸腹板 中後胸腹板 脛節	土倉の性格が考えられる。

第８表　昆虫遺体

富沢遺跡第77次調査植物種子調査報告

東北大学農学部　星川清親・庄司駒男

１．ＳＫ－２

オオムギ（皮麦）－かなり焼きぶくれの跡あり。

２．ＳＫ－５

ホタルイ、サンカクイ、タイヌビエ、ヒメジソ、イシミカワ、シロザ、シロバナサクラタデ－すべて湿地またはその周辺の荒れ地の雑草である。

３．ＳＩ－１

モモ、オナモミ果実、ミゾソバ－当時人家の庭か住居に近い場所だったと思われる。

４．ＳＩ－１

オオムギ（皮麦）、イネの籾殻、スズメウリまたは小形のウリ、トウガン、ミゾソバ、ヒメジソ、カナムグラ－土蔵に貯蔵した食物の類か。籾殻とトウガンとミツバ種子は炭化せずに原形のまま遺存している。トウガンは果実のままでつぶれた状態で、多くの種子がそのままの形で遺存している。ミツバと思われるセリ科の種子が見出されたことは珍しい例で、当時の野菜の種類を知る手がかりとして注目される。

５．ＳＩ－３

クルミ－やや長形のものである。

６．ＳＩ－３

ヒメミカンソウ、イシミカワ－当時この近くが湿地または半湿地状態であったろう。

５．遺構の所属年代とまとめ

１．今回５・６層上面で検出された遺構は、出土遺物から中世から近世に所属する可能性が考えられる。（６層上面の遺構は、前述したように本来５層上面あるいは５層中から掘り込まれた可能性が考えられる。）基本層５層は黒褐色の粘土層で、隣接して行われている過去３回の調査（第15次調査・第35次調査・第40次調査）で中世から近世に対応されている層と層相がほぼ同様である。このようなことから以下のような関係が考えられるが、各調査とも年代を決定するに充分な遺物の出土が少ないことから所属年代には明確な対応が得られていない。今後さらに富沢遺跡北東部微高地周辺での調査が重ねられることにより検証がなされていくことに期待したい。（第77次調査の所属年代以外は各次調査の報文による。）

77次調査	15次調査	35次調査	40次調査
５層上面（中世～近世）	３ａ層上面（中世）	５層上面（13～14ｃ）	４層上面（15～17ｃ初）
			５層上面（15～17ｃ初）
６層上面（中世～近世）	３ｂ層上面（中世）	６層上面（12～13ｃ）	６層上面（15～17ｃ初）

２．今回検出された竪穴遺構は３基である（ＳＩ１～３）。いずれも南区で検出され、遺物などから中世に所属するものであると考えられる。これらの竪穴遺構はその規模や、形状等に共通する部分が多くみられるので以下のような点から検討を加えてみた。

○平面形－いずれも隅丸長方形を基調としている。ＳＩ３は部分的な検出である。

○断面形－壁はほぼ急角度に立ち上がり、底面との境は明瞭である。壁面には凸凹はみられず、形状は逆台形を呈する。深さはＳＩ１・３で80cm～100cmである。

○底面　－底面は中央部が僅かに下がる程度で、ほぼ平坦である。貼り床やピット等の施設は認められなかった。

○柱穴　－遺構内部（底面、壁面）には柱穴は認められない。ＳＩ１の周囲ではピットが検出されているが、柱痕跡は確認されていない。しかし、ＳＩ１の長軸線上に位置しているピット２基は規模や形態的に柱穴と考えることができ、何らかの上部構造があった可能性がある。

○堆積土－ＳＩ１・３は自然堆積状況を呈し、層中に植物遺体を多く含んでいる。（ＳＩ１は下層部分が自然堆積である。）

このような形態を示す遺構として次のような遺構が考えられよう。

1)　竪穴住居

2)　ゴミ穴

3)　これら以外の目的の地下施設

これらの可能性についてそれぞれ考えると、1）であるとした場合、カマドを持たないこと、生活の痕跡を示すような土器類の出土がほとんど見られないこと、深さに対して出入口となるような施設が確認できないこと、ＳＩ１以外では柱穴になりそうなピットがなく上部構造物があった可能性が少ないことなどの点から、竪穴住居とするには不十分であろう。次に２）であるとした場合、検出されたように平面形や、断面形などに共通する規格性を持つ必要性が考えられないこと、底面を水平に作る必要性が考えられないこと、さらにゴミ穴であるとすれば、堆積土中に多くの遺物が残されているものと考えられるが、今回堆積土中からの遺物の出土は僅かである、などの点から当初からゴミ穴として利用することだけを目的として構築されたとは考えるには困難な点が多い。しかし、堆積状況が自然堆積状況であるので、これらの遺構が埋没していく過程でゴミ穴として利用された可能性は否定されるものではない。次に３）であるとした場合、平面形、断面形に規格性が認められる。また、底面を水平にしていることからこの形であることに目的があったと考えられる。底面から付け札木簡が３点出土していることから、ここに何らかの荷物が置かれた可能性が考えられよう。さらに米、種子、縄等が出土していることからも荷物が置かれた可能性を示すことと矛盾はしないであろう。

以上のことから今回検出された竪穴遺構は住居やゴミ穴ではない別の目的を持って構築された地下施設であると考えられ、貯蔵施設であった可能性が考えられる。

このような形態を示す遺構は今泉遺跡（佐藤：1983)、隣接する山口遺跡第10次調査（中富：1991）でも検出されている。また、県内では観音沢遺跡（加藤・阿部：1980)、川上遺跡（大

友他：1990）が知られている。いずれもその形態、出土遺物から半地下式の貯蔵施設の可能性が指摘されている。

３．今回の調査で出土している遺物には、木簡、烏帽子の可能性のある漆製品、青磁、白磁、などがあり、また、貯蔵を目的とする施設が複数存在していることなどから、ある程度の身分を持ったものの屋敷が周辺に存在していた可能性が考えられる。

４．弥生時代の水田跡は17ａ層、18ａ層、19ａ層で検出されている。しかし、遺物は19ａ層で杭が１点出土しているのみで時期を決定するような遺物の出土はなかったが、第15次調査・第35次調査との層の対応から次のような推定が可能であろう。

77次調査	15次調査	35次調査	所属年代
17ａ層		24層	桝形囲式期～十三塚式期
18ａ層	11ａ層	25層	桝形囲式期
19ａ層	12層？		桝形囲式期以前

これらの水田跡は間に互層をなす自然堆積層の存在がそれぞれの大畦畔直下で確認されている。そのうち17ａ層水田跡と18ａ層水田跡の関係は17ａ層水田跡が18ａ層水田跡の畦畔を踏襲して作られており、17ａ層水田跡の大畦畔下には互層をなす自然堆積層（18ｂ層）が擬似畦畔Ｂとして遺存している。この関係は第35次調査24層水田跡、25層水田跡の形成過程でも認められることから、18ａ層水田跡が自然堆積層（17ｂ層）に覆われた後に17ｂ層を主な母材層とする17ａ層水田跡が復旧されたものと考えることができ、継続して水田経営が行われたのではなく途中に中断期があったものと考えられる。

19ａ層水田跡は擬似畦畔のみの検出であり、また、一部掘り過ぎの箇所もあることから不確定要素が大きいが畦畔方向が18ａ層とは大きく違うことや傾斜角度などから第15次調査12層と対応される可能性が考えられる。しかし、18ａ層と19ａ層の分層については前述したように、課題が残されており、19ａ層水田跡の認定については今後の調査によって検証されていく必要があろう。

５．この他に遺構を検出したのは３ｂ・４ｂ・10層上面で、それぞれ水田跡を検出しており、各層の対応関係をまとめると以下のような推定が可能であろう。

77次調査	15次調査	35次調査	所属年代
３ｂ層	２ａ層	２層	近世～現代
４ｂ層	２ｂ層	４層	近世
10層	７ａ層	15層	古墳時代（南小泉式期）

註１　高橋利彦氏のご教示による。
註２　伊達泰宗氏のご教示による。

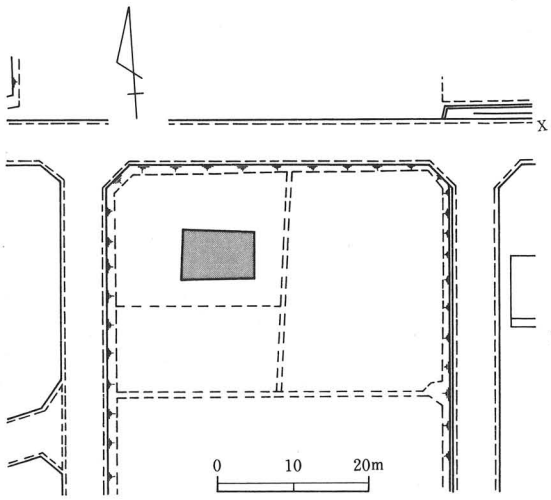
第８節　富沢遺跡第79次調査

１．調査方法

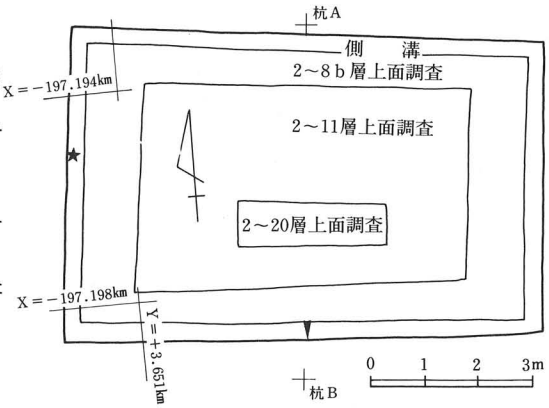
調査区の設定面積は約8.8×5.7m（約50㎡）である。調査は、盛土および直下の１層（旧水田耕作土）上面までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区周辺には土層観察および排水用の側溝を設けた。８ｂ層上面までは調査区全面の精査を実施し、８ｂ層以下は約6.0×3.8mの試掘区を、さらに11層からは約4.0×0.8mの試掘区を設けて、最終的には１層から約3.5m下の20層中まで掘り下げた。遺構の実測は、杭Ａ・Ｂを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ：Ｘ＝－197.19311km、Ｙ＝＋3.65460km　杭Ｂ：Ｘ＝－197.19954km、Ｙ＝＋3.65390km）。

２．基本層序

今回の調査では、盛土下に大別20層、細別では22層が確認された。各層の土質は１層はシルト、２・３層は粘土、４～７層は泥炭質粘土、８～19層は粘土と泥炭質粘土の互層となり、15層以下は粘土である。特に９・10層は泥炭や粘土を層中に挟在する泥炭質粘土が極めて厚いのが特徴といえる。グライ化は16層以下から漸次進み、18層以下からは顕著なグライ化をなし、極めて堅密な層となる。なお、ここでは調査土層中からは旧石器時代に属する植物遺体を含む層は確認されなかった。現代のものを除く水田土壌は２・３・４ａ・５・６・８ａの６つの層である。また、７層も水田土壌の可能性が高い。各層の傾きは、８ｂ層まではいずれの層もわずかながら、南東方向に下がっている。



第72図　調査区位置図



第73図　調査区設定図

３．検出遺構と出土遺物

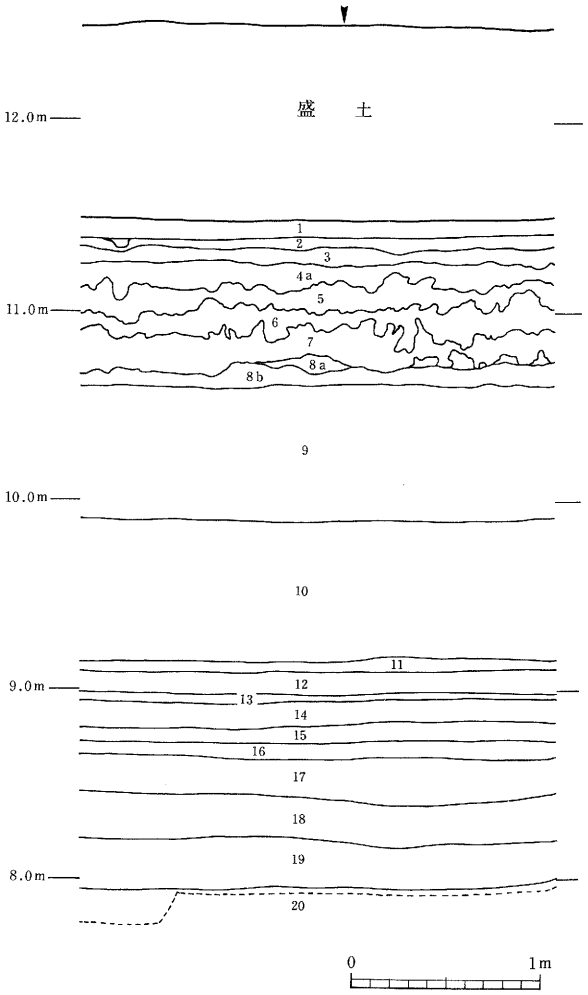
遺構は５層・６層・８ａ層上面でそれぞれ水田跡が検出された。また、２・３・４ａ層の各層では遺構は検出されなかったものの、土層の特徴や下面の状況から水田土壌と考えられた。

(1)　５層上面

５層水田跡（第75図）

〈遺構状況〉

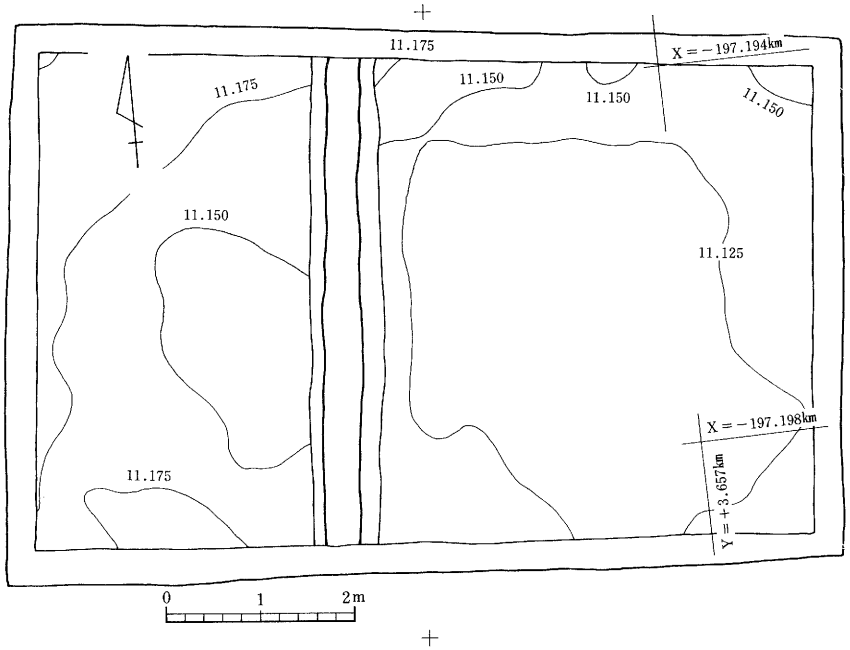
ほぼ真北方向に走る畦畔が１条検出されたのみである。畦畔は土盛り畦畔で、断面は台形状を呈する。規模は下端部が0.7m前後で、耕作土上面からの高さは３cm前後である。畦畔の方向はＮ－７°－Ｅである。耕作土は泥炭質粘土であり、耕作土の厚さは６～20cmである。また、その下面には凹凸が顕著に認められ、酸化鉄もわずかに認められた。水田面の標高は11.12～11.20mで、わずかに南東方向に下がる傾斜を示している。



第74図　基本層序

層序	色調	性質	層厚	酸化鉄	混入物	備考
1	オリーブ褐色　2.5Y4/3	粘土質シルト	10cm前後	有	――	現代の水田土壌
2	暗灰黄色　2.5Y4/2	シルト質粘土	2～8cm	斑紋	φ1～2cmの礫少量	水田土壌
3	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	6～10cm	有	――	水田土壌
4a	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	6～15cm	有	下層ブロック	水田土壌、下面起伏、上層より黒み強い
4b	黒色　2.5Y2/1 黄褐色　2.5Y5/3	泥炭質粘土 粘土	4cm前後	――	――	互層、４ａ層の母材層 所々に分布
5	黒褐色　2.5Y3/2	泥炭質粘土	6～20cm	有（少量）	――	水田土壌、下面起伏
6	黒褐色　2.5Y3/1	泥炭質粘土	4～20cm	――	上面および上部にφ2～6cmの灰白色火山灰ブロック少量下層ブロック	水田土壌、下面起伏
7	黒色　2.5Y2/1	泥炭質粘土	2～20cm	――	――	水田土壌？　下面やや起伏
8a	黒褐色　2.5Y3/1	粘土	2～10cm	――	――	水田土壌、南東部は分布しない
8b	暗灰黄色　2.5Y5/2	粘土	6～20cm	――	植物遺体	下部は黒色の泥炭質粘土と互層、８ａ層の母材層
9	暗灰黄色　2.5Y4/2	泥炭質粘土	70cm前後	――	――	層中に黒褐色の泥炭を挟在
10	黒色　2.5Y2/1	泥炭質粘土	70cm前後	――	――	層中に黄灰色の粘土層を挟在
11	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	8cm前後	――	植物遺体	
12	黒褐色　2.5Y3/1	泥炭質粘土	10cm前後	――	――	
13	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	4cm前後	――	植物遺体	
14	黒色　2.5Y2/1	泥炭質粘土	12cm前後	――	――	泥炭に近い。層中にうすく砂層挟在
15	黒色　2.5Y2/1	粘土	10cm前後	――	植物遺体	
16	黄灰色　2.5Y4/1	粘土	8cm前後	――	植物遺体	弱グライ
17	黄灰色　2.5Y6/1	粘土	22cm前後	――	砂少量	弱グライ
18	緑灰色　10GY6/1	粘土	22cm前後	――	――	強グライ
19	緑灰色　5G6/1	粘土	25cm前後	――	――	堅密、強グライ
20	明緑灰色　5G7/1	粘土	18cm以上	――	――	強グライ

〈出土遺物〉　土師器・赤焼土器の土器片が6点出土したが、図示できるものはなかった。その他に種子が1点検出されている。



第75図　5層水田跡平面図

(2)　6 層 上 面

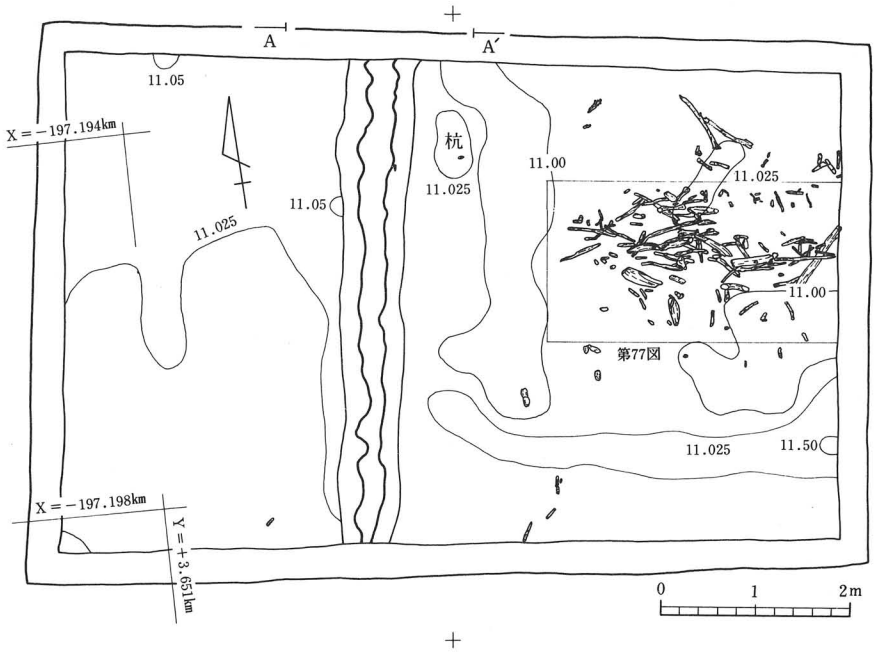
6層水田跡（第76図）

〈遺構状況〉

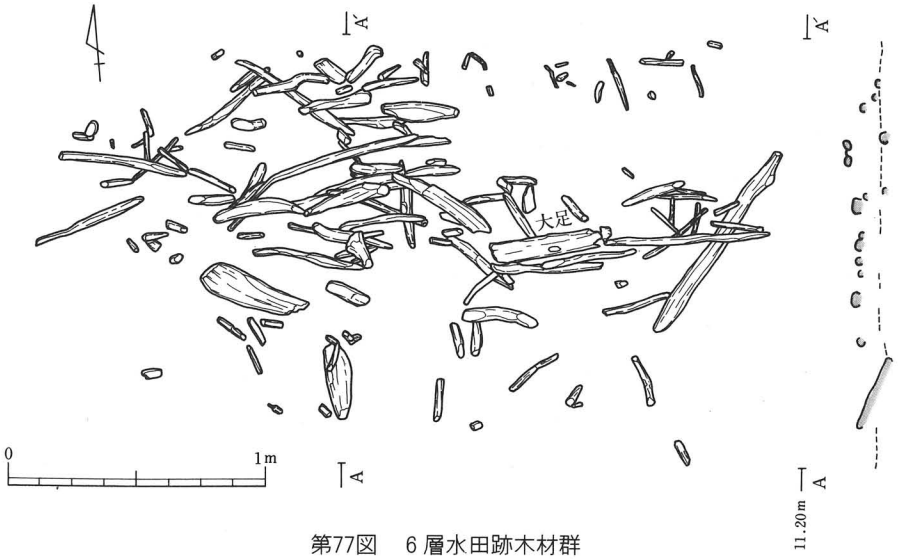
5層水田跡の畦畔とほぼ同位置に畦畔が1条検出された。また、畦畔の東側からは杭や木材群も検出されている。畦畔は土盛り畦畔で、断面は台形状を呈する。規模は、下端幅が0.6m前後で、耕作土上面からの高さは10cm前後である。畦畔の方向はN－8°－Eである。耕作土は泥炭質粘土であり、厚さは4～20cmである。その下面には凹凸が顕著に認められる。また、耕作土上面および上部には灰白色火山灰のブロックが少量認められた。水田面の標高は11.00～11.05mでほぼ平坦である。

〈杭〉　一本検出されている（第81図4）。畦畔から東へ約0.8m離れた地点である。遺構との関わりは明らかではない。

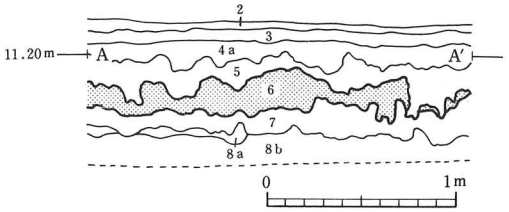
〈木材群〉　畦畔の東側を中心に、東西約3m、南北約2mの範囲から木材が集中して多数検出された。その大半が層中からの出土であり、東西方向に横たわった状態で出土している例が多い。木材群の中には自然木の他に大足・加工材・杭材なども多数含まれていた。この木材群については方向性などから畦畔の一部として、畦畔を補強するために意図的に入れ込まれた可能性が想定されるが、明確にはできなかった。



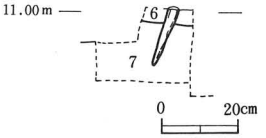
第76図　６層水田跡平面図



第77図　６層水田跡木材群



第78図　６層水田跡断面図



第79図　杭セクション図

〈出土遺物〉　土師器片（４点）・大足（１点）・杭材（53点）・その他の木材（113点）の他、昆虫遺体や種子も出土している。土師器は図示できたものは坏１点で、ロクロを使用して製作されており、底部は回転糸切り無調整である。大足は長方形の板状を呈する形態のものと推測され、鼻緒孔が３孔認められる。杭材では、保存状況から図示できたのは15点のみである。これらは全てが丸太材で、直径では１～３㎝、末端加工では１面のみのものが比較的多い。

(3)　８ａ層上面

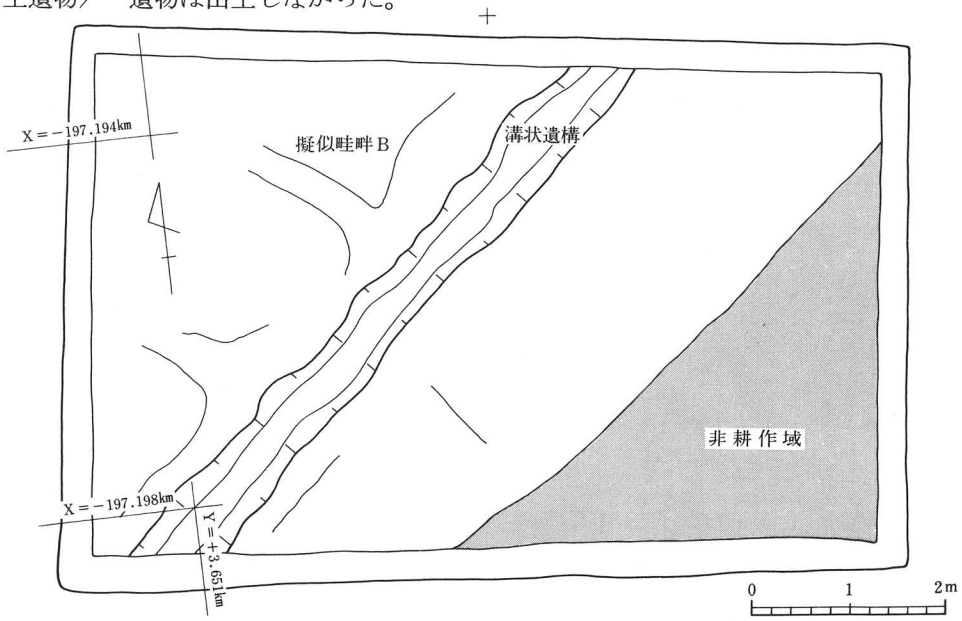
８ａ層水田跡（第80図）

〈遺構状況〉

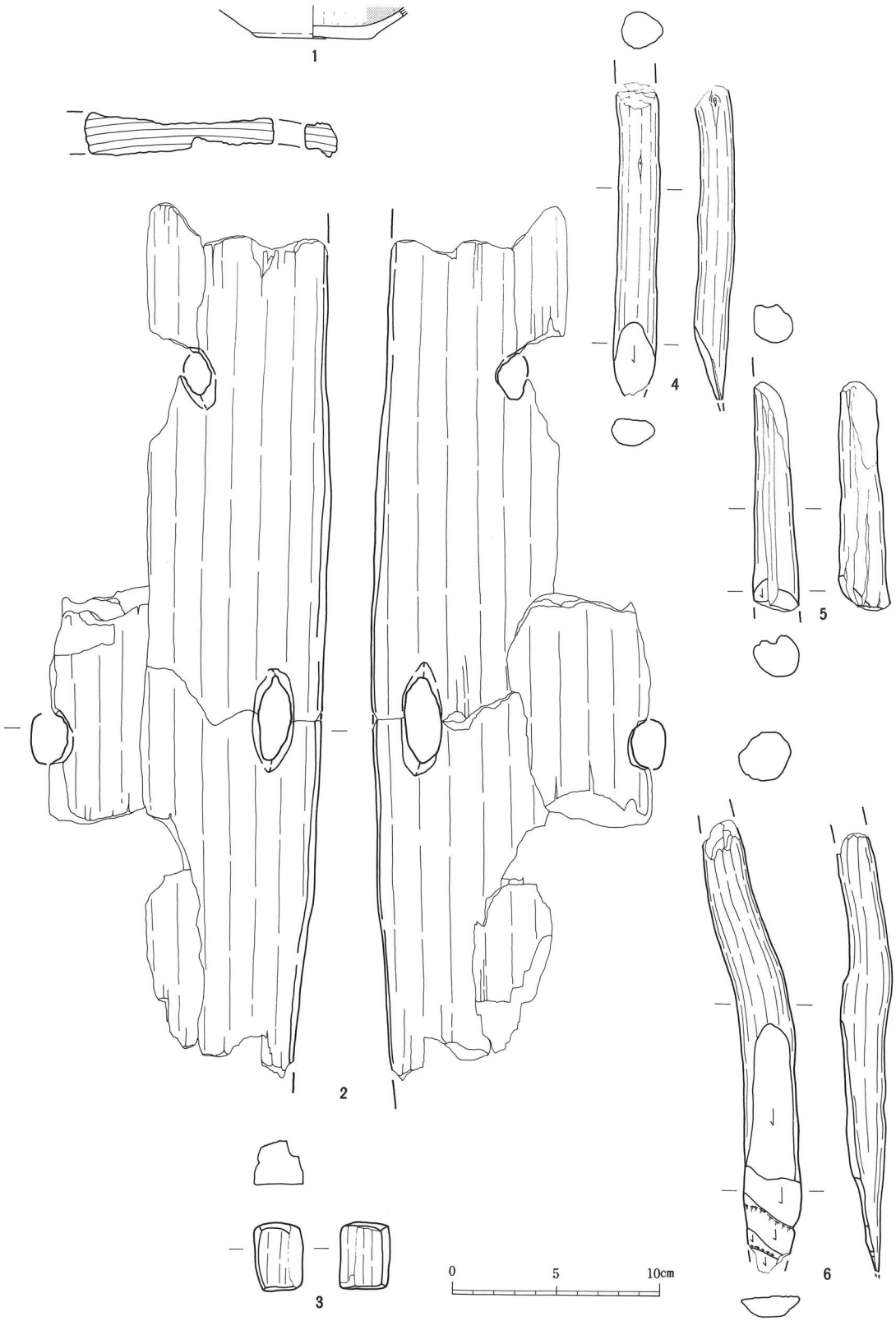
擬似畦畔Ｂが数条と溝状遺構が１条検出されている。調査区南東部は８ａ層は分布しておらず、非耕作域となっている。擬似畦畔Ｂは溝状遺構の両側に沿うように２条、そこからほぼ直角に北西方向に２条と南東方向に１条が確認された。方向は前者がＮ－47°－Ｅ、後者がＮ－54°－Ｗである。また、その幅は前者は0.3～0.6m、後者は30㎝前後である。水田区画全体を把握できた例はないが、方形で１辺が２ｍ程度の小規模な水田が想定される。なお、南東部の非耕作域が地形的に一段低くなっていることから、水田区画はほぼ地形の傾斜に即して行われているといえる。耕作土は８ｂ層を母材としており、粘土である。また、下面には凹凸が認められる。

〈溝状遺構〉　擬似畦畔Ｂと方向を同じくしており、この水田跡に伴う遺構と考えられる。上端幅は0.5～0.8mで、深さは10㎝前後である。堆積土は１層で、８ａ層とほぼ同様の特徴をもつものである。この溝状遺構については水田跡に伴う水路や、畦畔を設置する際の掘り込み跡などが想定されるが、今回の調査では明確にはできなかった。

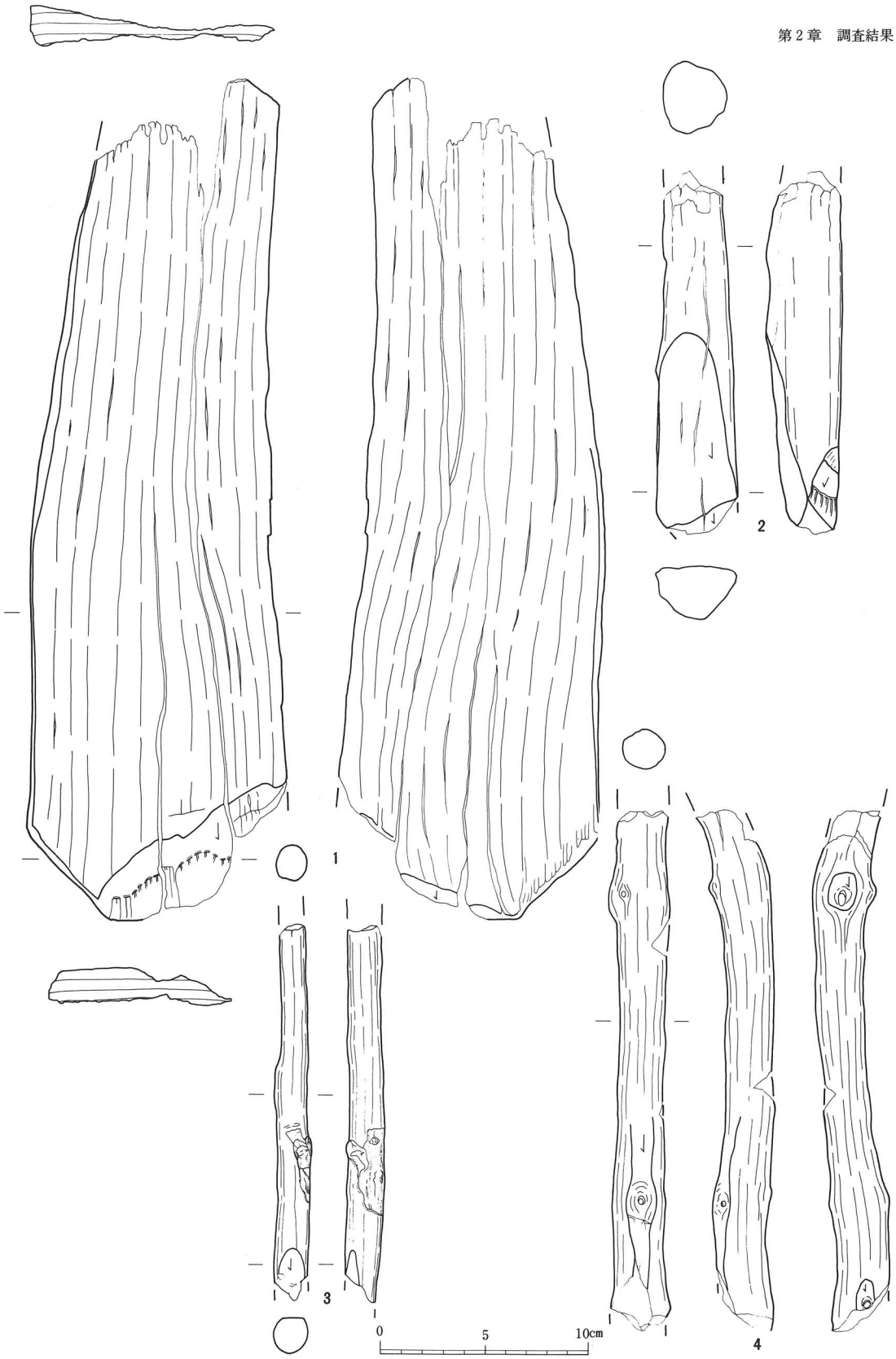
〈出土遺物〉　遺物は出土しなかった。



第80図　８ａ層水田跡平面図

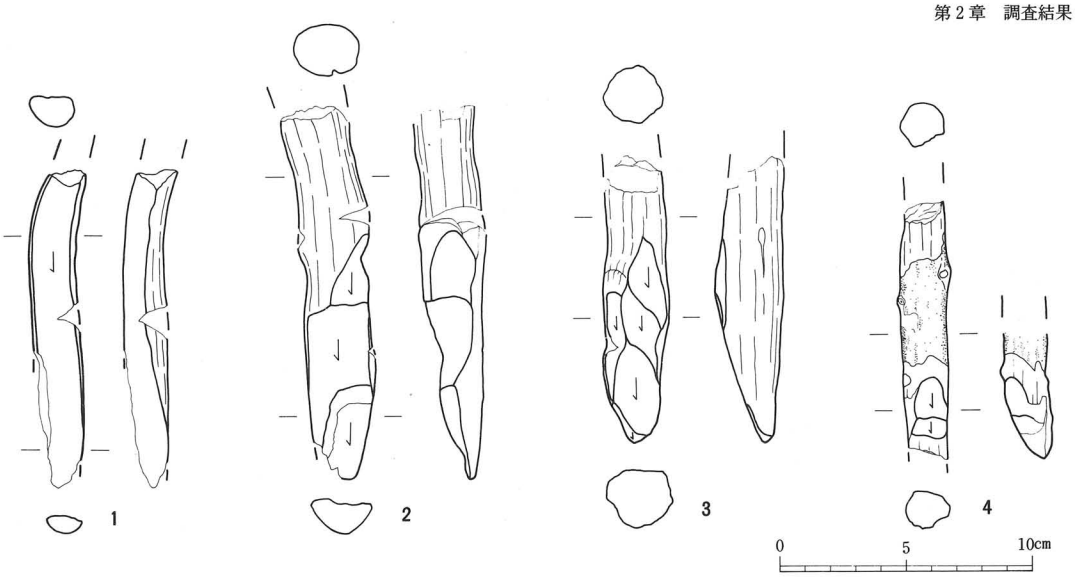


第81図　６層水田跡出土遺物(1)



第82図　６層水田跡出土遺物(2)

第83図　６層水田跡出土遺物(3)



第84図　６層水田跡出土遺物(4)

土器観察表

No.	挿図番号	図版番号	遺構・層位	種　別	器　種	遺存度	口　径	底　径	器　高	色　　調	特　　徴
1	第81図　1	59－1	６層水田跡	土師器	坏	底部4/5	――	5.6cm	――	外－灰白色　内－黒色	内面黒色処理。底部は回転糸切り無調整

木製品・加工材観察表

No.	挿図番号	写真番号	出土遺構・層位	種　別	材　　質	素材形状	長　さ cm	幅・直径 cm	特　　徴
1	第81図　2	59－4	６層水田跡木材群	大　足	モミ属の一種	板目材	(42.3)	(13.1)	長方形の板を素材としている。
2	第82図　1	59－5	６層水田跡木材群	加工材	モミ属の一種	板目材	(41.0)	(12.0)	
3	第81図　3		６層水田跡木材群	加工材	カ　ヤ	――	3.2	2.3	

杭材観察表

No.	挿図番号	写真番号	出土遺構・層位	種　別	材　　質	素材形状	長　さ cm	幅・直径 cm	先端加工	表面加工
1	第81図　4	59－2	６層水田跡　杭	杭　材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	丸太材	(15.1)	2.0	1　面	な　し
2	第81図　5	59－3	６層水田跡木材群	杭　材	ク　リ	丸太材	(11.1)	(2.0)	1面(焦痕)	な　し
3	第82図　3		６層水田跡木材群	杭　材	ハシバミ属の一種	丸太材	(18.3)	1.7	1　面	な　し
4	第83図　2		６層水田跡木材群	杭　材	――	丸太材	(24.5)	1.7	1　面	な　し
5	第83図　4	59－8	６層水田跡木材群	杭　材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	丸太材	(42.5)	7.0	4　面	な　し
6	第82図　4		６層水田跡木材群	杭　材	――	丸太材	(25.3)	2.3	1　面	あ　り
7	第83図　3		６層水田跡木材群	杭　材	散孔材	丸太材	(39.0)	1.6	1　面	な　し
8	第84図　1		６層水田跡木材群	杭　材	――	丸太材	(12.5)	(1.8)	1　面	な　し
9	第84図　4		６層水田跡木材群	杭　材	――	丸太材	(10.3)	1.9	2　面	な　し
10	第83図　1		６層水田跡木材群	杭　材	カエデ属の一種	丸太材	(31.8)	2.6	1　面	あ　り
11	第83図　5	59－11	６層水田跡木材群	杭　材	シラキ	丸太材	39.7	3.6	4　面	な　し
12	第84図　2	59－9	６層水田跡木材群	杭　材	シラキ	丸太材	(14.8)	2.5	3　面	な　し
13	第82図　2	59－7	６層水田跡木材群	杭　材	サクラ属の一種	丸太材	(17.7)	3.9	3　面	な　し
14	第84図　3	59－10	６層水田跡木材群	杭　材	――	丸太材	(11.4)	2.6	6　面	な　し
15	第81図　6	59－6	６層水田跡木材群	杭　材	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	丸太材	(21.9)	2.5	5　面	な　し

４．遺構の所属年代とまとめ

検出遺構としては５層・６層・８ａ層の各水田跡がある。その内、５・６層水田跡については出土土器から平安時代に所属するものと考えられる。特に６層水田跡では層上部において灰白色火山灰も認められており、このことを補強している。８ａ層水田跡については出土遺物がなく、所属時期については不明である。ただし、上層の水田跡とは畦畔の方向が大きく異なり、地形の傾斜に即した水田区画が行われていることなどから、古墳時代以前にさかのぼる可能性が大きい。

第3章　分　析・同　定

第1節　花粉分析

富沢遺跡（第74次調査）の花粉分析

守　田　益　宗

1．分析について

富沢遺跡の第74次調査区は、旧石器時代の遺物の出土した第30次調査区や第58次調査区の東方に位置している。本調査区では前記調査区から出土したグイマツ、アカエゾマツなどの大型植物遺体は見い出されなかったが、下層部より腐植質粘土層が検出された。本報告は、この腐植質粘土層と旧石器時代層との関連を花粉分析の立場から検討を加えたものである。

花粉分析用試料は、35～40層より各1試料を採取した。試料の採取地点とその層位を図1に示す。試料の処理法、花粉・胞子の同定および出現率の算出は、これまでの報告と同様にして行なった（例えば、守田1991など）。

2．結果および考察

各試料について検出された花粉・胞子を表1に示し、主要な花粉・胞子の消長を図1に示す。なお、図中白ヌキの部分は高木花粉が200粒に満たない層準であることを示す。

40層は花粉・胞子が極めて少ない。*Nyssa*（ヌマミズキ属）、*Liquidamber*（フウ属）などの第三紀植物の花粉がみられ、これらは明らかに二次堆積したものである。

39層の花粉・胞子含量は40層ほど極端ではないがやはり少ない。草本花粉（Herbs）やシダ胞子（Ferns）の占める割合が高く、高木花粉（Trees）の比率は低い。中でもCarduoideae（キク亜科）や*Lycopodium*（ヒカゲノカズラ属）が多く見い出される。高木花粉では*Pinus*（マツ属）、*Tsuga*（ツガ属）などの針葉樹や*Betula*（カバノキ属）の出現が目立つ。

38層は腐植質に富む粘土層である。花粉の保存状態は良好であり、高木花粉の占める割合が最も高い。*Betula*が最優勢で*Pinus*がこれに次ぐが、他の針葉樹花粉も多い。他の花粉・胞子ではEricaceae（ツツジ科）の出現率が比較的高いのが特徴である。

37層は高木花粉が高率を示す。*Betula*は約70％の高率である。その他の花粉・胞子では、Cyperaceae（カヤツリグサ科）、*Sanguisorba*（ワレモコウ属）が比較的多く見られる。二次堆積花粉もやや多く検出される。

36層は腐植質を含む粘土層である。花粉の保存状態は本層が最も良く、花粉含量も最も多い。高木花粉が60％以上の高率を占め、*Betula*や針葉樹の花粉が多い。針葉樹花粉の中では*Picea*（トウヒ属）の比率が高い。草本花粉ではCyperaceaeが高率を示す。シダ胞子は極めて低率

である。

35層では花粉・胞子含量が少ないが、低木花粉が約60％を占め最も多い。この大部分が*Alnus*（ハンノキ亜属）である。40層同様、*Fagus*（ブナ属）、*Quercus*（コナラ属）の比率が高く、二次堆積花粉も多く見い出される。

39～36層はその花粉の組成からも明らかに氷河期のものであり、距離的に考えて第30次調査、第58次調査の旧石器時代層とほぼ同時代の堆積物と言えよう。したがって、本調査区から検出された*Pinus*はチョウセンゴヨウ、*Picea*はアカエゾマツ、*Betula*はシラカンバ、*Alnus*はヤマハンノキから由来したものと考えられる。

本調査区の環境変遷を推定すると、40層は花粉・胞子含量が少なく、二次堆積花粉が目立つことから、周辺の丘陵斜面あるいは河川などによる土砂供給の多い環境下にあったと言える。本層で検出される*Fagus*、*Quercus*も二次堆積花粉であろう。39層の時代になると、土砂供給がややおさまり、キク亜科やヒカゲノカズラ属などが多く生育するようになった。38層の時代は腐植質が多く、二次堆積花粉も検出されないことから、比較的安定した堆積環境のもとでツツジ科の低木が多い植生が成立していた。付近にはチョウセンゴヨウ、シラカンバの多い亜寒帯性の針葉樹林が広がっていたと考えられる。37層の時代に一時的に周囲からの土砂流入があり、ツツジ科の低木にかわってカヤツリグサ科やワレモコウ属が多い湿性の草地が広がったと推定される。36層の時代はより湿潤で安定した堆積環境となり、付近にはアカエゾマツの林が広がったと推定される。35層では再び周辺からの土砂流入が多い環境となり、付近にはヤマハンノキが生育していたであろう。

本調査区の38～36層は高木花粉が上層に向って増加傾向を示し*Betula*が最優勢を示すこと、35層になって*Alnus*が増加することから、第30次調査のボーリング試料の23層および第58次調査区の37層以下の部分に対比される可能性が高い（守田1992）。本調査区の37層と第58次調査区の38層の関係が注目されるが、富沢遺跡の旧石器時代層は調査地点によって腐植層の数や層厚が異なること、また、花粉出現率の大まかな消長は地点間で互いによく似ているが、単層ごとの対比をするには出現率の変動が大きいため厳密な対比は難かしい。そのため、第58次調査区の38層との対比は、その可能性だけにとどめておきたい。

引用文献

守田益宗（1991）　富沢遺跡（第30次調査）の花粉分析．富沢遺跡（第30次調査）
－近世～縄文時代編－

守田益宗（1992）　富沢遺跡（第30次調査）のボーリングコアの花粉分析

守田益宗（投稿中）　富沢遺跡（第58次調査）の旧石器時代の花粉分析

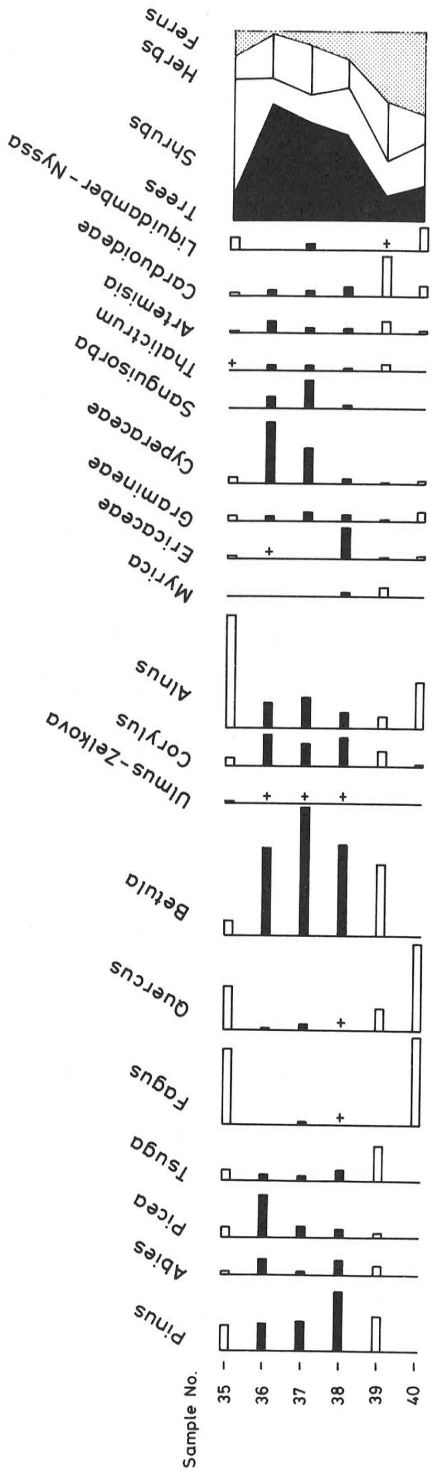

Sample No.
35
36
37
38
39
40
Pinus
Abies
Picea
Tsuga
Fagus
Quercus
Betula
Ulmus-Zelkova
Corylus
Alnus
Myrica
Ericaceae
Gramineae
Cyperaceae
Sanguisorba
Thalictrum
Artemisia
Carduoideae
Liquidambar-Nyssa
Trees
Shrubs
Herbs
Ferns
0
100 %

図1　花粉ダイアグラム

表1　花粉・胞子出現表

		35　層	36　層	37　層	38　層	39　層	40　層
Pinus	マツ属	8	45	34	80	8	
Abies	モミ属	1	27	4	21	2	
Picea	トウヒ属	3	69	13	11	1	
Tsuga	ツガ属	3	11	5	14	8	
Larix	カラマツ属		1				
Cryptomeria	スギ属			1			
Betula	カバノキ属	5	146	150	125	16	
Carpinus	クマシデ属					1	1
Fagus	ブナ属	24		3	1		6
Quercus	コナラ属	14	4	6	1	5	6
Ulmus—Zelkova	ニレ属—ケヤキ属	1	2	2	2		
Acer	カエデ属		1				
Tilia	シナノキ属	1			1	1	
Myrica	ヤマモモ属				8	16	
Salix	ヤナギ属	1			2		
Corylus	ハシバミ属	14	33	26	47	24	1
Alnus	ハンノキ亜属	197	28	36	27	18	14
Alnaster	ヤシャブシ亜属	1	4	2	9	1	1
Ilex	モチノキ属	8		1			
Araliaceae	ウコギ科			1			
Ericaceae	ツツジ科	5	1		52	3	1
Fraxinus	トネリコ属	1					
Lonicera	スイカズラ属	1	3		1		
Gramineae	イネ科	12	7	12	12	3	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	12	62	40	10	3	1
Typha	ガマ属	1					
Liliaceae	ユリ科				4	1	
Bistorta	イブキトラノオ属	1			5		
Persicaria	サナエタデ属	10		2		2	1
Reynoutria	イタドリ属			1			
Aconitum	トリカブト属				2		
Clematis	センニンソウ属	1	1		1		
Coptis	オウレン属				10	4	
Thalictrum	カラマツソウ属	1	7	7	3	10	
Ranunculus	キンポウゲ属				1		
Sanguisorba	ワレモコウ属		12	32	5		
other Rosaceae	バラ科		2				
Geranium	フウロソウ属		1			1	
Umbelliferae	セリ科	1	6	5	8	1	
Artemisia	ヨモギ属	4	13	7	7	18	1
Carduoideae	キク亜科	5	5	6	13	60	3
Cichorioideae	タンポポ亜科		1				
1—lete type FS	単条溝型シダ胞子	45	5	24	64	73	25
3—lete type FS	三条溝型シダ胞子	1		2		1	5
Lycopodium	ヒカゲノカズラ属	3			18	49	
L. serratum type	トウゲシバ型			2			
Sphagnum	ミズゴケ属		7	8	24	19	
Trees	高木花粉	60	306	218	256	42	13
Shrubs	低木花粉	228	69	66	146	62	17
Herbs	草本花粉	48	117	112	81	103	9
Ferns	シダ胞子	49	5	28	82	123	30
Unknown	不明	45	18	31	20	28	7
Liquidamber	フウ属	7		2		1	2
Nyssa	ヌマミズキ属	18		6			5

第２節　樹種同定

１．富沢遺跡第70次・72次・73次・77次調査出土材の樹種

高橋　利彦（木工舎「ゆい」）

１．試料と方法　　試料は19点で、表記調査で検出された木製品・加工材・自然木である（表１）。試料の解剖学的知見に基づいて同定した（詳細は紙数に限りがあるため割愛する）。作製したプレパラートは仙台市教育委員会と木工舎「ゆい」に１組ずつ保管されている。

２．結果と考察　　試料は、劣化のため確実な同定ができず類似種としたものを含め11科14分類群に同定された（表１）。なお同定の根拠となった解剖学的特徴の記載は省略する。

木製品の用材をみると、下駄（№１）はヤナギ属であり、ほとんど類例の知られていないものであった。鋤（№４）はクヌギ節（クヌギと考える）であり、これは試料と同時期のものとされる第28次調査出土の鍬と同じ用材（高橋1988）であった。関東地方などでもクヌギ節（類）製の鋤・鍬類の報告が多いことから、当時これらの農具にクヌギ材を選択的に用いていたものと考える。木簡にはいずれも針葉樹の４分類群が用いられていた。加工性や比重と強度などが選択理由となったものと思う。建築・土木用材にはそれぞれ異なった種類が用いられていた。以上のように、いずれの木製品・加工材も、その当時入手可能な樹種の中からそれぞれの用途にふさわしい材質のものを選択・使用してきたこと示しているものと考えている。

引用文献

高橋　利彦　1988　富沢遺跡（総合支所予定地）出土材同定，「仙台市文化財調査報告書第114集富沢遺跡－第28次発掘調査報告書－」，仙台市教育委員会，131－136.

表１　樹種同定一覧表

試料No.	遺物番号	図版番号	遺物の種類	遺　構	層位	遺物の時代	樹　　種	次数
1	55-7	第５図	下駄	ＳＤ－３	埋土	近世～現代	ヤナギ属	70次
2	33-37	第10図	木材(杭?)	水田土	９層	弥生（桝形囲）	イヌガヤ	70次
3	9	第25図２	杭	作土？	16ａ層	弥生（桝形囲）	キハダ	73次
4	12	第25図１	鋤	作土？	16ａ層	弥生（桝形囲）	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	73次
5	108	第54図２	木簡	ＳＩ１	埋土	中世	ネズコ	77次
6	115	第54図４	木簡	ＳＩ１	埋土	中世	カヤ類似種	77次
7	117	第54図５	木簡	ＳＩ１	11ａ層	中世	アスナロ	77次
8	118	第54図１	木簡	ＳＩ１	11ａ層	中世	スギ	77次
9	119	第54図６	木簡	ＳＩ１	11ａ層	中世	スギ	77次
10	124	第54図３	木簡	ＳＩ１	11ａ層	中世	スギ	77次
11	127	第70図１	杭？	作土？	19層下部	弥生	カヤ	77次
12	146	第57図６	建築材	ＳＩ３	埋土	中世	ネズコ	77次
13	148	第57図１	建築材	ＳＩ３	埋土	中世	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	77次
14	149	第57図10	杭	ＳＩ３	埋土	中世	サクラ属の一種	77次
15	193	第70図２	柱材	Ｐ－76	埋土	中世	クリ	77次
16	1		樹木	ＳＲ－１	埋土	縄文？	カエデ属の一種	72次
17	3		樹木	ＳＲ－７	埋土	縄文	ヤマグワ	72次
18	10		樹木	ＳＲ－７	埋土	縄文	カエデ属の一種	72次
19	16		樹木	ＳＲ－７	埋土	縄文	エノキ属の一種	72次

２．富沢遺跡79次調査で出土した材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社　高　橋　　敦

１．試料及び方法

試料は、富沢遺跡の６層水田跡（平安時代）から出土した杭等の木製品13点で、剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目の３断面の徒手切片を作製、ガム・クロラールで封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

２．結果

№４の試料は同定する事ができなかったが、他の12点の試料は解剖学的特徴から９種類に同定された（表１）。なお、試料の同定根拠となった組織の記載や図版の一部は紙面の都合上省略した。

木製品は、全て針葉樹である。これは高橋（1987）の指摘のように加工性や仕上がりの良さを意識した用材選択があったものと思われる。

上記以外の資料は全て杭とされるもので、10点で８種類が同定された。高橋（1987）は杭材の調査から、弥生時代から平安時代に材の利用形態や周辺植生の変化があったことを推定している。今回の結果は、高橋（1987）の指摘を示すものなのかもしれないが、試料数が少ないため判断できない。今後さらに試料数を増やして確認していく必要があるだろう。

文献

高橋利彦（1987）富沢遺跡出土材同定.「仙台市文化財調査報告書第98集　富沢　－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」，ｐ．397－412，仙台市教育委員会.

表１　樹種同定一覧表

試料No.	遺物番号	図版番号	遺物の種類	遺構・層位	樹　　種
1	40	第81図２	大足（板目材）	６層水田木材群	モミ属の一種
2	15	第82図１	板材	６層水田	モミ属の一種
3	37	第81図４	杭材（丸太材）	６層水田ａ区	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
4	7	第83図３	杭材（丸太材）	６層水田木材群	散孔材
5	33	第82図３	杭材（丸太材）	６層水田	ハシバミ属の一種
6	51	第83図４	杭材（丸太材）	６層水田	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
7	53	第81図５	杭材（丸太材）	６層水田	クリ
8	86	第83図１	杭材（丸太材）	６層水田	カエデ属の一種
9	97	第81図６	杭材（丸太材）	６層水田	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
10	109	第84図２	杭材（丸太材）	６層水田	シラキ
11	111	第83図５	杭材（丸太材）	６層水田	シラキ
12	127	第82図２	杭材（丸太材）	６層水田	サクラ属の一種
13	18	第81図３	木材（丸太材）	６層水田	カヤ

第3節　プラント・オパール分析

仙台市富沢遺跡（第70，71，73，74，75，77，79次調査）における プラント・オパール分析

古環境研究所

1．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図2に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ，ヨシ属，タケ亜科，ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる），キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

2．考　察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、富沢遺跡の場合はこれまでの調査の結果、プラント・オパール密度が3,000個/g未満の場合でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準となる値を約3,000個/gとした。この判断基準にもとづいて、各調査区ごとに稲作の可能性について検討を行った。

(1)　第70次調査

5a層～16層について分析を行った。その結果、9層（水田耕作土）からイネのプラント・オパールが10,500個/gと非常に高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。

(2)　第71次調査

2層～8層について分析を行った。その結果、2層（水田耕作土）からイネのプラント・オパールが2,300個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性が考えられる。

(3)　第73次調査

12層～16b層について分析を行った。その結果、16a層（水田耕作土？）からイネのプラント・オパールが3,800個/gと高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

(4)　第74次調査

1層～13層について分析を行った。その結果、8層と13層を除く各層でイネのプラント・オ

パールが検出された。このうち、1層では密度が20,600個/gと非常に高い値である。同層は現耕作土であることから、ここで検出されたものは最近の水田耕作によるものと考えられる。9層と10層（弥生時代の水田耕作土）では、密度が8,900個/gおよび5,300個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。また、4層（平安時代の水田耕作土？）でも密度が2,800個/gと比較的高い値であることから、稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の5，6，7，12層では、密度が2,000個/g未満と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

(5)　第75次調査

2層～6層について分析を行った。その結果、2層～4b層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、3b層（水田耕作土）では密度が14,200個/gと非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。2層と3a層（水田耕作土）でも密度が7,700個/gおよび5,900個/gと高い値であることから、稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の層では、密度が約2,000個/g以下と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

(6)　第77次調査

11層～20層について分析を行った。その結果、11層～14a層，15層，17a層，18a層，19a層，20層の各層でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、17a層と18a層（いずれも水田耕作土）では密度が3,500個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の各層では、密度がおよそ2,000個/g以下と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

(7)　第79次調査

2層～8b層について分析を行った。その結果、これらのすべての層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、2層，3層，4a層，5層，6層，8a層（いずれも水田耕作土）および7層では密度が3,800～7,800個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。8b層では密度が900個/gと低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

3．まとめ

以上のように、水田耕作土とされていた層では、そのほとんどからイネのプラント・オパー

ルが検出され、各層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、水田耕作土とされていなかった層でも、第74次調査の9層、第79次調査の7層などで稲作の可能性が高いと判断された。

【参考文献】

藤原宏志．1976．プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9：15－29．

藤原宏志．1979．プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.)生産総量の推定－．考古学と自然科学，12：29－41．

藤原宏志・杉山真二．1984．プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17：73－85．

表1　プラント・オパール分析結果

仙台市．富沢遺跡

70次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
5a	65	5	0.70	0	0.00	3,900	71,100	900	0
5b	70	17	0.78	0	0.00	900	110,700	0	0
7	91	4	0.66	0	0.00	600	22,400	0	0
9	97	10	0.66	10,500	7.11	4,400	12,300	0	0
10	107	3	0.60	0	0.00	8,900	9,600	0	0
11	110	4	0.52	0	0.00	3,300	5,000	0	0
12	114	4	0.50	0	0.00	3,200	23,500	800	0
13	118	8	0.29	0	0.00	5,200	7,200	0	0
14	126	6	0.56	0	0.00	3,200	19,300	600	0
16	134	16	0.43	0	0.00	4,200	11,400	0	0

71次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
2	30	26	0.90	2,300	5.36	1,100	22,100	500	0
4	56	8	0.38	0	0.00	11,800	2,700	3,600	900
5	64	7	0.52	0	0.00	0	9,400	0	0
6	71	9	0.19	0	0.00	1,300	4,600	0	0
7	80	8	0.55	0	0.00	0	25,100	0	0
8	88	10	0.21	0	0.00	3,800	2,300	0	0

73次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
12	55	21	0.65	0	0.00	0	6,500	0	0
13	76	5	0.69	0	0.00	0	12,900	0	0
14	81	5	0.55	0	0.00	2,800	15,100	0	0
15	86	4	0.30	0	0.00	6,700	2,500	0	0
16a	90	3	0.47	3,800	0.56	0	3,000	0	0
16b	93	7	0.75	0	0.00	0	2,500	0	0

74次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
1	0	17	0.98	20,600	35.20	1,800	27,200	0	0
4	17	5	0.80	2,800	1.13	900	36,400	0	0
5	22	4	0.49	500	0.08	500	5,100	0	0
6	26	20	0.34	800	0.41	4,400	4,400	0	0
7	46	7	0.35	1,900	0.43	900	10,400	0	0
8	53	6	0.22	0	0.00	600	6,200	0	0
9	59	10	0.13	8,900	1.13	7,900	900	0	0
10	69	5	0.28	5,300	0.72	3,100	3,100	0	0
12	74	5	0.26	800	0.10	5,100	2,500	800	0
13	79	10	0.21	0	0.00	9,500	2,800	1,900	0

75次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
3a	12	13	1.09	5,900	8.57	700	27,400	700	0
3b	25	7	1.24	14,200	12.62	5,000	20,000	1,600	0
4a	32	4	1.38	2,100	1.19	7,200	16,600	3,600	700
4b	36	5	1.25	1,500	0.93	3.900	20,700	700	0
5a	41	12	1.16	0	0.00	700	24,800	0	0
5b	53	7	0.94	0	0.00	2,300	65,100	2,300	0
6	60	9	0.73	0	0.00	700	5,300	2,300	0
2	0	4	1.15	7,700	3.63	3,800	17,800	2,300	0

77次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
11	86	22	0.96	1,700	3.63	1,700	29,000	800	0
12	108	4	0.96	700	0.25	0	9,100	0	0
13	112	9	0.89	2,000	1.58	1,300	12,200	0	0
14a	121	2	0.86	1,100	0.19	0	15,900	0	0
15	127	3	0.88	500	0.12	1,100	21,100	0	0
16	130	6	0.83	0	0.00	0	10,200	0	0
17a	136	7	0.83	3,500	2.09	2,100	10,600	0	0
18a	150	4	0.85	3,500	1.19	1,400	19,900	0	0
19a	158	5	0.86	700	0.31	700	15,400	0	0
20	167	6	0.74	800	0.31	0	12,600	0	0

79次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
2	0	5	1.19	7,000	4.27	700	17,200	700	0
3	5	6	0.96	4,600	2.66	3,000	20,800	1,500	0
4a	11	11	0.73	6,400	5.21	1,600	20,100	0	0
5	22	14	0.62	7,800	6,92	700	9,300	0	0
6	36	12	0.46	4,200	2.35	5,900	18,600	800	0
7	48	12	0.31	4,300	1.61	23,300	14,600	2,100	0
8a	60	3	0.48	3,800	0.56	3,800	20,100	0	0
8b	63	16	0.61	900	0.82	1,900	66,500	0	0

富沢遺跡から検出されたプラント・オパールの顕微鏡写真　(写真49)

No.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	74次	9	400
2	イネ	75次	3b	400
3	イネ	77次	17a	400
4	イネ	79次	5	400
5	ヨシ属	74次	9	400
6	ヨシ属	70次	10	400
7	タケ亜科（ネザサ節など）	71次	2	400
8	タケ亜科（クマザサ属）	77次	18a	400
9	不明	70次	9	400
10	不明	75次	3b	400
11	不明	79次	8a	400
12	イネ科の茎部起源	79次	7	400

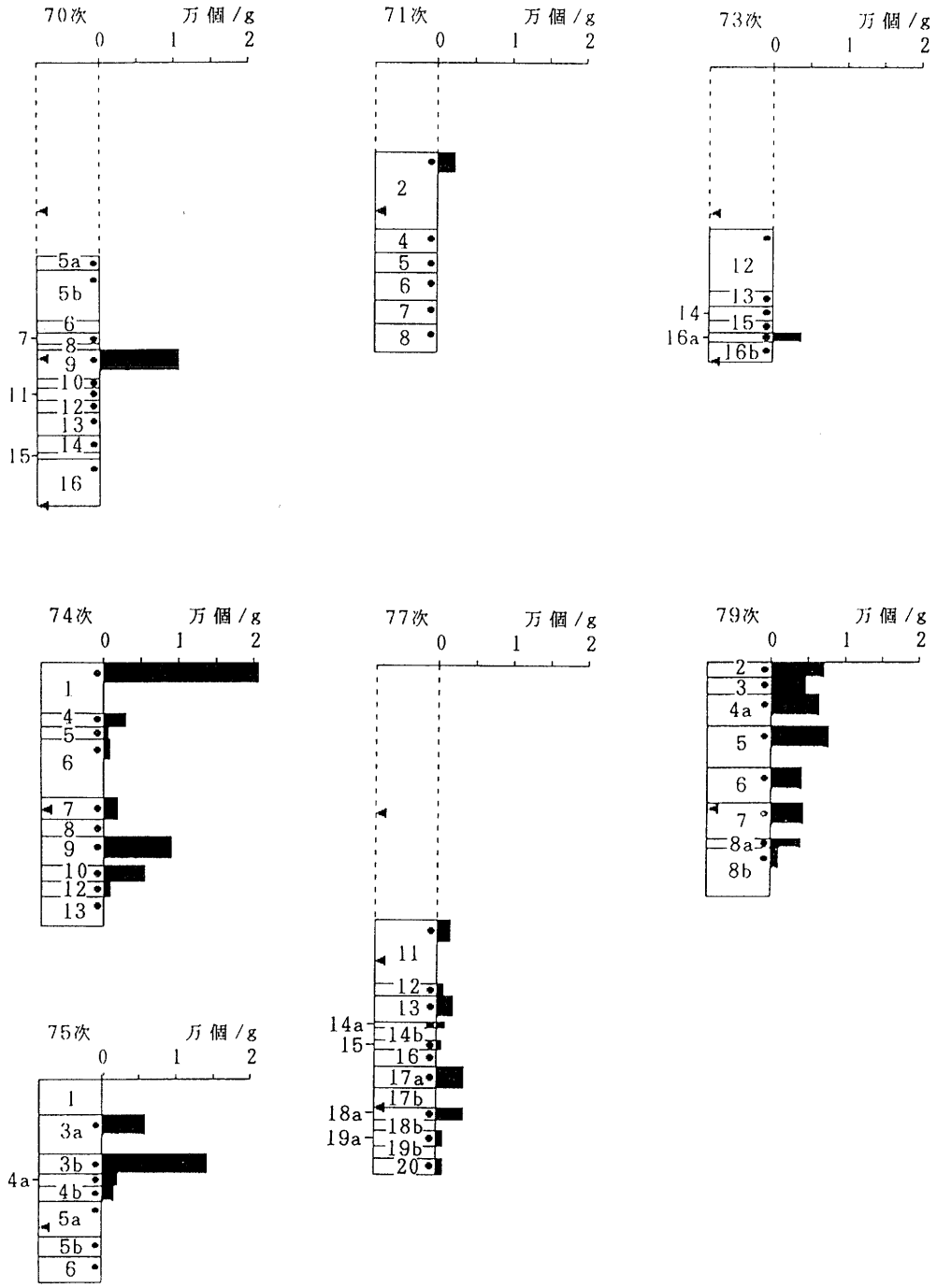
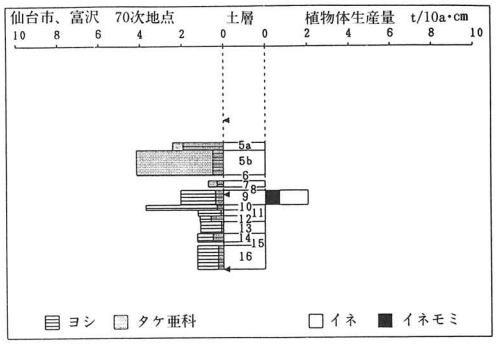
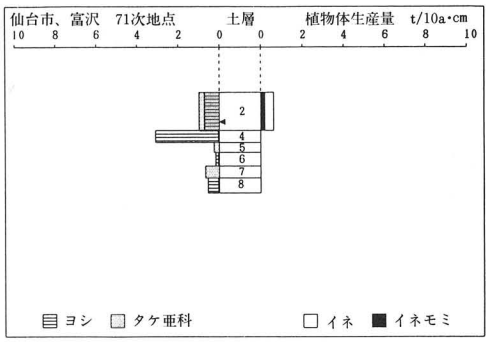
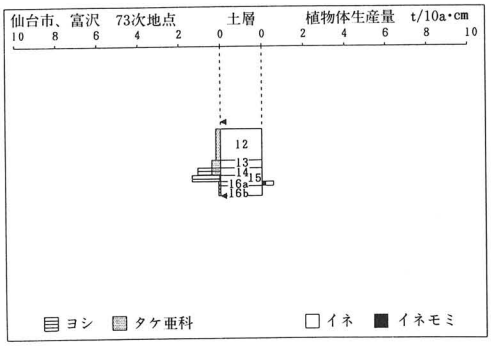


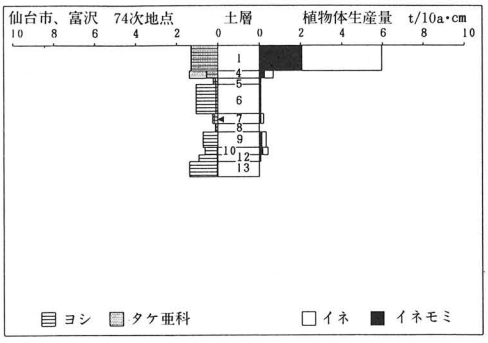
図2　イネのプラント・オパールの検出状況

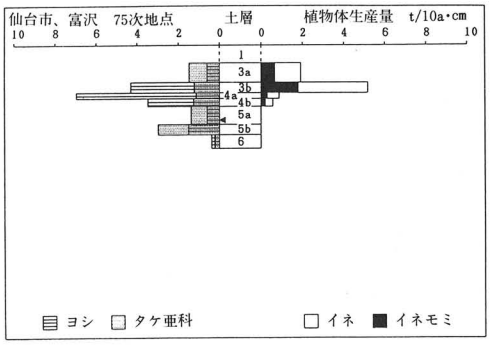
（注）◀印は50cmごとのスケール，・印は分析試料の採取箇所

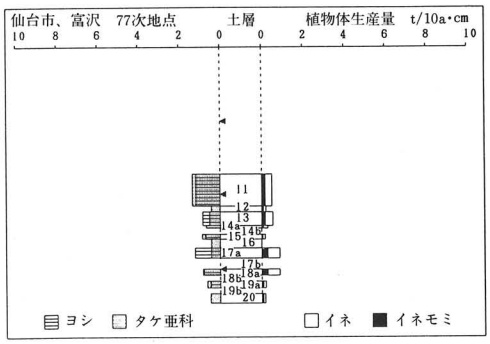












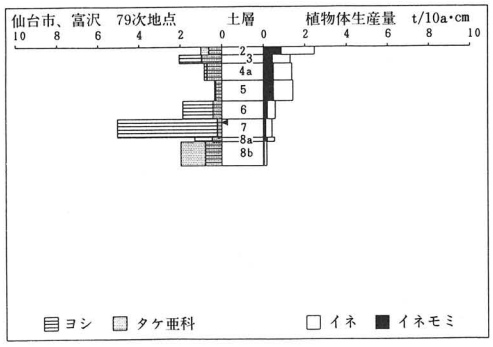


図3　おもな植物の推定生産量と変遷

（注）◀印は50cmごとのスケール

第4章　まとめ

今年度は、富沢遺跡で10地点の調査が行われた。本書では、このうち8地点の調査成果の報告を行った。ここでは、各時代の検出された遺構、遺物の概要と、これまでの調査との関連性や今後の課題を述べておきたい。

1．旧石器時代

・第74次調査で、後期旧石器時代の腐植層の調査が行われた。遺構や人工遺物、樹木や毬果などの自然遺物は検出されなかったが、花粉分析では、その組成から基本層36～39層は第30次調査、第58次調査で検出された旧石器時代の層とほぼ同時代の堆積物と考えられた。

2．縄文時代

・第72次調査では、時期は明確でないが縄文時代の河川跡（ＳＲ10・11）が検出されている。これらは、調査区周辺に展開している谷地形の形成と関連しているものと考えられ、調査区周辺の地形形成を把握するうえで、貴重な調査となった。

・第75次調査では、基本層７層・８層から早期末葉～前期初頭以降の遺物が出土している。この遺物包含層は、近接する第24次調査基本層Ⅺ層と対応する可能性がある。

3．弥生時代

・第70次調査、第73次調査、第74次調査、第77次調査で水田跡が検出されている。各水田跡からは時期を決める遺物は出土していないが、これまでの調査成果からそれらの所属時期は以下のように考えられた。

桝形囲式期あるいはそれ以前――70次９層水田跡・77次19ａ層水田跡

桝形囲式期――――――――73次16ａ層水田跡・74次12層水田跡・77次18ａ層水田跡

十三塚式期～桝形囲式期――――77次17ａ層水田跡

十三塚式期――――――――74次７層水田跡

このうち、77次19ａ層水田跡は、15次調査12層水田跡に対応すると推定されるが、18ａ層水田の耕作による影響を受けており、明確な対応関係については今後の課題とされる。

・第70次調査９層水田跡から出土した石庖丁と大型板状安山岩製石器の使用痕分析が行われ、ともにシリカ含有量の高いイネ科植物などに対して機能したことが知られた。大型板状安山岩製石器については、今回が使用痕分析の２例目であり、以前の分析結果と同様、イネ科植物の

切断に使われたことが考えられ、石庖丁とは機能を異にし、「鎌」のような使われ方をした石製農具であると推定される。今後、実験による使用痕の形成過程の把握や、分析例を増やしていくことが必要とされよう。

4．古墳時代

・第76次調査、第77次調査で水田跡が検出されている。これらは、ともに15次７ａ層水田跡、35次15層水田跡に対応する古墳時代中期南小泉式期の水田跡であり、水田域の広がりが確認された。

5．平安時代

・第74次調査、第75次調査、第79次調査で水田跡が検出されている。なかでも79次調査地点は富沢遺跡の北端部にあたり、平安時代の水田域の広がりを示している。

6．中世・近世

・第77次調査で15世紀～17世紀初頭の居住域が確認されている。周辺での調査成果から、この時期の生産域と居住域の関係が明らかにされるとともに、今回の調査では、貯蔵施設と推定される竪穴遺構が３基検出され、そのうち１基（ＳＩ1）からはコメ、種子、縄や木簡、烏帽子の可能性のある漆製品が出土するなど、貴重な成果となった。

富沢遺跡第70次調査

層位・遺構	須恵器	かわらけ	陶器	磁器	瓦	石器	石製品	木製品	杭	種子	材
3層						1					
9層水田跡						2					1
10層						1	1			1	
16層										1	
SD1	1	1	16	24	1		2	1			
SD3			2						26		
SX−4			1								
層位不明				6		3		2		2	
計	1	1	19	30	1	7	3	3	26	4	1

富沢遺跡第71次調査

層位・遺構	須恵器	陶器	土師質土器
1層	1	3	1
計	1	3	1

富沢遺跡第72次調査

層位・遺構	縄文土器
SR4	3
SR10	2
15b層	1
19層	2
攪乱	7
計	15

富沢遺跡第73次調査

層位・遺構	土師器（ロクロ）	赤焼土器	須恵器？	陶器	磁器	石製品	木製品	杭
1層				1	1			
2層		1		1				
4層			1					
5層	1	1						
6層		3						
7層水田跡						1		
16a層							1	5
計	1	5	1	2	1	1	1	5

富沢遺跡第75次調査

層位・遺構	縄文土器	土師器（ロクロ）	須恵器	陶器	磁器	石器
1層				1		1
2層		1		4	7	
3層		8	1	1		
3a層		24	1			
3b層		1				
7層	37					
8層	2					
壁面	4		1			
表採			1		2	
計	43	34	4	6	9	1

富沢遺跡第74次調査

層位・遺構	土師器			土師器？	赤焼土器	赤焼土器？	須恵器	須恵器？	かわらけ？	陶器	磁器	瓦	石器	石製品	鉄製品	銅製品	土師質土器	瓦質土器	鉄滓
	非ロクロ	ロクロ	？																
1・2層	1	6	18	12	1	2	4	1	1	62	68	16	3	1	5	1	1	2	
4層水田跡		1								2									1
30層上面													1						
側溝		1																	
計	1	8	18	12	1	2	4	1	1	64	68	16	4	1	5	1	1	2	1

富沢遺跡第77次調査

層位・遺構	土師器		土師器	赤焼土器	須恵器	須恵器	かわらけ	かわらけ	陶器	磁器	瓦	石器	石製品(礫も含む)	鉄製品	銅製品	木製品	骨(馬歯)	焼粘土	種子	昆虫	繩
	ロクロ	?	?			?		?													
1層		1							5	3			1								
2層				1		1			20	33		1			1		1				
3層	1	1			1			1	11	1			3		1			9			
4層	4	3	1		4		2		5	3			3	1	1						
5層	12	4			1				4				1								
6層	2	4			3	1			1				5								
7層		2			1																
9層					1											1					
10層		1																			
19層																1					
SD1	1																				
SD2	1	1																			
SD4	3	4			1				11	2	1		13							1	
SI1			1						3				17			7			多数	多数	1
SI2																					
SI3	1	2			1	1			11				4			12				多数	
SK4													1								
SK2													1								
層位不明								1	25	15			15			2					
計	25	23	2	1	13	3	2	2	96	57	1	1	64	1	3	23	1	9	多数	多数	1

富沢遺跡第79次調査

層位・遺構	土師器			赤焼土器	須恵器	磁器	木製品	杭	木材(自然木も含む)	昆虫	種子
	非ロクロ	ロクロ	?								
1層						1					
2層	1	1	3	1	1						
3層			3	2							
4層											
5層　水田跡			2	4							1
6層　水田跡		1	2				1	53	113	9	4
計	1	2	10	7	1	1	1	53	113	9	5

－引用文献－

入間田・豊田・遠藤　1970 「東北地方における北条氏の所領」『日本文化研究所報告』別巻第７集

入間田宣夫　1978 「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』

太田昭夫他　1991 『富沢遺跡第30次調査報告書第Ⅰ分冊（縄文～近世編）』仙台市文化財調査報告書第149集

恵美・大友他　1990 『名取市高舘川上遺跡』名取市文化財調査報告書第25集

梶原・阿子島　1981 「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その２）」『考古学雑誌』第67巻第１号

加藤・阿部　1980 『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』－観音沢遺跡－第72集　宮城県教育委員会

工藤哲司他　1984 『富沢水田遺跡１』仙台市文化財調査報告書第67集

工藤哲司他　1988 『富沢遺跡第24次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第113集

工藤哲司・荒井格　1990 『仙台市中在家南遺跡出土ノ木製品』考古学ジャーナル第323号

斎野裕彦他　1987 『富沢遺跡第15次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集

佐藤甲二　1988 『富沢遺跡第28次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集

佐藤洋　1991 「富沢遺跡第57次調査報告書」『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書第152集

佐藤洋　1983 『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第58集

主浜光朗　1988 『泉崎浦遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第119集

須藤隆　1984 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究１』－考古学篇－

須藤・阿子島　1984 「４．富沢水田遺跡泉崎地区出土石庖丁」『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査概報－Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第67集

仙台農耕文化勉強会　1990 「水田跡の基本的理解－仙台における水田跡の検出と認定」『第３回東日本の水田跡を考える会－資料集』東日本の水田跡を考える会

芹沢長介編　1979 『聖山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊２

芹沢・梶原・阿子島　1981 「実験使用痕研究とその可能性（東北大学使用痕研究チームによる研究報告その４）」『考古学と自然科学』第14号

田中則和　1984 『山口遺跡Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第61集

東北歴史資料館　1983 『東北の中世陶器』

中富洋　1991 『山口遺跡第10次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第151集

平間亮輔他　1985 『松並平遺跡』福島県白河建設事務所　福島県棚倉町教育委員会

平間亮輔　1988 「平安時代の条里型土地割について」『日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム資料集

平間亮輔　1989 『富沢遺跡第35次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集

藤原・杉山　1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』第17号

岡村道雄他　1984 『里浜貝塚Ⅲ』　東北歴史資料館資料集９

山田しょう　1986 「使用痕研究の現状と針路」『歴史』第67輯

吉岡・篠原　1989 『富沢遺跡・泉崎浦遺跡－仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ』仙台市文化財報告書第126集

Keeley, L.H. 1980 Experimental Determination of Stone Tool Uses:A Microwear Analysis. Univ. of Chicago Press.

発掘調査参加者

相沢かほる	相原友子	青山諒子	阿部篤	阿部みのる
阿部美代寿	池田恵美子	砂金正男	石川たみえ	石坂節子
石田幸嗣	泉美恵子	板橋栄子	板橋喜恵子	板橋スエノ
板橋みつよ	伊藤房江	岩井レイ子	植野敏江	植野美登子
梅津洋子	遠藤繁	遠藤とき子	小野辰夫	小野つや子
鬼沢悦子	小野寺千枝子	小山慶助	大石多恵子	太田兼也
大槻明美	大槻京子	大庭チエ子	加嶋みえ子	柏木ふじ子
金山幾代	菊池則子	北村宗司	木村俊子	窪田百合子
栗原皎子	車田敦	黒沢幸子	桜井芳子	斎藤一彦
斎藤紀子	斎藤由美子	佐藤静子	佐藤みよ	佐竹カツヨ
佐竹さく子	佐野弘	鈴木かつ子	鈴木幸子	須賀栄子
菅井君子	菅井清子	菅井美枝子	菅谷裕子	菅原美枝子
武田芳子	高橋勝恵	高橋健寿	高橋美香	田中さと子
田村節子	千葉千枝	千葉正昭	土田幸子	富田是
永野泰治	沼田綾子	蓮沼英子	蓮沼秀子	畠中真知子
早川裕子	早坂みつえ	針生昭三	樋口より子	細谷清子
松野順子	松本和美	馬目靖子	水野信子	宮嶋都
村井二郎松	森みほ子	山岸忠一	山田やす子	山田千代子
横田きくよ	横山美智子	米倉節子	渡辺イチ子	渡辺洋子
渡辺好恵				

写 真 図 版

富沢遺跡第70次調査

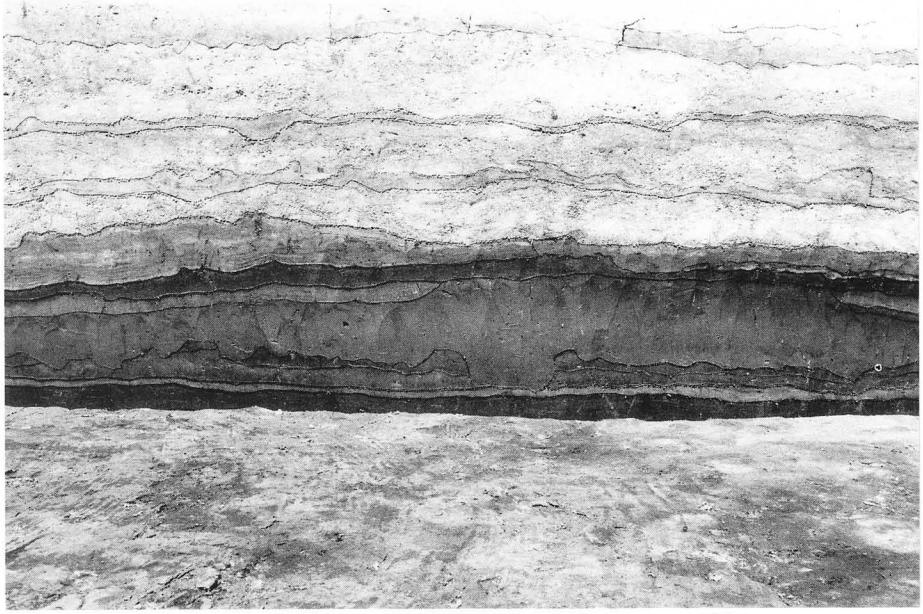


写真１
９層水田跡大畦断面

写真２
９層水田跡検出状況

写真３
15層溝状遺検出状況

写真４
　石庖丁出土状況

富沢遺跡第71次調査

写真５
　基本層序

富沢遺跡第72次調査

写真６
　１号河川跡（足跡）
　検出状況

写真７
10号河川跡
樹木検出状況

写真８
調査区東壁断面

写真９
調査全景

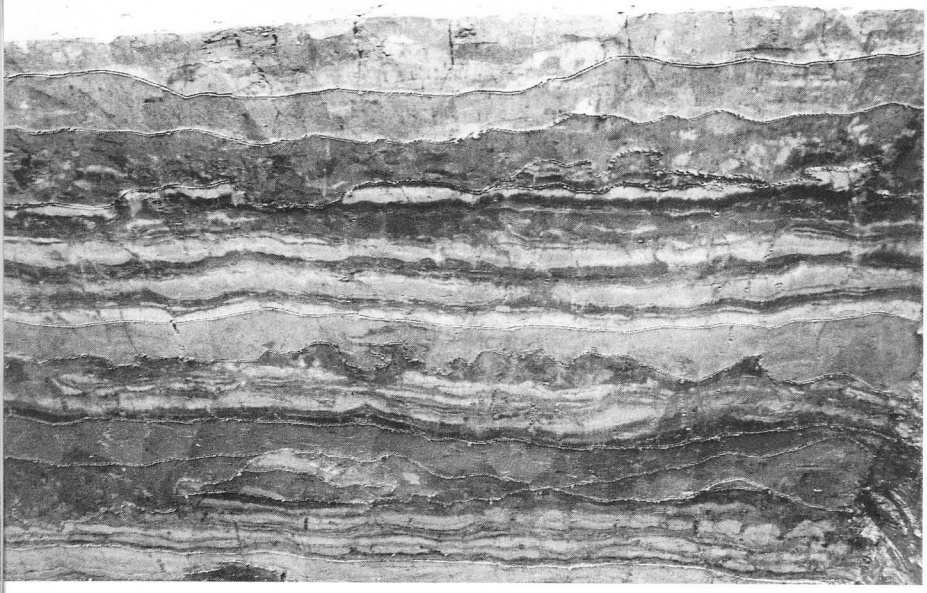


写真10
土層断面

写真11
7層水田跡検出状況

写真12
杭断面

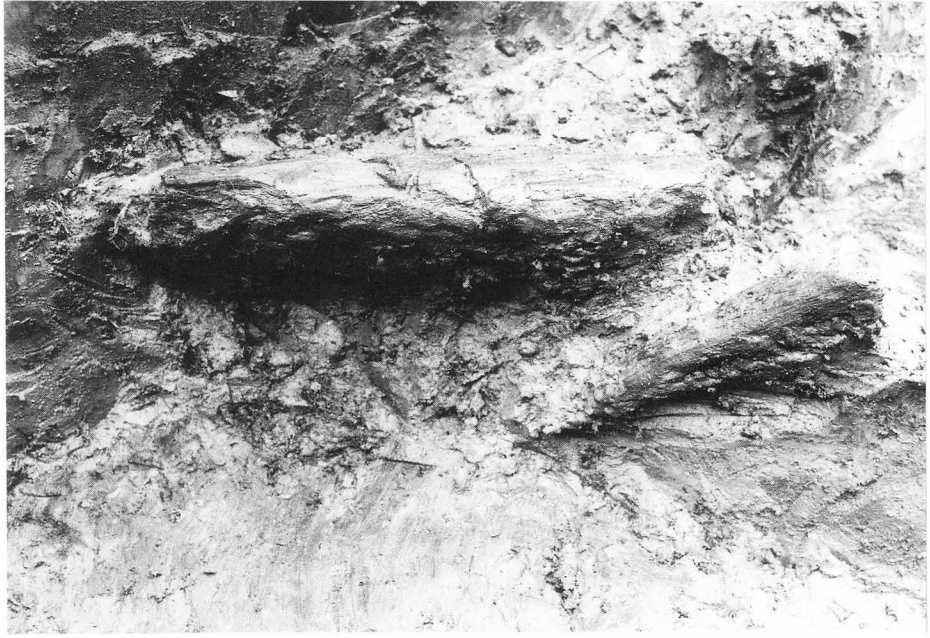


写真13
木製農具出土状況

富沢遺跡第74次調査

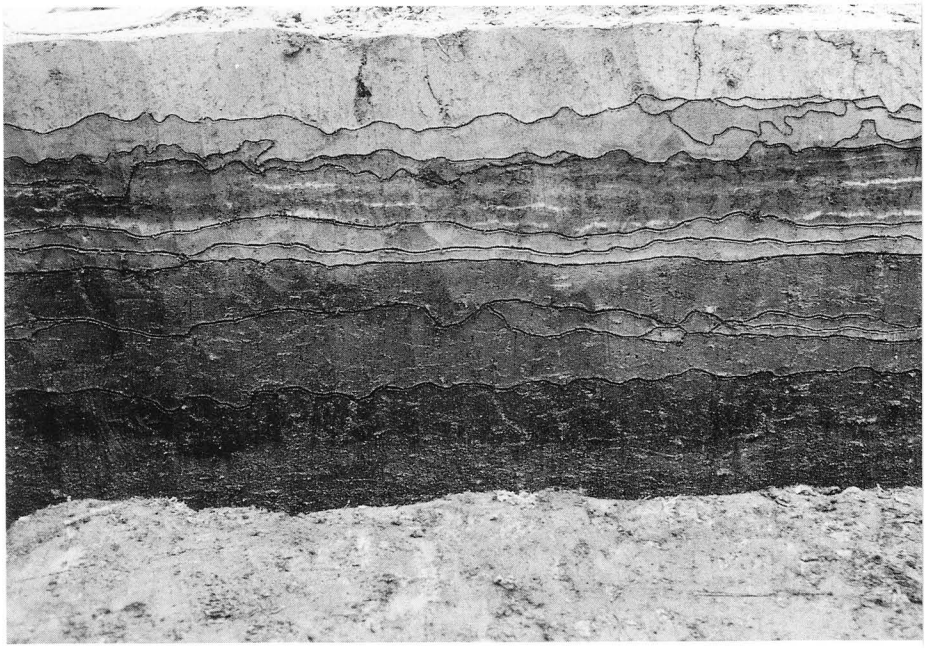


写真14
基本層序
（南壁東端部）

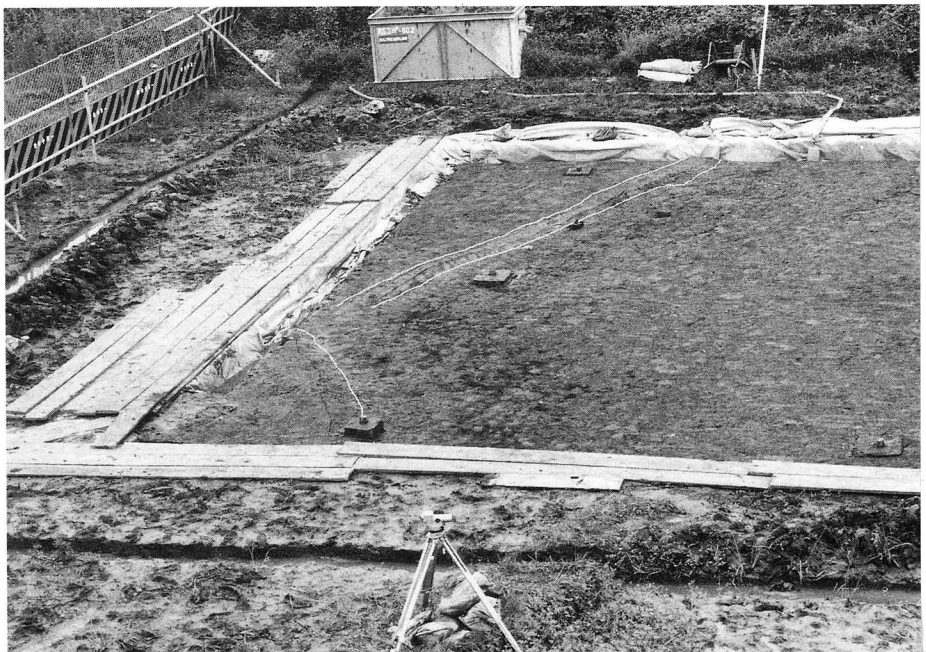


写真15
４層水田跡検出状況
（西部、畦畔No.２・３、南より）

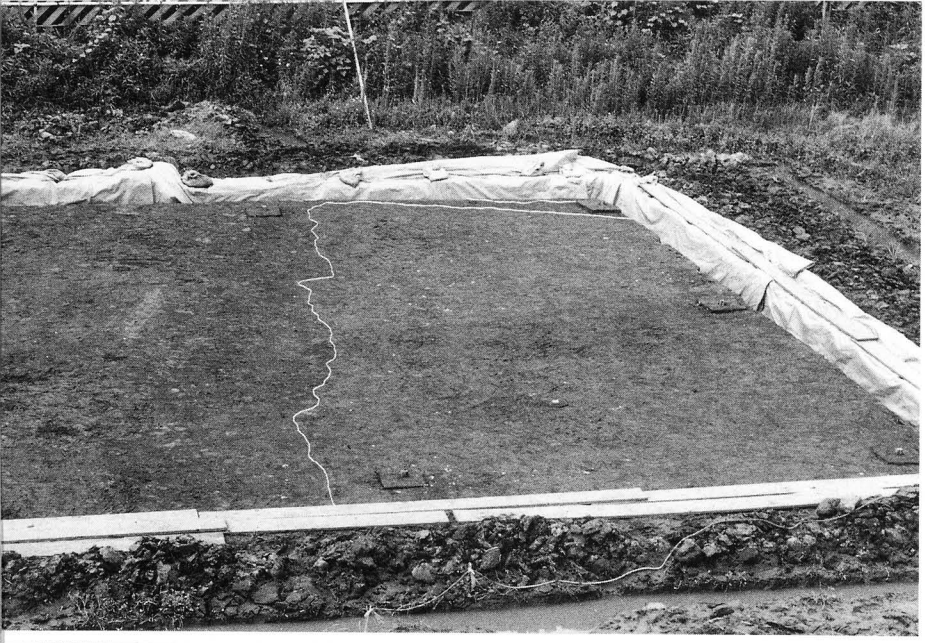


写真16
5層水田跡確認状況
（東部、畦畔No.3・4、南より）

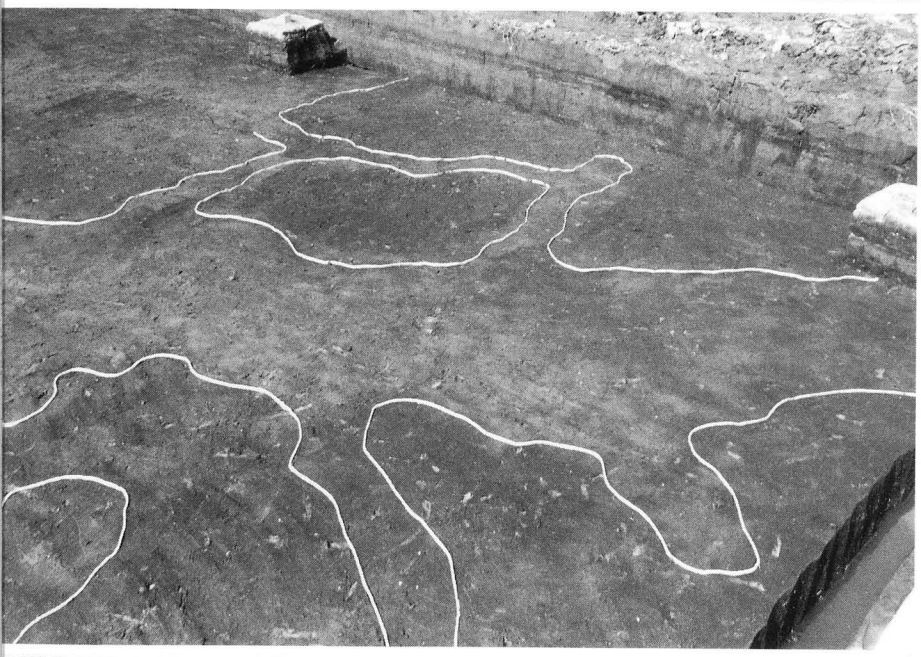


写真17
10層上面確認状況
（南東部、南西より）

写真18
10層上面検出状況
（南より）

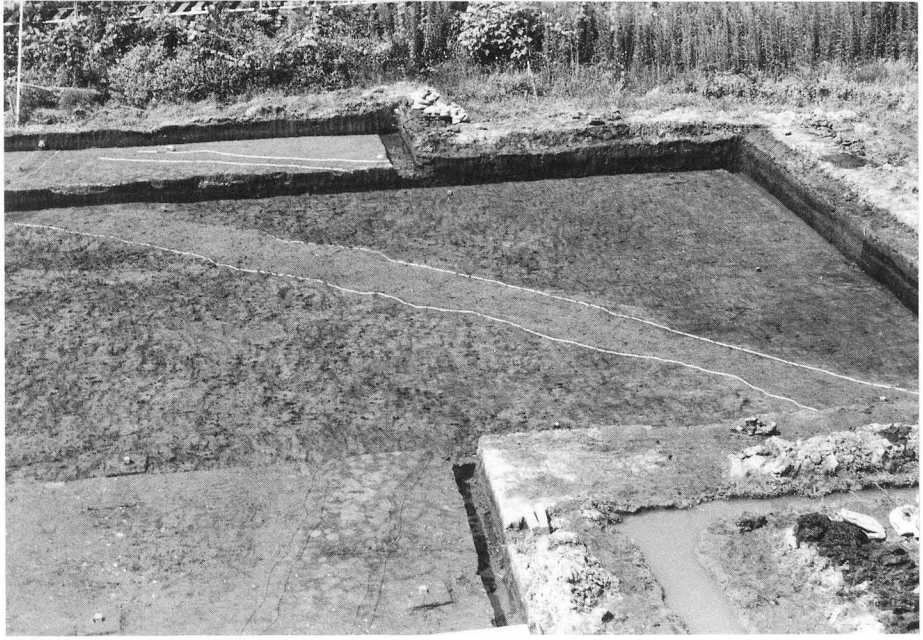


写真19
12層水田跡確認状況
（南から、奥は４層水田跡
手前は５層水田跡
検出状況）

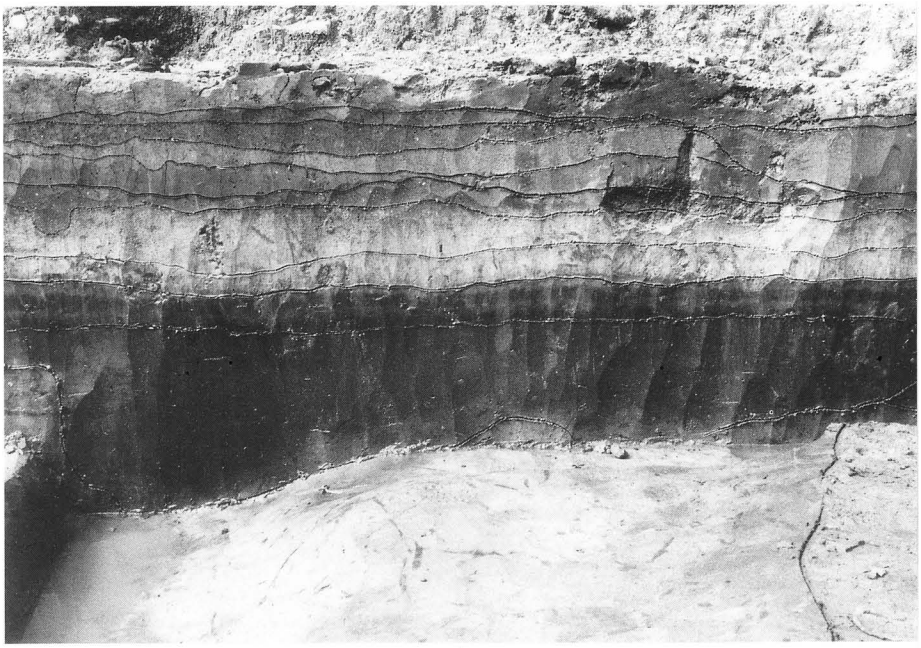


写真20
基本層序

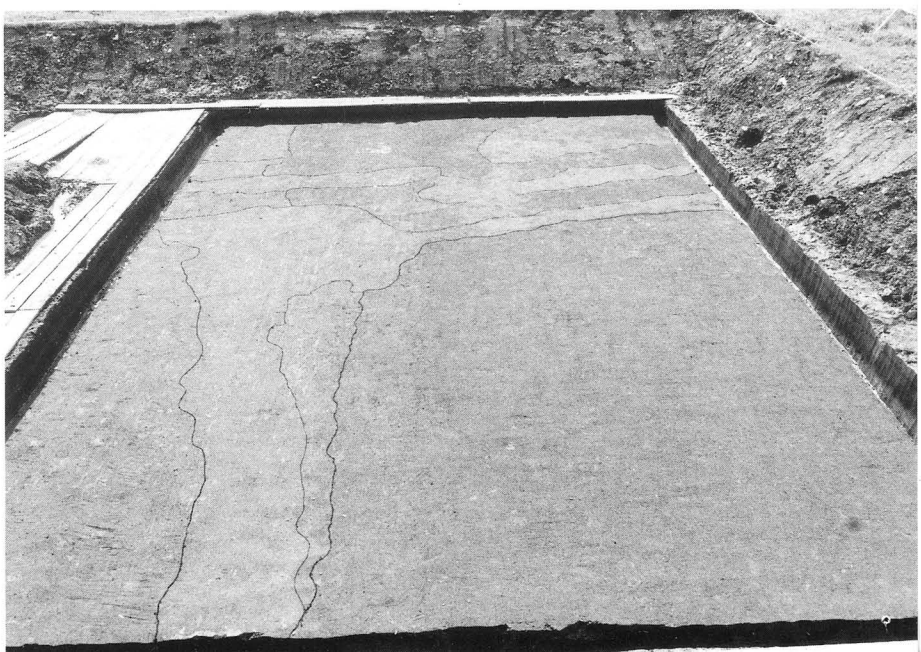
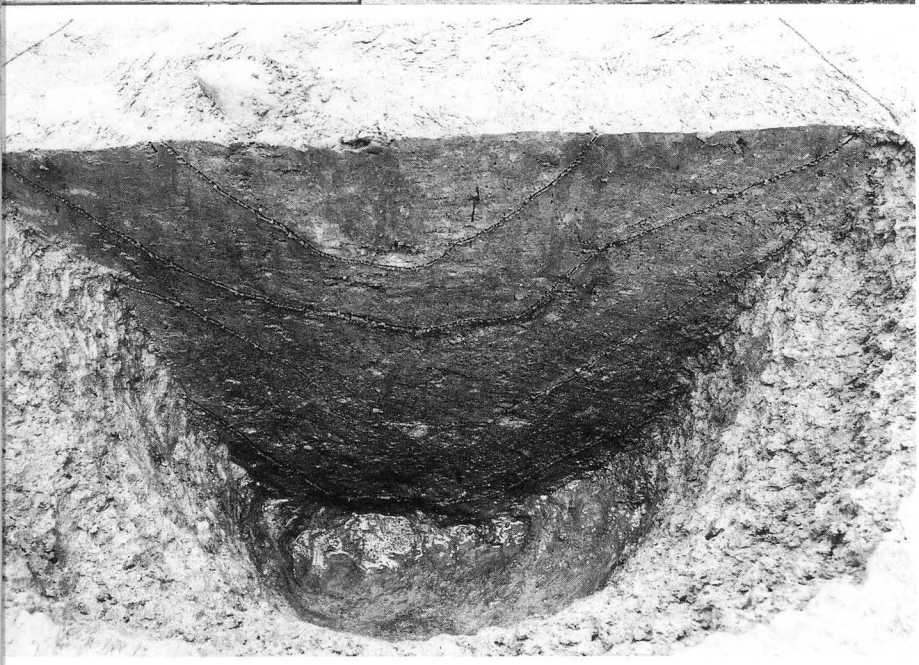


写真21
３ｂ層
擬似畦畔検出状況

写真22
調査区全景



富沢遺跡第77次調査

写真23
ＳＫ２断面
（西より）

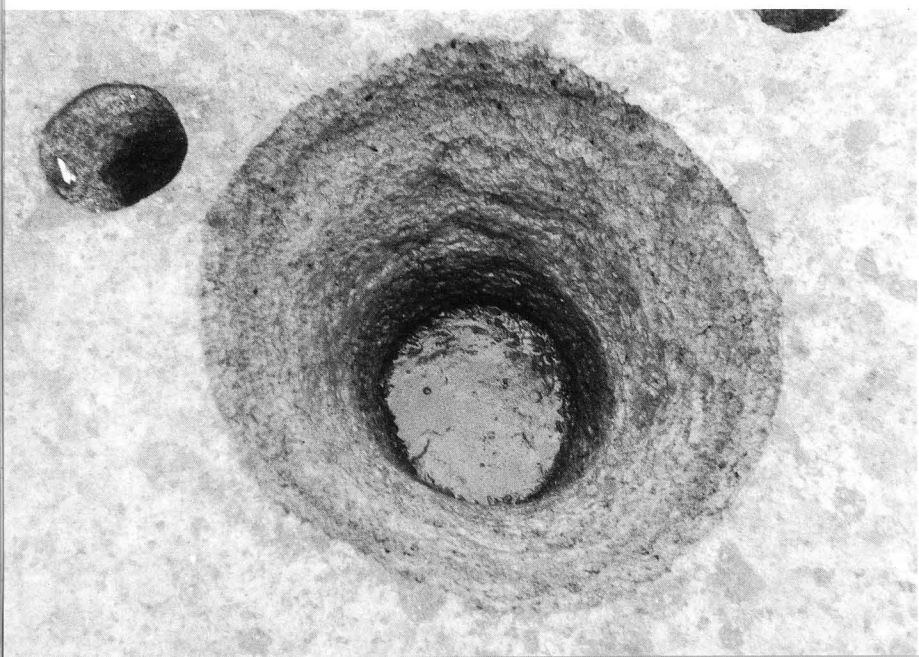


写真24
ＳＫ２完掘全景

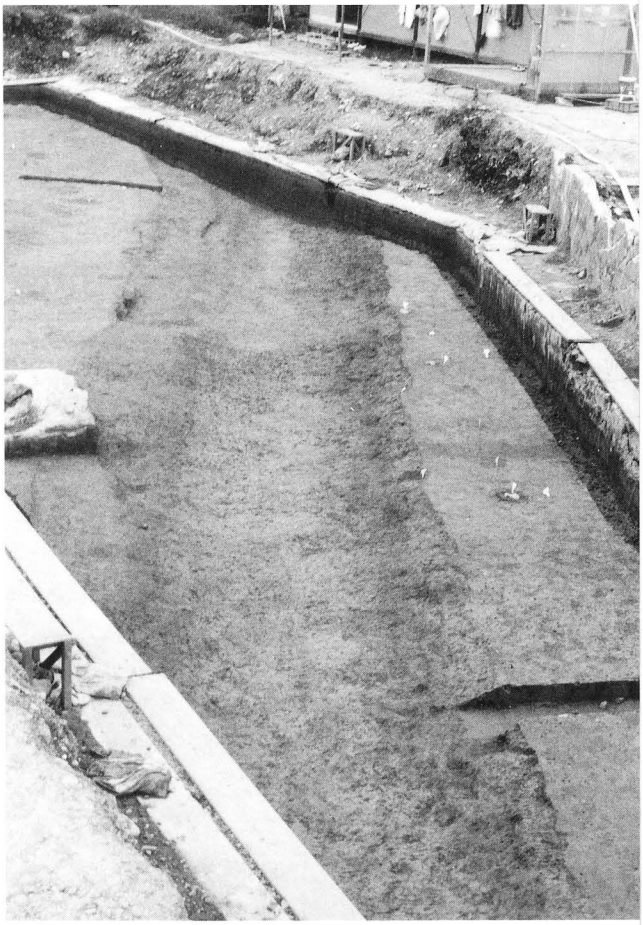


写真25
ＳＤ４完掘全景
（東より）

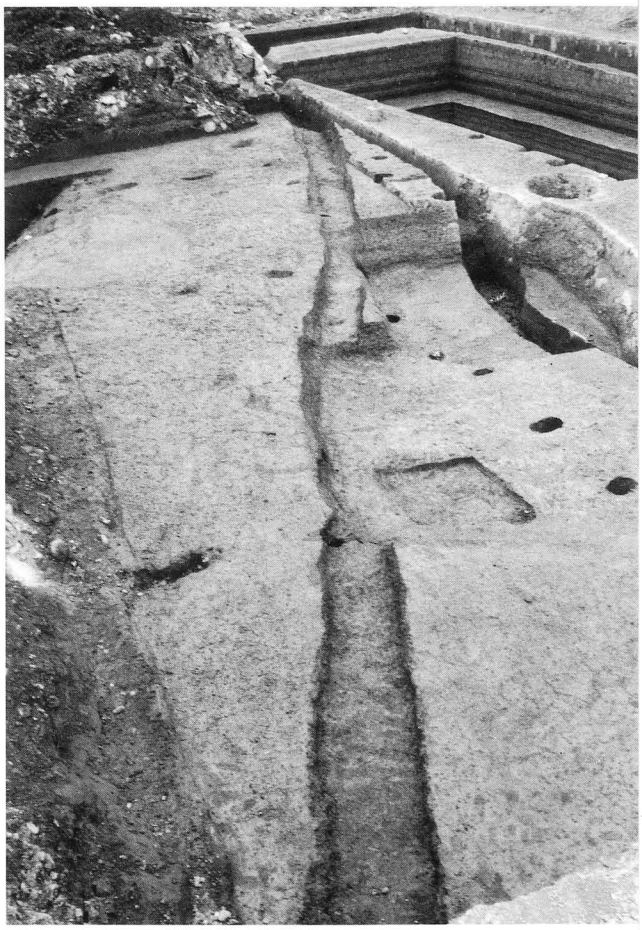


写真26
ＳＤ２完掘全景
（東より）

写真27
ＳＤ４遺物出土状況

写真28
南区ＳＩ１・ＳＩ２
確認状況

写真29
ＳＩ１完掘全景
（西より）

写真30
ＳＩ２完掘全景
（東より）

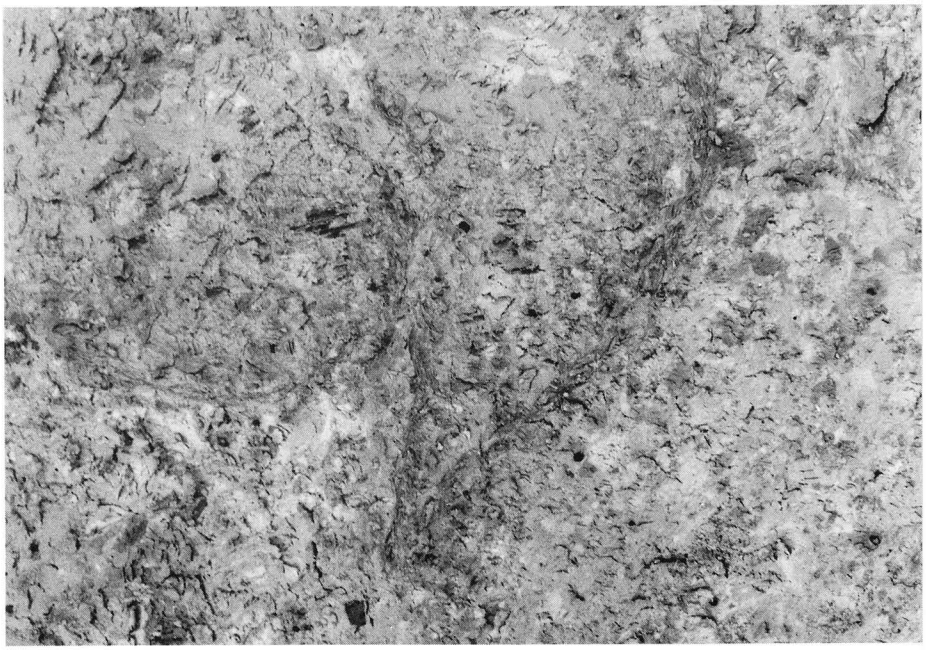


写真31
ＳＩ１遺物出土状況

写真32
ＳＩ１木簡出土状況

写真33
ＳＩ３断面
（北より）

写真34
ＳＩ３遺物出土状況
（北より）

写真35
ＳＫ５確認状況
（南より）

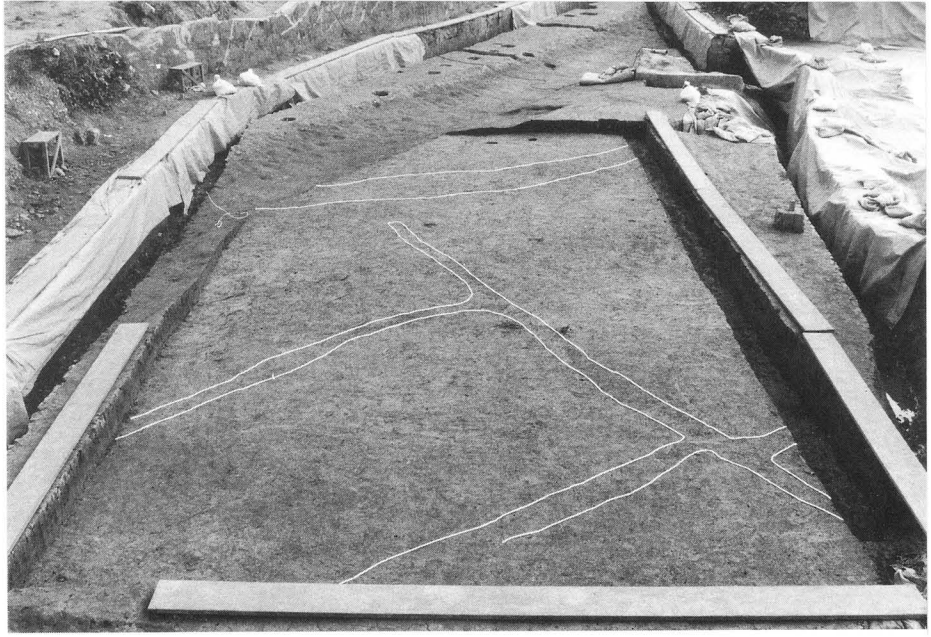


写真36
西区10層水田跡
（西より）

写真37
東区10層水田跡
（西より）

写真38
東区17ａ層水田跡
（東より）

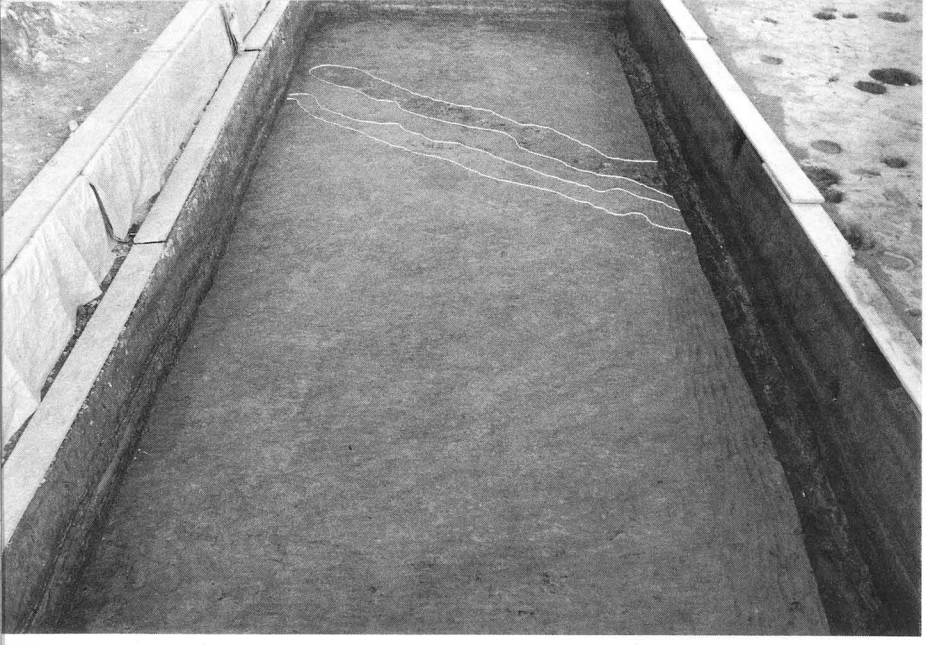


写真39
東区18ａ層畦畔・
17ａ層擬似畦畔Ｂ
（西より）

写真40
東区19ａ層水田跡
（西より）

富沢遺跡第79次調査

写真41
調査風景（西より）

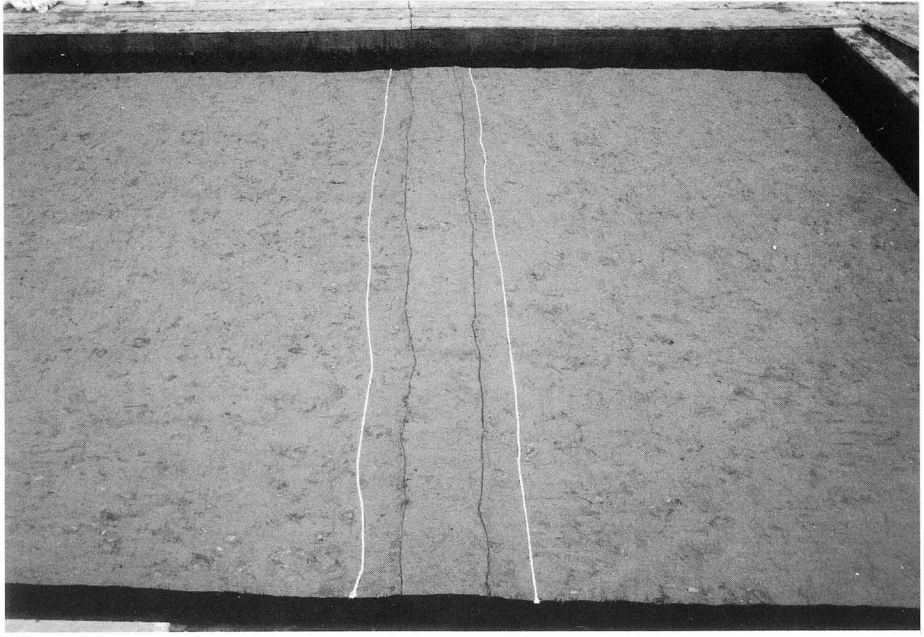


写真42
5 層水田跡
（北より）

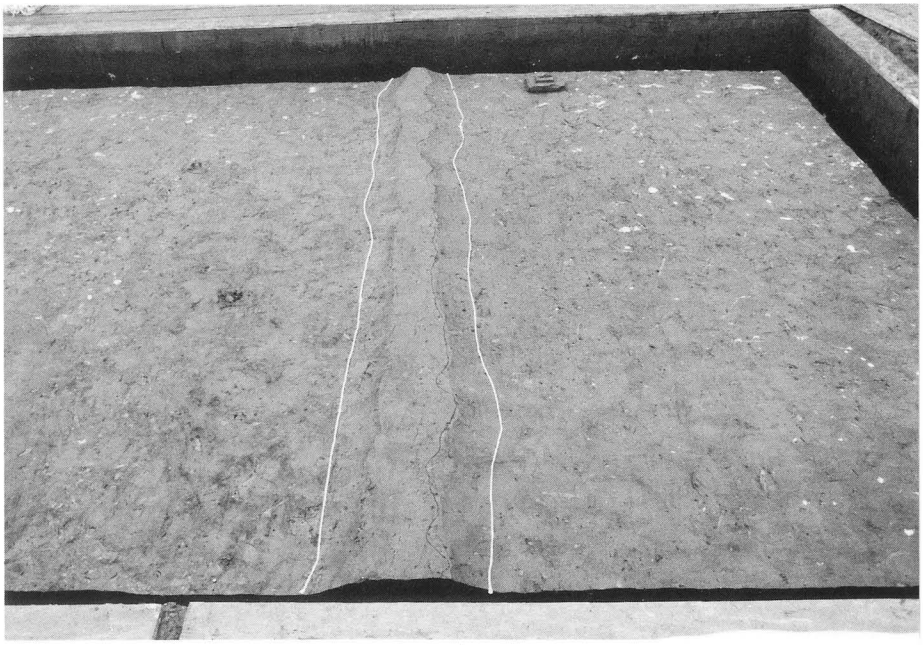


写真43
6 層水田跡
（北より）

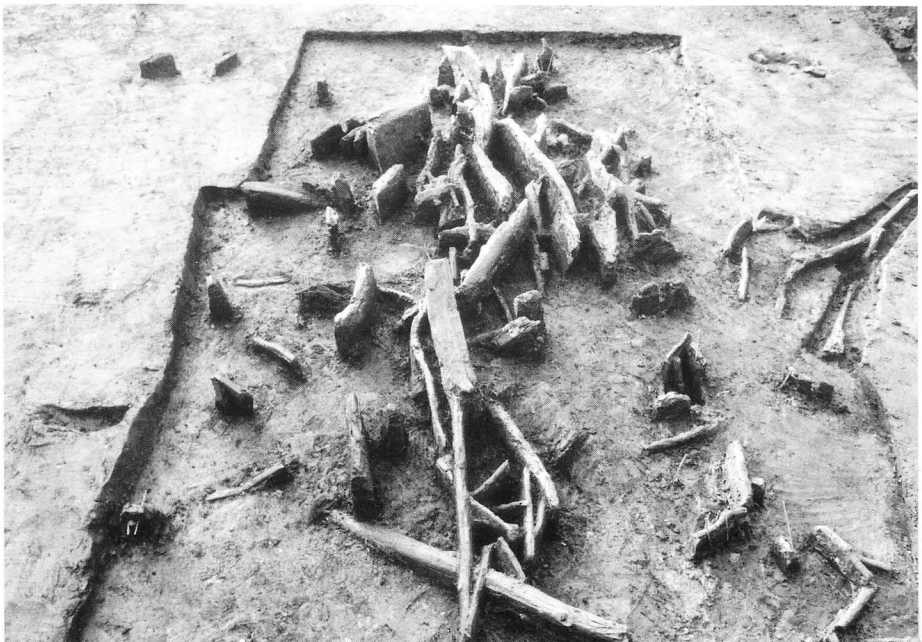
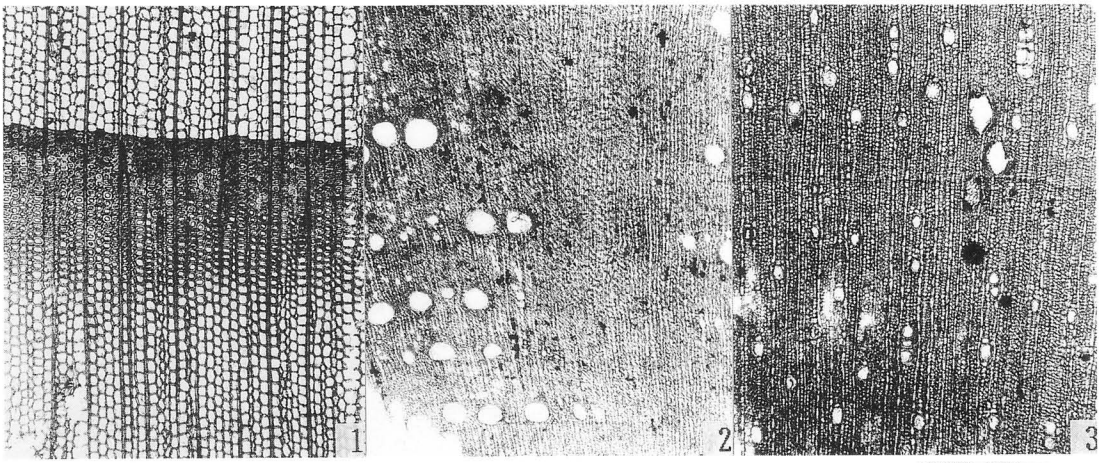


写真44
6 層水田跡木材群
（東より）

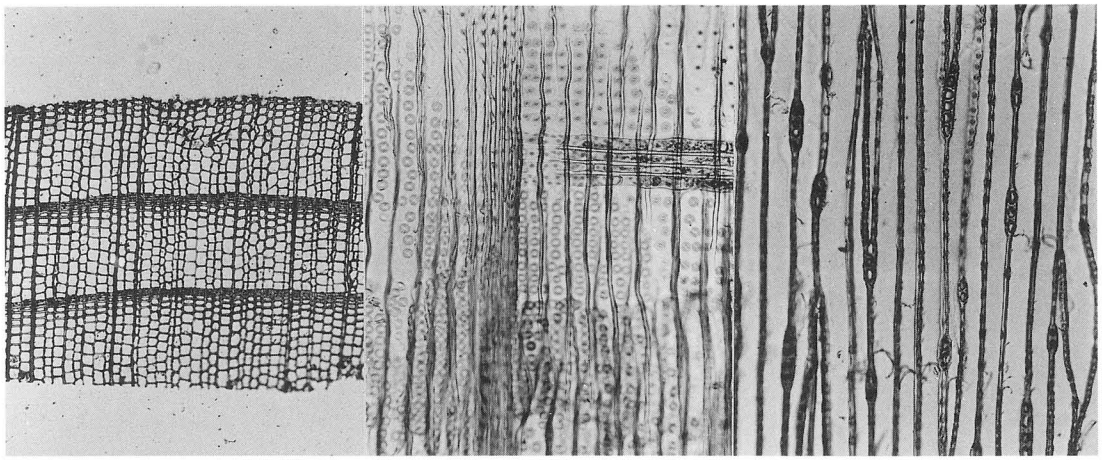
写真45
8 a 層水田跡
確認状況(北東より)

写真46
8 a 層水田跡東半部
(南西より)

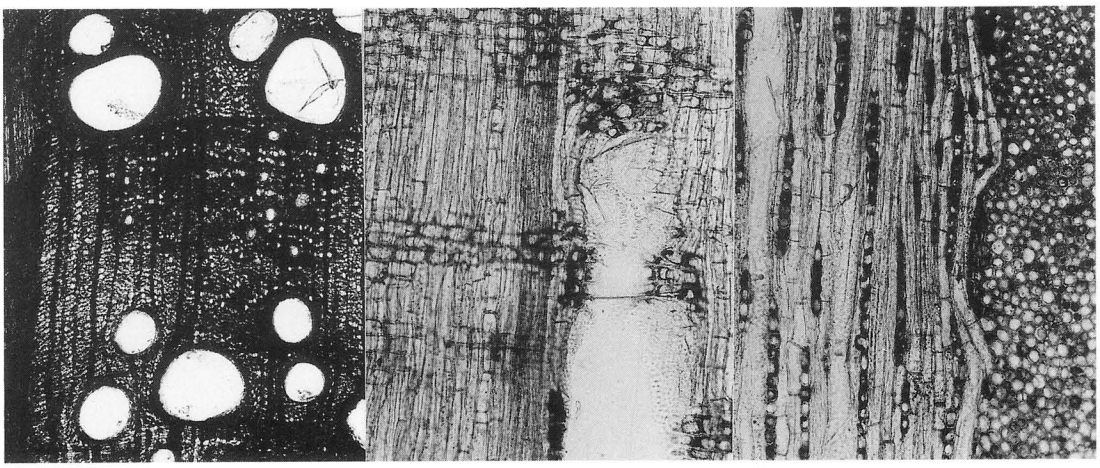


1．モミ属の一種（No.1）、2．コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種（No.3）
3．シラキ（No.11）（写真はすべて木口面）

写真47　材の顕微鏡写真(1)　パリノサヴェイ株式会社



1a　1b　1c



2a　2b　2c

1．No.5 木簡、イヌガキ、2．No.4 鋤コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種
a：木口×40　b：板目×100　c：板目×100　樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、柾目では左から右

写真48　材の顕微鏡写真(2)　髙橋利彦

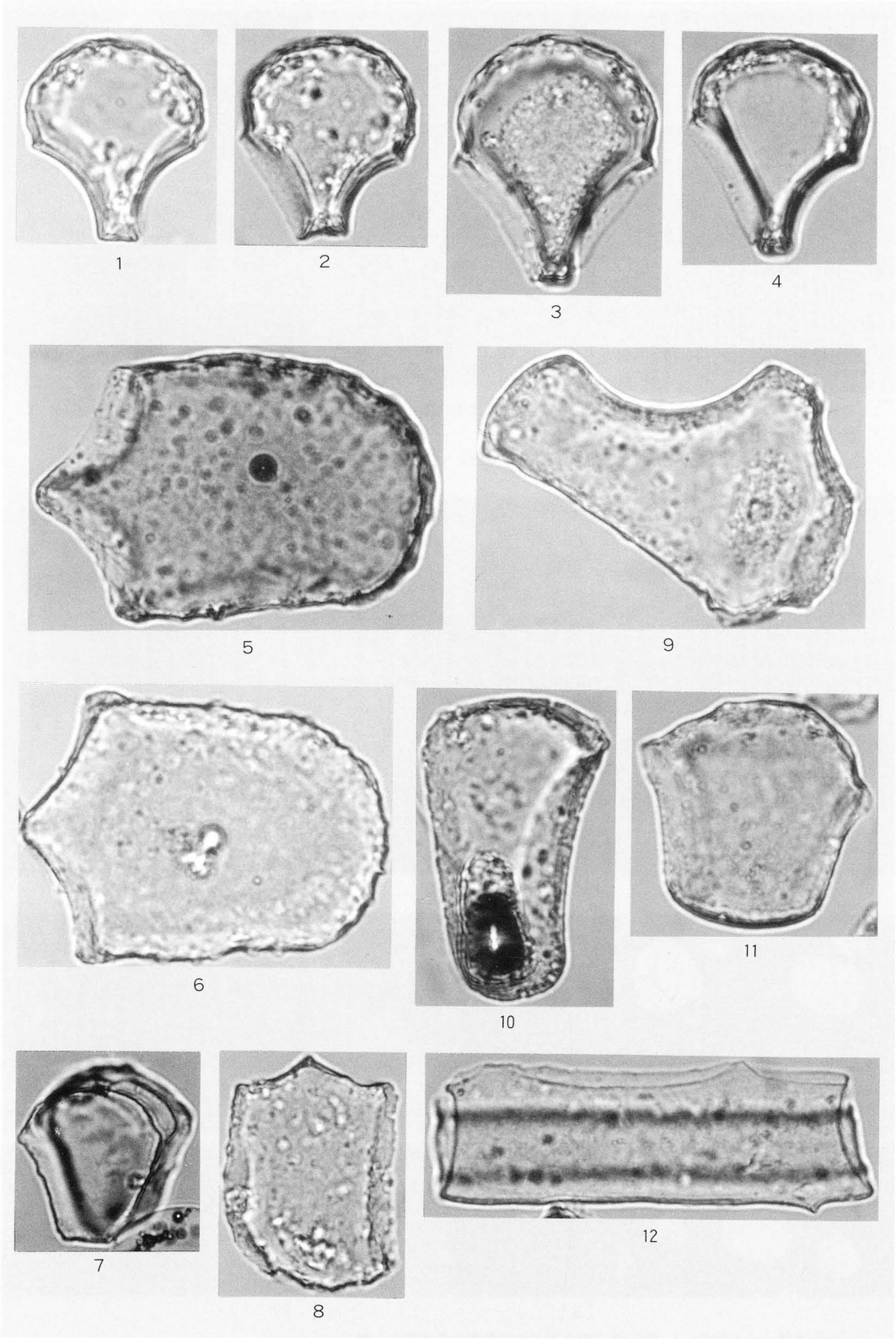
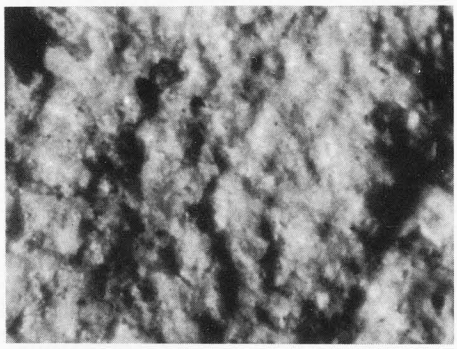
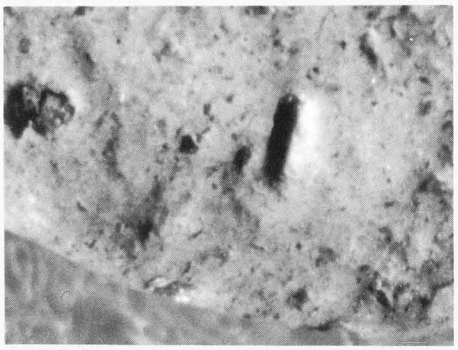


写真49　プラント・オパール顕微鏡写真

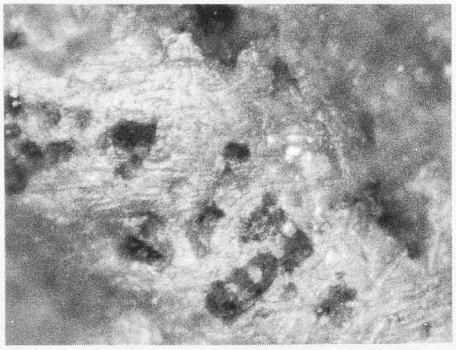


A：20倍
（実体顕微鏡）　1mm

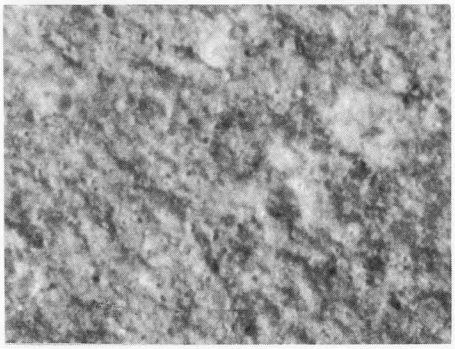


B：20倍
（実体顕微鏡）　1mm

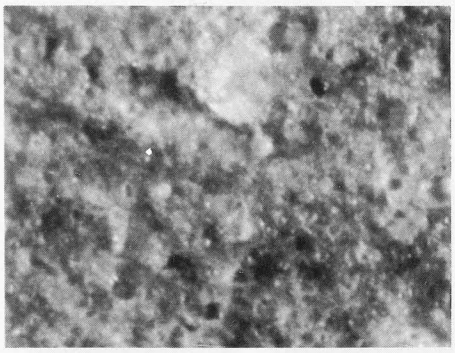
C：85倍
（金属顕微鏡）　0.2mm



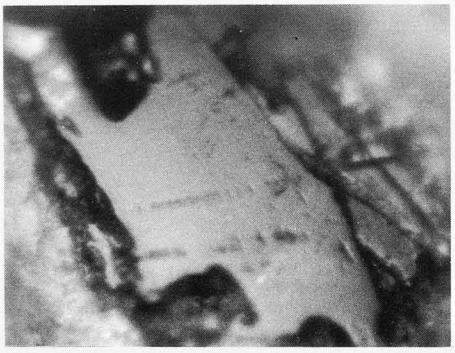
D：170倍
（金属顕微鏡）　0.1mm



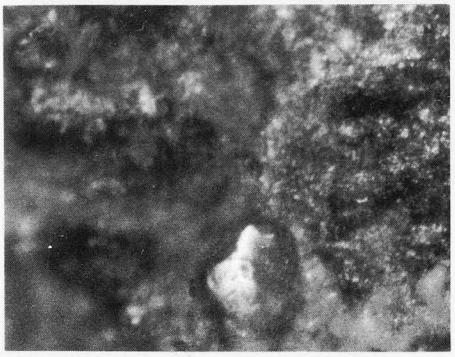
E：20倍
（実体顕微鏡）　1mm



F：50倍
（実体顕微鏡）　0.4mm



G：170倍
（金属顕微鏡）　0.1mm



H：85倍
（金属顕微鏡）　0.2mm

写真50　石器表面及び光沢面の顕微鏡写真

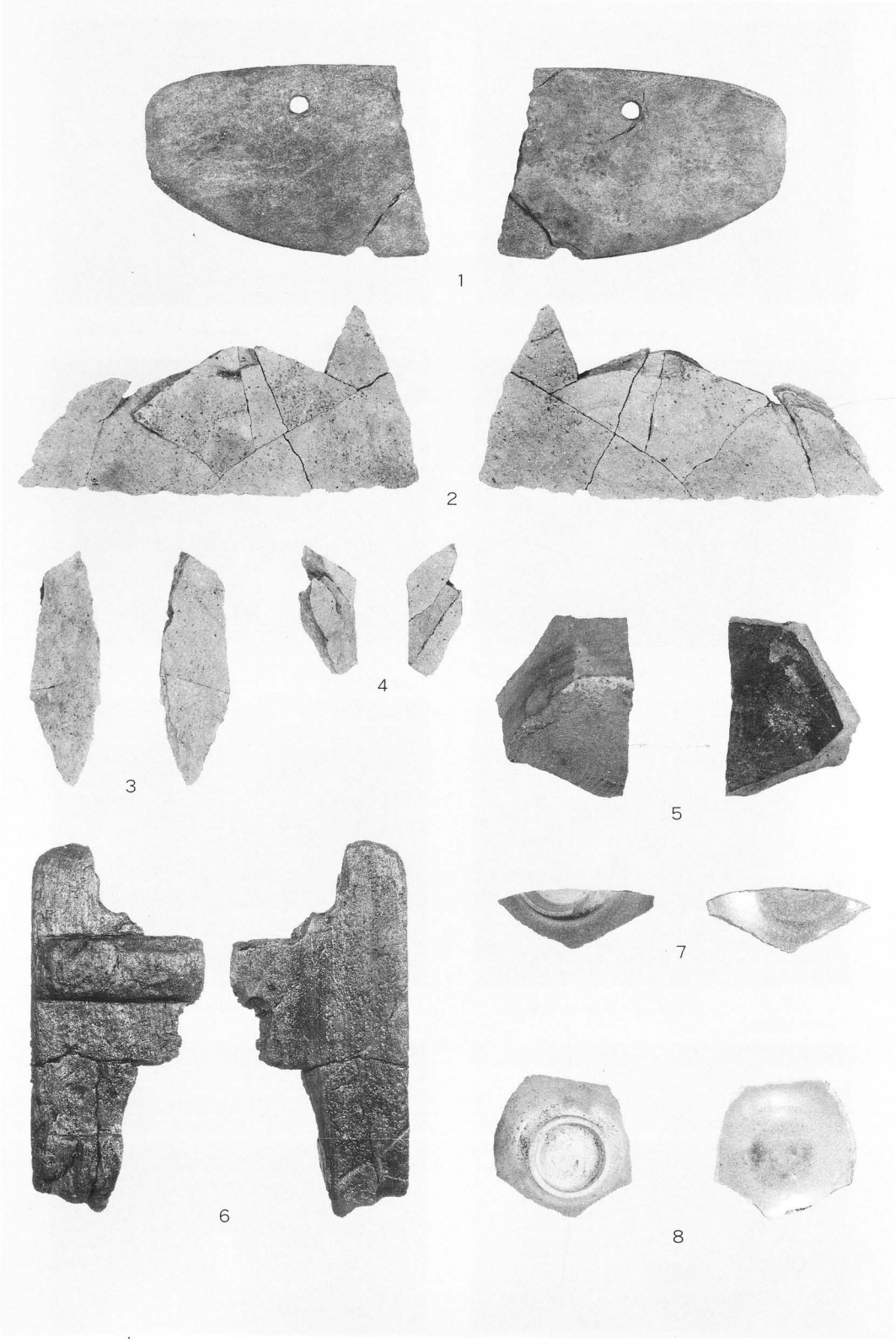
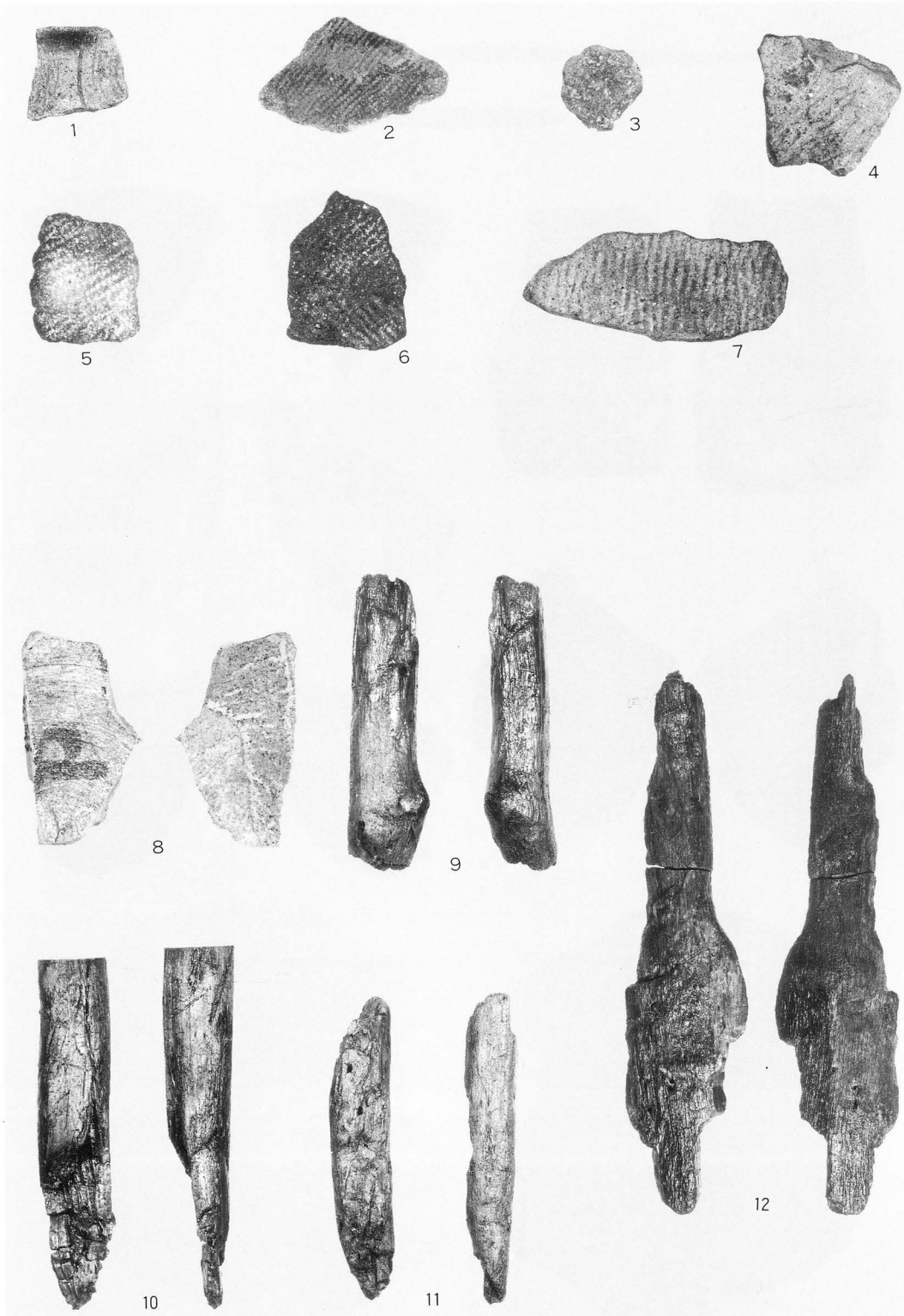


写真51　第70次調査出土遺物



1～7：第72次調査、　8～12：第73次調査

写真52　第72次・第73次調査出土遺物

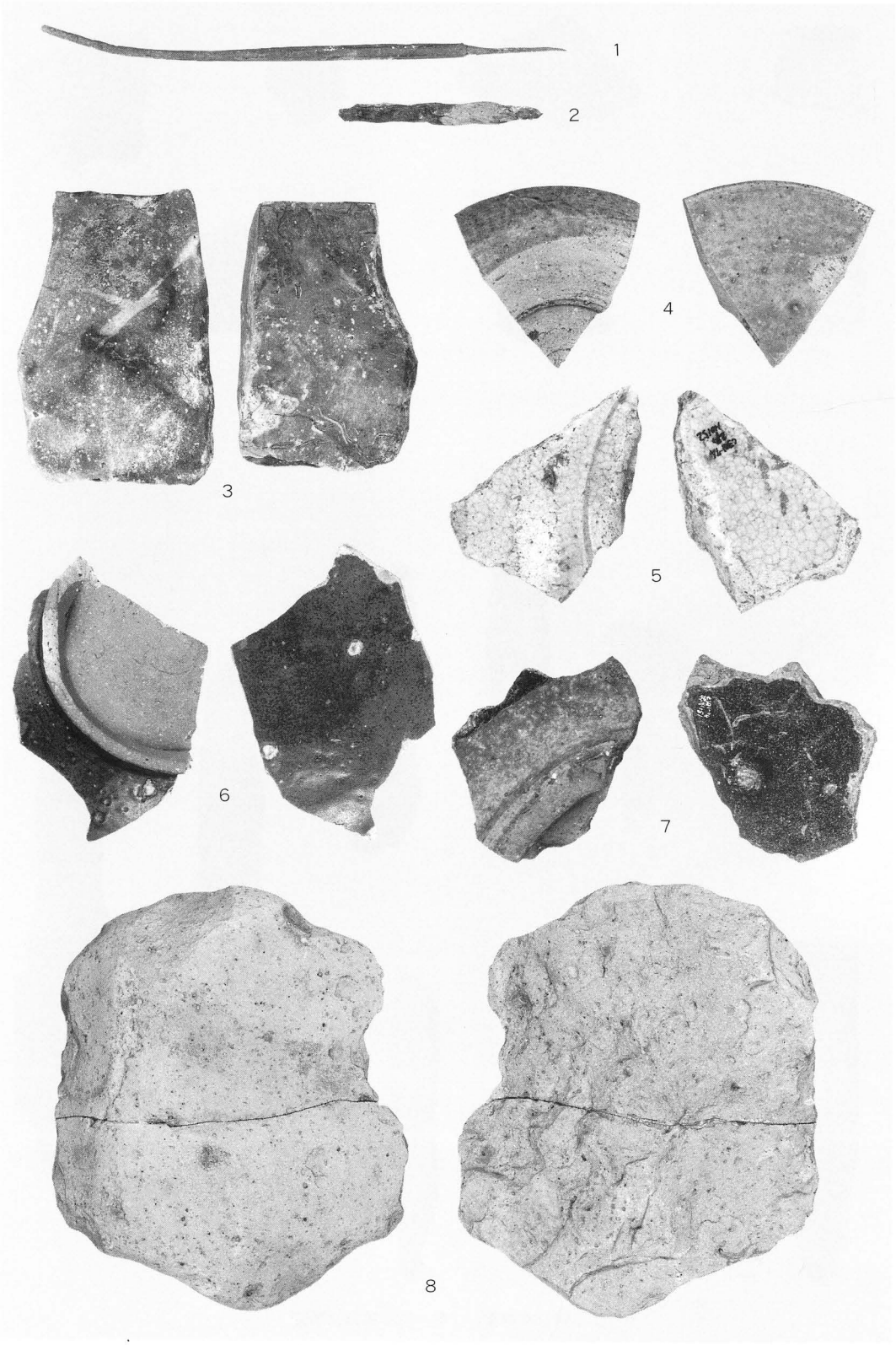


写真53　第74次調査出土遺物

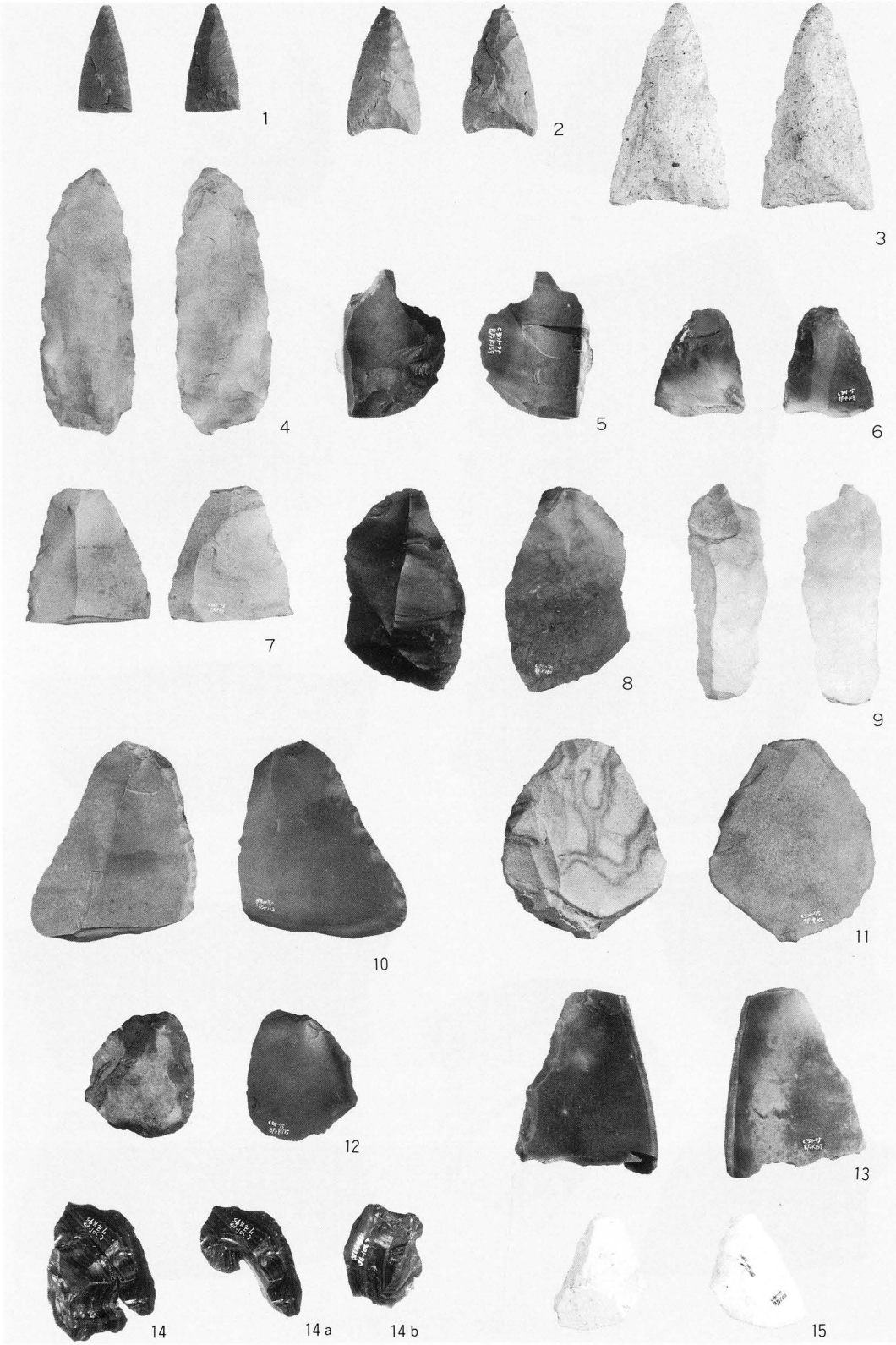
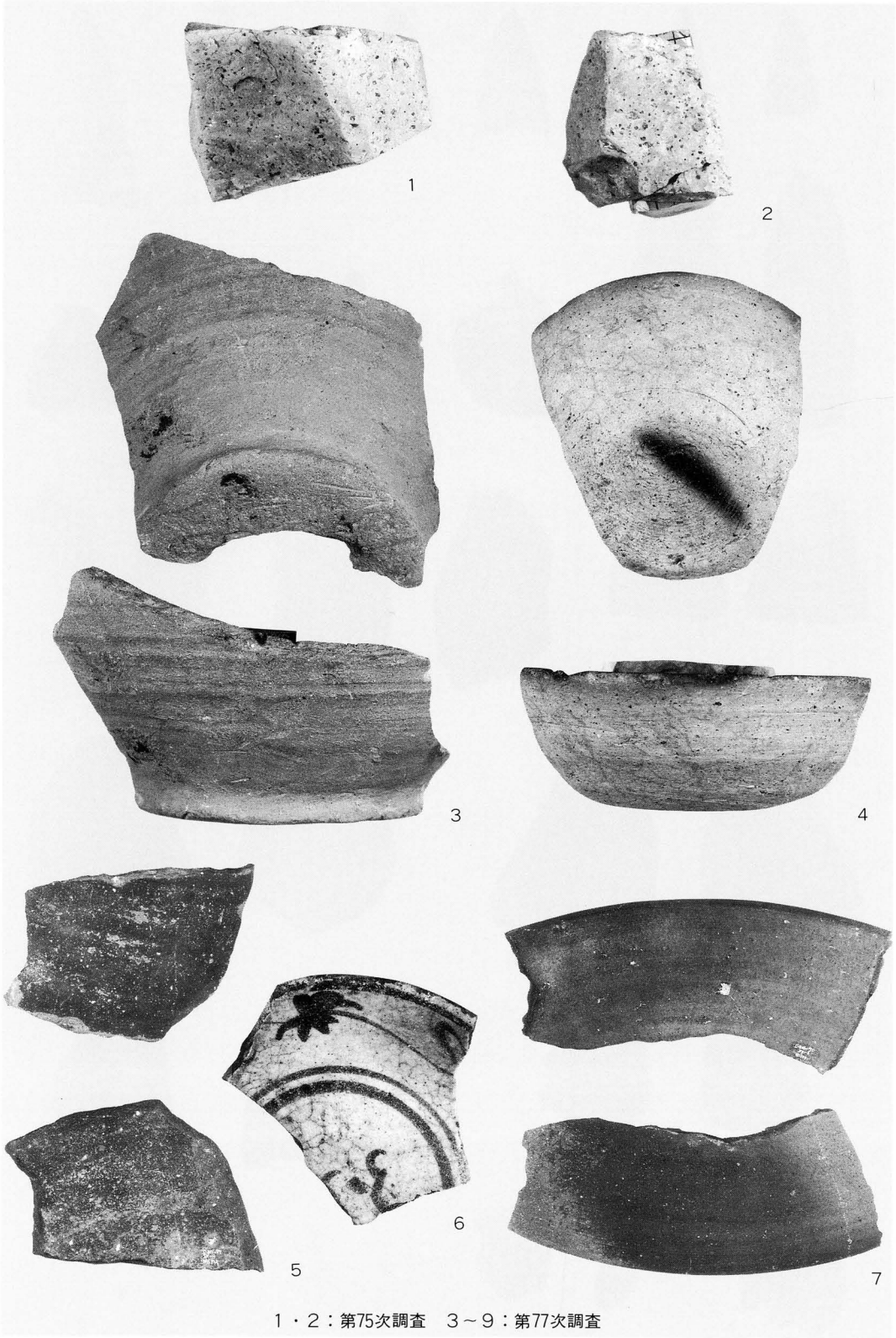


写真54　第75次調査出土遺物(1)



1・2：第75次調査　3～9：第77次調査

写真55　第75次調査出土遺物(2)　　第77次調査出土遺物(1)

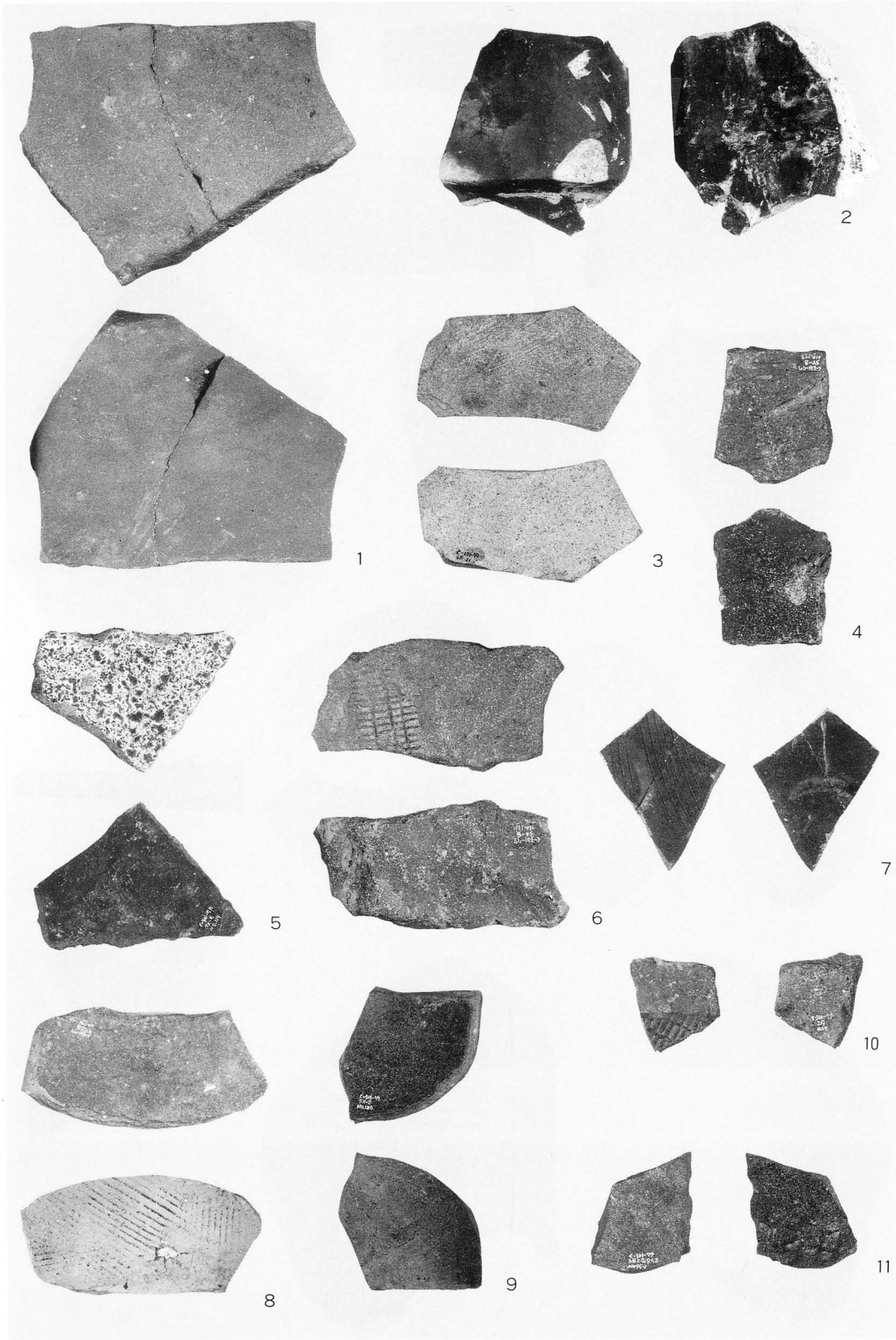


写真56　第77次調査出土遺物(2)

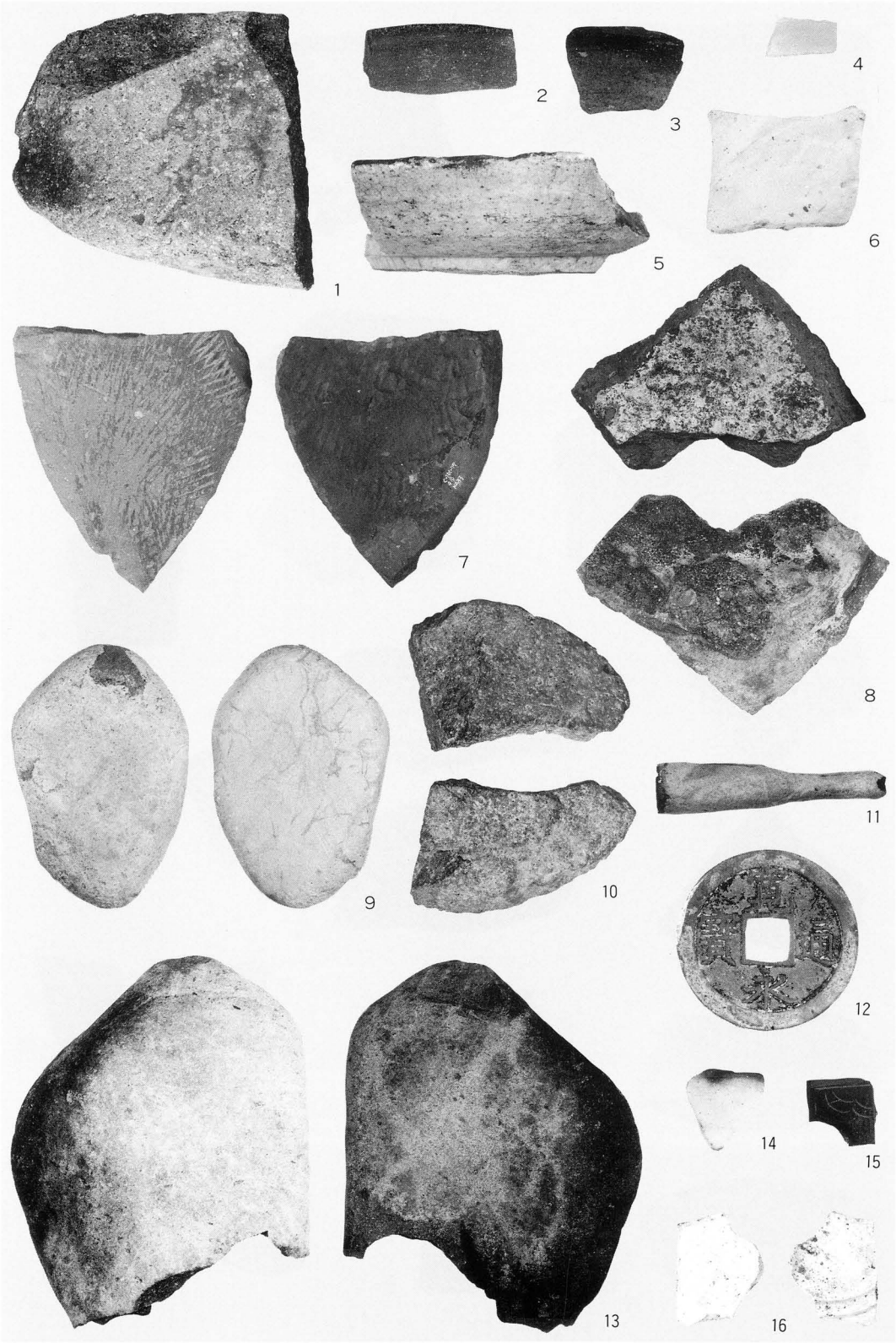


写真57　第77次調査出土遺物(3)

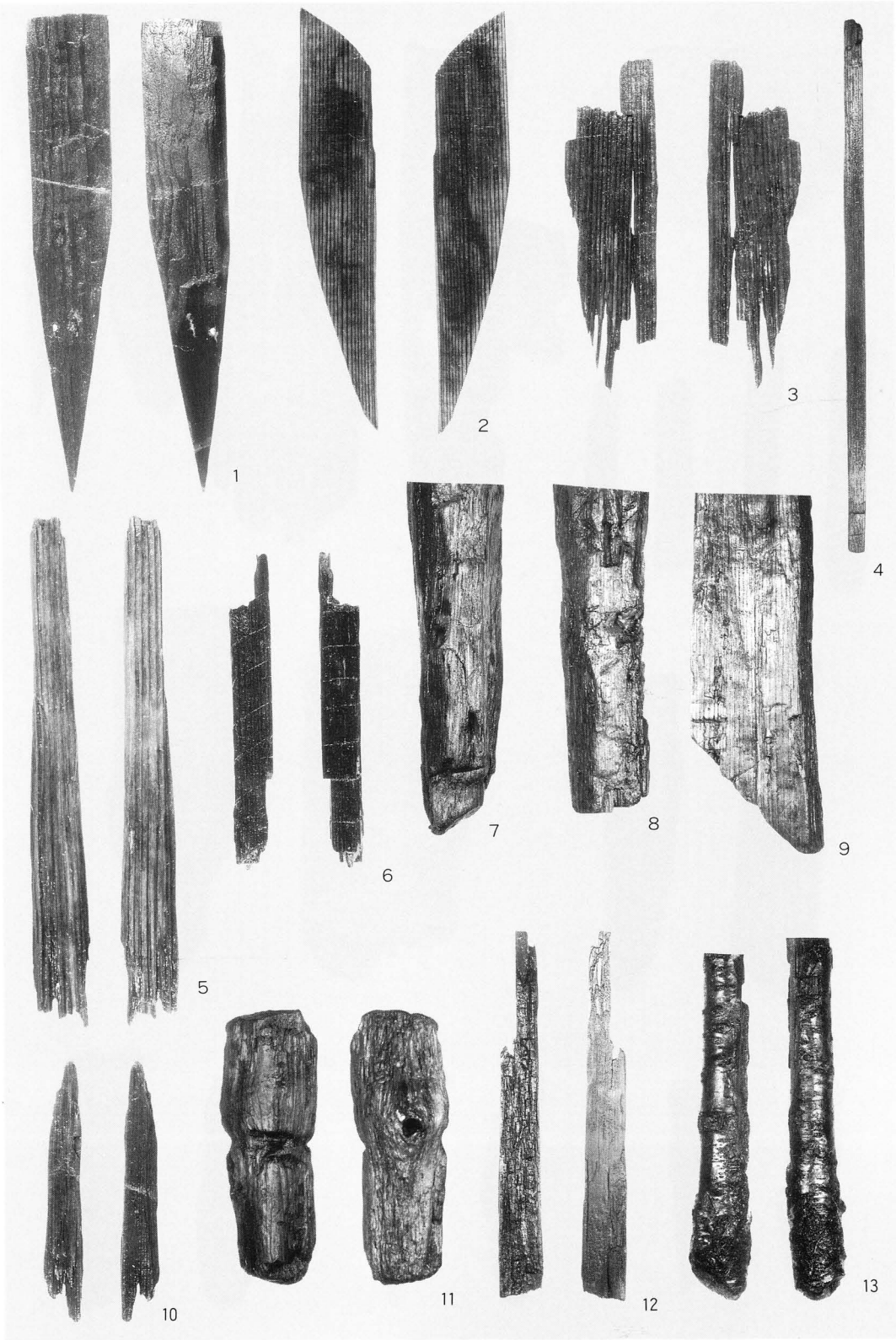


写真58　第77次調査出土遺物(4)

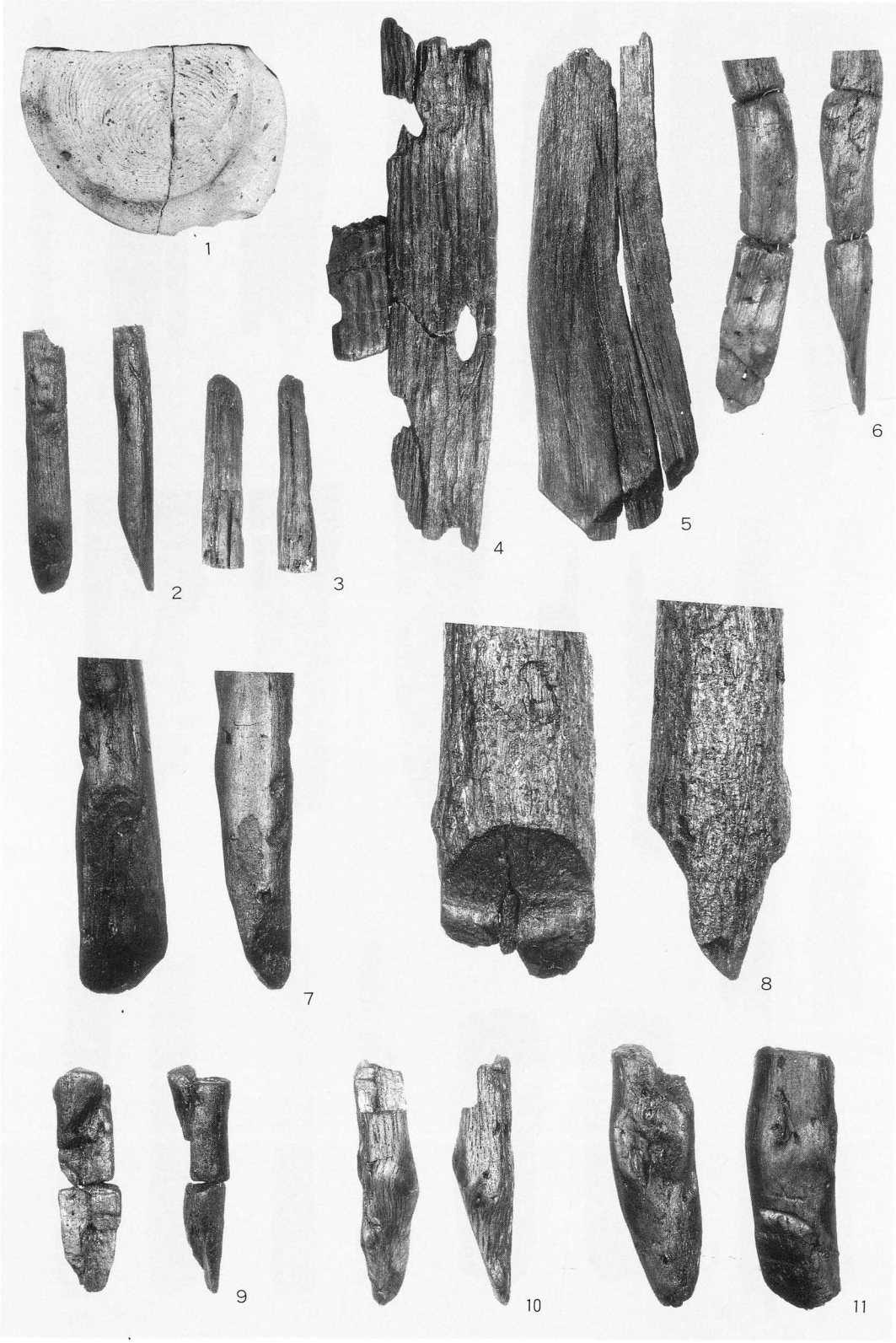


写真59　第79次調査出土遺物

下ノ内遺跡

――第5次発掘調査報告書――

下ノ内遺跡第５次（５区）調査

１．調査要項

遺 跡 名　　下ノ内遺跡

調 査 名　　下ノ内遺跡第５次（５区）調査

調査地点　　仙台市太白区富沢字下ノ内27－７

調査原因　　高層住宅建設にかかわる土木工事

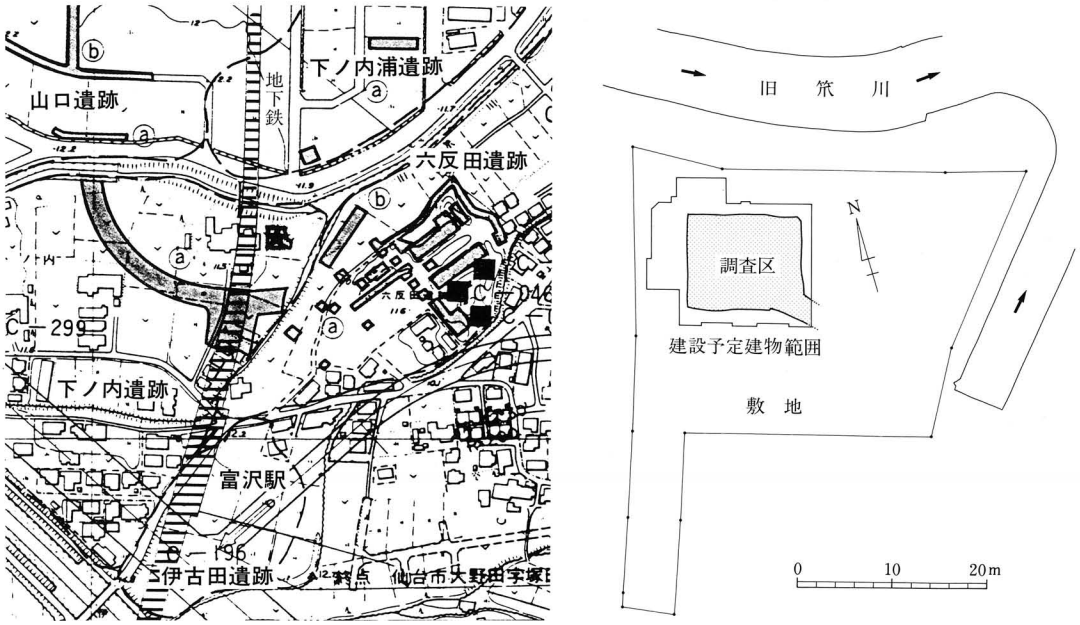
対象面積　　約168㎡

調査面積　　約120㎡

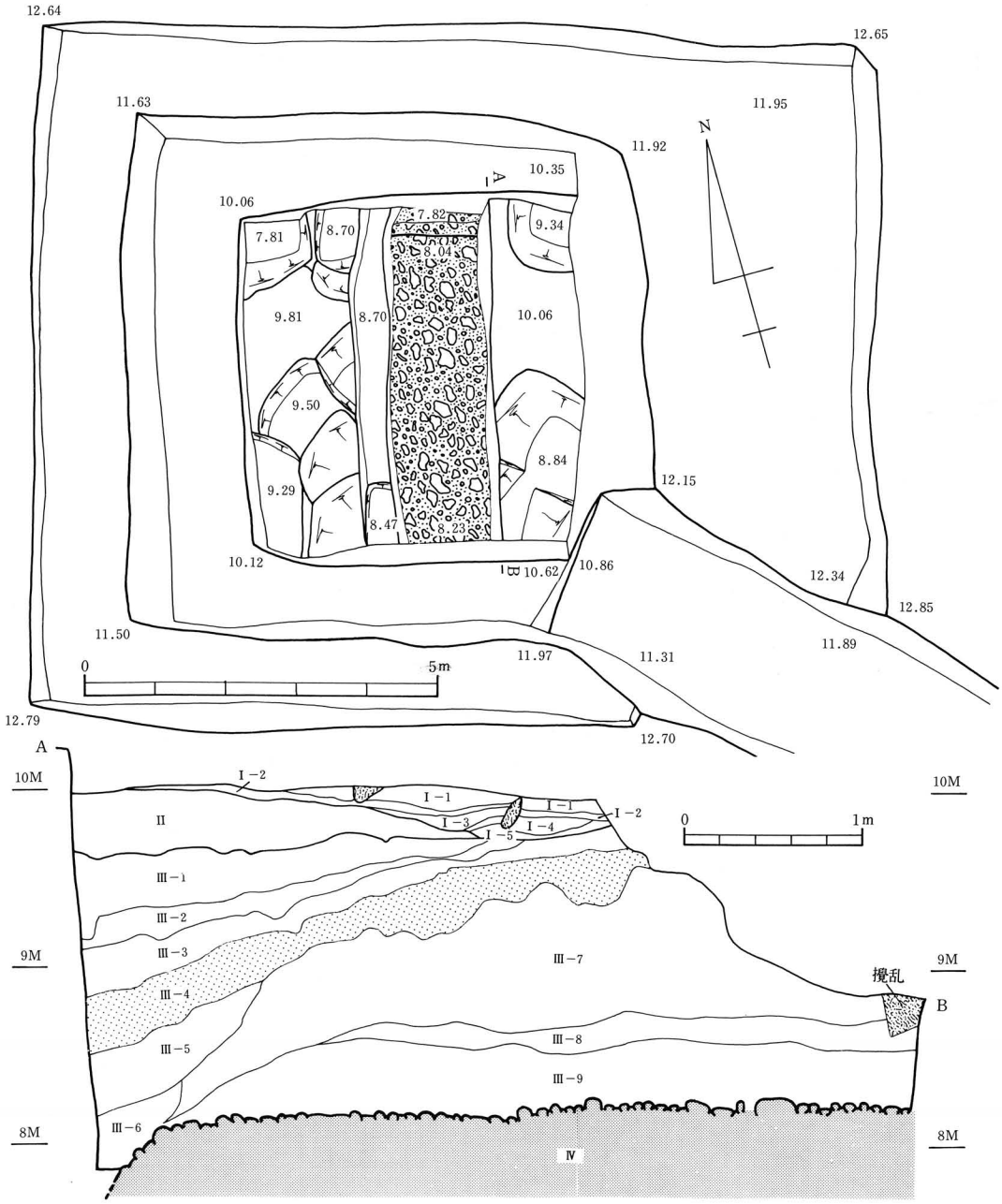
調査期間　　平成３年４月16日～４月30日

２．調査方法

調査区は建築予定地内に東西約12m・南北約10mの範囲に設定し、表土はバックホーによって除去した（第１図）。過去の調査データによると当該地区の表土層は１m以内であるが、本地区においては、重機による著しい掘削が行なわれており、この攪乱が地表面より2.6mに達していた。このため、調査区の壁面は３段の階段を要し、非攪乱部上面での実調査面積は約25㎡となった（第２図上）。



第１図　調査区位置図・設定図



層 No.	土　　色	土　質	そ　の　他	層 No.	土　　色	土　質	そ　の　他
Ⅰ－1	10YR3/5　にぶい黄褐色	砂	しまり強い	Ⅲ－3	10YR3/4　暗褐色	シルト質粘土	
2	10YR2/4　灰黄褐色	シルト質粘土		4	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土・土器片を含む
3	2.5Y3/5　黄褐色	砂	粘土を薄く縞状に含む	5	7.5YR4/6　褐色	粘土質シルト	層下部はグライ化
4	10YR6/5　黄褐色	粗　砂	下部ほど粒径が大きい	6	10YR3/5　にぶい黄褐色	砂・粘土	砂と粘土の互層
5	10YR2/4　灰黄褐色	砂質粘土	小礫を含む	7	10YR5/4　にぶい黄褐色	粘土質シルト	
Ⅱ	10YR6/5　黄褐色	砂礫層	礫は径５～６cmのものまで含む	8	10YR4/6　褐色	砂	礫を少量含む
Ⅲ－1	7.5YR4/4　褐色	シルト質粘土		9	10YR5/4　にぶい黄褐色	シルト質砂	
2	7.5YR4/6　褐色	シルト質粘土		Ⅳ	10YR4/6　褐色	砂・礫	砂及び径30までの礫

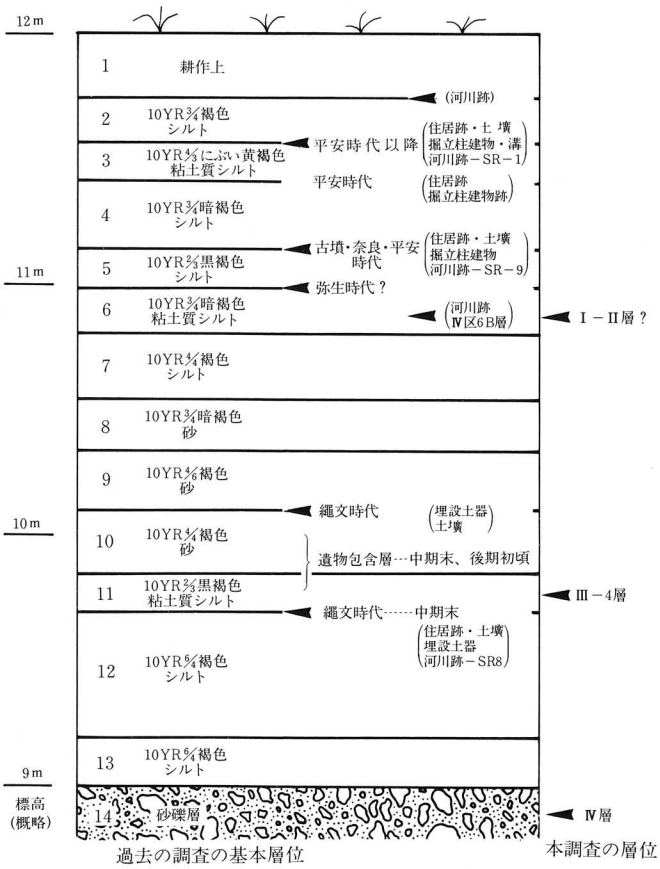
第２図　調査区平・断面図

非攪乱部上面でも、なお多くの攪乱坑が検出されたが、これについては完掘し、残存部各面の精査を実施した。精査により遺構は検出されなかった（写真２）。

攪乱の状況から、弥生時代以降の地層は完全に破壊されているものと判断されたが、縄文時代の遺構及び遺物包含層の存在を確認するために、残存部を東西1.5mの幅で、この地域の基盤となっている礫層まで徐々に堀下げた（第２図、写真３・４）。この調査の結果、Ⅲ－４層より縄文土器数点が出土した。Ⅲ－４層の土器の含有量は極めて稀薄であり、調査区も狭くなっていたので拡張は行なわず、この状態の実測を行なって調査を終了した。

調査区の平面実測は、任意の２点を原点として１／50の平板実測を行なった。現況地形図との合成は、平板実測の２点の原点とともに、敷地境界杭４点を１／100で平板実測して行なった。北は磁北で示した。

３．基本層序



第３図　下ノ内遺跡の基本層位

本調査においては、地表面より深さ2.6mまで完全に攪乱されており、地表からの基盤礫層までの完全な土層の把握はできなかったが、下部堆積層は大別４層・細別16層に分けられた（第２図下）。

Ⅰ層は砂及び粘土を主体とする水成堆積層で、５層に分けられた。

Ⅱ層は直径が５～６cmまでの大小の礫を主体とし、これに若干の粗砂を含む層である。この層は、粒子の大小に規則的な変化があり、その層理面は北から南に下がって傾斜し

ているのが観察できる。この層も水成層と考えられる。

Ⅲ層はシルト質粘土及び粘土質シルトを主体とし、一部砂の層を挟む。Ⅲ－９～７層の段階では比較的水平に堆積しているが、Ⅲ－６～１層の段階は北側に向かって厚くかつ下がった状態で堆積しており、河川のような凹地の肩口の堆積状態を示している。Ⅲ－４層から縄文土器片が７点出土している。

Ⅳ層は基盤と考えられる砂礫層である。礫は直径数cmから30cm程のものまであるが、大形のものが目立つ。Ⅳ層の上面は南側から北側に向かって緩やかに下がっている。また調査区の北端には、傾斜面が形成されているが、これはⅢ－１～６層の傾斜と一致し、河川による浸蝕の可能性が考えられる。

下ノ内遺跡は、仙台市高速鉄道（地下鉄）建設工事に関係し、昭和56～59年にⅠ区から４区までの調査が、仙台市教育委員会によって行なわれ、14層からなる基本層序と、遺構・遺物の検出層が明らかにされている（第３図）。この調査における基本層序に、今回の調査区の土層を対応させると、Ⅳ層の砂礫層は14層に、Ⅲ－４層は黒褐色を呈し遺物を含む点で11層に対応するものと考えられる。Ⅰ・Ⅱ層は、堆積層レベルと５区の位置から、Ⅳ区６Ｂ層検出河川跡の堆積土と対応する可能性があるが、この地域では各時期の旧河道が複雑に存在するので、どの時期のものに相当するかは今後の課題である。

なおⅠ～Ⅳ層を、今回の調査区より西側ないし南側で行なわれた過去の調査層位と、上記のように対応させた場合、各層とも数十cm程低くなっている。

４．検出遺構と出土遺物

今回の調査区は、堆積層の上部が攪乱を受けていた。この攪乱は、本調査のⅠ・Ⅱ層を過去の調査における基本層の６層に対応させた場合、弥生時代以降の堆積層と遺構を完全に破壊したことになる。したがって弥生時期以降の資料は何等得ることができなかった。残存する下部堆積層では、縄文時代の遺構検出の可能性があったが、調査部分では遺構は検出されず、僅かながら縄文土器を包含する土層（Ⅲ－４層）が存在を確認することができたに止どまった。包含層の層厚は30cm程で、炭や焼土も含まれる。遺物の量は少なく、縄文土器片が７点出土しただけである。出土した縄文土器片には、３条の沈線文のあるもの（写真１左上）、ＬＲＬ縄文に沈線のあるもの（写真１右上）、Ｌ撚糸文（写真１左）、Ｒ撚糸文（写真１右）がある。

５．遺構の所属年代とまとめ

１．本調査区においては、弥生時代以降の堆積層及びそれに伴う遺構は破壊されていた。

2．残存する堆積層のうちⅠ・Ⅱ層は河川堆積土と考えられる。この河川については、位置およびレベルから仙台市高速鉄道関係調査下ノ内遺跡Ⅳ区６Ｂ層検出の河川跡と関係する可能性がある。

3．堆積層Ⅲ－４層は、縄文土器の包含となっている。この層は仙台市高速鉄道関係調査の下ノ内遺跡基本層の11層に対応するものと考えられる。11層の包含層は、縄文時代の住居跡が検出された本調査区の西方130m付近では多量の遺物が出土しているが、住居跡から離れると遺物量は極めて少なくなっているものの、本地区まで伸びていることが明らかになった。11層出土の土器は「大部分が中期末葉（大木10式）から後期初頭のものであり、僅かに中期中葉（大木８ｂ式）のものもある。」とされているが、今回出土したものもこの時期に相当すると考えられる。

4．Ⅲ－１～６層は河川跡のような凹地への堆積土層で、凹地の形成時期は縄文時代と考えられる。

5．本調査区の基盤は、砂礫層となっており、その上面標高は8.2m前後で北に向かって緩やかに下がっている。㊟

㊟　本調査区Ⅳ層の砂礫層について、東北大学地理学研究室　松本秀明助教授に来跡のうえ観察していただいたところ、当該礫層については、富沢地区において約7000年前の年代が得られているものと風化の度合い等が類似するとの所見をいただいている。

参考文献

篠原信彦：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第40集　1982
篠原信彦：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集　1983
渡辺忠彦：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集　1984
工藤哲司：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第82集　1985

写真１
Ⅲ－４層出土縄文土器

写真 2
攪乱部完掘状況

写真 3
基盤礫層検出状況

写真 4
下ノ内遺跡第 5 次
調査区土層断面

仙台市文化財調査報告書第163集

富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

——富沢遺跡第70～75•77•79次発掘調査報告書——

下ノ内遺跡

——第5次発掘調査報告書——

1992年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3－7－1

仙台市教育委員会文化財課

印刷　株式会社 共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町2－4－2

TEL 236－7181